

一般国道 470 号 能越自動車道 七尾氷見道路に係る埋蔵文化財発掘調査報告書

七尾市
七 尾 城 跡 Ⅲ

2 0 2 3

石 川 県 教 育 委 員 会
(公財)石川県埋蔵文化財センター

なな お じょう あと
七 尾 城 跡 Ⅲ

2023

石川県教育委員会
(公財)石川県埋蔵文化財センター



第4次 北1・2区（南西から）



第4次 北1・2区（南西から）

巻頭図版2



第4次 南1区（西から）



第4次 南1区（北から）



第5次 南2区・市道区（北東から）



第5次 南2区・市道区（南西から）



第4次 北1区 SE08・09



第4次 北2区 SD13



第9次 北区（北から）



第9次 南区（西から）

巻頭図版6



第9次 北区道路状遺構（北から）



第9次 北区SD09（北東から）

例　　言

- 1 本書は七尾城跡の平成20(2008)・21(2009)・25(2013)年度発掘調査に係る報告書である。
- 2 遺跡の所在地は石川県七尾市小池川原町地内である。
- 3 調査原因は一般国道470号能越自動車道七尾氷見道路建設工事で、同工事を所管する国土交通省北陸地方整備局金沢河川国道事務所が石川県教育委員会に発掘調査を依頼したものである。
- 4 現地調査は石川県教育委員会からの委託を受けて平成20・21・25年度に財団法人石川県埋蔵文化財センター（平成25年度に「財団法人」から「公益財団法人」に改組）が実施した。出土品整理は平成22(2010)年度から令和4(2022)年度まで同センターが、石川県教育委員会から委託を受け実施した。
- 5 調査に係る費用は国土交通省北陸地方整備局金沢河川国道事務所が負担した。
- 6 現地調査の期間・面積・担当グループ・担当者は下記のとおりである。
 - (1) 平成20年度（第4次調査）
期　間　平成20年4月21日～同年11月13日
面　積　3,440m²
担当G　調査部国関係調査グループ
担当者　谷内明央（主任主事）、坂下博晃（嘱託調査員）
 - (2) 平成21年度（第5次調査）
期　間　平成21年9月15日～同年12月25日
面　積　1,800m²
担当G　調査部国関係調査グループ
担当者　谷内明央（主任主事）、空　良寛（主事）
 - (3) 平成25年度（第9次調査：小池川原町地内）
期　間　平成25年10月23日～同年12月25日
面　積　1,650m²
担当G　調査部国関係調査グループ
担当者　金山哲哉（専門員）、立原秀明（専門員）、矢部史朗（嘱託調査員）
- 7 出土品整理は主に調査部国関係調査グループが担当した。
- 8 第6章 自然科学分析等は、「第1節 漆器の科学分析」を漆器文化財科学研究所（四柳嘉章）、「第2節 木製品の樹種同定」をパリノ・サーヴェイ株式会社（高橋　敦・田中義文）、「第3節 石製品の石材同定」を株式会社パレオ・ラボ（藤根　久）に委託して実施した。
- 9 本書の編集・刊行業務は調査部が実施し、執筆・編集は藤田邦雄（調査部参事）が担当した。遺物の写真撮影は池田　拓が行った。また、挿図作成等にあたっては谷内明央、立原秀明の協力を得た。
- 10 本書の作成にあたっては次の機関・個人の指導・協力を得た。
七尾市教育委員会スポーツ・文化課、大安尚寿、小川光彦、北林雅康、木村孝一郎、鈴木正貴、善端　直、三浦純夫、三浦知徳、盛田拳生
- 11 調査に関する記録と出土品は石川県埋蔵文化財センターで保管している。
- 12 本書についての凡例は下記のとおりである。
 - (1) 方位は座標北であり、座標は国土交通省告示の平面直角座標VII系に準拠した。
 - (2) 水平水準はT.P（東京湾平均海面）の標高による。
 - (3) 出土遺物番号は、挿図・観察表・写真図版で対応する。

目 次

第1章 調査の経緯と経過	1
第1節 調査の経緯	1
第2節 調査の経過	6
第2章 遺跡の位置と環境	10
第1節 地理的環境	10
第2節 歴史的環境	10
第3章 概要と分類	15
第1節 調査区の概要	15
第2節 遺物の分類	17
第4章 第4・5次調査の遺構と遺物	23
第1節 調査の概要	23
第2節 井戸 (SE)	42
第3節 土坑 (SK)	65
第4節 溝 (SD)・落ち込み	95
第5節 掘立柱建物 (SB)・ピット (Pit)	112
第6節 S X	147
第7節 包含層等	155
第5章 第9次調査（小池川原町地内）の遺構と遺物	172
第1節 調査の概要	172
第2節 井戸 (SE)・土坑 (SK)・溝 (SD)・道路状遺構・遺構検出等	179
第6章 自然科学分析等	191
第1節 漆器の科学分析	191
第2節 木製品の樹種同定	208
第3節 石製品の石材同定	221
第7章 総括	226
第1節 土器・陶磁器様相	226
第2節 遺構の様相と変遷	233

挿図目次

第1図 能越自動車道路線図	1	第43図 井戸（SE）出土遺物6	64
第2図 年次別調査区配置図（第1～9次）	3	第44図 第4・5次土坑（SK）配置図	65
第3図 七尾城跡主要曲輪群配置図	4	第45図 土坑（SK）遺構図1	77
第4図 調査区航空写真	5	第46図 土坑（SK）遺構図2	78
第5図 遺跡の位置	10	第47図 土坑（SK）遺構図3	79
第6図 七尾城跡と周辺の遺跡	13	第48図 土坑（SK）遺構図4	80
第7図 第4・5次、9次（小池川原町地内） 調査区位置図	15	第49図 土坑（SK）遺構図5	81
第8図 第4・5次、9次（小池川原町地内） 調査区配置図	16	第50図 土坑（SK）遺構図6	82
第9図 土師器皿の分類	18	第51図 土坑（SK）遺構図7	83
第10図 越中瀬戸焼の分類	20	第52図 土坑（SK）遺構図8	84
第11図 貿易陶磁器の分類	22	第53図 土坑（SK）遺構図9	85
第12図 調査区割図	23	第54図 土坑（SK）遺構図10	86
第13図 遺構区割図1	26	第55図 土坑（SK）遺構図11	87
第14図 遺構区割図2	27	第56図 土坑（SK）遺構図12	88
第15図 遺構区割図3・4	28	第57図 土坑（SK）出土遺物	89
第16図 遺構区割図5	29	第58図 土坑（SK）出土遺物2	90
第17図 遺構区割図6	30	第59図 土坑（SK）出土遺物3	91
第18図 遺構区割図7	31	第60図 土坑（SK）出土遺物4	92
第19図 遺構区割図8	32	第61図 土坑（SK）出土遺物5	93
第20図 遺構区割図9	33	第62図 土坑（SK）出土遺物6	94
第21図 遺構区割図10	34	第63図 第4・5次溝（SD）・落ち込み配置図	95
第22図 遺構区割図11	35	第64図 溝（SD）遺構図1	100
第23図 遺構区割図12	36	第65図 溝（SD）遺構図2	101
第24図 遺構区割図13	37	第66図 溝（SD）遺構図3	102
第25図 遺構区割図14	38	第67図 溝（SD）遺構図4	103
第26図 遺構区割図15	39	第68図 溝（SD）遺構図5	104
第27図 遺構区割図16	40	第69図 溝（SD）遺構図6	105
第28図 遺構区割図17	41	第70図 溝（SD）遺構図7	106
第29図 第4・5次井戸（SE）配置図	42	第71図 溝（SD）遺構図8	107
第30図 井戸（SE）遺構図1	51	第72図 溝（SD）出土遺物1	108
第31図 井戸（SE）遺構図2	52	第73図 溝（SD）出土遺物2	109
第32図 井戸（SE）遺構図3	53	第74図 溝（SD）出土遺物3	110
第33図 井戸（SE）遺構図4	54	第75図 溝（SD）・落ち込み出土遺物4	111
第34図 井戸（SE）遺構図5	55	第76図 第4・5次掘立柱建物（SB）配置図	112
第35図 井戸（SE）遺構図6	56	第77図 掘立柱建物（SB）遺構図1	123
第36図 井戸（SE）遺構図7	57	第78図 掘立柱建物（SB）遺構図2	124
第37図 井戸（SE）遺構図8	58	第79図 掘立柱建物（SB）遺構図3	125
第38図 井戸（SE）出土遺物1	59	第80図 掘立柱建物（SB）遺構図4	126
第39図 井戸（SE）出土遺物2	60	第81図 掘立柱建物（SB）遺構図5	127
第40図 井戸（SE）出土遺物3	61	第82図 掘立柱建物（SB）遺構図6	128
第41図 井戸（SE）出土遺物4	62	第83図 掘立柱建物（SB）遺構図7	129
第42図 井戸（SE）出土遺物5	63	第84図 掘立柱建物（SB）遺構図8	130
		第85図 掘立柱建物（SB）遺構図9	131
		第86図 掘立柱建物（SB）遺構図10	132

第87図	掘立柱建物周辺ピット1(SB01・03) ……	133
第88図	掘立柱建物周辺ピット2(SB4・06・07) ……	134
第89図	掘立柱建物周辺ピット3(SB08・09・10) ……	135
第90図	掘立柱建物周辺ピット4(SB09・10) ……	136
第91図	掘立柱建物周辺ピット5(SB11・12・13) ……	137
第92図	掘立柱建物周辺ピット6(SB12・13・14) ……	138
第93図	掘立柱建物周辺ピット7(SB15・16) ……	139
第94図	掘立柱建物周辺ピット8(SB17・18・19) ……	140
第95図	掘立柱建物周辺ピット9(SB20・21) ……	141
第96図	ピット(Pit)出土遺物1 ……	142
第97図	ピット(Pit)出土遺物2 ……	143
第98図	ピット(Pit)出土遺物3 ……	144
第99図	ピット(Pit)出土遺物4 ……	145
第100図	ピット(Pit)出土遺物5 ……	146
第101図	第4・5次SX配置図 ……	147
第102図	SX遺構図1 ……	150
第103図	SX遺構図2 ……	151
第104図	SX遺構図3 ……	152
第105図	SX出土遺物1 ……	153
第106図	SX出土遺物2 ……	154
第107図	包含層等出土遺物1 ……	157
第108図	包含層等出土遺物2 ……	158
第109図	包含層等出土遺物3 ……	159
第110図	包含層等出土遺物4 ……	160
第111図	包含層等出土遺物5 ……	161
第112図	包含層等出土遺物6 ……	162
第113図	調査区割図 ……	172
第114図	遺構区割図1 ……	173
第115図	遺構区割図2 ……	174
第116図	遺構区割図3 ……	175
第117図	遺構区割図4 ……	176
第118図	遺構区割図5 ……	177
第119図	遺構区割図6 ……	178
第120図	井戸(SE)、溝(SD)遺構図1 ……	182
第121図	土坑(SK)、溝(SD)遺構図2 ……	183
第122図	溝(SD)、ピット(Pit)遺構図3 ……	184
第123図	溝(SD)遺構図4 ……	185
第124図	断面図1(北区) ……	186
第125図	断面図2(南区) ……	187
第126図	井戸(SE)、溝(SD)、 遺構検出他出土遺物1 ……	188
第127図	遺構検出他出土遺物2 ……	189
第128図	石組井戸分布図 ……	234
第129図	遺構の変遷I ……	236
第130図	遺構の変遷II ……	237
第131図	遺構の変遷III ……	238
第132図	調査区位置図 ……	239

表 目 次

第1表	調査年次(第1～9)一覧表 ……	2
第2表	調査・整理体制 ……	9
第3表	七尾城関連年表 ……	12
第4表	遺跡地名表 ……	14
第5表	第4・5次調査主要遺構土器・陶磁器類 出土破片数1 ……	24
第6表	第4・5次調査主要遺構土器・陶磁器類 出土破片数2 ……	25
第7表	井戸(SE)規模等一覧表 ……	43
第8表	土坑(SK)規模等一覧表1 ……	66
第9表	土坑(SK)規模等一覧表2 ……	67
第10表	土坑(SK)規模等一覧表3 ……	68
第11表	土坑(SK)規模等一覧表4 ……	69
第12表	溝(SD)・落ち込み規模等一覧表 ……	96
第13表	掘立柱建物(SB)規模等一覧表 ……	113
第14表	SX規模等一覧 ……	148
第15表	第4・5次土器・陶磁器観察表1 ……	163
第16表	第4・5次土器・陶磁器観察表2 ……	164
第17表	第4・5次土器・陶磁器観察表3 ……	165
第18表	第4・5次土器・陶磁器観察表4 ……	166
第19表	第4・5次土器・陶磁器観察表5 ……	167
第20表	第4・5次土器・陶磁器観察表6 ……	168
第21表	第4・5次土器・陶磁器観察表7 ……	169
第22表	第4・5次木製品観察表 ……	170
第23表	第4・5次石製品観察表 ……	171
第24表	第4・5次金属製品観察表 ……	171
第25表	第4・5次銅貨観察表 ……	171
第26表	遺構規模等一覧表 ……	179
第27表	土器・陶磁器観察表 ……	190
第28表	木製品観察表 ……	190
第29表	土器・陶磁器出土破片数 ……	227
第30表	土器・陶磁器遺構別出土破片数 ……	228
第31表	珠洲焼分類別一覧 ……	230
第32表	越前焼分類別一覧 ……	230
第33表	瀬戸・美濃分類別一覧 ……	230
第34表	遺構別実測点数1 ……	231
第35表	遺構別実測点数2 ……	232

図版目次

- 卷頭図版 1 第4次 北1・2区（南西から）
第4次 北1・2区（南西から）
- 卷頭図版 2 第4次 南1区（西から）
第4次 南1区（北から）
- 卷頭図版 3 第5次 南2区・市道区（北東から）
第5次 南2区・市道区（南西から）
- 卷頭図版 4 第4次 北1区SE08・09
第4次 北2区SD13
- 卷頭図版 5 第9次 北区（北から）
第9次 南区（西から）
- 卷頭図版 6 第9次 北区道路状遺構（北から）
第9次 北区SD09（北東から）
- 図版 1 七尾城跡遠望（北から）
七尾城跡遠望（南から）
- 図版 2 七尾城跡と能越自動車道路線（南東から）
七尾城跡と能越自動車道路線（北西から）
- 図版 3 第4次 北1区完堀（東から）
第4次 北1区遺構検出（南西から）①
第4次 北1区完堀（南西から）①
第4次 北1区遺構検出（南西から）②
第4次 北1区完堀（南西から）②
- 図版 4 第4次 北1区SE03
第4次 北1区SE03断面（南から）
第4次 北1区SE04
第4次 北1区SE04断面（南から）
第4次 北1区SE06
第4次 北1区SE06断面（西から）
第4次 北1区SE07
第4次 北1区SE07断面（南から）
- 図版 5 第4次 北1区SE08
第4次 北1区SE08断面（南西から）
第4次 北1区SE09
第4次 北1区SE09断面（西から）
第4次 北1区SE10
第4次 北1区SE10断面（東から）
第4次 北1区SE12
第4次 北1区SE12断面（南西から）
- 図版 6 第4次 北1区SK01土層断面（北から）
第4次 北1区SK04土層断面（南東から）
第4次 北1区SK09土層断面（北東から）
第4次 北1区SK10（北から）
第4次 北1区SK18（東から）
第4次 北1区SK18天目茶碗（第58図90）
出土状況
- 第4次 北1区SK20（東から）
第4次 北1区SK35土層断面（南から）
- 図版 7 第4次 北2区完堀（南東から）
第4次 北2区遺構検出（南東から）
第4次 北2区完堀（東から）
第4次 北2区完堀（西から）
第4次 北2区完堀（南から）
- 図版 8 第4次 北2区SE13
第4次 北2区SE13断面（南から）
第4次 北2区SE14上層断面（南から）
第4次 北2区SE14
第4次 北2区SE16
第4次 北2区SE16断面（東から）
第4次 北2区SE15
- 図版 9 第4次 北2区SE17・SD14（東から）
第4次 北2区SK46（西から）
第4次 北2区SK46土層断面（西から）
第4次 北2区SD13（南東から）
第4次 北2区SD13珠洲焼壺（第72図200）
出土状況
第4次 北2区P207（SB05）
第4次 北2区P208（SB05）
第4次 北2区P209（SB05）
第4次 北2区P215（SB05）
- 図版 10 第4次 南1区完堀（北から）
第4次 南1区完堀SB09・10（南東から）
第4次 南1区完堀SB11～14（南から）
第4次 南1区SD18（南から）
第4次 南1区SD18土層断面（南から）
- 図版 11 第4次 南1区SE19
第4次 南1区SE19断面（北西から）
第4次 南1区SE20
第4次 南1区SE20断面（南東から）
第4次 南1区SE21
第4次 南1区SE21断面（南から）
第4次 南1区SE18
第4次 南1区SE22
- 図版 12 第4次 南1区SK65（北から）
第4次 南1区SK65漆器椀（第59図124）
出土状況
第4次 南1区SK68（南東から）
第4次 南1区SK69差歛下駄（第60図128）
出土状況
第4次 南1区SK74（南から）

- 第4次 南1区SK74土層断面（東から）
- 第4次 南1区SK78（南東から）
- 第4次 南1区SK78出土金箔土師器皿
(第61図137)
- 図版13 第5次 南2区完堀（北から）
- 第5次 南2区完堀（北東から）
- 第5次 南2区完堀（北東から）
- 第5次 南2区完堀（西から）
- 第5次 南2区完堀（西から）
- 図版14 第5次 南2区SE24
- 第5次 南2区SE24断面（北から）
- 第5次 南2区SE25
- 第5次 南2区SE25断面（南東から）
- 第5次 南2区SE26
- 第5次 南2区SE26断面（北東から）
- 第5次 南2区SE28
- 第5次 南2区SE28断面（南から）
- 図版15 第5次 南2区SK114（北西から）
- 第5次 南2区SK115（南東から）
- 第5次 南2区SD24（西から）
- 第5次 南2区SX06(SD18) 土層断面（北から）
- 第5次 南2区SB17（西から）
- 第5次 南2区P561
- 第5次 南2区SE26円面硯（第43図61）
- 出土状況
- 第5次 南2区P563越中瀬戸皿（第99図305）
- 出土状況
- 図版16 第5次 北3区完堀（北東から）
- 第5次 北3区SE27
- 第5次 北3区SE27断面（西から）
- 第5次 北3区SD27土層断面（南東から）
- 第5次 北3区SD27土師器皿（第75図224）
- 出土状況
- 図版17 第5次 市道区完堀（北西から）
- 第5次 市道区完堀（北西から）
- 第5次 市道区SD18土層断面（北から）
- 第5次 市道区SK118（南西から）
- 第5次 市道区SK118土層断面（北東から）
- 図版18 第9次 北区完堀（西から）
- 第9次 北区道路状遺構（北から）
- 第9次 北区道路状遺構土層断面（北東から）
- 第9次 北区SD09（北から）
- 第9次 北区SD09土層断面（南から）
- 図版19 第9次 南区完堀（北から）
- 第9次 南区SE01
- 第9次 南区SE01断面（北から）
- 第9次 南区SK01（西から）
- 第9次 南区SK01土層断面（西から）
- 図版20 第9次 南区完堀（西から）
- 第9次 南区SD01・02土層断面（南から）
- 第9次 南区SD03土層断面（南から）
- 第9次 南区SD03土留め遺構（東から）
- 第9次 南区SD04土層断面（南から）
- 第9次 南区SD05土層断面（西から）
- 第9次 南区SD03遺物出土状況（南から）
- 第9次 南区漆器椀（第127図26）出土状況
- 図版21 第4・5次1
- 図版22 第4・5次2
- 図版23 第4・5次3
- 図版24 第4・5次4
- 図版25 第4・5次5
- 図版26 第4・5次6
- 図版27 第4・5次7
- 図版28 第4・5次8
- 図版29 第4・5次9
- 図版30 第4・5次10
- 図版31 第4・5次11
- 図版32 第4・5次12
- 図版33 第4・5次13
- 図版34 第4・5次14
- 図版35 第4・5次15
- 図版36 第4・5次16
- 図版37 第9次（小池川原町地内）

第1章 調査の経緯と経過

第1節 調査の経緯

七尾城跡の発掘調査は、建設省（平成13年（2001）1月に国土交通省と改称）が施行する一般国道470号能越自動車道（以下「能越道」）の七尾氷見道路建設事業を要因としている。

能越道は、石川県輪島市から富山県砺波市までの能登半島を縦断する総延長約117kmの高規格道路で（第1図）、小矢部砺波JCTで北陸自動車道と東海北陸自動車道にそれぞれ接続し、能登地域・富山県西部地域と東京・大阪・名古屋を中心とする三大都市圏との交流及び観光圏域の拡大など、沿線地域の活性化を目的として計画されたものである。このうち本遺跡にかかる七尾氷見道路は、能越道の中央部に近い石川県七尾市八幡町（七尾IC）から富山県氷見市大野（氷見IC）間の総延長28.1kmを指し、平成27年（2015）2月28日には発掘調査区間を含めた全線が開通している。

七尾城跡については、昭和9年（1934）に山頂の中心部が史跡に指定されるなど、国内有数の大規模な戦国期拠点城郭であるとともに、すぐれた山城構造の全貌をうかがえる城跡としてきわめて高い評価を得ている。また、平成3年（1991）に七尾市教育委員会が実施したシッケ地区の調査では、大手道とそれに沿った町屋敷が確認され、鎌物師工房の存在が推測されるなど七尾城下町の実体解明に向けた大きな成果が得られている（七尾市教委1992）。こうしたなかで出てきたのが、能越道七尾氷見道路の建設計画であった。

七尾氷見道路の基本計画が決定したのは平成3年（1991）12月で、平成9年（1997）8月には七尾城下の重要遺構である総構を部分的に断ち割つて城下を横断するルート案が発表された。これを知った石川考古学研究会は、同年12月18日、七尾城跡の重要な箇所を通過するルート案についてその変更を求め、濱岡賢太郎会長名で、「史跡七尾城跡・城下町遺跡」の保存と路線変更に関する要望書を、建設省北陸地方建設局金沢工事事務所長、石川県知事、石川県議会議長、石川県教育委員会教育長・文化財課課長に提出した（石考研1998a）。また、翌平成10年（1998）年2月22日に同会は加能地域史研究会と共に、七尾城と城下町を考えるシンポジウム「『七尾城と城下町』－能登畠山氏の町づくり－」を七尾市で開催し、七尾城跡と城下町遺跡の重要性を訴えている（石考研1998b）。

こうした動きを受けて各所間でルート変更に関する協議が行われ、平成11年（1999）1月には変更ルート案について、石川県教育委員会教育長、石川県土木部長、七尾市長、建設省北陸地方



第1図 能越自動車路線図

建設局金沢工事事務所長の4者で合意がなされ、1月5日付で「覚書」が交わされた。その内容は、七尾城跡への影響が最も少ないルートを選択、道路構造は高架橋方式（約840m）を採用、景観面へ配慮することなどであった。七尾市は、能越道が七尾城跡を横断することを踏まえ、平成11年度から3か年で『史跡 七尾城跡 保存管理計画書』を作成し、今後は、①史跡の追加指定、②史跡の整備事業、③史跡の公有地化等を計画的に進めることとした（七尾市教委2002）。

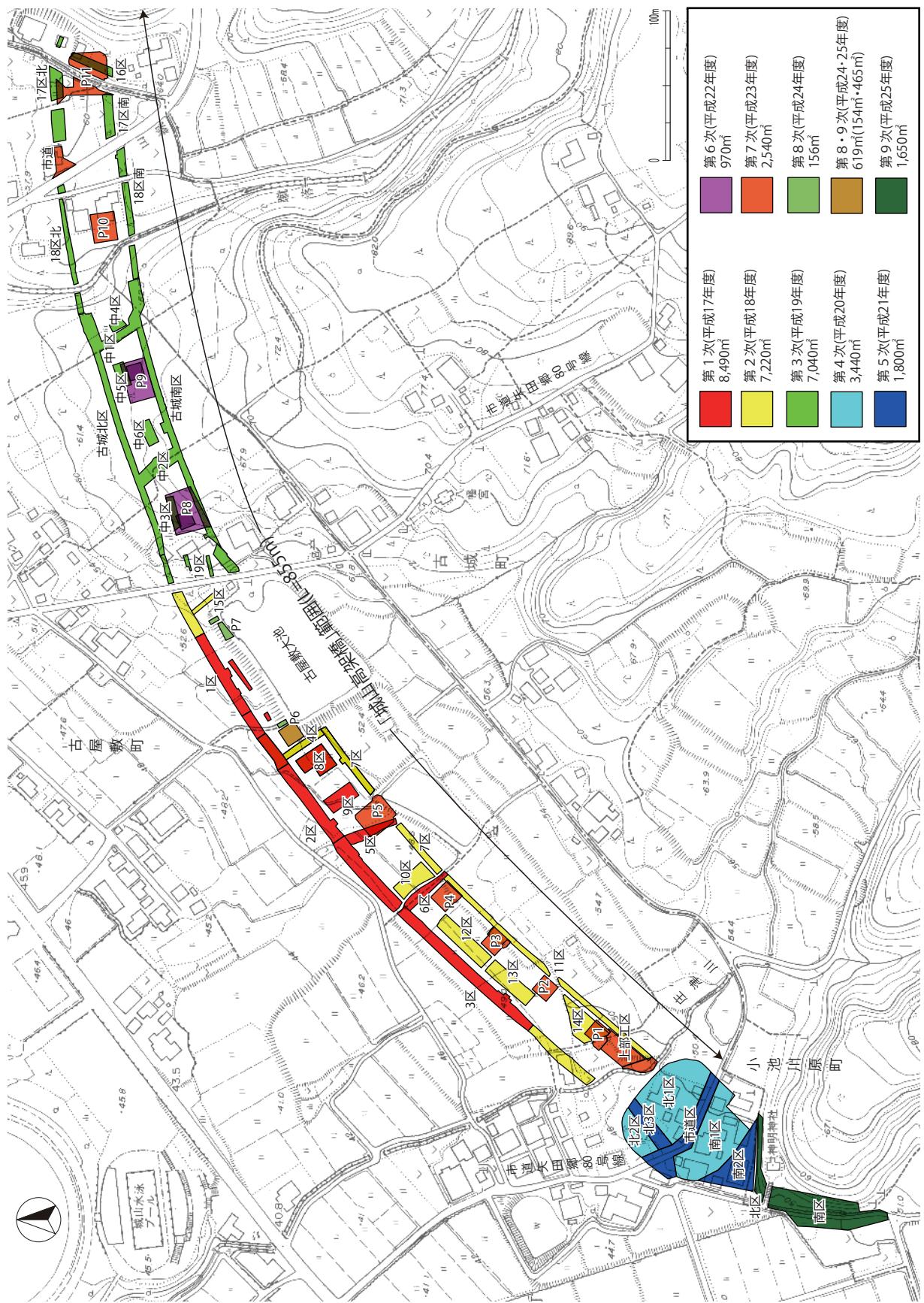
道路事業はこのあと、平成12年（2000）2月に七尾～大泊IC間の都市計画決定がなされ、同年4月に整備計画が決定、平成14年（2002）からは道路設計・測量、用地買収に着手している。

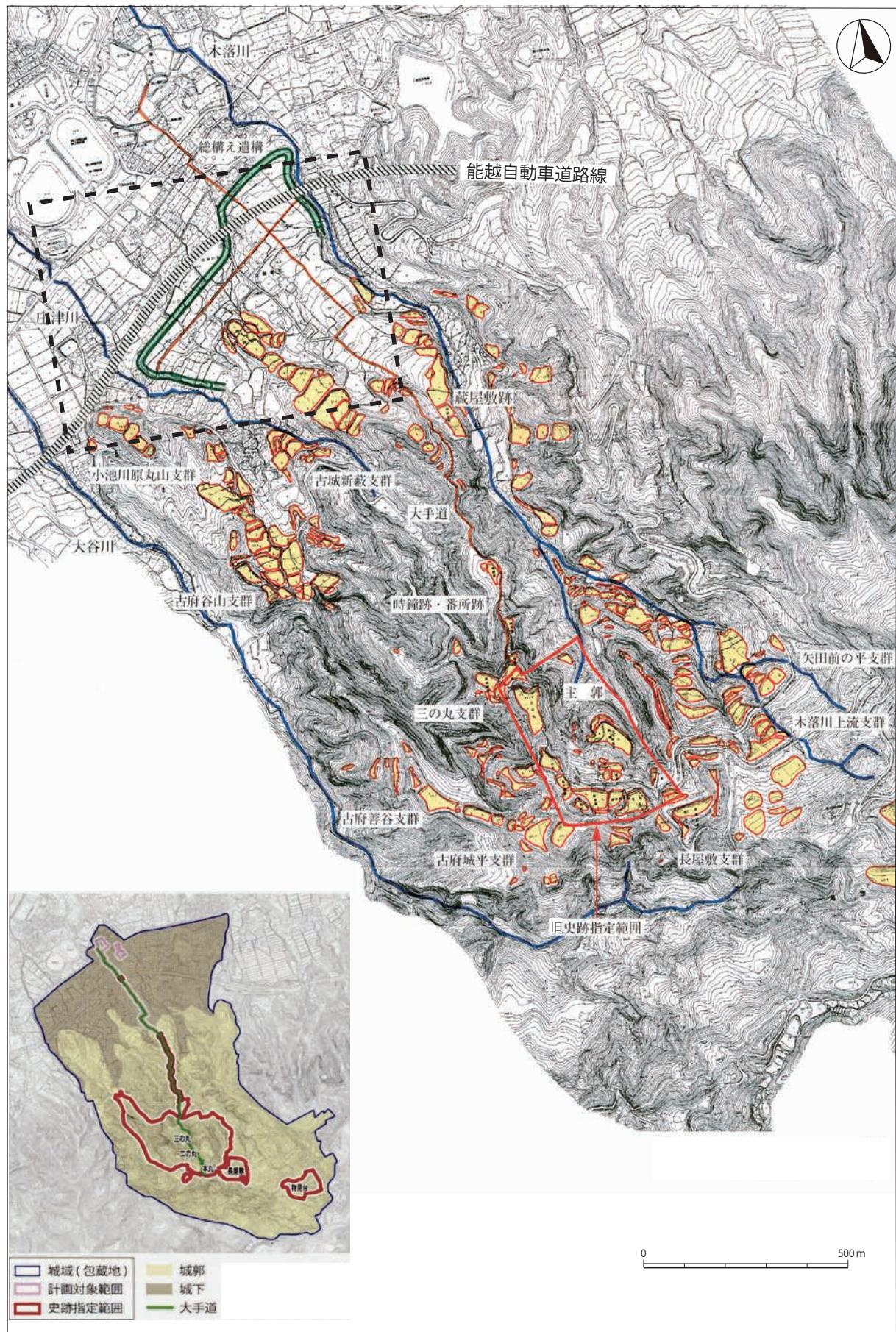
発掘調査および確認調査（遺構の存在を確認するが、掘り下げを行わない調査）は平成17年（2005）度から同25年（2013）度までの9次にわたって実施され、調査面積は計33,925m²にのぼる（第1表）。特に第1～3次および第6～9次調査の古屋敷町・古城町地内の調査域については、遺構への影響範囲を最小限にとどめるための高架橋方式による道路構造（城山高架橋L=855m）が採用・検討された（第2～4図）。そのため当初の第1～3次調査では、遺構の保存、景観等を配慮した橋脚の設置位置・間隔・橋梁構造等の基礎資料を得るために確認調査および側道予定箇所の調査が実施され、平成20年（2008）からは調査成果に沿った検討・整理、高架橋の基本設計等の作成が進められた。こうした検討結果を踏まえ、平成22年（2010）6月28日に「第1回 能越道七尾水見道路城山高架橋検討委員会」が開かれ、引き続き同年8月23日に第2回検討委員会を実施、同年8月30日には文化庁との協議が行われるなど、橋脚位置等の検討結果に基づいた第6次調査以降のより詳細な調査手順に向けた検討がくり返し行われた。

第1～3次調査の報告書は遺構編が『七尾城跡I』（石川埋文2020）、遺物編が『七尾城跡II』（石川埋文2021）として刊行されている。なお、第9次調査は古屋敷町地内（465m²）と小池川原町地内（1,650m²）の2箇所で実施され、本書『七尾城跡III』は第4・5・9次調査の小池川原町地内（6,890m²）に係る発掘調査報告書であり、橋脚建設ではなく盛土工事部分に伴う全面発掘調査となっている。

調査次	調査年度	所在地	調査主体	調査面積(m ²)	報告書
第1次	平成17(2005)	古屋敷町地内	(財)石川県埋蔵文化財センター	8,490	I・II
第2次	平成18(2006)	古城町、古屋敷町地内	(財)石川県埋蔵文化財センター	7,220	
第3次	平成19(2007)	古城町、古屋敷町、竹町地内	(財)石川県埋蔵文化財センター	7,040	
第4次	平成20(2008)	小池川原町地内	(財)石川県埋蔵文化財センター	3,440	III
第5次	平成21(2009)	小池川原町地内	(財)石川県埋蔵文化財センター	1,800	
第6次	平成22(2010)	古城町地内	(財)石川県埋蔵文化財センター	970	IV (予定)
第7次	平成23(2011)	古屋敷町、竹町地内	(財)石川県埋蔵文化財センター	2,540	
第8次	平成24(2012)	古屋敷町地内	(財)石川県埋蔵文化財センター	310	
第9次	平成25(2013)	古屋敷町地内	(公財)石川県埋蔵文化財センター	465	
第9次	平成25(2013)	小池川原町地内	(公財)石川県埋蔵文化財センター	1,650	III
調査面積 計				33,925	

第1表 調査年次(第1～9次)一覧表





第3図 七尾城跡主要曲輪群配置図 (---- 第2図範囲) (七尾市教委 2002・2021に加筆)



第4図 調査区航空写真 (---- 第2図範囲)

(七尾市教委 2002 に加筆)

第2節 調査の経過

今回の平成20・21・25年度（第4・5・9次調査）分の発掘調査は、東からの「城山高架橋」予定区域をぬけた庄津川以西の盛土工事部分において実施された（第2図）。

（1）平成20年度（第4次調査）

現地調査は、平成20年4月21日～11月13日に実施した。調査面積は3,440m²、担当は調査部国関係調査グループの谷内明央（主任主事）、坂下博晃（嘱託調査員）である。調査箇所は「北1区」、「北2区」、「南1区」の3地区であった（第2図）。

4月14日

県教委へ当初面積3,400m²で発掘調査届を提出。

4月21日～5月15日

4/21に国交省、七尾市能越道建設推進課、県文化財課と現地協議を実施。それを受け4/24付けて七尾市教委等へ発掘調査実施についての案内を行う。5/7から仮設建物・駐車場の用地整備、借上機材等の搬入を開始。5/12～15で北1区（約1,300m²）の表土除去作業を完了した。

5月19日～6月20日

5/19から現場作業員による周辺整備作業に着手。北1区の遺構検出作業は5/23までに終了。略図作成の後5/29から遺構掘削作業にはいり、遺構断面図等の実測作業を並行して行う。

6月23日～7月30日

6/23・24に仮設道をはさんだ北2区（約500m²）の表土除去作業を実施。6/26から遺構検出作業に着手する。5月以来進めてきた北1区の遺構掘削・実測作業は7/8に終了し、引き続き北2区の遺構掘削・実測作業を行う。7/23に北1・2区の空中写真測量を併せて実施。7/28～30で北1区の埋め戻しを完了した。

7月31日～8月29日

7/31から市道矢田郷80号線以南の南1区（約1,600m²）の表土除去作業に着手し、8/4～8に遺構検出、8/9には「親と子の発掘体験教室」を実施した。8/11・12で北2区を埋め戻し、盆明けの8/18～21には南1区の残り箇所の表土除去作業を行い、遺構検出・略図作成作業を進めた。

9月1日～11月13日

9/1から南1区の遺構掘削および遺構断面図等の実測作業に着手する。地形は東から西へと低くなり、西に進むにつれて搅乱箇所が多くなるようである。10/18には南1区を対象に現地説明会を開催。好天にもめぐまれ地元住民を中心に64名の参加者があった。10/22には南1区の完掘を受けて、北1・2区に続く2回目の空中写真測量を実施した。その後は断ち割り等の補足作業の後、11/4～7に埋め戻し作業、11/13に現地の引き渡しを行い現地調査を完了した。

県教委への現地作業の完了報告は11月18日付で提出された。その中では「調査区全域で16世紀以降とみられる掘立柱建物20棟以上や石組みの井戸19基などを検出した。遺物では土師器皿・越前焼・珠洲焼・備前焼・中国産磁器・瀬戸美濃焼・越中瀬戸焼・肥前産陶磁器、漆器椀・下駄、硯・石臼、銅錢など16世紀から17世紀前半の製品が出土した。今回の調査によって、中世から近世にかけての集落跡の展開が認められ、また、南1区では西側調査区外へ伸びる溝などが確認された。」と報告されている。

(2) 平成21年度（第5次調査）

現地調査は、平成21年9月15日～12月25日に実施した。調査面積は1,800m²、担当は調査部国関係調査グループの谷内明央（主任主事）、空良寛（主事）である。調査箇所は「南2区」、「市道区」、「北3区」の3地区であった（第2図）。

9月11日

県教委へ当初面積1,800m²で発掘調査届を提出。同日付で七尾市教委等へ発掘調査実施についての案内を行う。

9月15日～10月9日

9/15に町会長へ挨拶。調査区周辺は道路・農道幅ともに狭く、進入路等について確認した。9/28から仮設建物・駐車場の用地整備、借上機材等の搬入を開始し、10/6～9で南2区（約900m²）の表土除去作業を完了した。

10月13日～11月2日

10/13から現場作業員による周辺整備作業に着手。10/14には遺構検出作業、10/16からは遺構掘削作業にはいり、遺構断面図等の実測作業についても並行して行う。

11月4日～11月26日

11/4・5で市道矢田郷80号線に重なる市道区（約600m²）の表土除去作業を実施。以後、南2区と並行して作業を進める。市道区は調査区内に旧送水管が埋設されるなど搅乱域も多く、11/6から遺構検出および掘削作業に着手する。11/17には文化庁埋蔵文化財部門の渡辺丈彦文化財調査官が来跡し谷内が概要を説明した。11/24には南2区および市道区において空中写真測量を実施。11/26には市道区の埋め戻しを行った。

11月27日～12月25日

11/24の空中写真測量以降も南2区の補足分の実測作業を継続する。12/3に今年度の最終調査地となる北3区（約300m²）の表土除去作業を実施。12/4から遺構検出および掘削に着手し、南2区と並行して作業を進める。12/12には南2区を対象に現地説明会を開催し、雨天にもかかわらず50名の参加者があった。また、12/14には七尾市観光協会からの依頼で40名の参加者に発掘現場を案内した。翌12/15に北3区の空中写真測量を実施。12/21～25には南2区および北3区の埋め戻し作業を並行して行い、作業の終了をもって現地調査を完了した。



第4次調査 現地説明会（H20.10.18）



第5次調査 現地説明会（H21.12.12）

県教委への現地作業の完了報告は12月28日付で提出された。その中では「南2区と市道区の西側で、幅約3～4m、深さ約1m、延長50m以上とみられる南北方向の大溝を確認した。調査区全域では、16世紀代以降とみられる掘立柱建物6棟や石組井戸5基などを検出した。遺物では土師器皿・越前焼・珠洲焼・中国産磁器・瀬戸美濃焼・越中瀬戸焼・肥前産陶磁器、硯、銅錢など16世紀代から17世紀前半代の製品が出土した。今回の調査によって、中世から近世にかけての集落跡の展開が認められた。また、調査区西側で確認した大溝は区画溝と考えられ、さらに南側調査区外へ伸びると推測される。」と報告されている。

(3) 平成25年度（第9次調査・小池川原町地内）

現地調査は、平成25年10月23日～12月25日に実施した。調査面積は1,650m²、担当は調査部国関係調査グループの金山哲哉（専門員）、矢部史朗（嘱託調査員）、県関係調査グループの立原秀明（専門員）である。調査箇所は神明神社へ続く階段参道部分をはさんだ「南区」と「北区」の2地区であった（第2図）。

9月19日～10月1日

9/19に国交省、文化財課との事前現地協議を実施。調査区境や今後の調査手順等を確認する。10/1には県教委へ当初面積1,650m²で発掘調査届を提出。同日付で七尾市教委等へ発掘調査実施についての案内を行う。

10月23日～11月8日

10/23・30に再度国交省を交えた現地協議を行い、現場事務所用地の造成等について調整を重ねる。その後当初計画より約1ヶ月遅れで、神明神社以南の南区（約1,400m²）の表土除去作業を11/5～8に実施した。

11月11日～11月30日

11/11から現場作業員による周辺整備作業に着手し、併行して山側包含層の掘削作業を進める。また、11/18より金山専門員に替わり立原専門員・矢部嘱託が調査担当となる。11/21から遺構掘削作業にはいるが、山側は近代の水田耕作による削平が著しく、また、平野部では調査区南端で多数の須恵器片を確認した。11/29には南区で文化財課による終了確認が行われ、翌11/30には空中写真測量を実施した。

12月2日～12月25日

12/2～4で北区（約250m²）を中心とした表土除去作業を実施。12/5から遺構検出および掘削作業に着手した。なお、調査区西部域では道路遺構を確認するなどの成果がみられたが、東部域は遺構密度が低く、12/9には空中写真測量を実施、併せて文化財課による終了確認を行った。12/10からは第4・5次調査区から伸びる大溝の行方を確認する目的で調査区の一部拡張を実施し、確認後の12/13には国交省に現地を引き渡した。現地調査の完了日は、仮設建物等を解体し発掘機材類の搬出を終えた12/25とした。

県教委への現地作業の完了報告は12月26日付で提出された。その中では「平成21年度調査で確認された大溝は、今回の調査地まで伸びており、それが丘陵裾で完結することを確認した。また、南北方向に伸びる道路遺構を確認した。道路は丘陵裾の斜面を削り低い箇所に盛土をすることで造成しており、その上に小石等を敷き詰めて路面としていた。道路の西側には側溝が伴い数度の掘り直しが行われていたことを確認した。周辺では石組の井戸や土坑を確認した。これらの時期は七尾城跡とほぼ同時期とみられる。なお、奈良・平安時代の須恵器が調査地の南端でまとまって出土した。調査区外より流れこんだ状態であった。」と報告されている。

【調査体制】

平成20年度（2008）

業務主体	(財)石川県埋蔵文化財センター(理事長 中西吉明)
総括	黒崎宰作(専務理事)
事務	栗山正文(事務局長)
総務	釜親利雄(総務グループリーダー)
経理	谷内孝夫(総務グループ専門員)
担当	湯尻修平(センター所長)
	三浦純夫(調査部長)
	藤田邦雄(国関係調査グループリーダー)
	谷内明央(国関係調査グループ主任主事)
	坂下博晃(国関係調査グループ嘱託調査員)

平成21年度（2009）

業務主体	(財)石川県埋蔵文化財センター(理事長 中西吉明)
総括	黒崎宰作(専務理事)
事務	栗山正文(事務局長)
総務	釜親利雄(総務グループリーダー)
経理	谷内孝夫(総務グループ専門員)
担当	湯尻修平(センター所長)
	三浦純夫(調査部長)
	藤田邦雄(国関係調査グループリーダー)
	谷内明央(国関係調査グループ主任主事)
	空良寛(国関係調査グループ主事)

平成25年度（2013）

業務主体	(公財)石川県埋蔵文化財センター(理事長 木下公司)
総括	橋本定則(専務理事)
事務	栗山正文(事務局長)
総務	山口登(総務グループリーダー)
経理	小松孝弘(総務グループ主幹)
担当	福島正実(センター所長)
	藤田邦雄(調査部長)
	伊藤雅文(国関係調査グループリーダー)
	立原秀明(県関係調査グループ専門員)
	金山哲哉(国関係調査グループ専門員)
	矢部史朗(国関係調査グループ嘱託調査員)

【整理体制】

平成22年度（2010）

業務主体	(財)石川県埋蔵文化財センター(理事長 竹中博康)
総括	橋本 満(専務理事)
事務	栗山正文(事務局長)
総務	浅香繁晴(総務グループリーダー)
経理	谷内孝夫(総務グループ主幹)
担当	三浦純夫(センター所長)
	福島正実(調査部長)
	藤田邦雄(国関係調査グループリーダー)

平成23年度（2011）

業務主体	(財)石川県埋蔵文化財センター(理事長 竹中博康)
総括	浜崎 洋(専務理事)
事務	栗山正文(事務局長)
総務	浅香繁晴(総務グループリーダー)
経理	谷内孝夫(総務グループ主幹)
担当	三浦純夫(センター所長)
	福島正実(調査部長)
	伊藤雅文(国関係調査グループリーダー)

平成26年度（2014）

業務主体	(公財)石川県埋蔵文化財センター(理事長 木下公司)
総括	小嶋隆司(専務理事)
事務	栗山正文(事務局長)
総務	山口登(総務グループリーダー)
経理	長嶋 誠(総務グループ主幹)
担当	福島正実(センター所長)
	藤田邦雄(調査部長)
	伊藤雅文(国関係調査グループリーダー)

平成30年度（2018）

業務主体	(公財)石川県埋蔵文化財センター(理事長 田中新太郎)
総括	紺野欽一(専務理事)
事務	釜親利雄(事務局長)
総務	山口登(総務グループリーダー)
経理	西 邦広(総務グループ専門員)
担当	藤田邦雄(センター所長)
	垣内光次郎(調査部長)
	土屋宜雄(国関係調査グループリーダー)

令和2年度（2020）

業務主体	(公財)石川県埋蔵文化財センター(理事長 徳田 博)
総括	田村彰英(専務理事)
事務	北谷俊彦(事務局長)
総務	伊藤 直(総務グループリーダー)
経理	山崎 修(総務グループ専門員)
担当	伊藤雅文(センター所長)
	川畑 誠(調査部長)
	松山和彦(国関係調査グループリーダー)

令和3年度（2021）

業務主体	(公財)石川県埋蔵文化財センター(理事長 徳田 博)
総括	田村彰英(専務理事)
事務	北谷俊彦(事務局長)
総務	北谷祥子(総務グループリーダー)
経理	杉林賢明(総務グループ主幹)
担当	伊藤雅文(センター所長)
	川畑 誠(調査部長)
	澤辺利明(国関係調査グループリーダー)

令和4年度（2022）

業務主体	(公財)石川県埋蔵文化財センター(理事長 北野喜樹)
総括	田村彰英(専務理事)
事務	北谷俊彦(事務局長)
総務	杉林賢明(総務グループリーダー)
経理	西田智恵(総務グループ専門員)
担当	川畑 誠(センター所長)
	土屋宣雄(調査部長)
	柿田祐司(国関係調査グループリーダー)

第2表 調査・整理体制

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境

七尾城跡を擁する七尾市は、日本海に突き出た能登半島の中央東側に位置する。能登半島の海岸線は半島西岸の日本海からの荒波を直接受ける崖地形の多い外浦海岸と、能登島を内包する波穩やかな七尾湾から富山湾に面した内浦海岸に大別される。

七尾市は、七尾南湾に位置し能登島を防波堤とした天然の良港である七尾港を窓口として発展してきた地方都市であり、現在の規模は人口約49,600人、面積約318km²となっている。市街地は七尾港の南の低地に広がり、外洋の日本海交易と七尾湾を中心とする内湾交易、さらには北陸道に連絡する能登街道や、奥能登へ向かう奥能登街道の発着地でもあった。こうした海・陸交通の要衝であった七尾は、古代律令国家の拠点である能登国府が置かれて以来、歴代の政治拠点となり、今日に至るまで能登の政治・経済・文化の中心的な役割を果たしている。

現在の市域は七尾西湾・南湾を取り囲むように面している。西側は南にかけて標高100～180mほどのなだらかな眉丈山系が連なる。東側は崎山半島から南にかけて、標高564mの石動山を最高峰とする急峻な石動山系が連なっており、七尾城跡が位置する通称「城山」は石動山の北部に位置する。両山系の間の南西部には、羽咋市にかけて幅2～4km、総延長約25kmの邑知地溝帯が広がっており、能登最大の穀倉地帯となっている。戦国時代に能登守護畠山氏によって築かれた七尾城は、古城町・古屋敷町・小池川原町・竹町一帯に所在する巨大城郭で、山麓に展開する城下も含めて遺構が良好に残存する全国的にも貴重な事例であり、さらに近年の山城ブームもあって訪問者数は増加傾向にある。七尾市は平成30年度から令和2年（2018～2020）度までの3ヶ年で『史跡七尾城跡整備基本計画書』を策定（七尾市教委2021）、今後の「整備・保存・活用」に向けた積極的な施策の展開が期待される。



第5図 遺跡の位置

第2節 歴史的環境

(1) 周辺の遺跡

縄文時代～古墳時代 縄文時代の遺跡は眉丈山系の徳田台地周辺に多く確認され、その代表が中期から後期の赤浦遺跡（60=遺跡番号）である。竪穴住居や多数の土坑・貝塚を検出し、土偶や三角墳形土製品などの呪具が出土した。他には前期前葉の竪穴住居を検出した国分尼塚遺跡（19）や、晩期末から弥生時代中期初頭の貯蔵穴を検出した小島西遺跡（109）などがみられる。

弥生時代になると、徳田台地上で多くの遺跡が確認される。小島六十苅遺跡（53）は、縄文時代晚期の影響を強くとどめる柴山出村I式の弥生土器が出土した集落遺跡である。弥生時代中期には細口源田山遺跡（26）や千野遺跡（80）、後期では高地性集落の可能性をもつ国分高井山遺跡（38）がある。

古墳時代になると、石動山系の麓でも多くの遺跡が確認されはじめめる。前期初頭に臨海部の段丘上に形成された万行遺跡（108）ではこの時期においては国内最大級の大型建物群が検出された。前期に築かれた国分尼塚1号墳（32）は県内有数の前方後円墳で、木棺から中国青銅鏡や銅鏡などが出土して

おり、国内統一を進めていたヤマト政権との関係を示す。七尾南湾地域においては、矢田丸山古墳(95)や矢田高木森古墳(103)を擁する矢田古墳群が形成された。後期の院内勅使塚古墳（市内下町）と終末期の須曾蝦夷穴古墳（市内能登島須曾町）は、七尾南湾周辺の支配者であったとされる「能登臣」との関係が想定されている。

古代 7世紀後半に律令国家が成立すると、8世紀前半から半ばにかけて二度の立国を経て能登国が成立した。律令体制下における官衙的性格を持つ遺跡は、最初石動山系山麓の矢田郷地区に現れる。能登国分寺跡(81)の発掘調査では、西に金堂、東に塔が建つ「法起寺式伽藍配置」が採用されたことがわかつており、新羅式の軒丸瓦も出土している。国分寺から北約3kmの河口部に位置する小島西遺跡(109)では1,000点を超える木製祭祀具が出土しており、8世紀後半から12世紀はじめまでの長い期間、国司や郡司によって「祓」の祭祀が行われていたとみられる。

中世 平安時代末期以降、低地帯への進出が顕著となり、現在の七尾市街地にあたる府中に国衙や守護所が置かれ、能登の政治の中心拠点となった。発掘調査で中世のあり方がわかる事例は少ないが、細口源田山遺跡(26)では14世紀末から16世紀初頭までの土葬墓54基、火葬墓約80基、村堂とみられる施設も確認されており、室町期の墓地や村落の様相がわかる貴重な資料である。その他、旧中島町地区では上町マンダラ中世墓群、小牧神社中世墓、中笠師中世墓などの墳墓が丘陵部に造られており、いずれも水系や生産基盤を支配する在地領主の造営にかかるものと考えられている。戦国期では小島西遺跡(109)が特筆される。遺物は16世紀前半から中頃の土師器皿が中心で、大型の井戸や建物、街路を検出した。現在の市街地にあたる所口の湊町の西縁に発展拡大した町場であったと考えられ、畠山氏と密接な関係にあったことが想定される。

近世 七尾城跡周辺において近世の様相が発掘調査でわかる遺跡は、小丸山城跡(50)の北西に位置する小島遺跡(51)・小島西遺跡(109)に限られる。小島遺跡では堅固な岩盤を掘削した大溝が検出されており、小丸山城と七尾湾を結ぶ運河の可能性が指摘されている。

(2) 七尾城の沿革概要

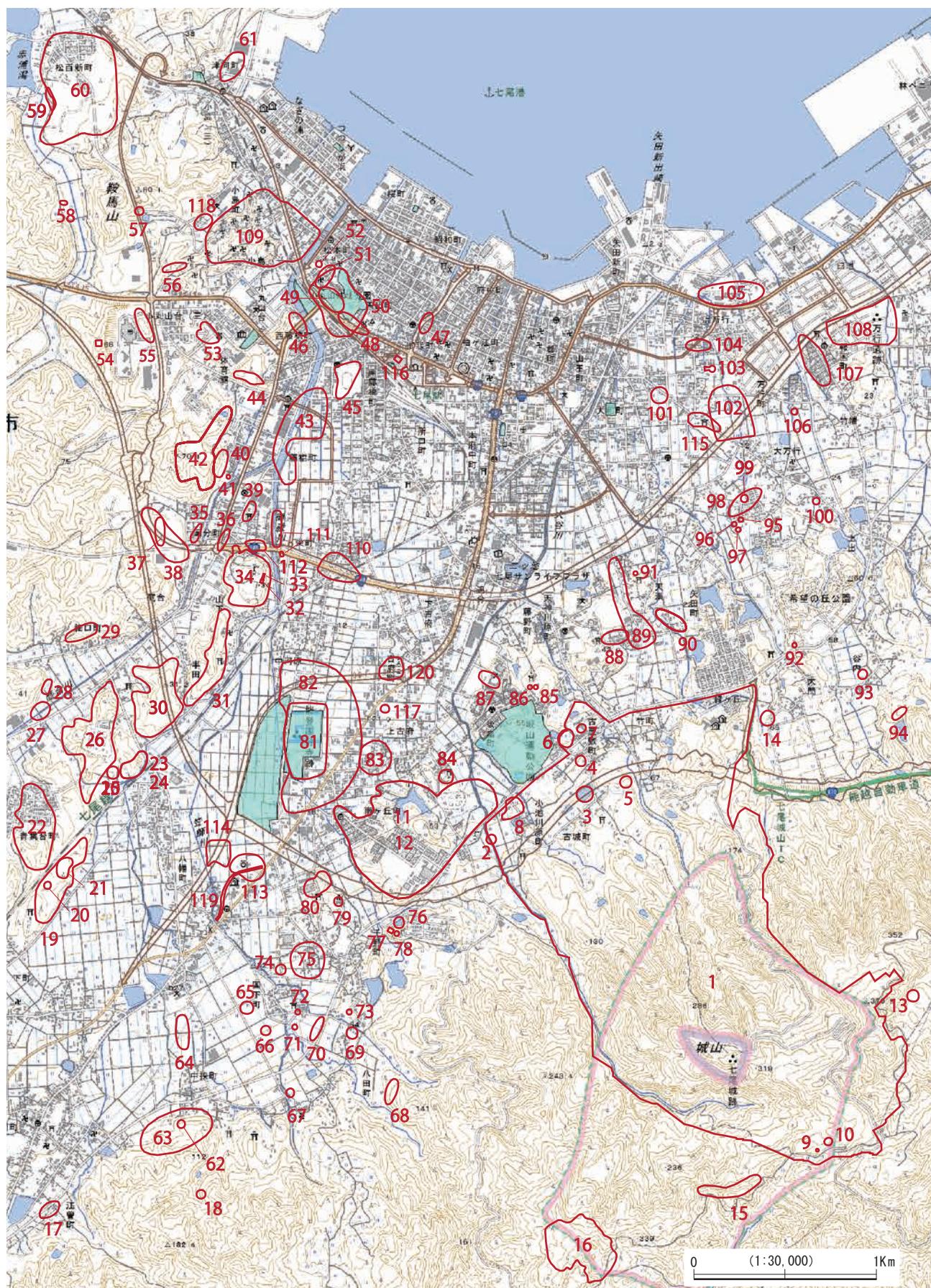
七尾城を築いた能登畠山氏は、室町時代の有力守護大名であった畠山氏の分家にあたる。応仁・文明の乱(1467～1477)後の文明10年(1478)に3代義統が能登に下向し、府中の守護所を拠点として領国經營を開始。明応6年(1497)に義統が死去すると家督を継いだ4代義元と弟の慶致が争い、永正5年(1508)には慶致の子義総を次期当主とすることで和睦が成る。その後永正10年(1513)に能登国内で大規模な内乱が起き、内乱終結後の永正12年(1515)に義総が7代当主に就任すると、政治拠点を府中の守護所から七尾城に移転、永正14年(1517)には公家の冷泉為広が能登下向に際して七尾城に滞在するなど、公家や禪僧など多くの文化人が七尾を訪れ、畠山文化が華開いた(第3表)。天文13年(1544)に彭叔守仙が記した「独楽亭記」には、城下の市場が商人で賑わい、城下から1里ほど延びる道沿いに「千門万戸」が建ち並ぶ様子などが描かれ、府中と七尾城下の二元的景観が窺える。

しかし、天文14年(1545)、能登畠山氏の最盛期を築いた義総が死去すると能登は内乱の時代に突入する。その最も大規模なものが、弘治元年(1555)からの重臣温井氏らの反乱である。内乱沈静後は9代義綱が家督を継ぐも永禄9年(1566)に追放、以後は幼少の10代義慶、11代義隆を擁立した重臣らが実権を掌握する。そして、天正4年(1576)には北陸平定と上洛を目指す上杉謙信が能登へ侵攻し七尾城を包囲、翌5年(1577)重臣の内応等により七尾城は落城し、能登畠山氏は滅亡した。

その後畠山旧臣らは織田信長に接近し上杉勢を追放するが、天正8年(1580)信長に降伏、七尾城を明け渡す。翌9年(1581)には前田利家が信長から能登一国を与えられ、所口の小丸山城の築城に着手したとされるが、しばらくは七尾城を拠点にしたともされ、発掘調査成果を含めた検討を要する。

西暦	年号	主な出来事	城主(代) (城代)
1514	永正11	畠山義元、大呑北莊の百姓に七尾出陣の忠誠を賞して年貢十分の一を永代免除	畠山義元⑥ 畠山義綱⑦
1515	永正12	畠山義元が没し、義綱が畠山氏当主となる。	
1517	永正14	冷泉為広が能登に下向し、翌年まで七尾城に滞在	
1523	大永3	七尾城下招月庵で正韵が連歌会を催す（「賦何路連歌」）。	
1525	大永5	月村斎宗碩が七尾城内にて独吟和歌を発す。	
1526	大永6	畠山義綱、七尾城内において歌会を催し、冷泉為広・為和父子が列席する。	
1539	天文8	長谷川等伯、七尾城下に生まれる。	
1544	天文13	彭叔守仙が「独楽亭記」を筆録	
1545	天文14	畠山義綱が没し、次男義統が畠山氏当主となる。	
1550	天文19	重臣温井総貞・遊佐続光ら畠山七人衆の反乱（七頭の乱）が起き、畠山義綱が七尾城に籠城する。	
1551	天文20	石動山が焼き討ちを受け、七尾城が焼失。義綱は出家し、義綱が家督を継ぐ。	畠山義綱⑧
		畠山七人衆が政治の主導権を握る。	
1553	天文22	七人衆の遊佐続光らが反乱を起こし、鎮圧される。	畠山義綱⑧ 畠山義綱⑨
1555	弘治元	温井続宗らが反乱を起こし、義綱・義綱らは七尾籠城に追い込まれる。	
1556	弘治2	畠山義綱・義綱・諸橋六郷に「御構柵」構築のための材木の供出を命じる。	畠山義綱⑨
		畠山義綱・義綱・上杉謙信に七尾城が堅固であることを伝え、支援を依頼する。	
1558	永禄元	七尾城方が反撃に転じ、勝山城に拠る温井続宗らを討ち取る。	畠山義綱⑨
1561	永禄4	畠山義綱、七尾城内の長続連邸を訪れる。	
1566	永禄9	遊佐続光ら重臣が畠山義綱・義綱らを追放し、義綱の子義慶を擁立する。	畠山義慶⑩
1571	永禄11	畠山義綱、能登へ攻め入り、七尾城を包囲するが、反撃により撤退する。	
1574	天正2	畠山義慶が殺され、弟の義隆が擁立される。	畠山義隆⑪
1576	天正4	越後の上杉謙信、能登へ攻め入り、七尾城を包囲する。畠山義隆没する。	
1577	天正5	遊佐・温井らが上杉軍に内応し七尾城が落城。能登畠山氏が滅亡する。	(鰐坂長実)
1578	天正6	城代の鰐坂長実、能登の諸将を七尾に登城させ、血判の誓詞をとる。	
1579	天正7	温井景隆ら、城代の鰐坂長実ら上杉勢を追放し、織田信長に通じる。	畠山旧臣
1580	天正8	温井景隆ら、織田信長に降服し、七尾城を明け渡す。	
1581	天正9	織田信長、城代の菅屋長頼に命じて七尾城内で遊佐一族を殺害する。 温井景隆・三宅長盛らは越後に逃亡する。	(菅屋長頼)
		前田利家が織田信長から能登一国を与えられ、七尾城に入城する。	
1582	天正10	前田利家、温井景隆らの進攻に備え、七尾城の改修のために穴水の百姓に材木を供出させ、七尾に勤員する。	前田利家
		前田利家、棚木城で捕えた長景連一族を七尾城下の赤坂で処刑する。	
1583	天正11	前田利家、羽柴秀吉より河北・石川二郡を与えられ、七尾から金沢へ移る。	前田利家 (前田安勝)
1585	天正13	前田利家、七尾城下の寺院に小島への移転を命じる。	
1586-1589	天正14～17	前田利家、所口に小丸山城を築き、七尾城は廃城となる。	

第3表 七尾城関連年表



第6図 七尾城跡と周辺の遺跡

第2節 歴史的環境

番号	県番号	遺跡名	種別	時代	番号	県番号	遺跡名	種別	時代
1	218200	七尾城跡	城館	中世・近世	61	211800	津向横穴群	横穴墓	古墳
2	218201	七尾城跡(古府谷内地区)	城館	中世・近世	62	215700	中挾経塚	その他(経塚)	中世・近世
3	218202	七尾城跡(古城の池地区)	城館	中世・近世	63	215800	中挾遺跡	散布地	中世
4	218203	七尾城跡(古屋敷地区)	城館	中世・近世	64	215900	中挾角田遺跡	散布地	古墳
5	218204	七尾城跡(古城大念寺屋敷地区)	城館・社寺	中世・近世	65	216000	国下遺跡	散布地	古代・中世
6	218205	七尾城跡(シッケ地区)	集落	中世・近世	66	216100	八田椿森遺跡	散布地	中世
7	218206	七尾城跡(古屋敷ラントウ地区)	集落	中世・近世	67	216200	八田大苗代遺跡	散布地	弥生・古墳
8	264500	小池川原地区遺跡	集落	古代	68	216300	千野横穴群	横穴墓	古墳
9	262600	熊渕大山1号塚	塚	不詳	69	216400	千野A遺跡	散布地	不詳
10	218300	城山中山遺跡	散布地	縄文	70	216500	国下柳田遺跡	集落	古代
11	217800	古府タブノキダ遺跡	散布地、集落	縄文・古墳・古代	71	216700	八田梨ノ本遺跡	散布地	縄文
12	217900	古府十三塚遺跡	その他	中世	72	216800	国下縄文遺跡	散布地	縄文
13	219100	城山旭遺跡	散布地	縄文	73	216900	千野古墳群	古墳	古墳
14	219200	矢田大門遺跡	散布地	縄文	74	217000	千野魔寺	集落	古代・中世
15	262500	熊渕浜形中世墓群	墳墓	中世・近世	75	217100	千野大聖寺平遺跡	散布地	古代・中世
16	201100	古府枒形岩跡	城館	中世	76	217200	千野高塚遺跡	散布地、集落	弥生・古代
17	200600	江曾池の原遺跡	散布地	古代	77	217301	千野高塚1号墳	古墳	古墳
18	200700	中挾横穴	横穴墓	不詳	78	217302	千野高塚2号墳	古墳	古墳
19	207200	月夜見神社古墳群	古墳	古墳	79	217400	千野正福寺遺跡	散布地	縄文
20	207300	下町中世墓遺跡	その他の墓	中世	80	217500	千野遺跡	散布地、集落	弥生～中世
21	207400	下町横穴群	横穴墓	古墳	81	217600	能登国分寺跡附建物群跡	散布地、集落	弥生～中世
22	207800	八幡昔谷遺跡	散布地、集落	縄文～中世	82	217700	古府・国分遺跡	集落・社寺	古墳～中世
23	207900	八幡八幡神社古墳群	古墳	古墳	83	218000	古府魔寺	社寺	古代
24	208000	八幡経塚	その他(経塚)	中世	84	218100	古府総社遺跡	散布地	古代
25	208100	八幡塔地面遺跡	散布地	古代	85	218901	後畠東之御塚古墳	古墳	古墳
26	208200	細口源田山遺跡	集落、その他の墓	弥生・古代・中世	86	218902	後畠西之御塚古墳	古墳	古墳
27	208300	細口遺跡	散布地	古墳	87	219000	藤野遺跡	散布地、集落	弥生・古代～近世
28	208400	細口B遺跡	散布地	中世	88	219300	矢田天神川原遺跡	散布地	古代・中世
29	208500	細口古墳群	古墳	古墳	89	219400	矢田天神川原B遺跡	散布地	古代
30	208600	国分山遺跡	散布地	弥生・古墳	90	219500	矢田中瀬古墳群	古墳	古墳
31	208700	国分火司神社古墳群	古墳	古墳	91	219600	矢田天満宮古墳	古墳	古墳
32	208801	国分尼塚1号墳	古墳	古墳	92	219700	万行首塚	貝塚	不詳
33	208802	国分尼塚2号墳	古墳	古墳	93	219800	万行谷内遺跡	散布地	縄文
34	208900	国分尼塚遺跡	散布地、集落	縄文・弥生・古代	94	219900	万行横穴群	横穴墓	古墳
35	209000	国分高井A遺跡	散布地	古墳	95	220001	矢田丸山古墳	古墳	古墳
36	209100	国分高井B遺跡	散布地	縄文～古墳	96	220002	矢田高塚古墳	古墳	古墳
37	209200	国分高井山古墳群	古墳	古墳	97	220003	矢田いも塚古墳	古墳	古墳
38	209300	国分高井山遺跡	散布地、集落	弥生～古代	98	220100	矢田竈跡	生産遺跡	近世
39	209400	国分鰐山遺跡	散布地	弥生・古墳	99	220200	矢田明星館遺跡	集落	古代～近世
40	209500	岩屋遺跡	散布地	古墳	100	220300	万行経塚	経塚	近世
41	209600	岩屋A遺跡	散布地	不詳	101	220400	大和遺跡	散布地	縄文～古墳
42	209700	国分岩屋山古墳群	古墳	古墳	102	220500	矢田遺跡	散布地、集落	弥生～中世
43	209800	藤橋遺跡	散布地、集落	弥生～中世	103	220600	矢田高木森古墳	古墳	古墳
44	209900	岩屋十三塚遺跡	塚	中世・近世	104	220700	矢田高木森遺跡	散布地	弥生・古代
45	210000	南藤橋七高遺跡	散布地、集落、城館	弥生・中世	105	220800	七尾軍艦所跡	生産遺跡	近世
46	210100	西藤橋遺跡	散布地	不詳	106	220900	万行御所遺跡	散布地	中世
47	210200	檜物町遺跡	集落	中世・近世	107	221000	万行赤岩山遺跡	集落	縄文～古墳
48	210300	小丸山公園下遺跡	散布地	不詳	108	221100	万行遺跡	集落・社寺・古墳	縄文～古墳・中世
49	210400	小丸山遺跡	散布地	古墳	109	261700	小島西遺跡	集落・祭祀跡・道路	縄文～中世
50	210500	小丸山城跡	集落	古墳・中世・近世	110	261800	栄町遺跡	集落	古墳～中世
51	210600	小島遺跡	散布地	古墳・中世	111	261901	国分遺跡	散布地、集落	弥生～中世
52	210700	小島旧七商高遺跡	散布地	古墳	112	262700	国分B遺跡	集落	弥生～中世
53	210800	小島六十石遺跡	集落	弥生	113	262900	千野林田遺跡	散布地、集落	弥生・古墳
54	210900	藤橋セニガミネ古墳	散布地、古墳	弥生～古代	114	263000	八幡大皆口遺跡	集落	古代・中世
55	211000	藤橋十三塚遺跡	散布地	縄文・中世・近世	115	263100	矢田神社東遺跡	集落	古墳
56	211100	小島十三塚遺跡	塚	近世	116	263700	御祓町遺跡	屋敷跡	中世・近世
57	211200	小島池底遺跡	散布地	縄文	117	265400	古府遺跡	散布地	不詳
58	211300	赤浦大割遺跡	散布地	縄文～古墳	118	265500	津向B遺跡	散布地	中世
59	211400	赤浦かくちだ遺跡	散布地	古墳・古代	119	266000	能登街道(ハシラマツ地区)	道路跡	中世・近世
60	211500	赤浦遺跡	散布地、集落、貝塚	縄文～古墳	120	266700	古府ヒノバンデニバン遺跡	集落	古代

第4表 遺跡地名表

第3章 概要と分類

第1節 調査区の概要

今回報告分の第4・5次、9次調査区は、県埋蔵文化財センターが担当した能越自動車道建設工事関連調査区（第1～9次調査）内の最も西側にあたる（第2図）。地形的には七尾城下の西を画するとされる庄津川と大谷川にはさまれ、小池川原丸山群といった山麓曲輪群の裾部を含む谷をぬけた平場域に位置する（第7・8図）。七尾城の標高300mの本丸を軸とした縄張りは、外堀に見立てられる東の蹴落川から西の大谷川までの東西約1.2km、南北約2.5kmの範囲を中心に、山頂・山腹・山麓の曲輪群からなる城郭域（約297ha）とその北側に広がる城下域（約26ha）に大別される（第3図）。一般に城下の主要域については、東西南北軸の町割りが復元される東西が東の蹴落川から西の庄津川までの約600m、南北が大手道沿いの南の高屋敷から北のシッケ地区付近までの約720mとみられている（七尾市教委2021）。

こうした状況からすれば、今回の小池川原町地内に所在する調査区については、七尾城下域には含まれるものその主要域からは外れる七尾城下の北西縁辺部に該当する可能性があり、総構内外の七尾城下主要域に含まれるとみられる第1～3次調査成果との比較検討にも注意を要する。



第7図 第4・5次、9次（小池川原町地内）調査区位置図（〔〕第2図範囲）



第8図 第4・5次、9次（小池川原町地内）調査区配置図

第2節 遺物の分類

今回実測対象とした出土遺物は、第4・5次調査406点、第9次調査27点の計433点を数える。ここではその内の中世以降の土器・陶磁器類を対象に(1)土師器皿、(2)陶磁器に大別し分類を行った。なお、分類方法・分類名等は七尾城跡II（石川埋文2021）に準拠し、分類図右下の数字は、調査年次-遺物報告番号である。

(1) 土師器皿（第9図）

土師器皿169点（第4・5次160点、第9次9点）がある。七尾城跡II（第1～3次調査）では器形、成形、法量等によってA～J類に分類し、A～C類、E～G類については主に器形、成形による細分を行ったが、破片での見極めが難しいものもあるためここでは大分類までとした。また、A・F・H・I・J類については今回出土が認められなかったが、前回報告分との比較から分類説明文はそのまま残した。

A類：（今回未確認） おおむね口径19cmを超える大皿。器面を外型状に丁寧に成形し、口縁部を横ナデする。

B類：全体に器壁は薄く、広く平坦な底面をもつ。口縁部を先細り気味に外反させ、内面に面をもつ。比較的明瞭な見込み圈線を形成しつつ体部内面を横ナデし、最後に「2」字状にナデ抜くものもみられる。外面のナデは比較的明瞭で胎土は精良なものが多い。

C類：全体に器壁は厚く、底面は平坦もしくは内反りする。外面の横ナデは明瞭で口縁部はゆるやかに外反し、ナデの下端に稜が形成される。見込み圈線はやや広めで、体部内面のナデ抜きにはいくつかのタイプが認められる。

D類：全体に器壁は厚く、底面は内反りもしくは不整形気味とする。口縁部は外反せず単純口縁とし、外面の横ナデは不明瞭なものが多い。見込み圈線はやや広めで、体部内面のナデ抜きには「2」字状、「2」と「の」の中間的なナデ抜き、もしくはナデ抜かないものもみられる。胎土は粗いものが多い。

E類：口縁～内面を横ナデして「の」字状にナデ抜く。底面はほぼ平坦なものが多く、見込み圈線ははいらない。外面の横ナデ幅は狭い。

F類：（今回未確認） 口縁～内面を横ナデして「の」字状にナデ抜く。底面は丸底かやや丸みをもち、見込み圈線ははいらない。外面の横ナデ幅は狭い。

G類：外底面中央を押し上げる、いわゆる「へそ皿」。

H類：（今回未確認） 平底からやや急角度で体部が立ち上がる、深めの小杯。

I類：（今回未確認） 平底または丸底気味の底面から比較的短い体部が急角度で直立気味に立ち上がる。

J類：（今回未確認） 両端を内側に折り曲げた、いわゆる「耳皿」。

なお、土師器皿の年代観についても前回報告分を踏襲し、①～③グループに段階設定する。主な特徴および概念設定は以下のとおりである。

①グループ（16世紀第2四半期後半～第3四半期頃）：畠山氏段階（総構構築以前含む）

最も大きな特徴はそのほとんどが焼成の良好な硬質土器で、白色系は少なく、多くが赤色系で占められる点にある。また、B・C類の口縁部外反の伸び及び外面ナデが比較的明瞭で、見込みナデの際に水で垂れた粘土が溜まり、わずかな凸線状に底部周縁をめぐる個体が一定量認められる。G類は底部外面をしっかりと押し上げる傾向が強い。

②グループ（16世紀第3四半期頃）：畠山氏段階（総構構築以後含む）

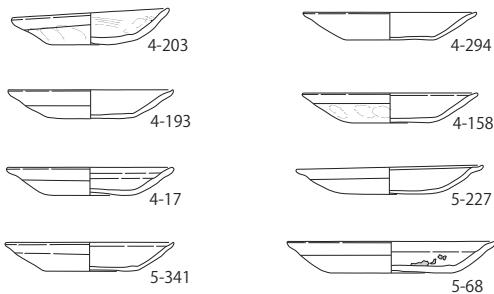
赤・白色系の混合、または白色系が多く、①グループのような赤色系の硬質土器のみで構成される

一群は確認できていない。それに対し、焼成不良で胎土の砂っぽい軟質土器が一定量を占めるようになる。全体に外面ナデは弱く、見込ナデもわずかに凹む程度であるが、見込に粘土溜まりの名残をもつものもある。また、G類底部外面の押し上げには深浅があり、全体に薄手で平面形が歪む華奢な個体もみられる。

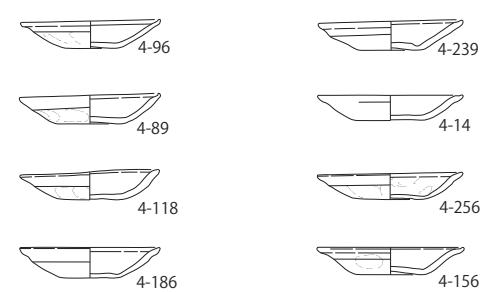
(3) グループ (~16世紀第4四半期頃) : 主に前田氏段階 (越中瀬戸焼共伴含む)

引き続き、白色系で砂気の強い軟質土器が大勢を占め、加えて各種土器とともに、器壁が5~6mmを超える厚手の一群が一定量みられるようになる。全体に口縁部外反の伸びは弱く、B類体部は屈曲が強く直線的に立ち上がる傾向をもつ。見込ナデは弱いが、凹線から沈線状になるものは認められない。また、G類底部外面の押し上げはわずかに凹む程度であり、器壁も厚い。

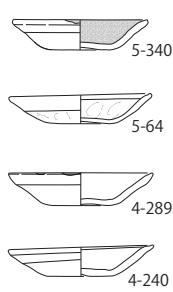
B



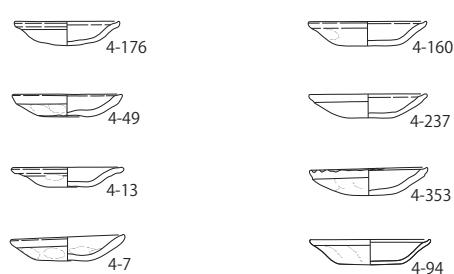
C



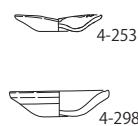
D



E



G



0 (1:6) 20 cm

第9図 土師器皿の分類

(2) 陶磁器（第10・11図）

国産陶磁器127点（第4・5次122点、第9次5点）、貿易陶磁器44点（第4・5次）がある。国産陶磁器は施釉陶器として瀬戸美濃窯産陶器、越中瀬戸焼、貯蔵・調理容器具として珠洲焼、越前焼、備前焼等、近世以降では肥前陶磁器等が出土した。貿易陶磁器は中国製品の青磁、白磁、青花が出土した。以下に主な分類を示すが、幾つかの未確認製品については前回報告分との比較から分類説明文をそのまま残した。

【国産陶磁器】

瀬戸美濃窯産陶器

出土の大半は大窯製品である。鉄釉天目茶碗、灰釉端反・丸皿を主体とし、大窯第1～4段階に編年される（藤澤良祐ほか2007）。分類等にあたっては、鈴木正貴氏からご教示をいただいた。

大窯第1段階：1480～1530 大窯第2段階：1530～1560

大窯第3段階：1560～1590 大窯第4段階：1590～1610

越中瀬戸焼

瀬戸美濃窯産陶器の影響を受けて天正年間（1570年代頃）に成立したとされる陶器窯である。大窯期（16世紀末以降）では富山県上市町（黒川窯）、滑川市（小森窯）、立山町（山下窯）での生産が想定されている。生産器種は多岐にわたるが、16世紀末（大窯期）～17世紀前半（登窯期）に関しては、皿および擂鉢が分類されている（宮田1988・1997）。分類等にあたっては、三浦知徳・盛田拳生氏からご教示をいただいた。

皿A（丸皿）：口縁部が内湾あるいはわずかに外反する。1a～c類（付高台）、2a・b類（削り込み高台）、3類（削り出し高台）に細分される。今回は大窯期の丸皿1a類を確認した。

皿B（折縁皿）：（今回未確認）口縁部が外反し端部をつまみ上げる。1a～c類（付高台）、2類（削り込み高台）、4類（削り出し高台）に細分される。

皿C：登窯期の端反皿で、高台の形状で2～4類に細分される。今回は削り出し三角高台のC3類、削り出し輪高台のC4類を確認した。

皿D：登窯期。口縁部が屈曲して直立する向付タイプを確認した。

擂鉢A：口縁部に縁帯をもつ。縁帯の形状等で1～4類に細分される。今回は縁帯を外方につまみ出すA2類、縁帯が三角形状になるA3類を確認した。

擂鉢B：口縁部上端に面をもつ。上端面の形状等で1・2類に細分される。今回は口縁端部上面が凹むB2類を確認した。

珠洲焼

石川県能登半島の先端部にある珠洲郡に分布する中世陶器窯で、珠洲市で38基、能登町で3基が確認されている。甕・壺・擂鉢を主体とし、I～VII期に編年される（珠洲市教委2006・2010）。今回はIII期以降を確認した。分類等にあたっては、大安尚寿氏からご教示をいただいた。

I期：1150～1200 II期：1200～1250 III期：1250～1280 IV期：1280～1380

V期：1380～1450 VI期：1450～1480 VII期：1480～1500

越前焼

甕・壺・擂鉢を主体とする。甕は従来の大甕I～IV群の分類を基本に、III群を1～3類、IV群を1～8類に細分する（福井県教育庁2016）。また、擂鉢はIV群をa～d類に細分する（福井県教育庁2012）。15世紀前半以降の甕および擂鉢の年代観は以下のとおりであるが、今回は甕III群1～3は未確認である。分類等にあたっては、木村孝一郎氏からご教示をいただいた。

甕Ⅲ群：(今回未確認) I・II群にみられた口縁帶はなく、口縁部は肥厚しない。口縁部外面の稜、内面の段の形状等で1～3類に細分される。

甕Ⅳ群：口縁部の立ち上がりが短くなり、肥厚する。肥厚の上面幅は時間を追って増幅する。口縁部外面の稜、内面の段の形状、口縁上面幅の長短等で1～8類に細分される。

擂鉢Ⅳ群：口縁部内面に段や沈線が巡る。口縁部の形状や擂目の状況等でa～d類に細分される。

甕Ⅲ群1・2：(今回未確認) 15世紀前半～中頃

甕Ⅲ群3・IV群1～3、擂鉢Ⅳ群a・b：15世紀後半(末)～16世紀初頭

甕Ⅳ群4・5、擂鉢Ⅳ群c：16世紀第2四半期

甕Ⅳ群6～8、擂鉢Ⅳ群d：16世紀第3四半期

備前焼

擂鉢2点が出土した。中世は1～6期、近世は1、2期に編年される(乘岡2005)。出土品は中世6期、近世1期とした。

中世6期：16世紀初頭～16世紀第3四半期

近世1期：16世紀第4四半期～17世紀第1四半期

肥前陶磁器

近世以降の出土陶磁器の大半を占める。I～V期に編年される(九近学2000)。

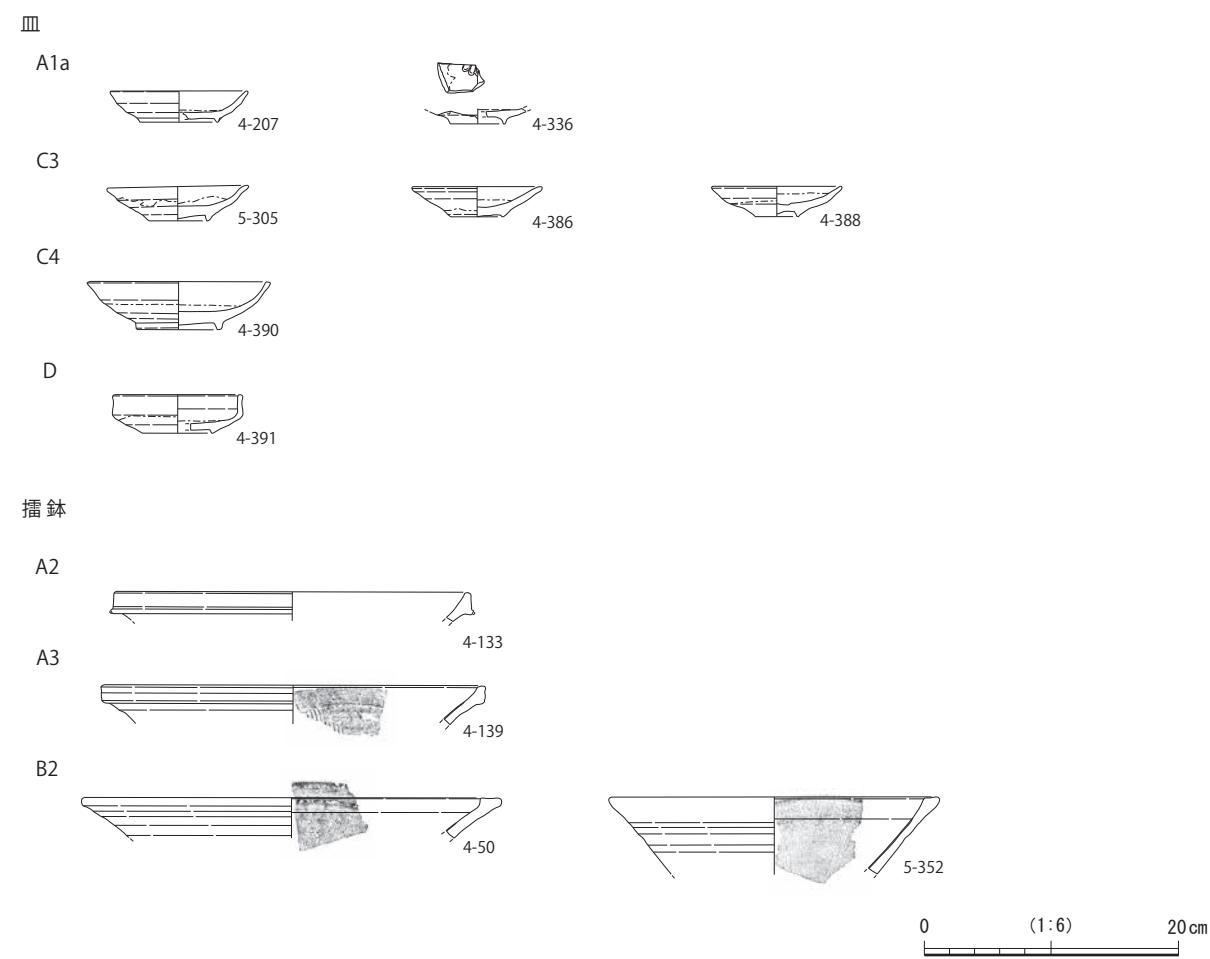
I期：1580～1610年代

II期：1610～1650年代

III期：1650～1690年代

IV期：1690～1780年代

V期：1780～1860年代



第10図 越中瀬戸焼の分類

【貿易陶磁器】

青磁、白磁、青花の分類は、小野正敏氏の分類を基本とし（小野1982・1985）、森毅氏（2005・2019）、柴田圭子氏（（財）愛媛県埋文1998、柴田2001）等の分類基準を参考とした。

青磁碗

A群：（今回未確認）外面に鎧蓮弁文がはいる。

B群：（今回未確認）外面に粗い蓮弁がはいり、口縁に雷文帯をもつものともたないものとがある。また、C群より間隔の広い幅広の線（ヘラ）描蓮弁文がはいるものもここに含めた。

C群：外面に間隔の狭い線描蓮弁文がはいる。剣先の表現は多様である。

無文：外面に文様ははいらず、口縁部は内湾あるいは直口する。見込に印花文をもつものもある。

青磁皿

稜花皿：腰折れで口縁部を稜花にする。

景德鎮窯系：器壁が薄く、白磁や青花と共に器形をもつ。

その他：【大皿】等がある。

白磁皿

B群：口縁部が内湾する浅い小皿で、胎土は軟質のものと磁質のものとがある。また、高台に抉りのはいるものもある。

C I群：口縁部が外反する端反皿。底部を確認した。

D群：（今回未確認）体部を型成形とし菊花状とする菊皿。

E群：口縁部を内湾気味とする。前回報告では未確認である。

青花碗

B群：端反碗である。器壁の薄い精良品【B2群】がある。

C群：口縁が開く器形で見込が凹む蓮子碗である。C群の器形、文様を模倣した粗製品【C群粗製】がある。

D群：腰が張る器形で見込を広く平坦とし体部は直線的に立ち上がる。D群の器形、文様を模倣した粗製品【D群粗製】がある。

E群：見込がゆるやかに盛り上がる饅頭心碗である。見込に牡丹唐草文、高台内に「大明年造」がはいる【E VI群】がある。

粗製碗：陶器質で文様も雑に施される一群。底部の釉調、畳付の釉の搔き取り、砂等の付着でA～C類に細分される。高台を全面施釉し畠付に砂や藁状の纖維痕をもつ【C類】がある。

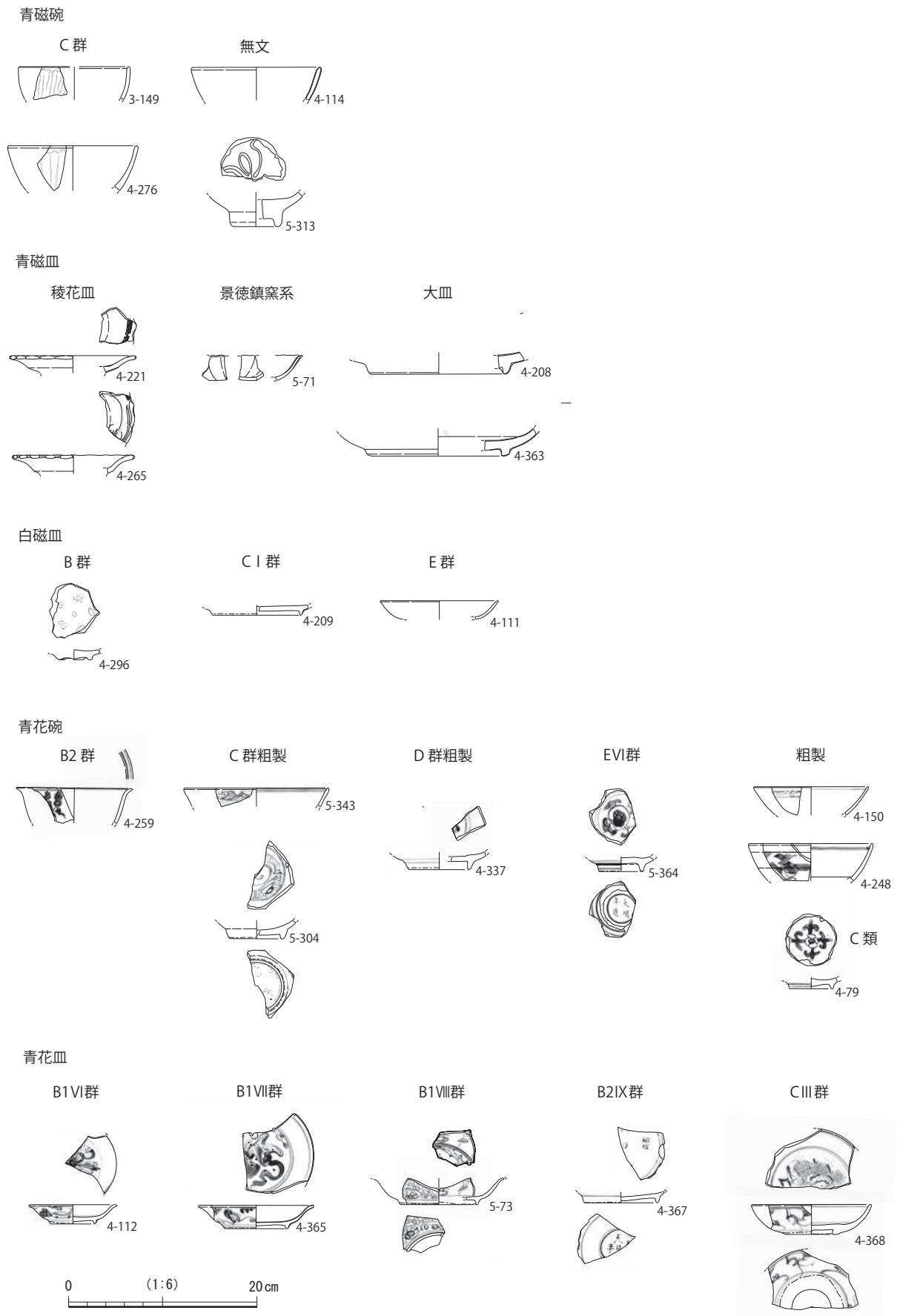
青花皿

B1群：端反皿である。外面に牡丹唐草、見込に十字花文がはいる【B1 VI群】、外面に牡丹唐草、見込に玉取獅子がはいる【B1 VII群】、外面に密な渦唐草、見込に花樹文等がはいる【B1 VIII群】がある。

B2群：端反皿で口縁部内面に四方櫛文がはいる。見込に「長命富貴」、高台内に「天下太平」がはいる【B2 IX群】がある。

C群：碁笥底をもち、口縁部はゆるく内湾する。外面に略字文、見込に吉祥文字文がはいる【C III群】がある。

第2節 遺物の分類

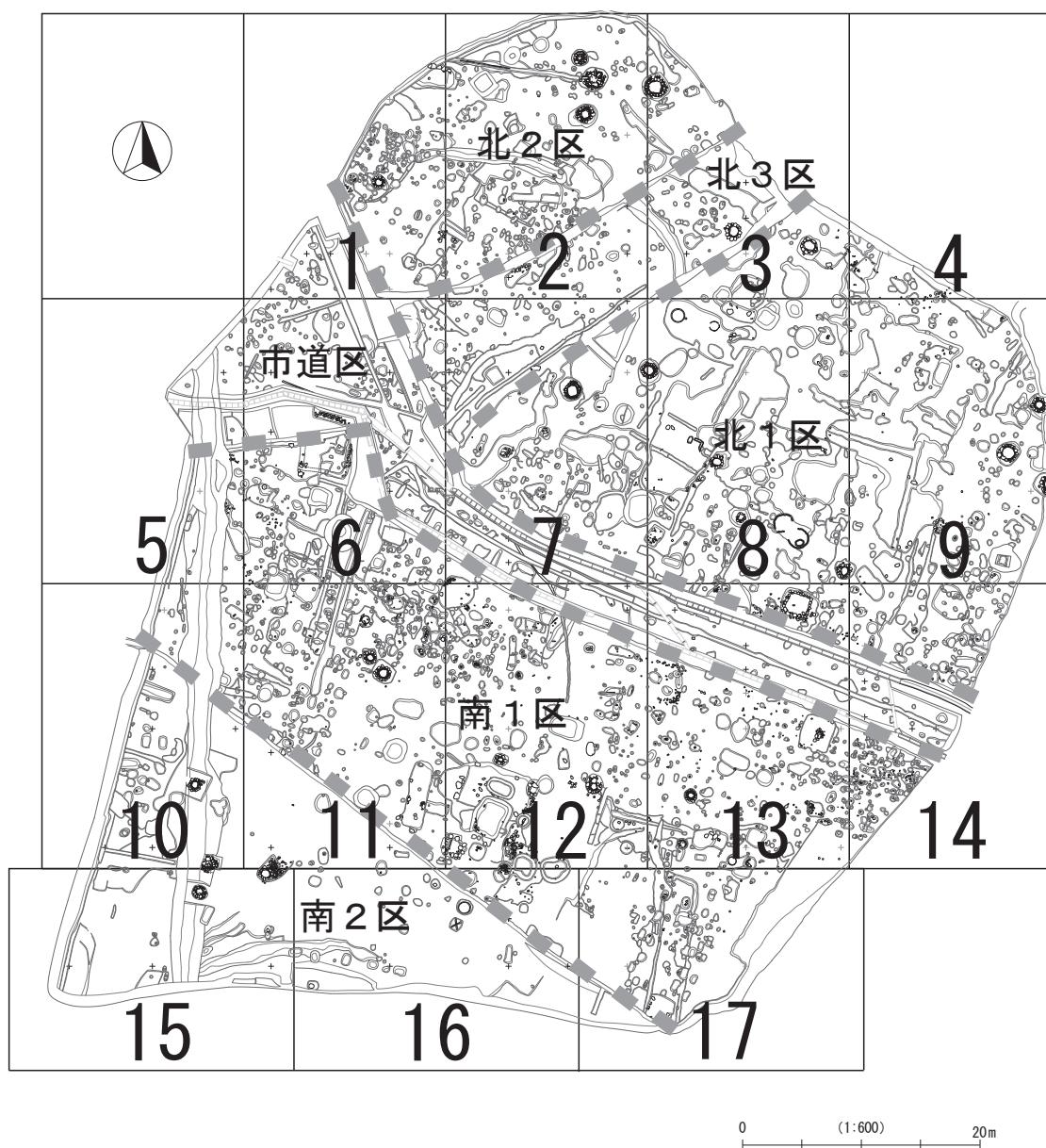


第11図 貿易陶磁器の分類

第4章 第4・5次調査の遺構と遺物

第1節 調査の概要

七尾城下主要域の西を画するとされる庄津川の西側に位置する。調査区内を横断する現道の市道矢田郷80号線（市道区）とそこに接続する仮設道（北3区）の確保のため、第4次調査（平成20年度）では北1・2区、南1区、第5次調査（平成21年度）では迂回路を設置して残りの南2区、市道区、北3区の調査を実施した（第12図）。七尾城下域の縁辺部とされるが、25基の石組井戸、120基を超える土坑のほか25棟の掘立柱建物が復元されている（第13～28図）。ただし、第5・6表に示した主要遺構別土器・陶磁器類出土破片数一覧にもあるように、第1～3次調査成果に対して、近世以降の出土遺物の比重が高くなっている、それらに伴う遺構、居住域等の見極めが必要となる。



第12図 調査区割図（第4次：北1・2区、南1区、第5次：南2区、市道区、北3区）

第1節 調査の概要

遺構区分	調査区	遺構名	須恵器	土師器	瓦質土器	瀬戸美濃	越中瀬戸	珠洲焼	越前焼	備前焼等	青磁	白磁	青花	肥前等	近代	その他	合計(点)
SE	北1区	SE01	23														23
		SE03	34		1												35
		SE04	10	1			1										12
		SE05 (SK15)	1												3	1	5
		SE06	6					1									7
		SE07 (SK29)	3										6				9
		SE08	1	166				5									172
		SE09	18					64	17	1			1				101
		SE10	15						1	1							17
		SE11	1	6				2						13			22
		SE12 (SK34)	23														23
	北2区	SE13	2		1												3
		SE14						1	2								3
		SE15	6	1					3								10
		SE16	1														1
		SE17									1						1
	南1区	SE18	8			1											9
		SE19	15		1		3	3					1				23
		SE20	5					3									8
		SE21	6														6
		SE22	1														1
	南2区	SE24	1												2		3
		SE25	6														6
		SE26	4					2								1	7
	北3区	SE27	19		2			3		1			2				27
	南2区	SE28 (P560)	1		1							1		1			4
SK	北1区	SK01	1	1			2										4
		SK02	1														1
		SK03	4														4
		SK04	3				2							1			6
		SK09	78	1	2		1			1	1						84
		SK10	3					2				3	22		1		31
		SK13											1				1
		SK14	1	1				1					1				4
		SK15 (SE05)	1							1			3				5
		SK16											8				8
		SK17	1	8													9
		SK18	34	15	5			5							1		60
		SK20	1	60	14			1									76
		SK21	2										2				4
		SK22	5														5
		SK23	29			2							46				77
		SK24	8									1		2			11
		SK33	48			4											52
		SK34 (SE12)	5														5
		SK35	10				1										11
		SK43	1						1				5				7
	北2区	SK44	3														3
		SK46	18								1	2					21
		SK47	15							1							16
		SK48	19														19
		SK51	6											12			18
	南1区	SK57	2														2
		SK58	7	1													8
		SK59	2									2					4
		SK60	4				1										5
		SK61	11														11
		SK62	20		2	1											23
		SK63	1					1									2
		SK64	12														12
		SK65	9	1					1	1			2				14

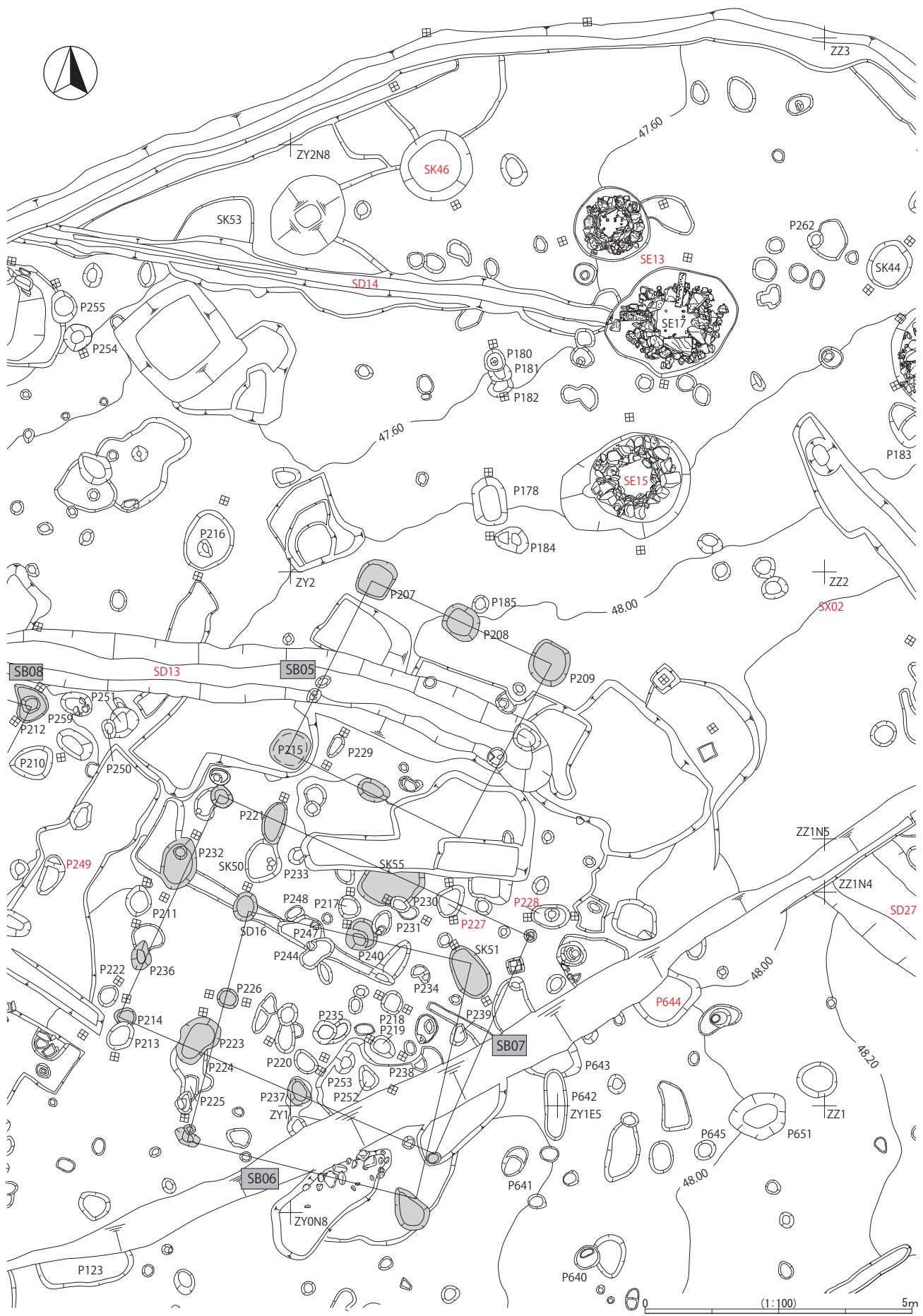
第5表 第4・5次調査 主要遺構土器・陶磁器類出土破片数 1

遺構区分	調査区	遺構名	須恵器	土師器	瓦質土器	瀬戸美濃	越中瀬戸	珠洲焼	越前焼	備前焼等	青磁	白磁	青花	肥前等	近代	その他	合計(点)
SK	南1区	SK66	5				2						2		1	10	
		SK67	55									1				56	
		SK68									1					1	
		SK69	1			1					1					3	
		SK70		1										3	1	5	
		SK71	2			1								1		4	
		SK72	8	1	1		1				1					12	
		SK73	1			1							4			6	
		SK74			1	1							1	1	1	5	
		SK76	1													1	
		SK77	5					1								6	
		SK78	43				1					1				45	
		SK80	4			2							5			11	
		SK81		1									7	5		13	
		SK82	1				1								1	3	
		SK83	2				1					2				5	
		SK84										3			1	4	
		SK85	5													5	
		SK86	6													6	
		SK89	26													26	
		SK90	55				1				1	1	1			59	
		SK91	1													1	
		SK92						1					4			5	
		SK93	6													6	
		SK94	34								1	4				39	
		SK95	38				1									39	
		SK96	1												11	12	
		SK102	28													28	
		SK106	3													3	
		SK107	13				1	7	29							50	
		SK111	1	50		4							2			57	
	南2区	SK113	8													8	
市道区	SK117	37														37	
	SK118	169		2							1		2		2	176	
	SK120	3												1		4	
南2区	SK124 (SK125)	4														4	
SD等	北1区	SD05						1					1			2	
		SD06										1				1	
		SD09	3								1					4	
		SD10	34				2	3					2			41	
		SD11						1								1	
	北2区	SD13	328		2		8									338	
		SD14	23		1		3							18		45	
		SD15	2		1	1					1		4	2		11	
	南1区	SD17	74			4	2	2					1	5		88	
	市道区 南1・2区	SD18 (SX06)	81	2	11	2	16	27			2	3	4	12		13	173
	南1区	SD20	1											1		2	
		SD21	1						4							5	
		SD22	2								1		1			4	
	南2区	SD24	1													1	
		SD26	1													1	
	北3区	SD27	28													28	
	南2区	SD28	2													2	
	北1区	落ち込み	62	4												66	
SX	北1区	SX01	1										1			2	
	北2区	SX02	1	58		2		9	15			1	3	33		122	
	南1区	SX03	10		1	2						1	2			16	
		SX04	6					1				5				12	
	南2区	SX05	8					1				1	2			12	
		SX06 (SD18)	205	1	2	2	8	22			1	1	3	4		1	250
	北3区	SX07	10													10	

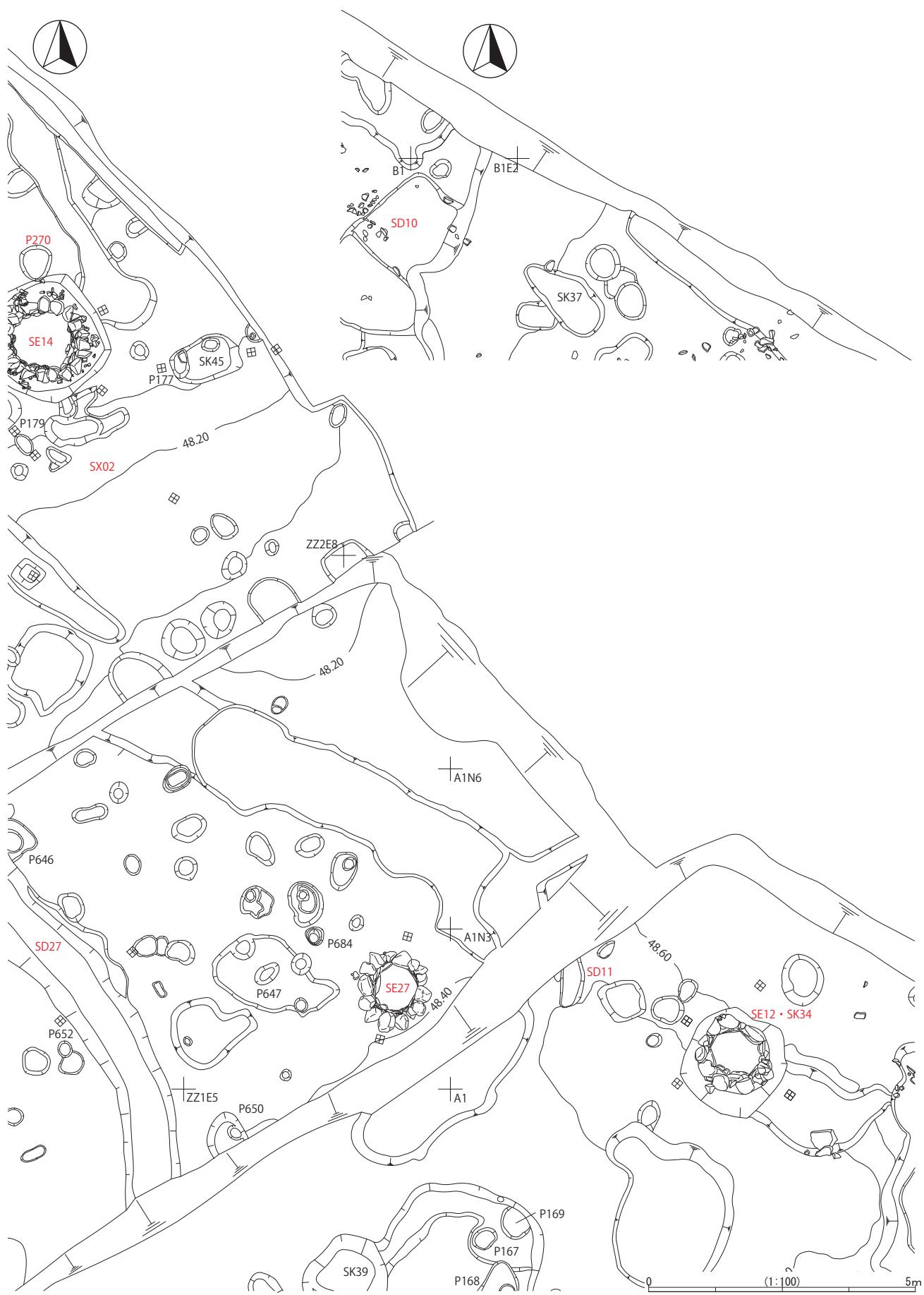
第6表 第4・5次調査 主要遺構土器・陶磁器類出土破片数 2



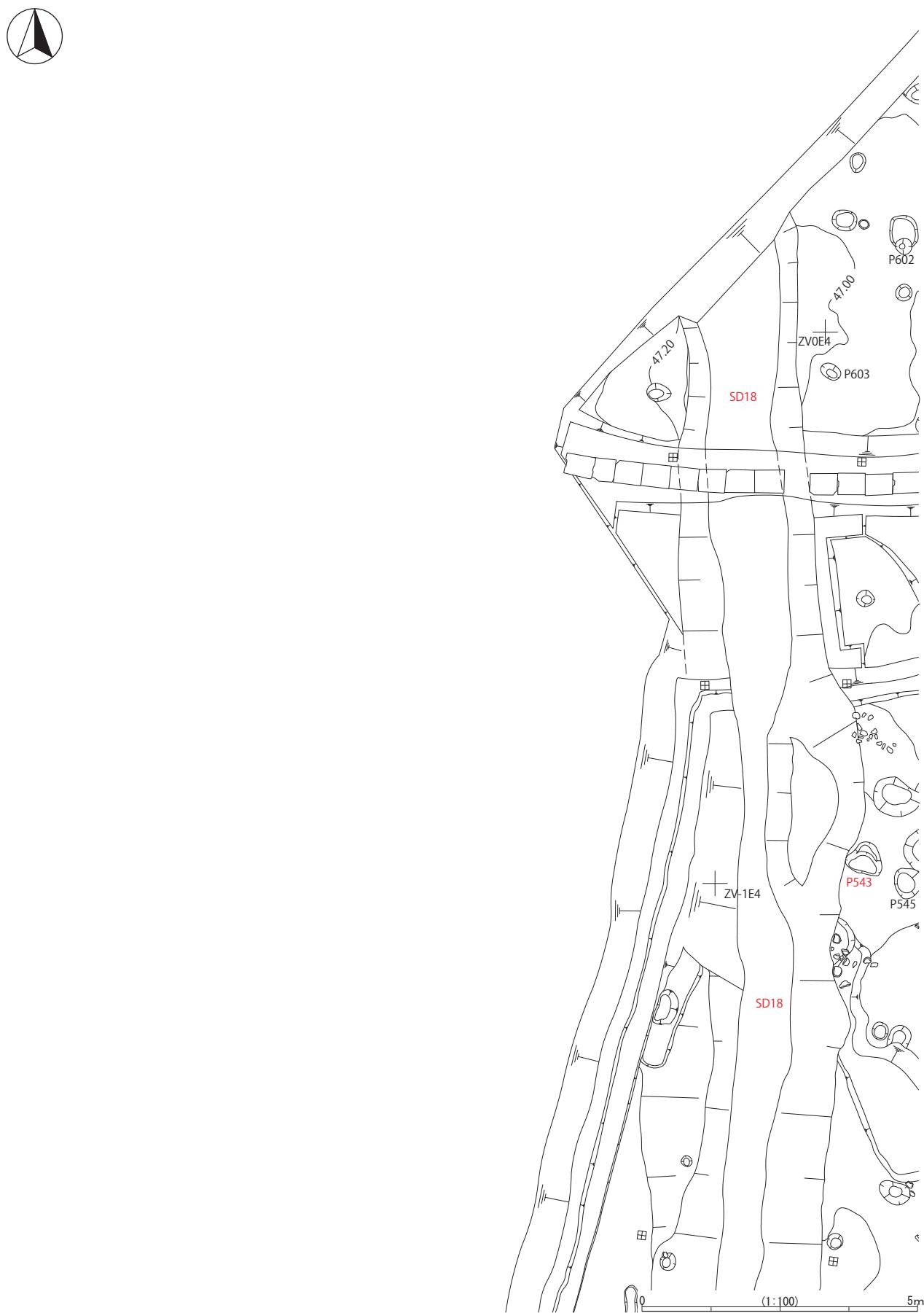
第13図 遺構区割図1 (赤字: 実測遺物出土遺構)



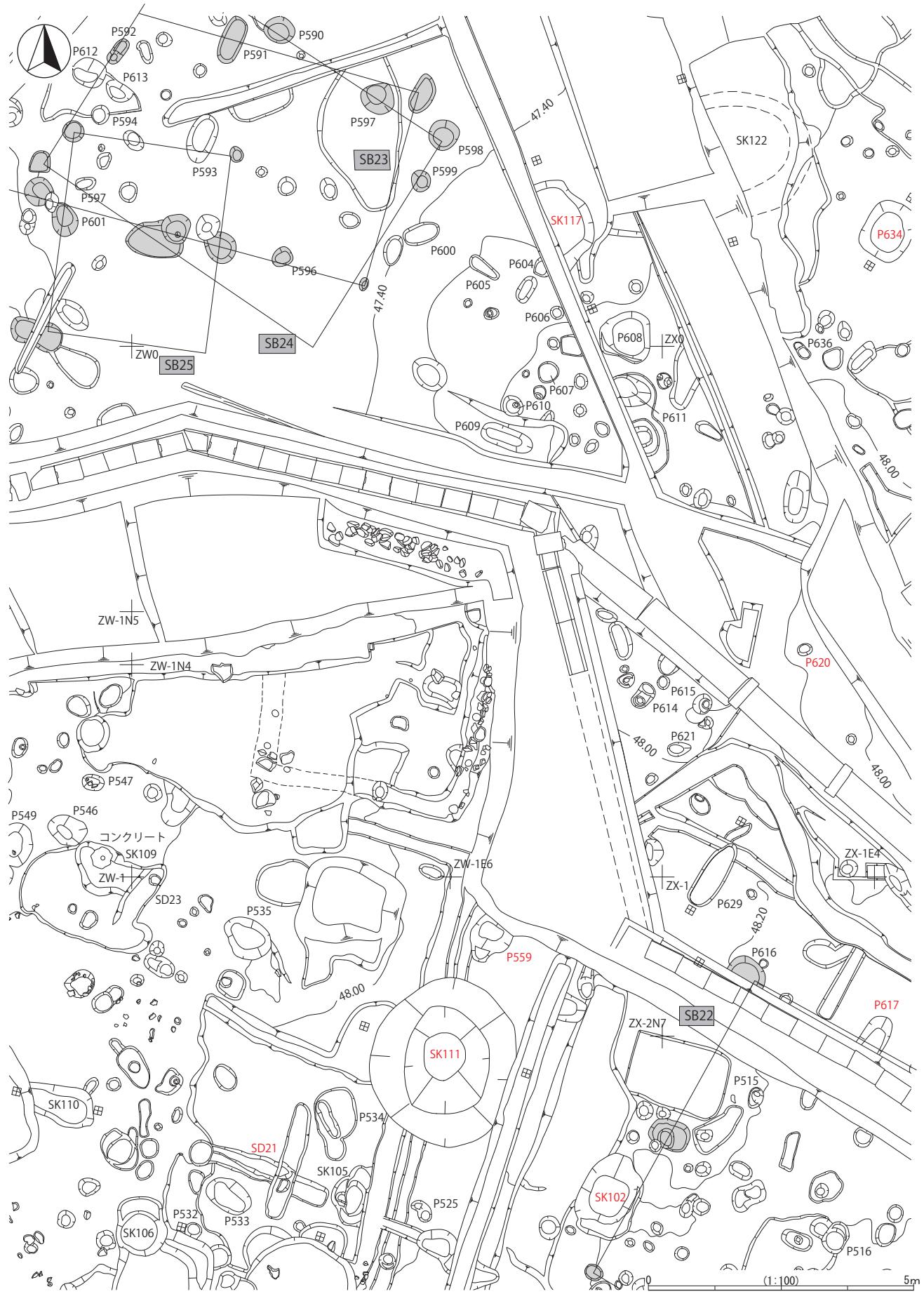
第14図 遺構区割図2（赤字：実測遺物出土遺構）



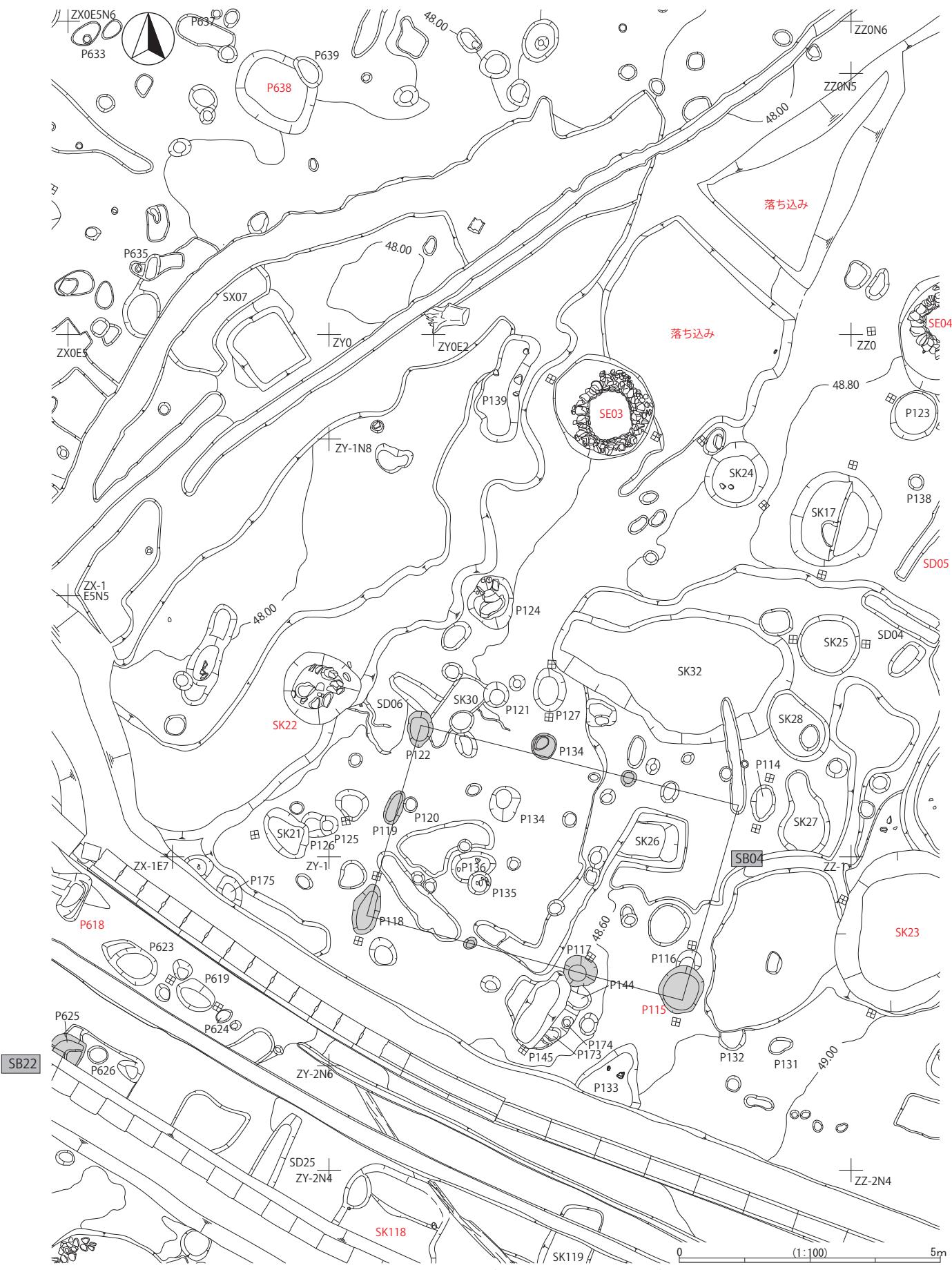
第15図 遺構区割図3・4（赤字：実測遺物出土遺構）



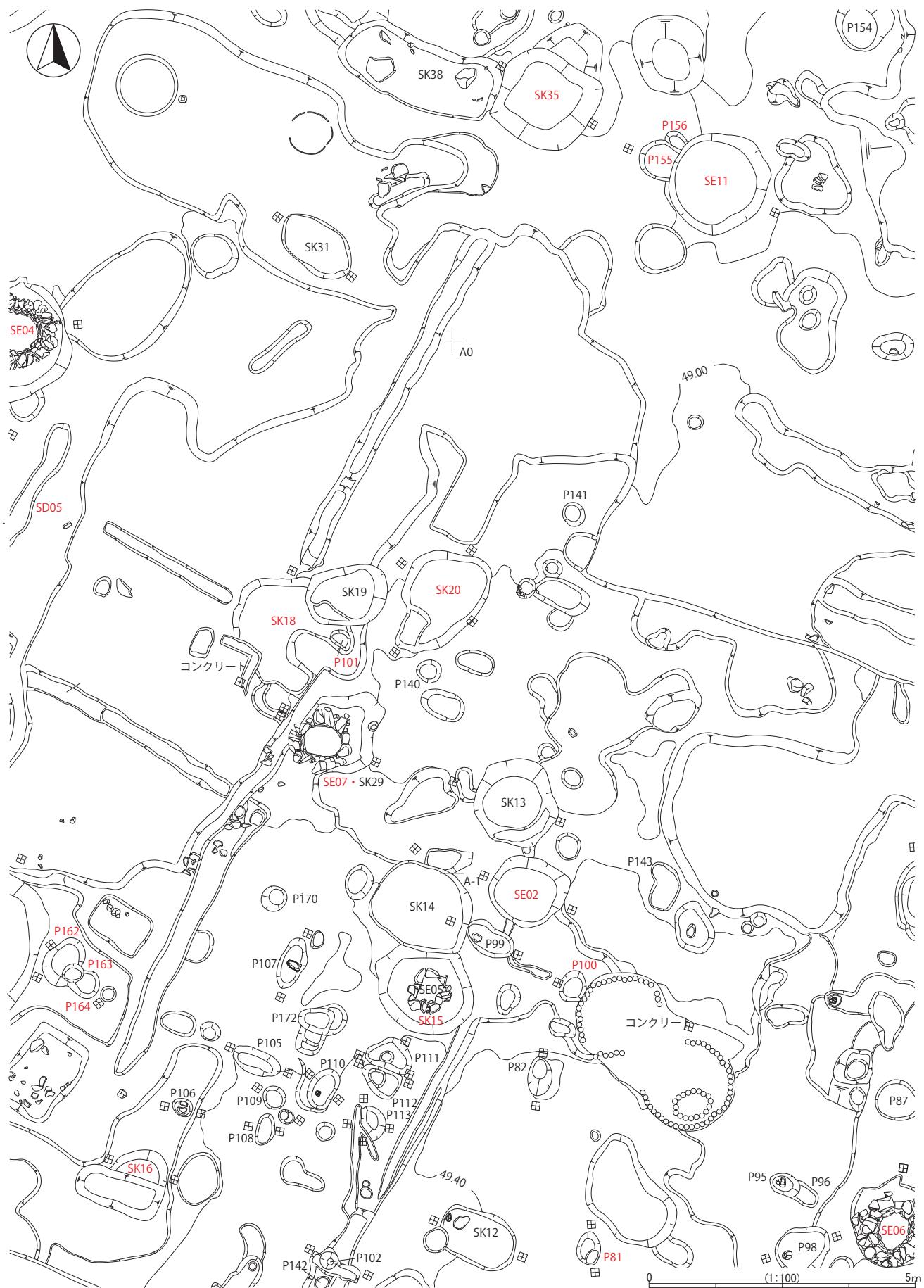
第16図 遺構区割図5（赤字：実測遺物出土遺構）



第 17 図 遺構区割図 6（赤字：実測遺物出土遺構）



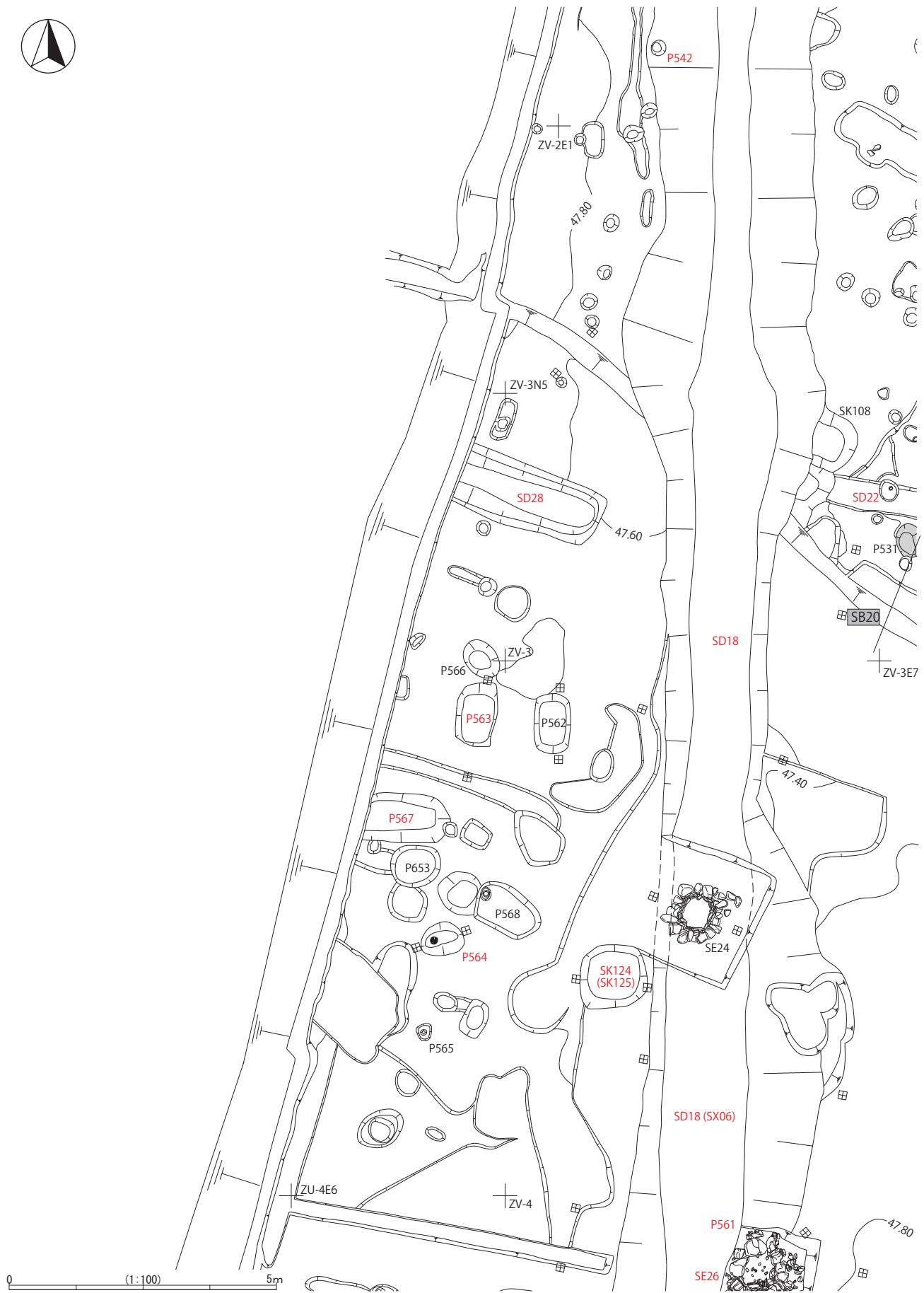
第18図 遺構区割図7（赤字：実測遺物出土遺構）



第19図 遺構区割図8（赤字：実測遺物出土遺構）



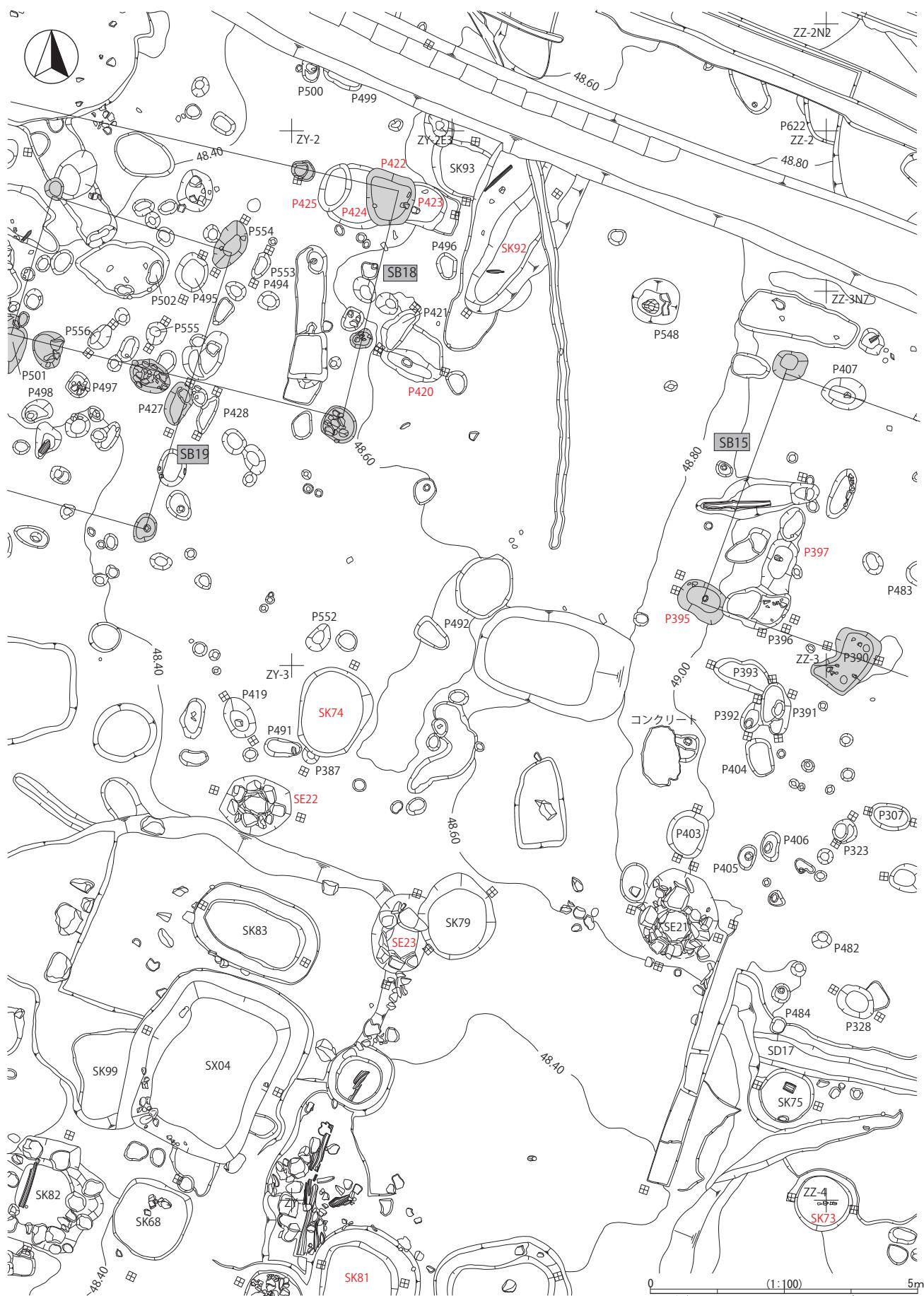
第20図 遺構区割図9（赤字：実測遺物出土遺構）



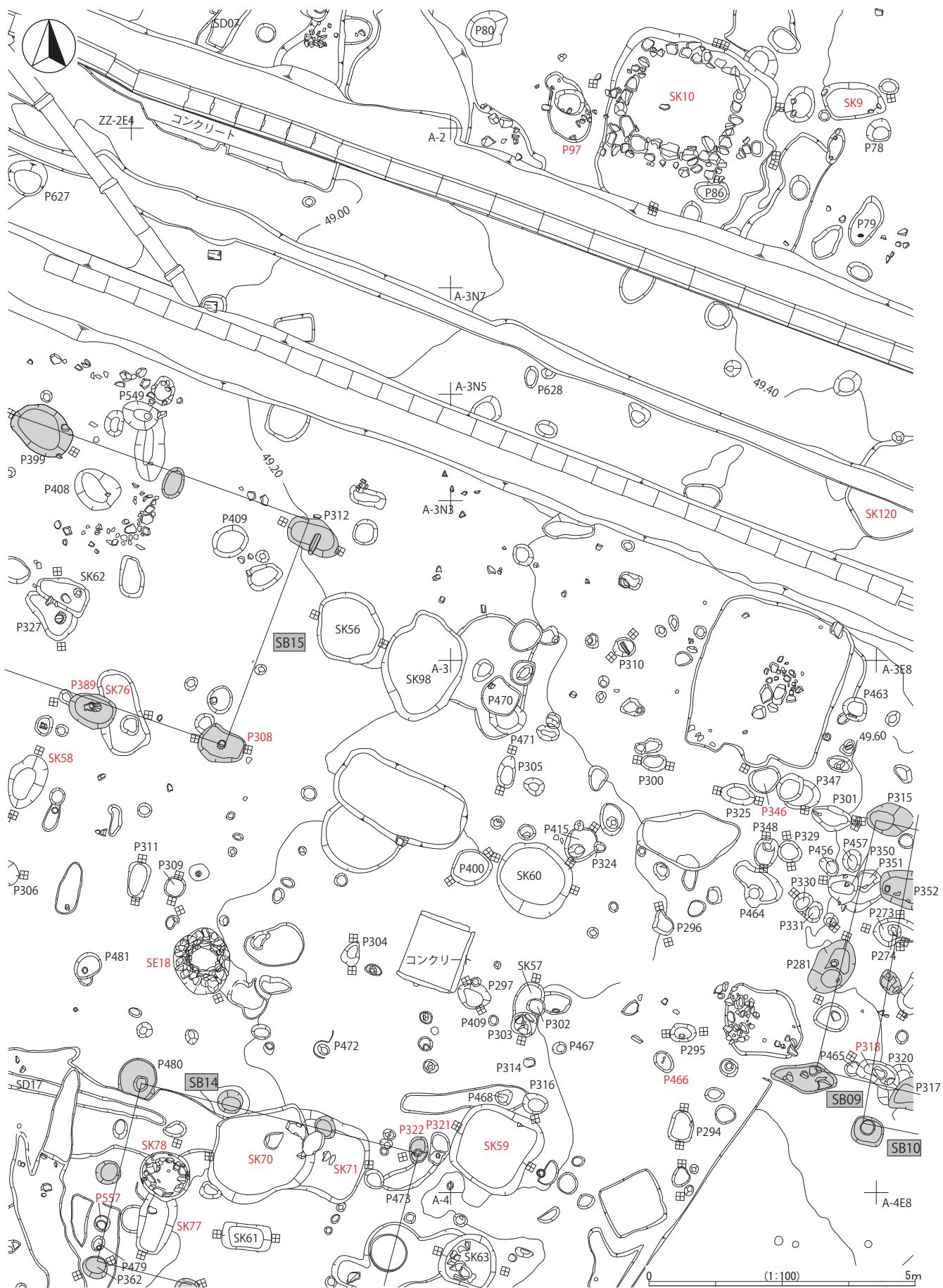
第 21 図 遺構区割図 10（赤字：実測遺物出土遺構）



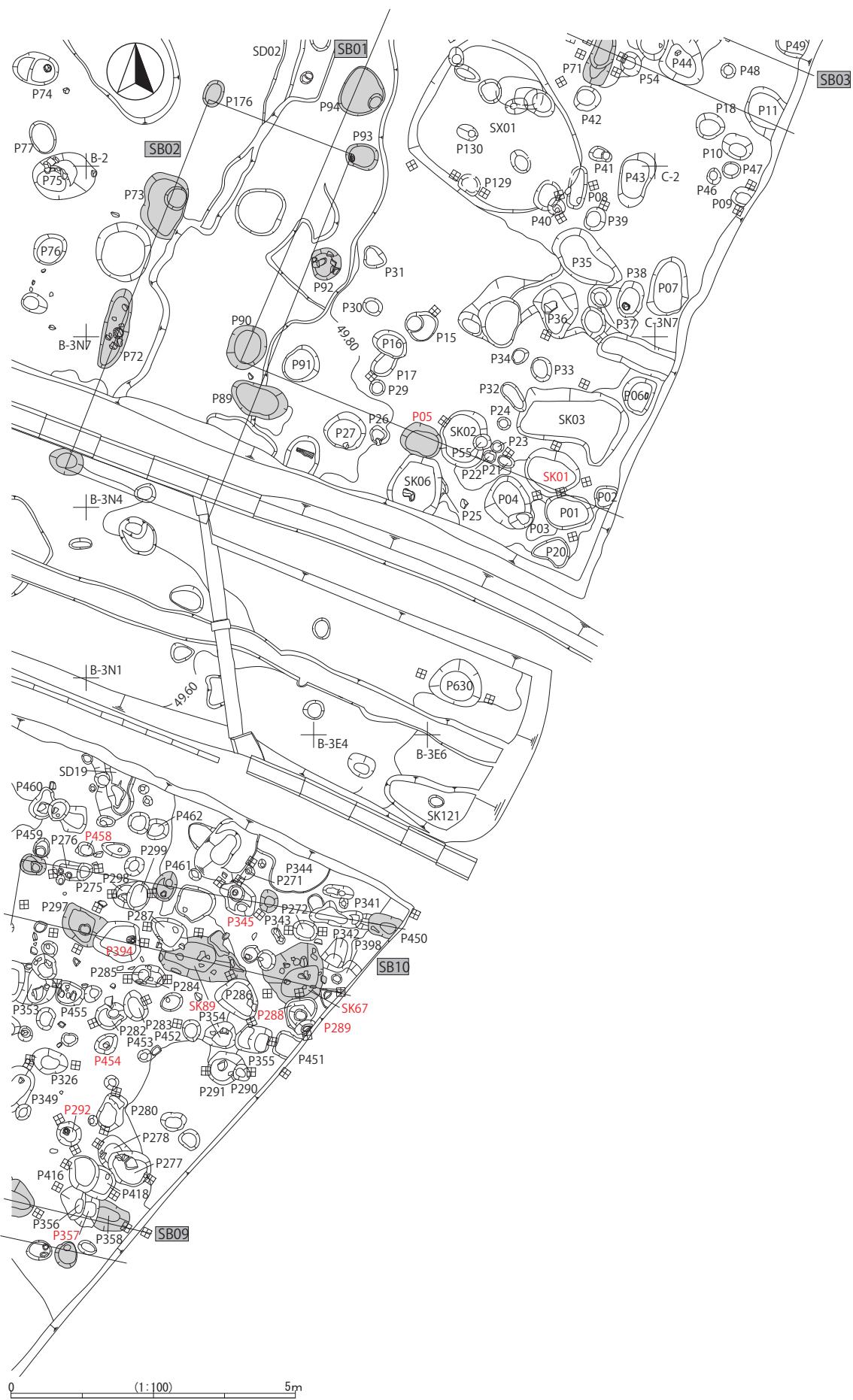
第22図 遺構区割図11（赤字：実測遺物出土遺構）



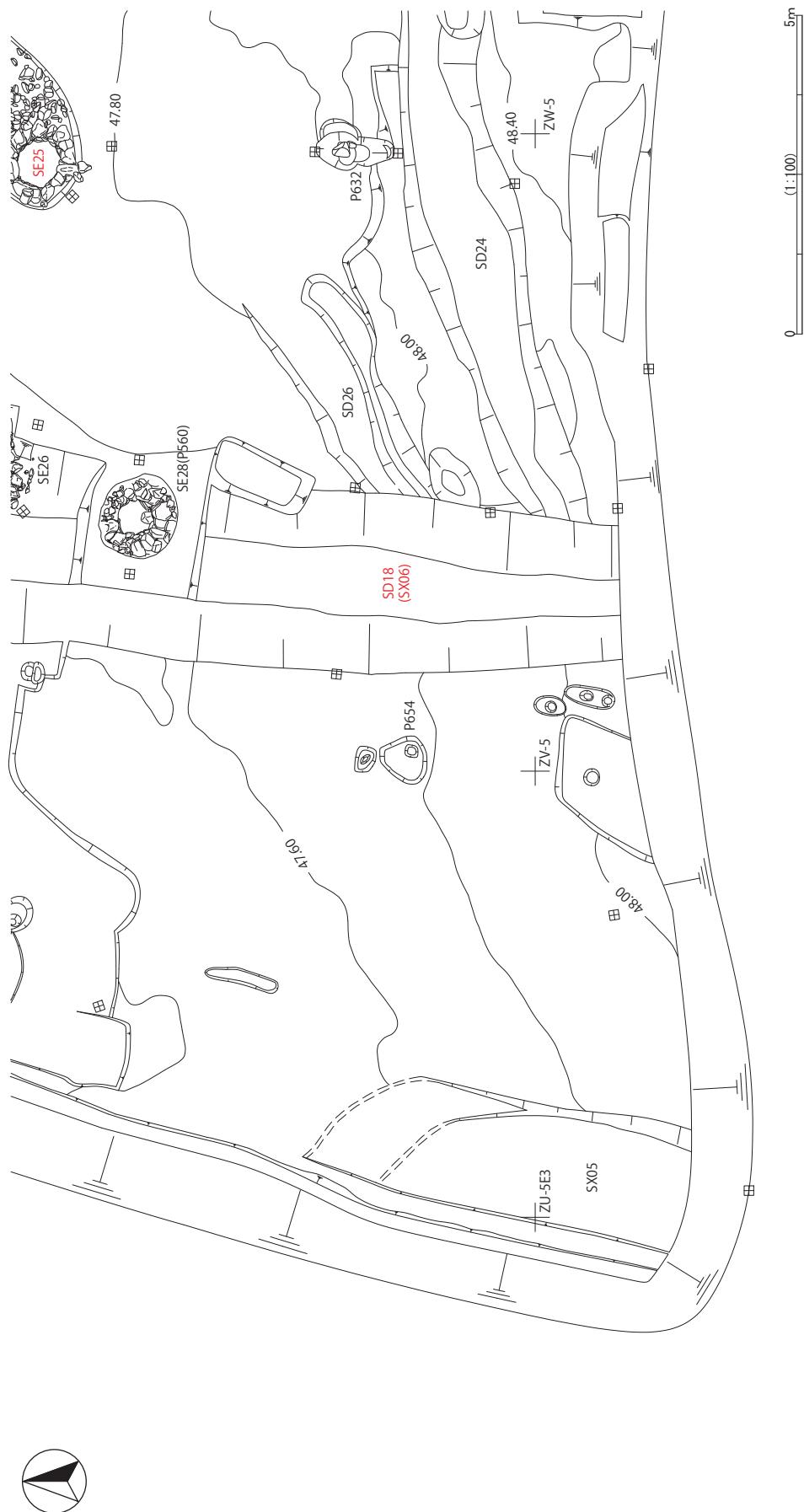
第23図 遺構区割図12（赤字：実測遺物出土遺構）



第24図 遺構区割図13（赤字：実測遺物出土遺構）



第25図 遺構区割図14（赤字：実測遺物出土遺構）

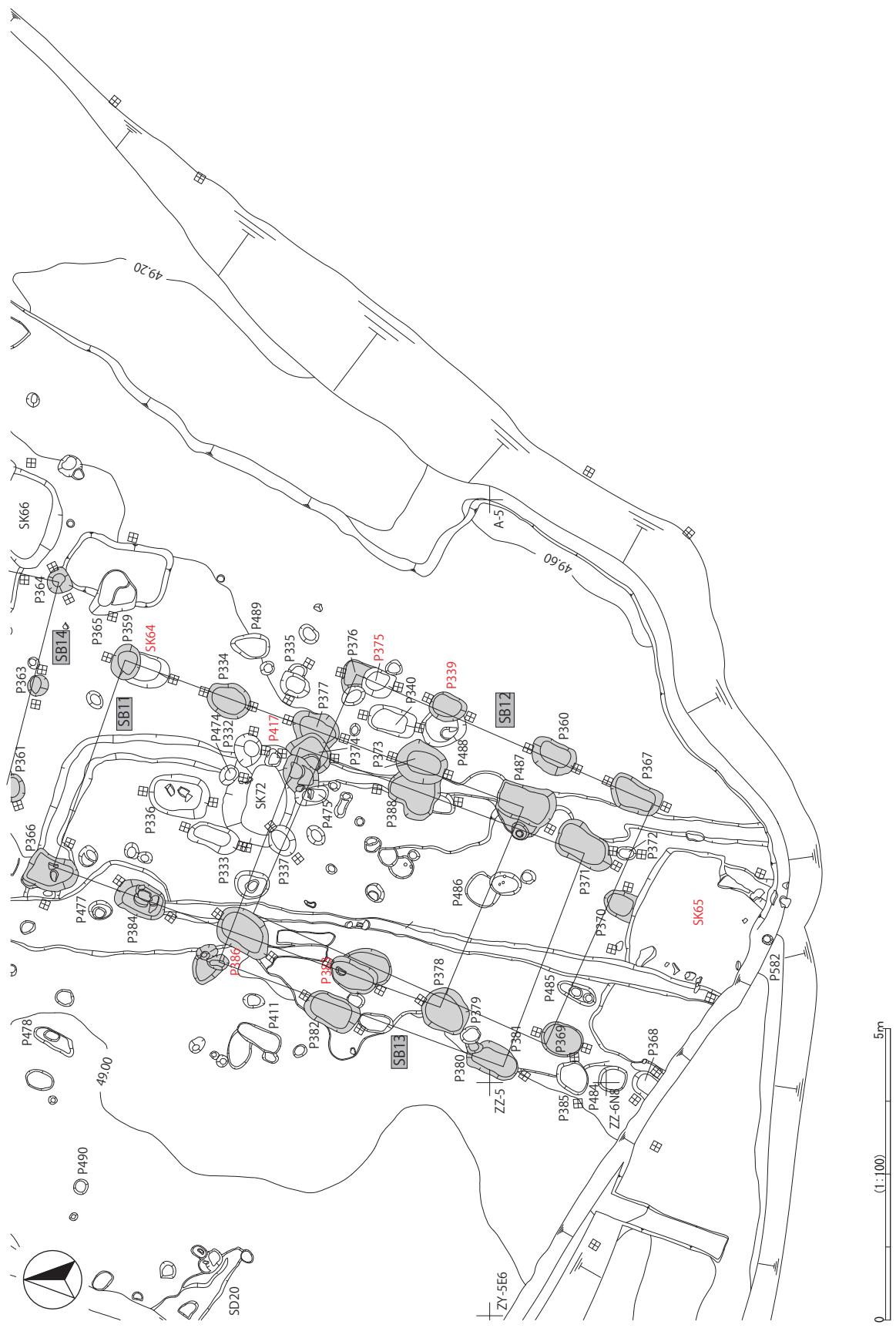


第26図 遺構区割図15（赤字：実測遺物出土遺構）



第27図 遺構区割図16（赤字：実測遺物出土遺構）

第28図 遺構区割図17（赤字：実測遺物出土遺構）



第2節 井戸 (S E)

井戸 (SE) 28基を確認した。調査区別では、北1区12基 (SE1～12)、北2区5基 (SE13～17)、南1区6基 (SE18～23)、南2区4基 (SE24～26・28)、北3区1基 (SE27) となり、調査区全域での分布が認められる（第29図）。その大半は石組井戸が占めており、個別の規模等は第7表に示した。また、井戸掘り方および井戸内からは約530点の土器・陶磁器破片が出土している。



第29図 第4・5次 井戸 (SE) 配置図

遺構名	調査区	遺構図版	規模(cm)				遺物図版	土器・陶磁器類 破片数(点)	備考
			長軸	短軸	井戸側内径 下端:上端	深さ (標高m)			
SE01	北1区	第20、30図	274	236	—	114 (48.46)	第38図1~5	土師器皿:23	SB03内
SE02	北1区	第19、30図	155	136	—	78 (48.64)	第38図6	—	木製容器埋設
SE03	北1区	第18、31図	202	187	88:90	105 (47.41)	第38図7~8	土師器皿:34 瀬戸・美濃天目碗:1	石組
SE04	北1区	第18・19、31図	226	197	82:90	151 (47.22)	第38図9~10	土師器皿:10 瓦質鉢:1 珠洲壺:1	石組
SE05 (SK15)	北1区	第19、31図	202	162	44:—	88 (48.24)	—	土師器皿:1 青磁瓶:1 肥前碗:2 肥前擂鉢:1	(石組) SK15と同遺構 SK14に切られる
SE06	北1区	第19・20、31図	175	160	75:82	125 (48.37)	第38図11	土師器皿:6 越前甕:1	石組
SE07 (SK29)	北1区	第19、32図	190	150	78:75	157 (47.66)	第38図12	土師器皿:3 肥前等碗:5 肥前染付皿:1	石組 SK29と同遺構
SE08	北1区	第20、32図	217	182	102:110	133 (48.23)	第38・39図 13~25	須恵器甕:1 土師器皿:166 珠洲甕:1 珠洲擂鉢:4	石組
SE09	北1区	第20、32図	222	208	82:98	111 (48.94)	第40図26~33	土師器皿:18 青花皿:1 珠洲擂鉢:64 越前甕:3 越前擂鉢等:14 備前擂鉢:1	石組
SE10	北1区	第20、33図	222	—	64:85	143 (47.96)	第40図34~36	土師器皿:15 志加浦鉢:1 越前擂鉢:1	石組
SE11	北1区	第19、33図	195	182	—	99 (47.81)	第40図37	須恵器甕:1 土師器皿:6 珠洲甕:1 珠洲擂鉢:1 肥前染付・陶器碗:8 肥前陶器鉢:1 肥前擂鉢:3 餌猪口:1	素掘り P155・156を切る
SE12 (SK34)	北1区	第15、33図	205	188	93:110	109 (47.46)	第40図38~42	土師器皿:23	石組 SK34と同遺構
SE13	北2区	第14、34図	140	130	52:68	87 (46.79)	第40図43	土師器皿:2 瀬戸・美濃天目碗:1	石組
SE14	北2区	第15、34図	240	235	112:112	158 (46.36)	第40図44	珠洲甕:1 越前甕:2	石組
SE15	北2区	第14、34図	252	190	58:112	160 (46.27)	第41図45~47	土師器皿:6 瓦質擂鉢:1 越前甕:2 越前擂鉢:1	石組
SE16	北2区	第13、34図	124	116	62:62	115 (46.15)	第41図48	土師器皿:1	石組 SB08内
SE17	北2区	第14、35図	250	200	74:84	109 (46.65)	—	白磁皿:1	石組 SD14と接続
SE18	南1区	第24、35図	126	106	40:64	64 (48.61)	第41図49~50	土師器皿:8 越中瀬戸擂鉢:1	石組
SE19	南1区	第22、35図	130	124	46:58	125 (46.95)	第41図51~54	土師器皿:15 瀬戸・美濃鐵釉平碗:1 青花皿:1 珠洲甕:1 珠洲擂鉢:2 越前擂鉢:3	石組
SE20	南1区	第22、35図	194	170	78:84	144 (46.78)	第42図55~56	土師器皿:5 越前擂鉢:3	石組
SE21	南1区	第23、36図	170	150	48:65	122 (47.81)	—	土師器皿:6	石組
SE22	南1区	第23、36図	128	110	48:56	105 (47.45)	第42図57~58	土師器皿:1	石組
SE23	南1区	第23、36図	152	104	44:62	42 (48.10)	第42図59	—	(石組) SK79に切られる
SE24	南2区	第21、36図	(120)	(95)	40:53	72 (46.66)	—	土師器皿:1 陶磁片:2	石組 SD18を切る
SE25	南2区	第22・26、37図	(132)	(110)	70:72	95 (46.95)	第42図60	土師器皿:6	石組
SE26	南2区	第21・26、37図	(120)	(112)	65:68	84 (46.79)	第43図61	土師器皿:4 越前甕:2 円面鏡:1	石組 SD18に切られる
SE27	北3区	第15、37図	(155)	(136)	78:88	110 (47.33)	第42・43図 62~73	土師器皿:19 瀬戸・美濃天目碗:1 瀬戸・美濃灰釉皿:1 青磁皿:1 青花皿:2 越前甕:2 越前擂鉢:1	石組
SE28 (P560)	南2区	第26、37図	(134)	(118)	54:70	89 (46.87)	第99図303	土師器皿:1 瀬戸・美濃灰釉皿:1 白磁皿:1 肥前瓶:1	石組 P560と同遺構 SD18を切る

第7表 井戸(SE) 規模等一覧表

SE01 (第20、30図、第38図1～5)

北1区東端の調査区際、SB03内に位置する。長軸274cm、短軸236cmの楕円形の大きな掘り方上面をもつ。約70cm下がったところで80～95cm×110～120cmの方形の二段掘りが認められ、その下面には水溜状の不整楕円形の落ち込みがみられる。検出面からの深さは114cm（標高48.46m）で、中段以下の方形部に木製の井戸側が据えられていた可能性がある。ただし、方形遺構の軸はSB03の主軸方位とは一致しておらず、建物との関連は検討を要する。

土師器皿1（E類）、2（C類）ともに白色系の硬質土器で、1は口縁部に、2は内面に油煤痕が付着する。3は内面赤色外面黒色系漆の椀で、見込の径4cmほどに漆が盛り上がり、漆パレットへの転用が認められる。樹種はモクレン属で、付着した漆は生漆ではなく精製漆と判断されている。分析No.1。4は一辺2.2cm、残存長15.5cmの隅丸方形の筒状木製品で、芯持丸木を加工した樹芯部には径約3mmの孔が通る。樹種は比較的強度の高いムラサキシキブ属で、周囲の4面は丁寧に仕上げられている。最下層からの出土である。5はイスノキ製の横櫛である。背部は上方に丸みをおび、側縁は急角度でやや内側に屈曲する。背部の断面は台形、歯は二等辺三角形状に薄く挽きだされ、表面は平滑に研ぎあげている。なお、イスノキは現在の石川県には分布が認められないため、製品として流通していた可能性がある。他には土師器皿片23点が出土する。

SE02 (第19、30図、第38図6)

北1区の中央下方寄りに位置する。長軸155cm、短軸136cmの平面不整円形の掘り方をもち、深さ78cm（標高48.64m）の穴底には直径70cm弱の木製大型容器の底板が残る。容器の側板はみられないが、土層断面には底板から垂直に立ち上がるかつての容器内に数十cm台の礫が複数個充填されている痕跡がみてとれ、こうした遺構廃絶時の状況からは、SE02がいわゆる井戸ではなく、木製容器を埋設した何らかの施設であったことが推察される。

6は穴底に残っていた直径68.0～69.2cm、厚さ3.2cmのスギの底板である。大型品のため、中央の板に両側の板2枚を4本の木釘で繋げて作られている。なお、検出時には側板を留めた竹製タガの一部が周囲に遺存しており、桶状の木製容器が据えられていた可能性がある。土器・陶磁器類は出土していない。

SE03 (第18、31図、第38図7・8)

北1区西側の北3区寄りに位置する。長軸202cm、短軸187cmの掘り方をもつ石組井戸で、井戸底の深さは105cm（標高47.41m）となる。10～20cm台の自然石を積み上げた井戸側の形状は、内径の下端88cm、上端90cmと湧水面からほぼ垂直に立ち上がる円筒形を呈する。使用された石はほぼ同程度の大きさで、所々を小石を詰めて調整する。

土師器皿片34点中2点を実測した。7は硬質系のE類、8は外面の横ナデが弱いD類で、「2」字状ナデ上げがみられる。その他、瀬戸・美濃大窯1・2段階の天目茶碗片1点が出土している。

SE04 (第18・19、31図、第38図9・10)

北1区SE03の北東側に位置する。長軸226cm、短軸197cmの掘り方をもち、石組内の深さは151cm（標高47.22m）となる。井戸側には20cm台前後の自然石が多く使われており、内径は下端82cm、上端90cmと上方に向かってやや開き気味の形状となる。石の積み上げは隙間が少なく比較的密に組まれている。

土師器皿片10点中2点を実測した。9・10とともに器表がややザラつく変化に乏しい土師器皿E類である。その他には瓦質土器の鉢口縁部片1点、珠洲焼壺片1点がみられる。

SE05（第19、31図）

北1区SE02の南側に位置する。掘り方は長軸202cm、短軸162cmの平面橢円形で、隣接するSK14に切られる。検出面からの深さは88cm（標高48.24m）で、穴底の最下段1段にのみ内径44cmの井戸側状の石組遺構が残る。石の大きさは10～30cm台と不揃いである。

未実測であるが、青磁瓶の底部片1点が出土している。また、同遺構として番号が付されているSK15では肥前の染付碗、擂鉢等が認められ、SK14からは肥前の白磁碗片1点が出土する。

SE06（第19・20、31図、第38図11）

北1区の東側で、SB01～03の西側に位置する。平面形は長軸175cm、短軸160cmの不整橢円形で、石組内の深さは125cm（標高48.37m）となる。井戸側の内径は下端75cm、上端82cmとやや上方に開く形状をとり、石の大きさは30～40cm台のものも含め、比較的大きな自然石が使用されている。ただし、積み方は雑で石間の隙間が多いようにもみうけられる。

土師器皿片6点中1点を実測した。11は器高が14.5mmと浅い薄手の製品で、焼成はあまく内黒状となる。E類とした。他には越前焼の甕片1点が出土する。

SE07（第19、32図、第38図12）

北1区の中央下方寄りに位置する。長軸190cm、短軸150cmの不整形の掘り方をもち、深さは157cm（標高47.66m）と深めになる。石組の井戸側は内径下端78cm、上端75cmと穴底からほぼ垂直に立ち上がる円筒形状を呈する。使用された石は20～30cm台の自然石が多く、井戸側の断面写真等からは、比較的平らな木口面を井戸側の内側に揃え、底から1段ずつ水平面を保ちながら8段分の石組を丁寧に積み上げていった様子が観察される。

SK29と同遺構であり、土師器皿細片3点の他、肥前IV期の染付碗2点、染付皿1点(12)、陶胎染付碗1点、刷毛目唐津碗1点、陶器碗1点が出土する。12は見込を蛇の目釉剥ぎとし、内側面には簡易な文様がはいる。

SE08（第20、32図、第38・39図13～25）

北1区の東側調査区際に位置する。掘り方の上面は、長軸217cm、短軸182cmの橢円形で、穴底までの深さは133cm（標高48.23）となる。井戸側の内径は下端102cm、上端110cmとやや上方に開く形状をとる。石の大きさは20～40cm台とバラつき、井戸側の断面でも大きな石の間に小石が挟み込まれている状況が認められる。

比較的多くの遺物が出土しており、土師器皿片は166点を数える。その内の13～19はいずれも橙色系の硬質土器で、E類(13)、C類（14～16）、B類（17～19）で構成され、15、17の見込には凸凹線がみられる。口縁部外面の横ナデは明瞭で外反も強く①グループの特徴をもつが、その中でも18はやや異質で、体部は丸みをおびずに直線的に立ち上がり、口縁部の横ナデ及び外反もはっきりとは認められず外面には煤が付着する。20は口径に対してやや器高の低い白色系のB類で、内面には十字方向に梵字を含む複数の墨書きが配され、呪符墨書きとなる可能性があるか。21は須恵器甕片か。外面には格子状の叩き、内面には不定方向のハケ調整がみられる。22～24はⅦ期の株洲焼擂鉢。22は片口部片。擂目部分は使用のため平滑となっている。23は短い口縁部に波状文を施し、密にはいる擂目は上部を除き摩滅している。24は砂気が強く、10mmを超える砂礫も散見される。波状文のはいる口縁部は直線状に伸び、中位以下の擂目は使用により摩滅する。外面には補強のためか粗い紐痕が上半部を中心にして数条巡り、底面には静止糸切りの痕跡がわずかに残る。なお、23、24はSE09出土品と接合する。25は総黒色系漆椀の口縁部片。外面には赤色漆で草花文が描かれる。樹種はブナ属で、分析No.7資料である。

SE09 (第20、32図、第40図26～33)

北1区SE08の南東約8mに位置する。長軸222cm、短軸208cmの掘り方から約30～40cm段掘りされたレベルで井戸側がはじまり、内径の下端82cm、上端98cmとやや上方に開く形状をとる。検出面からの深さは111cm（標高48.94m）である。石の大きさは20～30cm台前後が多くみられ、石組の積み上げ方は雑である。

出土遺物は多く、土師器皿片18点、珠洲焼擂鉢片64点、越前焼甕片3点・擂鉢片8点・鉢片6点、備前焼擂鉢片1点、青花皿片1点がある。土師器皿はE類（26・27）、B類（28）で構成される。いずれも硬質で、27は「2」字状ナデ上げがはいり、28の体部の立ち上がりは丸みをおびる。29は青花皿底部片。カンナ削り痕がはいる高台内に文様等はみられない。見込文様の種別は定かではないが、端反りタイプのB群となるか。30は口径150mm、高さ63.5mmの浅型の越前焼鉢。平底で体部から口縁部にかけてゆるやかに内湾し、口唇部には弱い面取りを施す。法量等から花器の可能性もあるか。IV群。31は珠洲焼擂鉢。底部周辺は特に厚みがあり、全体に重量感がある。口縁部は内面を横ナデ気味に凹ませ端部を先細りとする。波状文はみられない。擂目は密ではなく、やや間隔をあけて施されるが使用のため摩滅している。VI期末に近いか。SE08出土品と接合する。32は備前焼擂鉢。口縁帶は直立気味に屈曲し、外面には3～4条の凹線をもつ。口縁端部は先細りに仕上げ内面には明確な稜をもつ。中世6期b。33は粘板岩製の平底の小型硯。底部の一部が赤みを帯びており、披熱した可能性がある。なお、23・24・31の珠洲焼擂鉢はいずれもSE08・09最下層からの出土品が接合しており、両井戸が近い時期（①グループ期）に機能していた可能性は高いものと思われる。

SE10 (第20、33図、第40図34～36)

北1区SE08の北東側調査区間に位置する。井戸の西側に長軸222cmの掘り方がみえるが、東側は調査区外に延びるため定かではない。井戸側は内径の下端64cm、上端85cmとやや上方に開く。用いられた石の大きさは20～30cm台でほぼまとまり、石組も隙間なく丁寧に積まれている。穴底までの深さは検出面から143cm（標高47.96m）である。

土師器皿片15点、志加浦鉢片1点、越前焼擂鉢片1点が出土する。34は土師器皿C類。器表はややザラつき、外面の横ナデは弱く外反はみられない。35は比較的急角度で立ち上がる深めの鉢で擂目はみられず内面の使用痕は認められない。外面は縦方向のナデ調整、内面は斜め横方向のハケナデ調整が施され、口縁部外面は弱く横ナデし端部は丸くおさめる。焼成は軟質で色調は灰白色系、胎土には海綿骨針がはいる。羽咋郡志賀町小浦地内に生産窯のある志加浦窯の可能性がある。生産年代は13世紀前半代に比定されようか（垣内2010）。36は総黒色系漆椀の高台部分である。樹種はカエデ属で漆を用いた炭粉漆下地層が観察されている。分析No.8資料である。

SE11 (第19、33図、第40図37)

北1区の中央上方寄りに位置する。平面形が略円形、断面形が半円形状となる、長軸195cm、短軸182cm、深さ99cm（標高47.81m）の素掘り遺構である。井戸側等は確認されていない。P155・156を切る。

実測遺物は1点（37）のみであるが、須恵器甕片1点、土師器皿片6点、珠洲焼甕片1点・擂鉢片1点、肥前IV・V期の染付碗片3点・陶器碗片5点・陶器鉢片1点・擂鉢片3点、餌猪口片1点等、近世を含めた雑多な遺物が出土する。37は白化粧土の上に刷毛目文様を施す肥前陶器鉢。化粧土の上には緑釉が流れている。IV期の大型品である。

SE12 (第15、33図、第40図38～42)

北1区北側の北3区寄りに位置する。長軸205cm、短軸188cmの略円形の掘り方をもち、約30cm下がったレベルで石組の井戸側を検出している。井戸側の内径は下端93cm、上端110cmと上方にやや開

く形状をとり、最下段に30～40cm台の大きめの石を配置する。石組の段数は3～4段と少なく、検出面からの深さは109cm（標高47.46m）となる。

土師器皿片23点中、38・39（E類）、40・41（C類）を実測した。40、41は外面ナデ、内面には「2」字状ナデ上げが施され、見込ナデ脇に細い凸圈線が巡る。胎土にはやや砂粒が浮く。②グループに属するか。42は体部がゆるやかに内湾する総黒色系漆椀。樹種はカエデ属で、外面には大きな扇面が赤色漆で描かれる。分析No.4資料である。

SE13（第14、34図、第40図43）

北2区の最北部に位置する。長軸140cm、短軸130cmの掘り方をもち、井戸側の内径は下端52cm、上端68cmと小振りで上方にやや開く形状をとる。また、掘り方と石組の検出面は同レベルで、井戸底からの深さは87cm（標高46.79m）となる。用いられた石の大きさは10～30cm台とバラつきがあり、石組の積み方も各段数が揃っていないようにみえる。

43は瀬戸・美濃鉄釉天目茶碗。体部は開き気味に立ち上がり口縁の折り返しは短い。体部下半には濃い錆釉が施されるが、器高が低く大窯3段階とした。他には土師器皿の細片2点が出土する。

SE14（第15、34図、第40図44）

北2区SE13東側の調査区際に位置する。長軸240cm、短軸235cmの略円形の掘り方をもち、やや内側にはいる井戸側は内径の下端・上端とともに112cmと、井戸底からほぼ垂直に立ち上がる円筒形を呈する。検出面からの深さは158cm（標高46.36m）で、石組の積み上げには10～30cm台の多様の大きさの石が不規則に使われている。

44は鉄鍋の口縁部片か。先端は外側へ2cm程度「へ」の字状に屈曲し、口縁部下端にはゆるやかな面取りが施される。こうした鉄製品が鋳つぶされずに残る例は珍しく、残存重量は68.2gである。他には珠洲焼甕片1点、越前焼甕片2点が出土する。

SE15（第14、34図、第41図45～47）

北2区中央のSB05北東側に位置する。掘り方は長軸252cm、短軸190cmの橢円形状とし、井戸側は掘り方の東側に寄る。石組の内径は下端58cm、上端112cmと断面逆台形状に大きく広がり、下段には10cm台前後の比較的小さめの石が密集して積み上がる。井戸底からの深さは、160cm（標高46.27m）である。

45は瓦質擂鉢である。内外面ともに淡黒色で、口縁上端は水平気味に丸みをもつ。擂目は下から上へ比較的密に施すが摩滅のため単位は定かではなく、口縁下3cm前後で止まる。胎土は軟質で細砂粒を多く含むが海綿骨針は認められない。46は越前焼甕底部。外面には自然釉の垂れ、底部内面には顯著な降灰がみられる。IV群。47は越前焼擂鉢。見込周辺は使用のため擂目が摩滅し底部も薄くなっている。IV群。なお、土師器皿片は6点出土しているが、いずれも細片である。

SE16（第13、34図、第41図48）

北2区調査区西際のSB08内に位置する。井戸の掘り方と他遺構が重なる可能性があるため、ここでは掘り方を井戸側際の長軸124cm、短軸116cmとした。井戸側の内径は下端・上端ともに62cmと、ほぼ円筒形の形状をとる。使われた石は10～20cm台が多く、石組の積み上げには規則性が乏しい。検出面からの深さは115cm（標高46.15m）である。

出土遺物は48の土師器皿E類の1点のみである。白色系の硬質土器で砂粒の含みは少ない。

SE17（第14、35図）

北2区のSE13・15に挟まれた石組井戸で、長軸250cm、短軸200cmの橢円形状の掘り方をもつ。井戸側の一部には長さ50～60cm台の切石状の板石（立方体・直方体）が何点か組み込まれるが、こう

した板材の使用はSE17のみで確認されている。井戸側の内径は下端74cm、上端84cmで、ほぼ垂直気味に立ち上がり、深さは109cm（標高46.65m）となる。また、井戸の西側に取り付くように、幅30～60cm台、深さ20～40cm台の溝（SD14）が西方向へ向けて約11mまっすぐに延び調査区外へ抜けており、SE17との関連をうかがわせる。

出土遺物は白磁皿の細片1点（時期等不詳）のみである。また、SD14からは型紙刷りで蛇の目凹形高台をもつ染付皿類が出土しており、ともに近代以降の所産とみられる。

SE18（第24、35図、第41図49・50）

南1区東側のSB14上方に位置する。掘り方はほぼ井戸側の掘り込みに近い、長軸126cm、短軸106cmの略楕円形で、井戸側の内径は下端40cm、上端64cmと井戸底から逆台形状に大きく開く形状をとる。石の大きさは10～20cm台とやや小振りで、積み上げ段数は5～6段と少なく、深さは64cm（標高48.61m）となる。

49は土師器皿E類。特に体部から口縁部にかけての器壁は5～6mmと厚く、後出的（③グループ）な要素をもつ。50は越中瀬戸擂鉢。内外面に鋸釉を施し、内面には擂目の上端がみえる。口縁端部上面が僅かに凹むB2類で、胎土は硬質の淡灰色とし砂粒は少ない。大窯黒川窯か。他には土師器皿片7点が出土する。

SE19（第22、35図、第41図51～54）

南1区西側のSB20の北東隅柱脇に位置する。掘り方と井戸側の掘り込み位置及びレベルは近く、長軸130cm、短軸124cmの略円形とする。井戸側の内径は下端46cm、上端58cmと僅かに上方に開き、検出面からの深さは125cm（標高46.95m）となる。石組の段数は8～9段で、上面には20cm台前後の石が並ぶ。

土師器皿片は15点が出土するが、横ナデの明確な製品が何点か認められる。51はやや薄手の土師器皿E類で口縁部の外反は強い。52は瀬戸・美濃鉄釉平碗。体部は斜め上方に開き口縁端部は丸くおさめる。古瀬戸末の後IV期とした。53は見込文様を玉取獅子とする青花皿B1V群。漆継ぎがみられる。54は越前焼擂鉢。擂目は沈線を超えて施されるが、沈線はやや下がり気味で口縁上面は水平に近い。IVc群。

SE20（第22、35図、第42図55・56）

南1区SE19の南側に隣接する。掘り方は長軸194cm、短軸170cmの不整方形とし、井戸側よりも一回り大きくなるが、掘り込みは数cmと浅い。井戸側は20～30cm台の石を7～8段積み上げ、内径の下端78cm、上端84cmと井戸底からの立ち上がりはほぼ垂直に近い。また、深さは144cm（標高46.78m）となる。

55は外面横ナデが比較的明瞭な土師器皿C類で、他には同皿細片4点が出土する。56は越前焼擂鉢底部片。擂目は密で見込周辺は特に使用による磨り減りが目立つ。IV群におさまる製品である。

SE21（第23、36図）

南1区中央東寄りに位置する。長軸170cm、短軸150cmの楕円形状の掘り方をもち、井戸側は南側に寄る。井戸側の内径は下端48cm、上端65cmとやや上方に開く形状をとるが、石の大きさは10～40cm台と不揃いで、石組の積み上げも乱雑にみえる。検出面からの深さは122cm（標高47.81m）である。

遺物量は少なく、特徴の乏しい土師器皿片6点が出土する。

SE22（第23、36図、第42図57・58）

南1区中央、SE21の西側約8mに位置する。長軸128cm、短軸110cmの不整楕円形の掘り方から1段下がって井戸側が掘り込まれる。井戸側の内径は下端48cm、上端56cmとやや上方に開き、深さは

105cm（標高47.45m）である。石組に用いられた石は30cm台前後とやや大きめである。

57は口縁部の横ナデは不明瞭で、土師器皿D類とした。焼成は硬質で見込にはやや幅広の凸圈線が認められる。58は長さ20.7cm、幅7.7cmの連歯下駄で平面形は方形に近い。鼻緒の孔がなく、前方短辺に2箇所、各長辺に4箇所ずつの計10箇所の釘孔が認められる。鼻緒の付いた草履状の表を釘や鉢で留めて使用したものか。樹種はマツ属複維管束亜属である。

SE23（第23、36図、第42図59）

南1区、SE21・22のほぼ中間地点に位置する。長軸152cm、短軸104cmの橢円形掘り方は隣接するSK79に切られる。一部の石組は抜けており、内径の下端44cm、上端62cm、深さは42cm（標高48.10m）と浅く、水溜状遺構として機能したものか。

土器・陶磁器類は出土していない。59は長さ21.2cmのクリの分割材残欠で、片側には約 $2 \times 3 \times 6$ cmのホゾ状の直方体突起が切り出されている。建築部材か。なお、SK79からは近代以降の擂鉢片が出土する。

SE24（第21、36図）

南2区に位置し、調査区西際を南北に延びる大溝SD18の埋没後に設営された井戸である。井戸側は上面の削平のためか、石組がせり上がるようにして検出されている。井戸側の内径は下端40cm、上端53cmと上方にやや開き、深さは72cm（標高46.66m）でSD18の溝底レベルよりも30cm以上深く掘り込まれている。石の大きさは10～30cm台と不揃いで積み上げも粗雑である。

遺物は土師器皿片1点の他、裏込土から近代以降と思われる陶磁片2点が出土している。

SE25（第22・26、37図、第42図60）

南2区中央部、SD18の東側に位置する。掘り方は明瞭ではなく、石組の東側には約 1×1.5 mの範囲に10cm前後の小礫が敷石状に広がる。井戸側は内径の下端70cm、上端72cmとほぼ垂直に立ち上がり、深さは95cm（標高46.95m）で6段程度の石組が比較的端正に積み上がっている。

井戸内からは2点の柱根が出土しており、60はその内の1点である。残存長57.9cm、径23.8cmのクリの芯持丸木で、根元近くには運搬用の紐等を通すための5cm前後の孔が2箇所穿たれている。他には土師器皿片6点が出土する。

SE26（第21・26、37図、第43図61）

南2区SD18の東法面上に位置しSD18に切られる。井戸側の北側半分以上は搅乱により削平を受けるが、石組の下段は良好に残っている。井戸側は内径の下端65cm、上端68cmとほぼ垂直気味に立ち上がると思われ、石組検出面からの深さは84cm（標高46.79m）となる。石の大きさは20cm台前後が一般的だが、下段には40cm台のものも使われている。なお、遺物量は総じて少ないが、井戸底近くからは円面硯が出土している。

61は直径196mmに復元できる細粒砂岩の中国製円面硯で、部分的な二次被熱が認められる。高さは27mmで側面には丸鑿状の飾り彫りを施し、周縁の推定9箇所に丸みを帯びた突起を等間隔に削り出す。硯面は平滑で中央が緩やかに下がり、外周側に位置する海部は8～12mmと幅をもつ。また、平底となる底面には「申」、「玉」、「文」等と読める複数の文字が細く浅く線刻されるが、内容等は定かではない。なお、こうした大型の硯は硯箱に収納することなく卓上に置かれた置硯として、14世紀代以降の寺院に受容されており（垣内2006）、七尾城下での位置づけについても注目される。他には土師器皿細片4点、越前焼甕体部片2点が出土する。

SE27（第15、37図、第42・43図62～73）

北3区の北東側で北1区との境界境に位置する。掘り方と井戸側の径はほぼ近く、長軸155cm、短

軸136cmで、内径の下端78cm、上端88cmとやや上方に広がる形状をとる。石組は最下段に30～40cm台の大きめの石が使われ、深さは110cm（標高47.33m）となる。

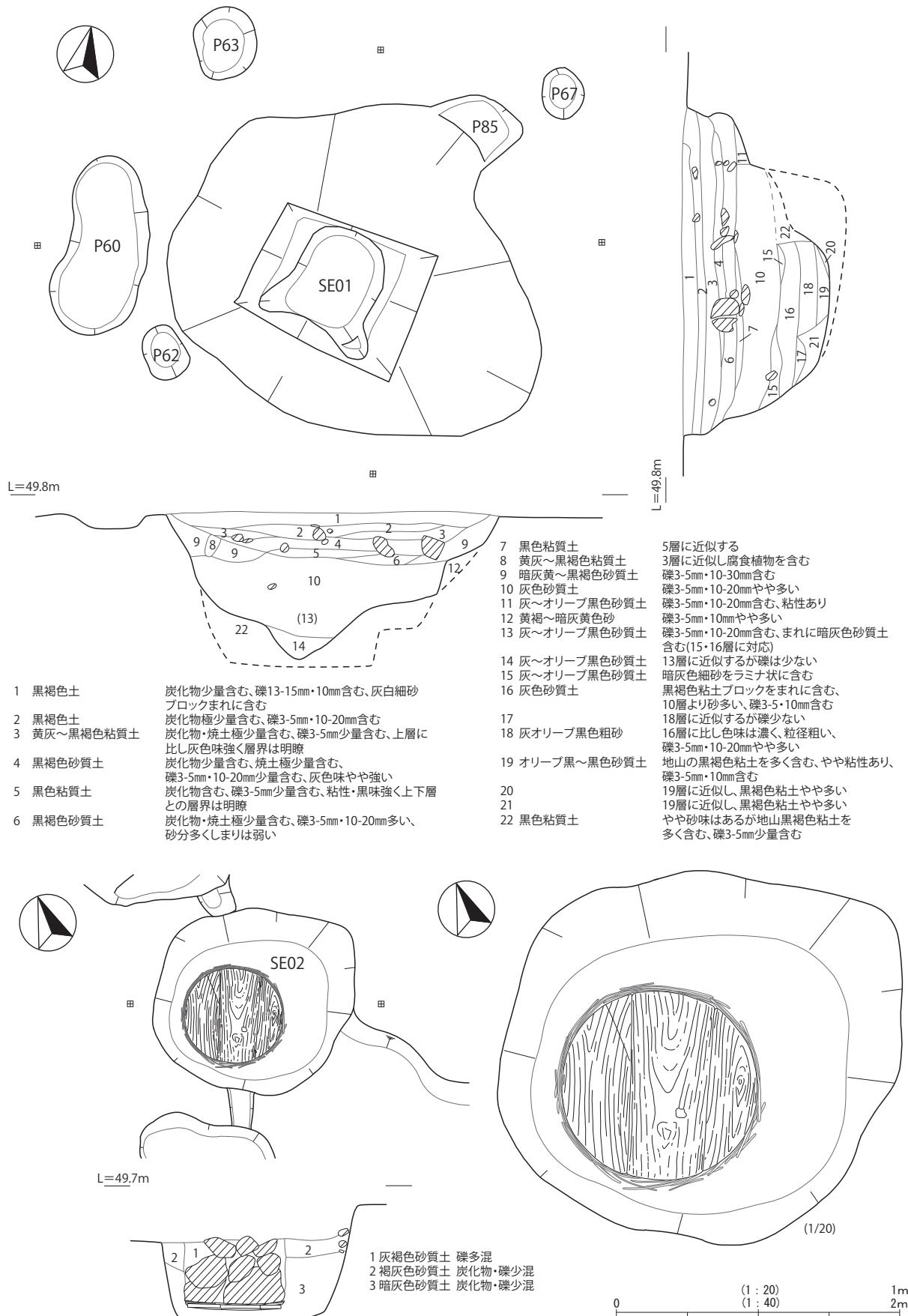
62～69は土師器皿で、E類(62)、D類(63・64)、B類(65～69)で構成される。63、64の外面ナデは不明瞭で、底部はややせり上がる。65～69は体部の立ち上がりが直線的で、口縁端部の引き出しは弱く見込ナデも弱いが、大型の66～69にはわずかに凸圈線が残る。また、64、67には「2」字状ナデ上げが認められる。全体に器壁が5～6mm台と厚く、比較的多くの砂粒を含み橙色系の個体はみられない。③グループに属する土器群か。70は瀬戸・美濃灰釉皿の底部片である。釉は厚く、外底には輪トチ跡が付く。大窯1・2段階。71は器壁の薄い景德鎮窯系の青磁菊皿。型成形で口縁部を輪花状とする。白磁皿D群を意識したタイプと思われる。72、73は端反りの青花皿。72は外面に牡丹唐草文のはいるB1群。73は外面に密な唐草文、見込に梵字文等を配するB1Ⅷ群で、高台畳付は無釉とする。

なお、他には大窯1・2段階の瀬戸・美濃天目茶碗片1点、越前焼甕体部片2点・擂鉢1点が出土する。

SE28（第26、37図、第99図303（P560））

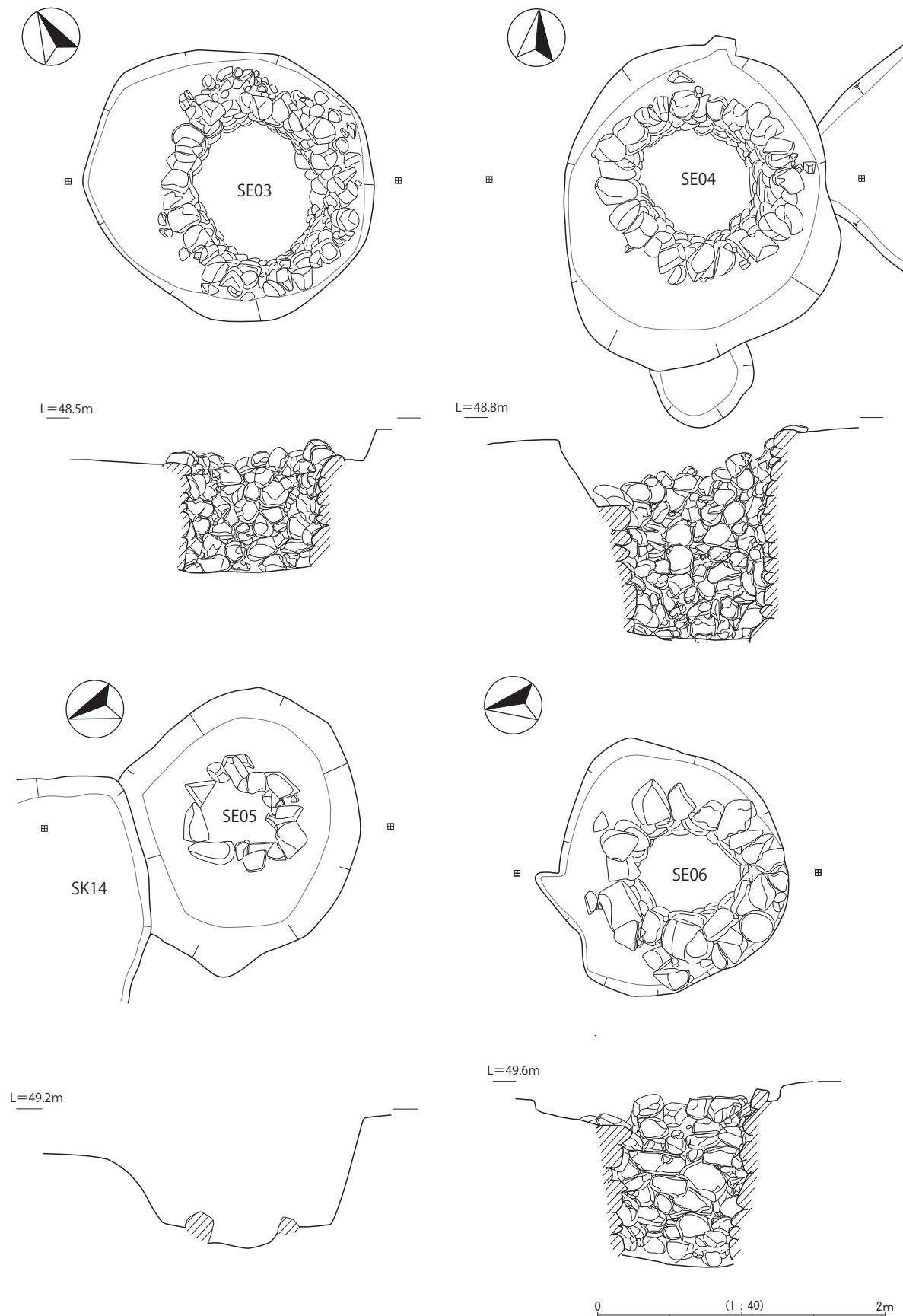
南2区のSD18上に位置し、北側のSE26に隣接する。当初はピット（P560）として掘り進められ、石組が検出された段階でSE28に切り替えている。長軸134cm、短軸118cmの略円形で、検出面から約10cm前後下がった位置で井戸側を確認している。SD18を切る。井戸側の内径は下端54cm、上端70cmで上方に開き、検出面からの深さは89cm（標高46.87m）である。

遺物はSE28からは確認されていないが、上層にあたるP560で土師器皿細片1点、大窯1段階の瀬戸・美濃灰釉皿1点、中国白磁皿1点、肥前Ⅲ期の染付瓶1点(303)が出土している。ロクロ成形で内面無釉、外面には一重圈線と草花文が描かれる。

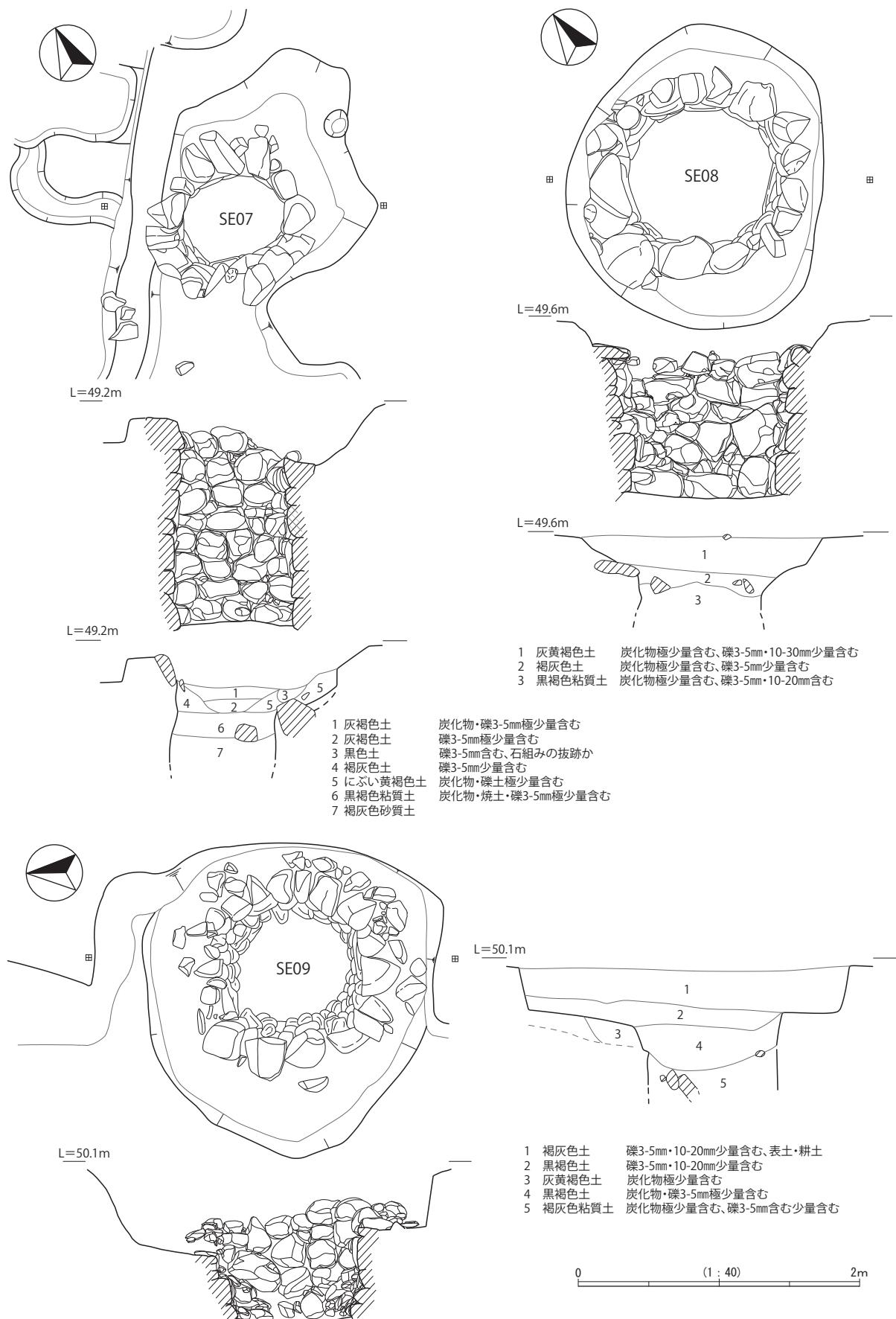


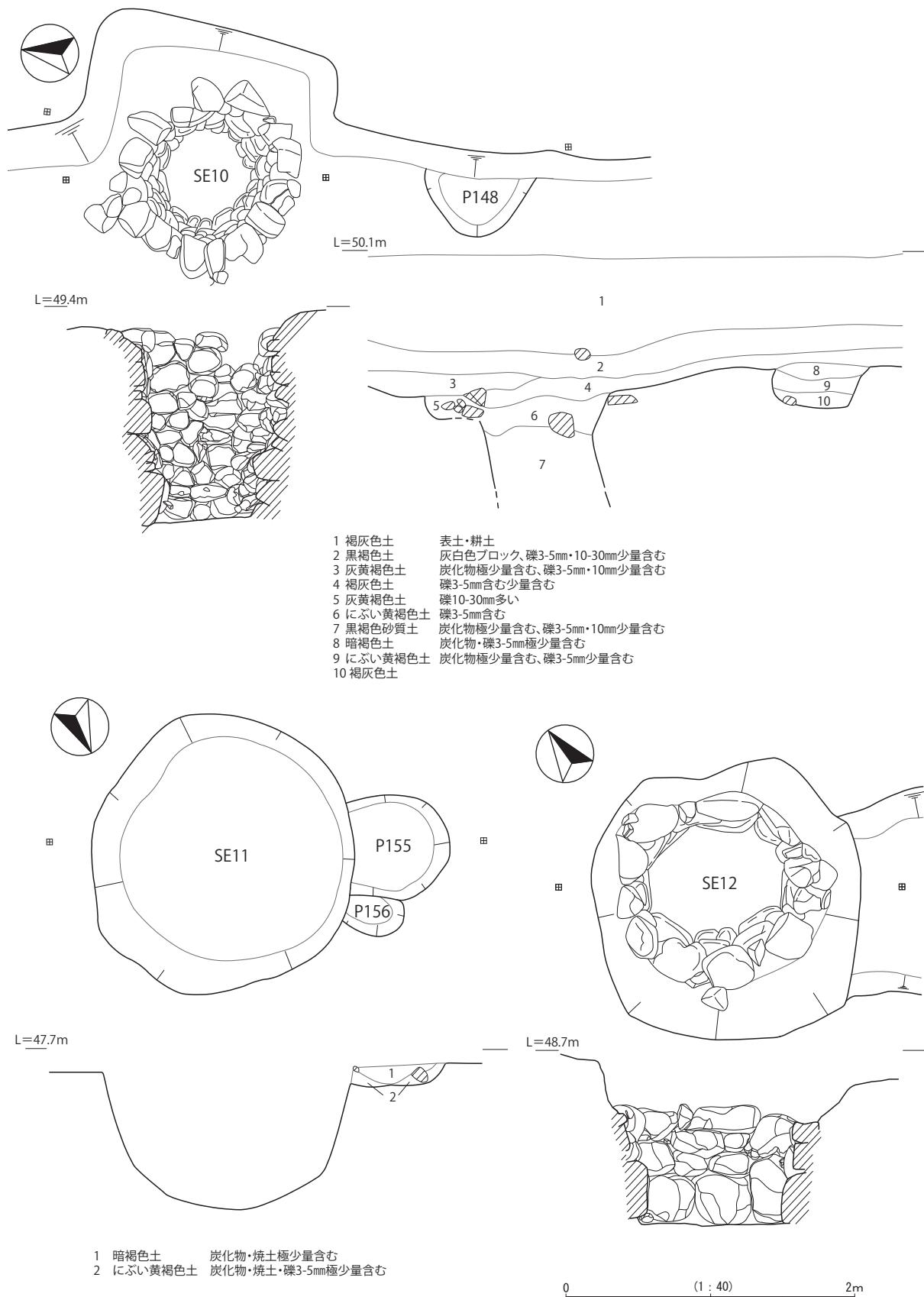
第30図 井戸(SE) 遺構図1

第2節 井 戸 (S E)

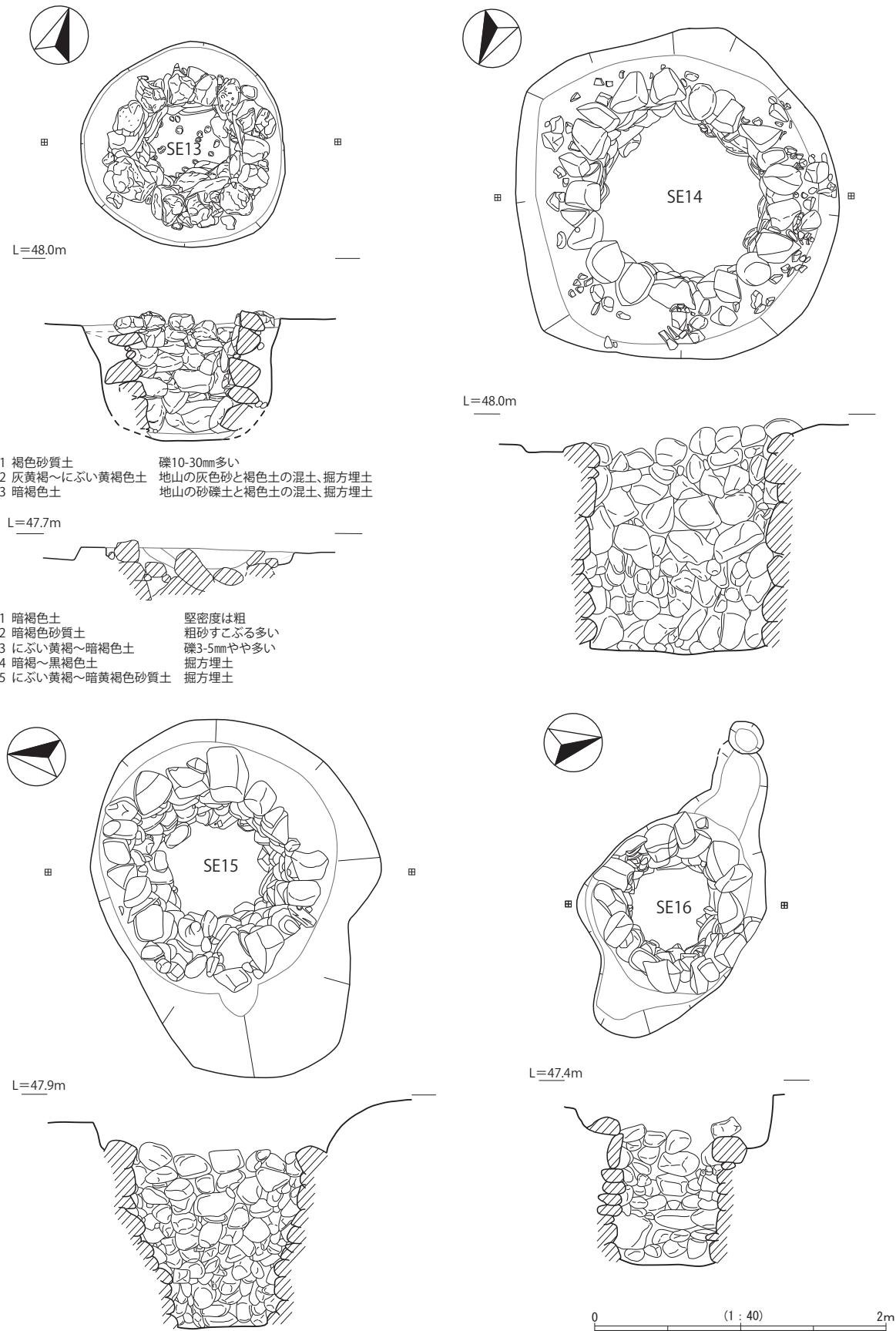


第31図 井戸 (SE) 遺構図 2

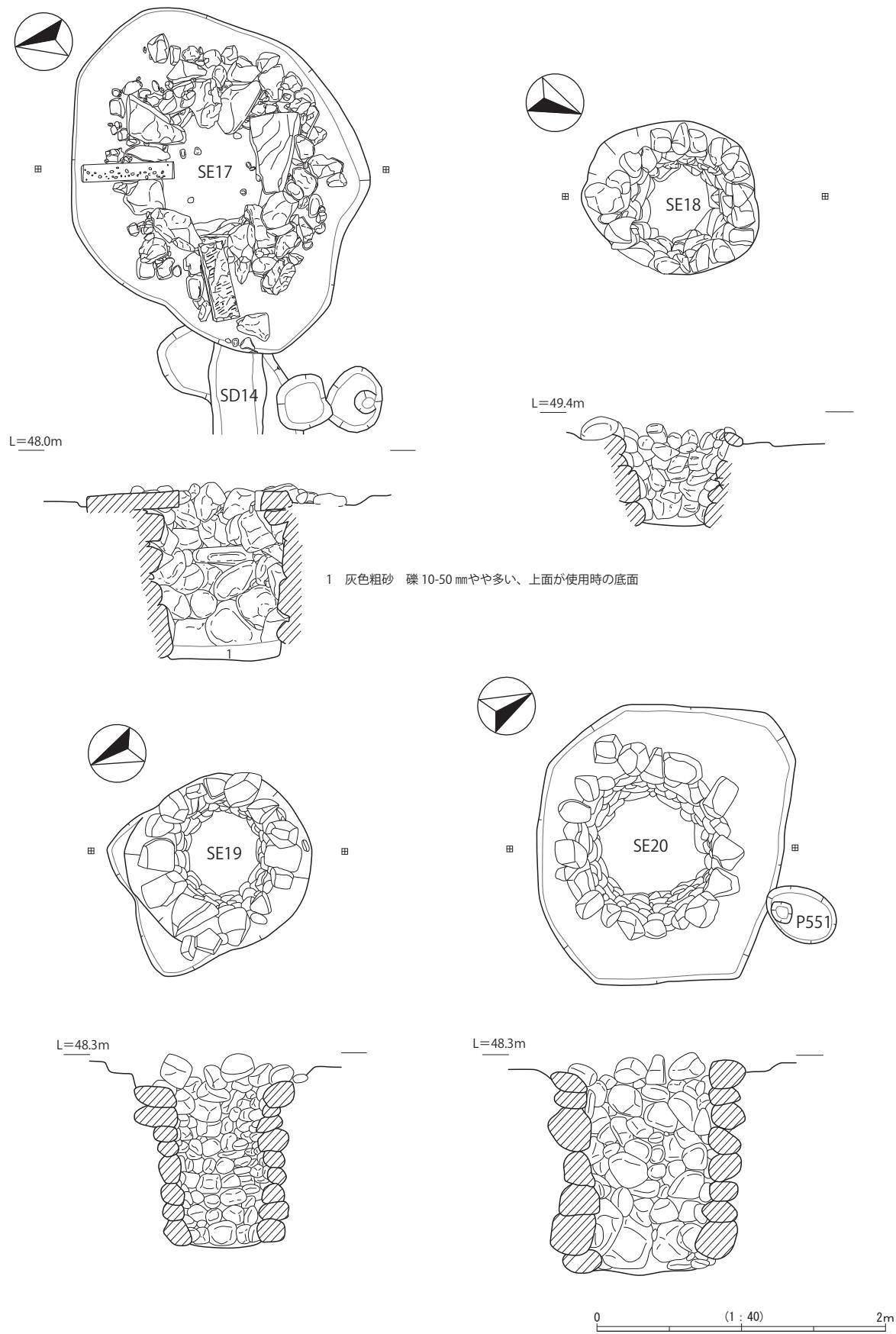




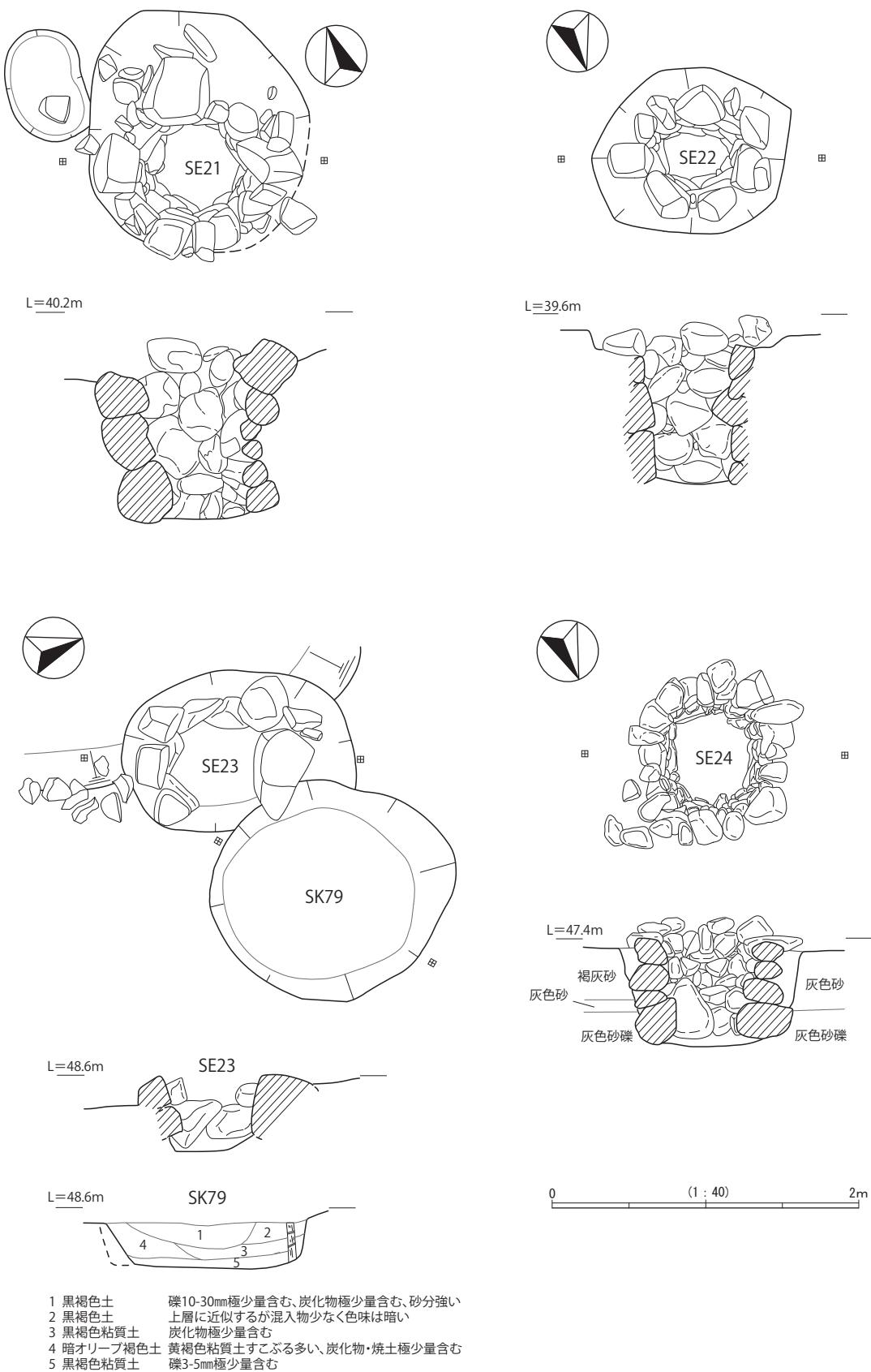
第33図 井戸 (SE) 遺構図 4



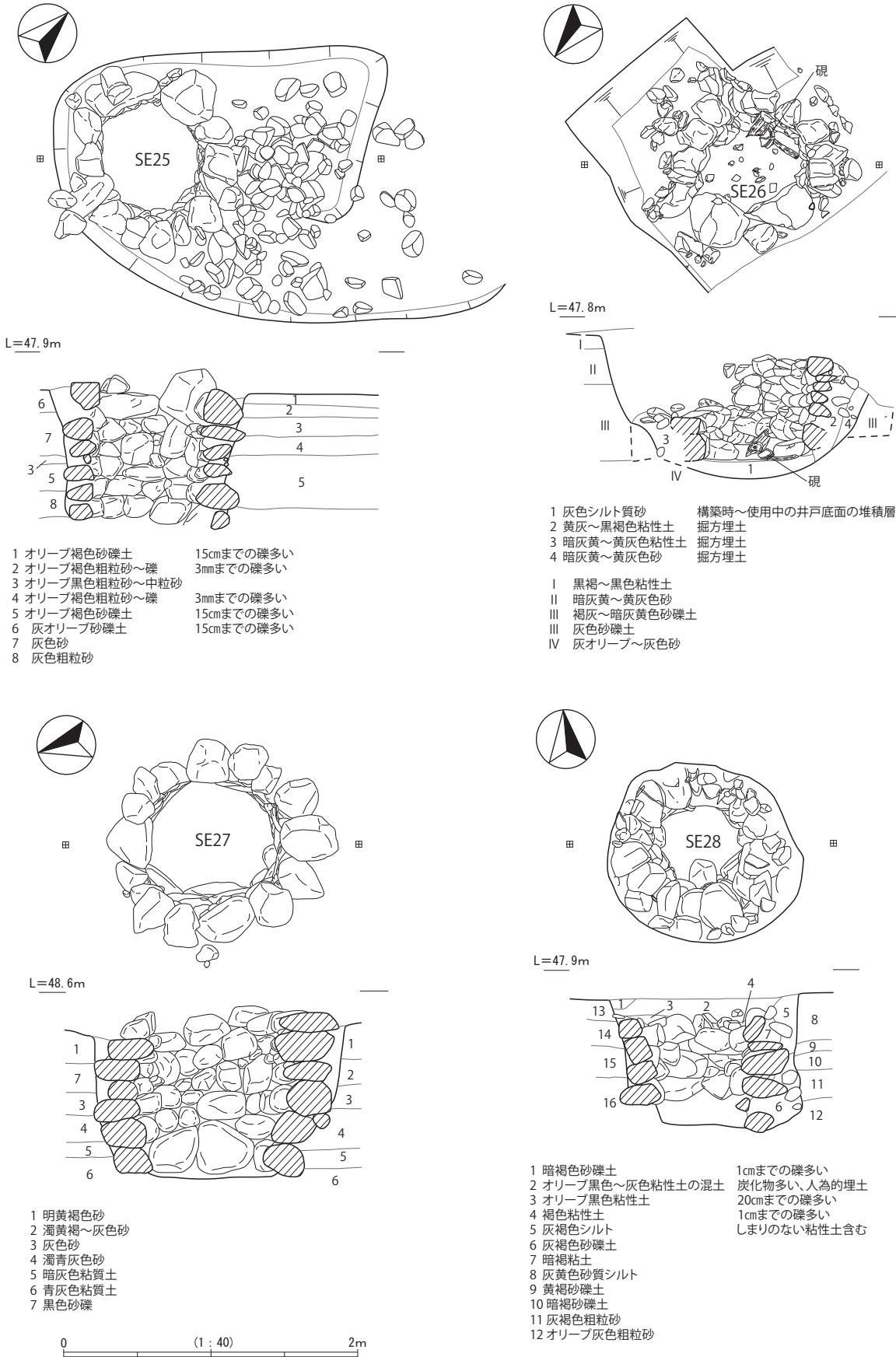
第34図 井戸(SE) 遺構図5



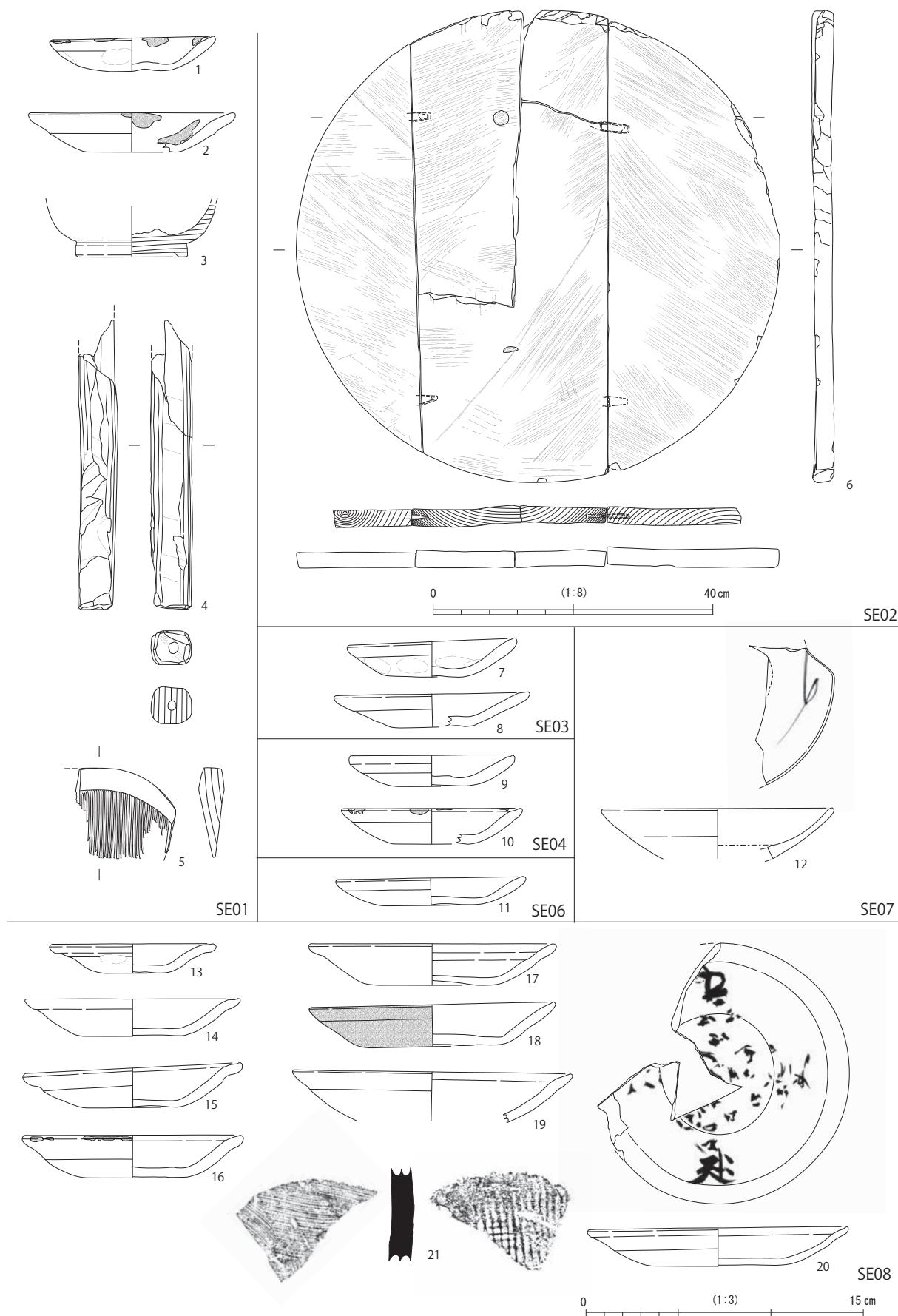
第35図 井戸 (SE) 遺構図 6



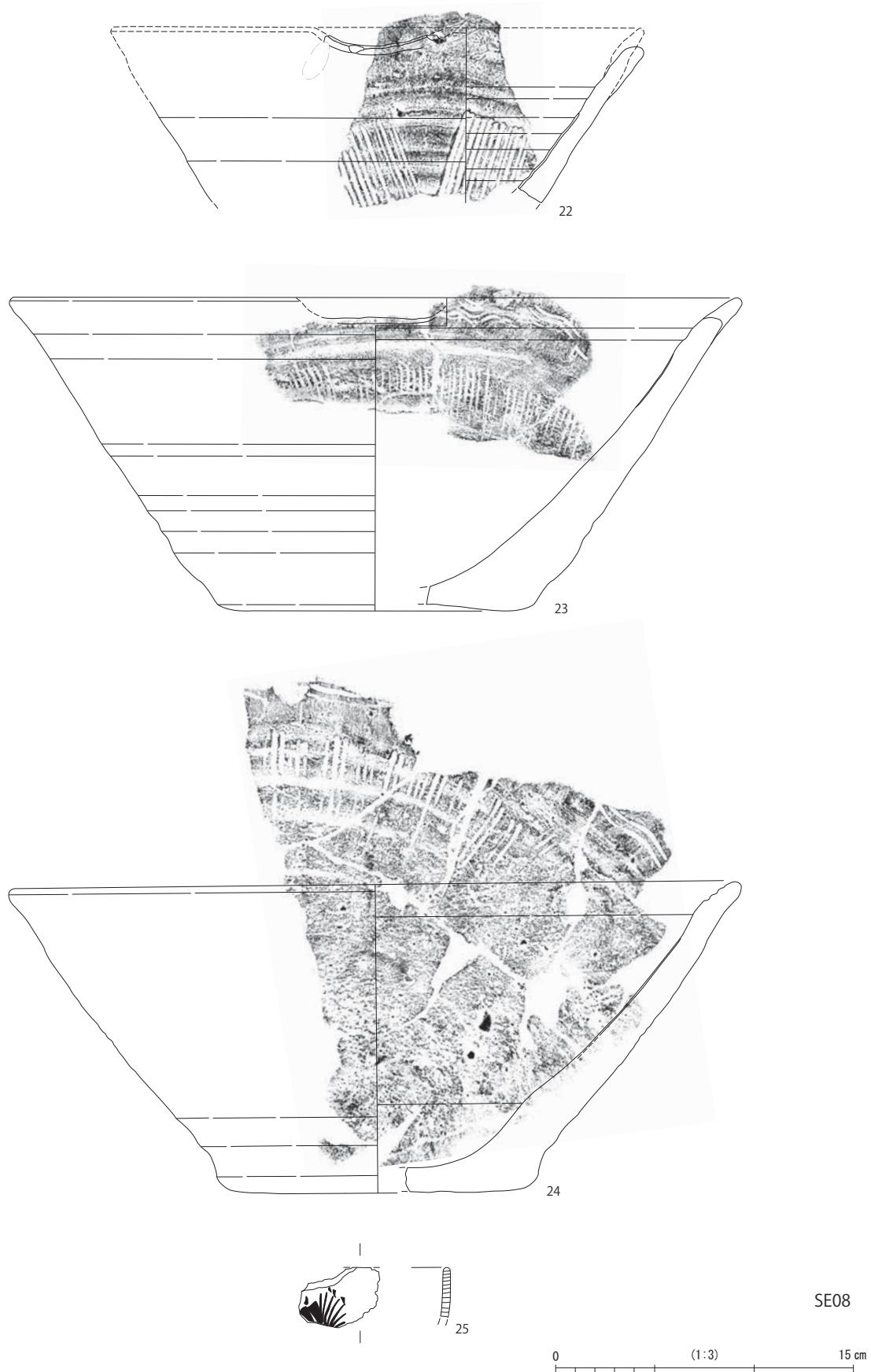
第36図 井戸(SE) 遺構図7



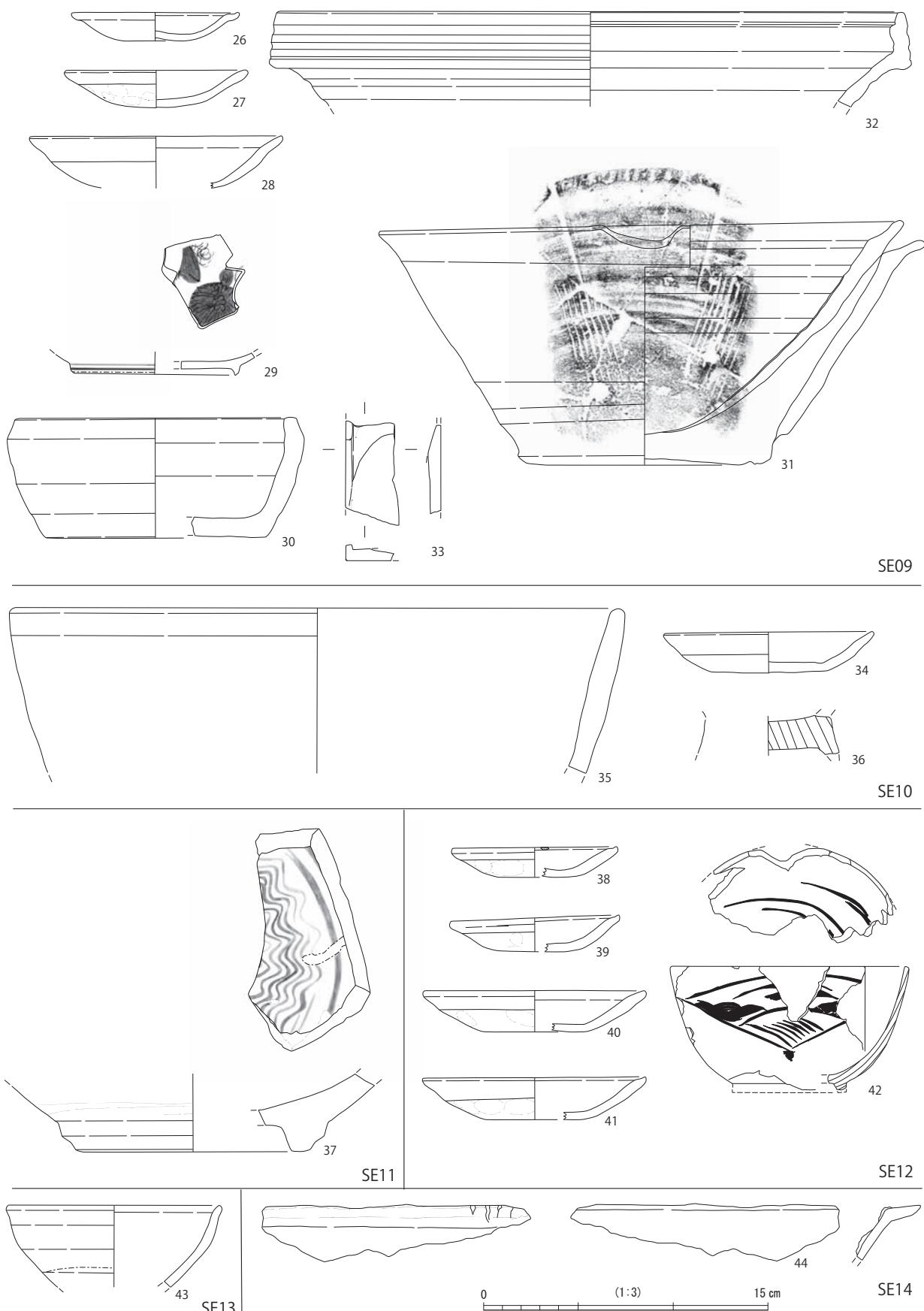
第37図 井戸 (SE) 遺構図 8



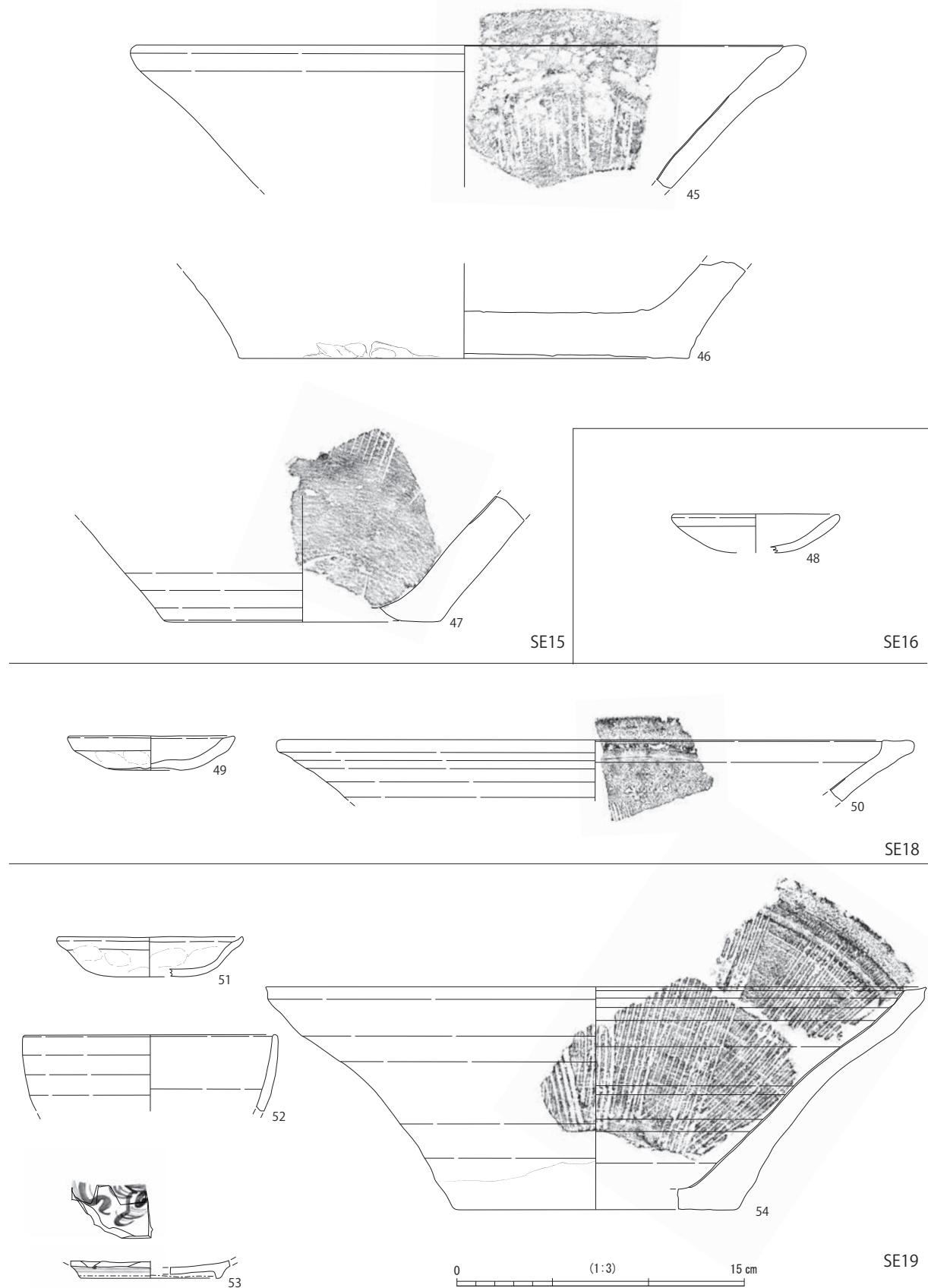
第38図 井戸(SE) 出土遺物 1



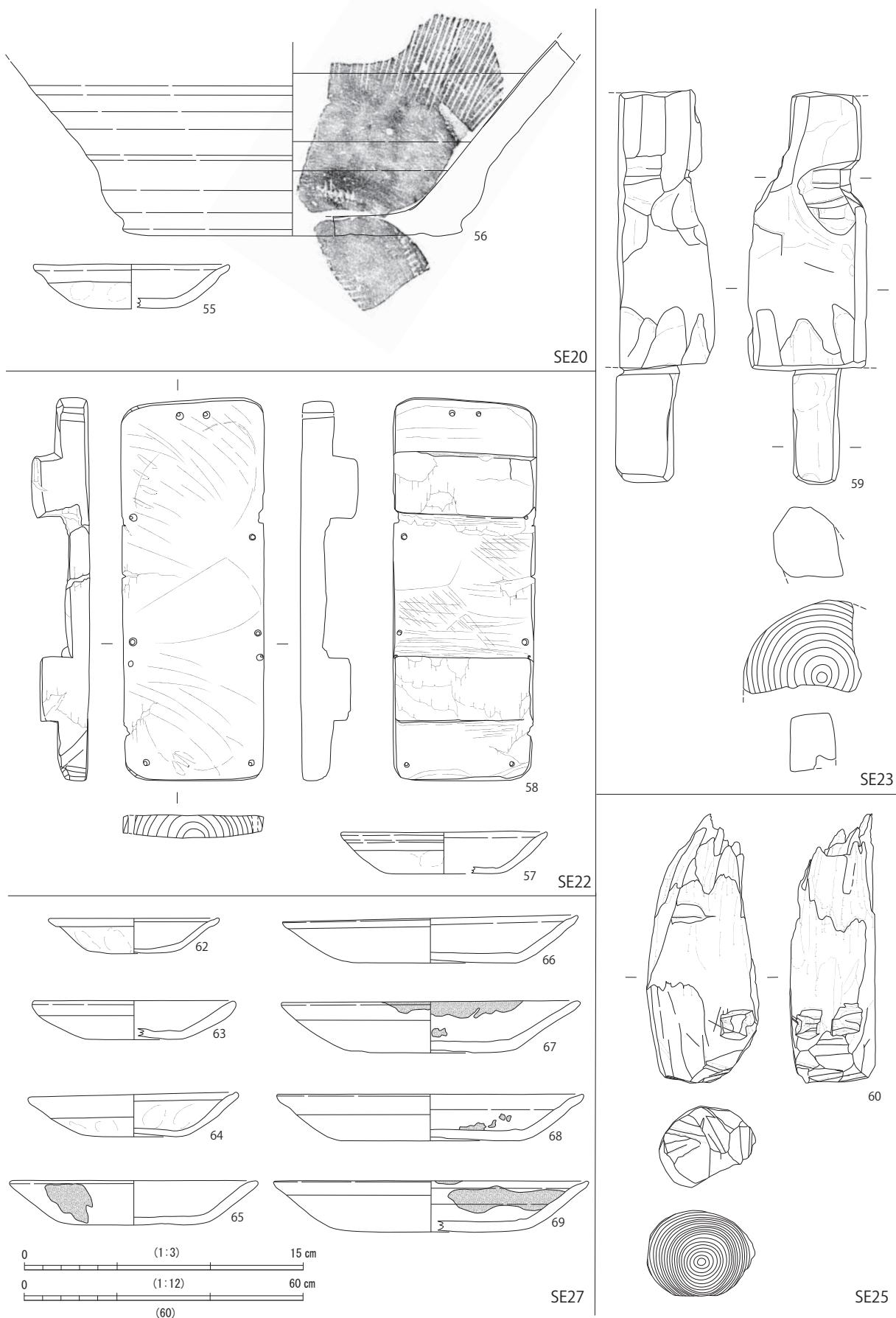
第39図 井戸 (SE) 出土遺物 2



第40図 井戸(SE) 出土遺物 3

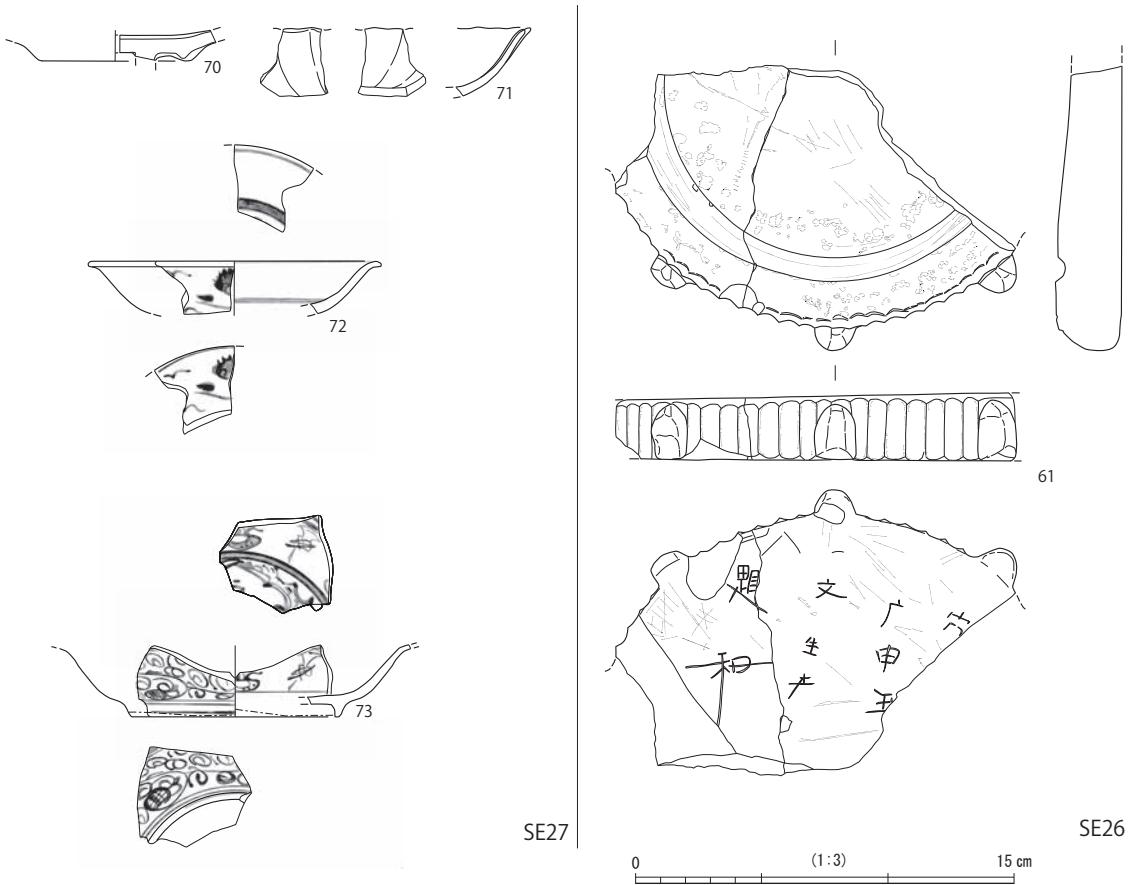


第41図 井戸 (SE) 出土遺物 4



第42図 井戸(SE) 出土遺物 5

第2節 井 戸 (S E)



第43図 井戸 (SE) 出土遺物 6

第3節 土坑 (SK)

調査区全体では、120基を超える土坑(SK)に番号が付されているが、ここでは土層観察の実施と実測遺物を伴う土坑を中心に報告を加える(第44図)。なお、個別の規模等は第8~11表に示し、土坑全体では破片数にして1,560点弱の土器・陶磁器類が出土するが、肥前等の近世以降の遺物も一定量認められる。



第44図 第4・5次 土坑(SK)配置図

第3節 土 坑 (S K)

遺構名	調査区	遺構図版	規模 (cm)			遺物図版	土器・陶磁器類 破片数 (点)	備考
			長軸	短軸	深さ (標高m)			
SK01	北1区	第25、45図	98	78	20 (49.61)	第57図74	土師器皿：1 瓦質鉢：1 株洲壺：1 株洲擂鉢：1	
SK02	北1区	第25、45図	102	80	36 (49.52)	—	土師器皿：1	P05に切られる
SK03	北1区	第25、45図	194	92	30 (49.56)	—	土師器皿：4	
SK04	北1区	第20、45図	176	112	54 (49.15)	第57図75	土師器皿：3 株洲甕：1 株洲擂鉢：1 肥前皿：1	SB03構成柱穴
SK09	北1区	第24、45図	110	68	54 (49.15)	第57図76～78	土師器皿：78 瓦質香炉：1 瀬戸・美濃灰釉皿：2 株洲甕：1 青磁碗：1 白磁壺：1	
SK10	北1区	第24、45図	(328)	310	30 (49.23)	第57図79～84	土師器皿：3 越前甕：1 越前擂鉢：1 青花碗：1 青花皿：2 肥前碗：12 肥前皿：10 行平蓋：1	市道区に延びる
SK12	北1区	第19、46図	148	100	27 (49.18)	—	—	
SK13	北1区	第19、46図	173	152	60 (48.62)	—	肥前擂鉢：1	
SK14	北1区	第19、46図	185	158	23 (48.85)	—	須恵器甕：1 土師器皿：1 越前甕：1 肥前白磁碗：1	SK15 (SE05) を切る
SK15 (SE05)	北1区	第19、46図	202	162	65 (48.24)	第57図85	土師器皿：1 青磁瓶：1 肥前碗：2 肥前擂鉢：1	SE05と同遺構 SK14に切られる
SK16	北1区	第19、46図	108	—	62 (48.40)	第57図86	肥前碗：6 肥前仏飯器：1 肥前瓶：1	
SK17	北1区	第18、46図	180	164	70 (48.66)	—	須恵器甕：1 土師器皿：8	
SK18	北1区	第19、47図	230	(210)	12 (48.77)	第58図87～92	土師器皿：34 土鈴：1 瓦質行火：15 瀬戸・美濃天目碗：4 瀬戸・美濃灰釉碗：1 越前擂鉢：5	SK19に切られる
SK20	北1区	第19、47図	226	155	60 (48.61)	第58図93～97	須恵器壺：1 土師器皿：60 瓦質風炉：14 越前擂鉢：1	
SK21	北1区	第18、47図	106	76	34 (48.09)	—	土師器皿：2 染付碗 (型紙刷)：2	P126を切る
SK22	北1区	第18図	149	138	37 (47.58)	第58図98	土師器皿：5	
SK23	北1区	第18、47図	312	245	32 (48.51)	第58図99～102	土師器皿：29 越中瀬戸小壺：2 肥前碗：32 肥前皿：10 肥前瓶：1 肥前擂鉢：3	
SK24	北1区	第18、48図	128	112	56 (48.60)	—	土師器皿：8 陶器碗：1 肥前皿：1 擂鉢：1	
SK25	北1区	第18、48図	120	118	17 (48.60)	—	—	
SK31	北1区	第19、48図	154	89	14 (48.60)	—	—	
SK33	北1区	第20、48図	125	120	26 (49.15)	第59図103～105	土師器皿：48 株洲壺：4	SK42に切られる 破片数はSK42を含む
SK34 (SE12)	北1区	第15図	205	188	109 (47.46)	第59図106	土師器皿：5	SE12と同遺構
SK35	北1区	第19、48図	188	170	35 (48.47)	第59図107・108	土師器皿：10 株洲甕：1	

第8表 土坑 (SK) 規模等一覧表 1

遺構名	調査区	遺構図版	規模(cm)			遺物図版	土器・陶磁器類 破片数(点)	備考
			長軸	短軸	深さ (標高m)			
SK43	北1区	第20図	150	106	78 (48.46)	第59図109	土師器皿：1 信楽壺：1 肥前碗：3 肥前皿：1 肥前鉢：1	
SK44	北2区	第14、48図	94	78	23 (47.52)	—	土師器皿：3	
SK45	北2区	第15、48図	130	80	27 (47.73)	—	—	
SK46	北2区	第14、48図	138	130	58 (47.00)	第59図110～112	土師器皿：18 白磁皿：1 青花皿：2	
SK47	北2区	第13、49図	(170)	94	56 (46.98)	第59図113・114	土師器皿：15 青磁碗：1	P194・195に切られる SD13を切る
SK48	北2区	第13、49図	200	166	20 (47.71)	第59図115	土師器皿：19	P202・203に切られる SK49を切る
SK50	北2区	第14、49図	(86)	70	30 (47.72)	—	—	P221(SB07)に切られる
SK51	北2区	第14、49図	106	64	24 (47.85)	—	土師器皿：6	SB06構成柱穴 焼土塊：12
SK56	南1区	第24、49図	144	123	10 (49.12)	—	—	
SK57	南1区	第24、49図	(100)	(50)	20 (49.18)	—	土師器皿：2	P302・303に切られる
SK58	南1区	第24、49図	106	63	23 (48.79)	第59図116	土師器皿：7 瓦質鉢：1	
SK59	南1区	第24、49図	154	146	32 (49.06)	第59図117	土師器皿：2 肥前皿：2	
SK60	南1区	第24、50図	142	136	28 (49.06)	—	土師器皿：4 珠洲甕：1	
SK61	南1区	第24、50図	92	48	49 (48.81)	—	土師器皿：11	SB14内
SK62	南1区	第24、50図	100	55	20 (48.90)	—	土師器皿：20 瀬戸・美濃灰釉皿：1 瀬戸・美濃鐵釉瓶：1 越中瀬戸擂鉢：1	SB15内 P327を切る 破片数はP327を含む
SK63	南1区	第24、50図	106	100	64 (48.77)	—	土師器皿：1 越前甕：1	SK66を切る
SK64	南1区	第28、50図	(120)	55	40 (48.96)	第59図118～121	土師器皿：12	P359(SB11)に切られる
SK65	南1区	第28、50図	384	(200)	34 (49.28)	第59図122～124	土師器皿：9 瀬戸・美濃鐵釉瓶：1 越前甕：1 備前擂鉢：1 肥前皿：1 肥前擂鉢：1	南2区に延びる
SK66	南1区	第28、50図	(200)	106	40 (49.00)	—	土師器皿：5 珠洲甕：2 肥前碗：1 肥前火入：1 灰釉碗：1	SK63に切られる
SK67	南1区	第25、51図	114	110	36 (49.57)	第60図125～127	土師器皿：55 青花皿：1	SB09構成柱穴 P288に切られる P398を切る
SK68	南1区	第23、51図	140	135	28 (48.22)	—	白磁皿：1	
SK69	南1区	第27、51図	146	140	34 (48.15)	第60図128	土師器皿：1 青磁碗：1 越中瀬戸鉢：1	
SK70	南1区	第24、52図	190	160	20 (49.01)	第60図129・130	染付碗：2 陶器鉢：1 瓦質鉢：1	SK71を切る 瓦：1
SK71	南1区	第24、52図	—	144	28 (49.06)	第60図131	土師器皿：2 越中瀬戸皿：1 染付碗：1	SK70に切られる
SK72	南1区	第28、52図	176	120	22 (49.12)	—	土師器皿：8 瀬戸・美濃鐵釉瓶：1 青磁盤：1 瓦質花瓶：2 珠洲甕：1	P374(SB13)を切る
SK73	南1区	第23、52図	106	103	24 (48.70)	第60図132	土師器皿：1 越中瀬戸鉢：1 肥前陶器皿：3 肥前擂鉢：1	

第9表 土坑(SK) 規模等一覧表2

第3節 土 坑 (S K)

遺構名	調査区	遺構図版	規模 (cm)			遺物図版	土器・陶磁器類 破片数 (点)	備考
			長軸	短軸	深さ (標高m)			
SK74	南1区	第23、52図	168	130	32 (48.32)	第60図133・134	瀬戸・美濃鉄釉碗：1 越中瀬戸擂鉢：1 肥前陶器鉢：1 染付皿：1	釉薬黒瓦：1
SK75	南1区	第23、53図	102	98	14 (48.78)	—	—	
SK76	南1区	第24図	162	80	21 (48.85)	第61図135	土師器皿：1	P389 (SB15) に切られる
SK77	南1区	第24、53図	(120)	66	32 (48.88)	第61図136	土師器皿：5 越前擂鉢：1	SB14内 SK78に切られる
SK78	南1区	第24、53図	96	90	70 (48.42)	第61図137・138	土師器皿：43 青花皿：1 珠洲擂鉢：1	SB14内 SK77を切る
SK80	南1区	第23・27、53図	202	130	26 (48.40)	第61図139	土師器皿：4 越中瀬戸皿：1 越中瀬戸擂鉢：1 肥前皿：3 肥前擂鉢：2	
SK81	南1区	第23・27、53図	172	154	16 (48.43)	第61図140～143	瓦質鉢：1 肥前碗：1 肥前皿：3 肥前鉢：2 肥前擂鉢：1 染付碗：1 鉄釉擂鉢：4	
SK82	南1区	第23、53図	216	200	20 (48.20)	—	土師器皿：1 珠洲甕：1 鉄釉鉢：1	
SK83	南1区	第23、53図	194	96	19 (48.14)	—	土師器皿：2 珠洲甕：1 肥前陶器皿：1 肥前擂鉢：1	
SK84	南1区	第23・27、54図	(136)	108	26 (48.34)	—	肥前碗：2 肥前皿：1 瀬戸・美濃染付碗：1	
SK85	南1区	第22、54図	204	182	22 (47.94)	—	土師器皿：5	
SK86	南1区	第22、54図	130	108	17 (47.91)	—	土師器皿：6	SK87を切る
SK87	南1区	第22、54図	148	94	6 (48.07)	—	—	SK86に切られる
SK89	南1区	第25図	126	78	40 (49.35)	第62図144・145	土師器皿：26	SB09構成柱穴 P287に切られる
SK90	南1区	第22、54図	216	195	30 (47.75)	第62図146～150	土師器皿：55 青磁碗：1 白磁皿：1 青花碗：1 珠洲甕：1	SK91を切る
SK91	南1区	第22、54図	—	98	12 (48.05)	—	土師器皿：1	SK90に切られる
SK92	南1区	第23、54図	(300)	84	16 (48.34)	第62図151	越前甕：1 肥前皿：3 肥前小杯：1	市道区に延びる
SK93	南1区	第23、55図	—	97	21 (48.40)	—	土師器皿：6	
SK94	南1区	第17・22、55図	250	210	18 (47.90)	第62図152・153	土師器皿：34 青磁鉢：1 白磁皿：4	SB21構成柱穴に切られる
SK95	南1区	第17・22、55図	252	182	32 (47.65)	—	土師器皿：38 珠洲擂鉢：1	SK106に切られる
SK96	南1区	第22、55図	92	73	52 (47.65)	第62図154	土師器皿：1	壁土：11
SK97	南1区	第22、55図	—	62	27 (48.09)	—	—	P443・444に切られる
SK102	南1区	第17図	160	110	47 (47.93)	第62図155～158	土師器皿：28	
SK106	南1区	第17、55図	114	98	74 (47.18)	—	土師器皿：3	SK95を切る
SK107	南1区	第22図	180	80	73 (47.59)	第62図159	土師器皿：13 珠洲甕：6 珠洲擂鉢：1 越前擂鉢：29 越中瀬戸擂鉢：1	
SK110	南1区	第17、56図	—	70	27 (47.60)	—	—	

第10表 土坑 (SK) 規模等一覧表3

遺構名	調査区	遺構図版	規模(cm)			遺物図版	土器・陶磁器類 破片数(点)	備考
			長軸	短軸	深さ (標高m)			
SK111	南1区	第17、56図	316	(270)	60 (47.28)	第62図160～162	須恵器杯：1 土師器皿：50 瀬戸・美濃天目碗：2 瀬戸・美濃灰釉皿：2 青花碗：1 青花皿：1	
SK113	南2区	第22、56図	162	130	22 (47.72)	—	土師器皿：8	SB16構成柱穴
SK117	市道区	第17、56図	176	—	40 (48.10)	第62図163～165	土師器皿：37	
SK118	市道区	第18図	—	215	47 (48.05)	第62図166～168	土師器皿：169 瀬戸・美濃天目碗：2 青磁皿：1 肥前鉄釉碗：1 肥前擂鉢：1 染付碗：1	釉薬瓦：1
SK120	市道区	第24・25図	206	174	28 (49.22)	第62図169	土師器皿：3	瓦：1
SK124 (SK125)	南2区	第21、56図	126	118	54 (46.66)	第62図170	土師器皿：4	SK125と同遺構

第11表 土坑(SK) 規模等一覧表4

SK01 (第25、45図、第57図74)

北1区。長軸98cm、短軸78cmの不整楕円形でSB01の南側梁間筋に重なるが、建物との関連は不明である。深さは20cmと浅い。

74は珠洲焼の壺である。直立気味に立ち上がる頸部途中にゆるやかな隆起をもち、口縁端部は外反する。頸部外面には細い櫛状工具でラフな波状文を回す。Ⅲ期とした。他には、瓦質土器の鉢片1点、珠洲焼擂鉢片1点等が共伴する。

SK02 (第25、45図)

北1区。長軸102cm、短軸80cm、深さ36cmの略楕円形で、SB01の構成柱穴P05に切られる。土師器皿片1点が出土する。

SK03 (第25、45図)

北1区、SB01内に位置する。長軸194cm、短軸92cm、深さ30cmの不整方形で、土師器皿片4点が出土するが時期等の特定は難しい。

SK04 (第20、45図、第57図75)

北1区、SB03の南西隅柱部に位置する2段掘りの土坑で、長軸176cm、短軸112cmと他の柱穴に比べて数段大きく、建物構成遺構の是非については検討を要する。

75は肥前Ⅱ期の灰釉溝縁皿である。珠洲焼甕・擂鉢片等が共伴する。

SK09 (第24、45図、第57図76～78)

北1区。長軸110cm、短軸68cmの不整方形で、断面は深さ54cmの逆台形となる。

76は硬質系の土師器皿E類。口縁部の3箇所に明確な油煤痕が付着する。77は底部を円形状に打ち欠いた青磁碗。高台内は蛇の目釉剥ぎとする。無文碗か。78は瓦質土器の筒形香炉で口縁部断面を方形とする。外面にはスタンプ文が回る。内外面には口縁部を中心に漆塗りの痕跡が認められる。なお、遺物量は多く、土師器皿片は全体に硬質で器表のザラつきが少なく古相を示す。他には大窯1・2段階とみられる灰釉皿片2点等が出土する。

SK10 (第24、45図、第57図79～84)

北1区。南側の一部が市道区側に延びる、長軸328cm、短軸310cm、隅丸方形の大型土坑である。なだらかに1段下がる中心部は10～30cm台の1段積みの石組が方形に巡り、内法は長軸180cm、短

軸160cm前後で検出面からの深さは30cmとなる。

79は底部を円形に打ち欠いた青花碗片。胎土はやや軟質で十字花文を配した見込は饅頭心状に盛り上がる。全面施釉で高台内及び畳付の一部に透明度の強い砂粒が付着する。豊臣後期から徳川初期1(1598～1622)にかけて主体となる粗製碗C類とした(森2019)。80～82は肥前IV期の製品である。80は79と同様に底部を打ち欠く呉器手の京焼風陶器碗。81、82は見込を蛇の目釉剥ぎ、高台無釉とする磁器Ⅲである。83は内面赤色外面黒色系の漆器椀で口縁部と底部を欠く。全体に塗りは薄く樹種はブナ属である。分析No.10資料。84は北宋銭の元豊通寶である。遺物は近世が主体で、肥前の碗皿類が定量認められる。

SK13 (第19、46図)

北1区、SE02の北側に隣接する。長軸173cm、短軸152cmの不整円形で、片側を段掘りとする。深さは60cmで、叩き成形の肥前擂鉢細片1点が出土する。

SK14 (第19、46図)

北1区。隣接するSK15(SE05)の北側法面を切り込む深さ23cmの深い土坑で、平面形は長軸185cm、短軸158cmの隅丸方形状とする。越前焼甕片等に混じり、肥前白磁碗細片1点が出土する。

SK15 (第19、46図、第57図85)

北1区、SE05と同遺構であり、SK14に切られる。

85は上半部を欠くが、口縁部以下を無釉とする肥前Ⅲ期のロクロ成形擂鉢である。胎土は赤褐色で砂粒の含みは少なく、底部には回転糸切り痕を残す。

SK16 (第19、46図、第57図86)

北1区。長軸1mを超える深さ62cmの円筒形状の土坑で、南側は搅乱坑に切られ消失する。土層観察面1～4層それぞれの間に木屑層が薄く堆積しており、周辺での何らかの木材加工の痕跡がうかがわれるか。

86は口径6.6cm、小型でやや深めの肥前筒丸碗。外面4箇所に径20mm弱の丸文を等間隔に配置する。近世末期V期の製品であり、他にも仏飯器等が共伴する。

SK17 (第18、46図)

北1区。長軸180cm、短軸164cm、深さ70cmの円形状土坑で、最上層には3～10cm台の礫が多量に含まれる。

焼き歪みのある須恵器甕体部片1点が、土師器皿片に混じって出土している。

SK18 (第19、47図、第58図87～92)

北1区。長軸230cmのU字状に湾曲する変則的な土坑で、土層観察の深さは12cmと浅く、東端に重なるP101からは瀬戸・美濃鉄釉把手付水注(251)が出土する。

土師器皿はE類(87・88)、C類(89)で構成される。87の底部中央には「口」と読める墨書がみられる。89の外面ナデは弱く見込には雑な「2」字状ナデ上げがはいる。90は瀬戸・美濃天目茶碗。内反り高台をもち体部はゆるやかに湾曲する。高台周辺には濃いめの錆釉がかかる。大窯2段階。91は瓦質土器の平底片で体部は湾曲気味に立ち上がる。上部を欠くが平面形は隅丸方形で、方形状の透孔が並ぶとみられる体部片が共伴するため、行火とした。92は焼成のあまい越前焼擂鉢。口縁部内面は明瞭な面取りをせず、擂目は間隔をあけて施され沈線で止まる。IVb群とした。

SK20 (第19、47図、第58図93～97)

北1区、SK18の東側に隣接する。長軸226cm、短軸155cmの不整形で、片側に小さなテラス状の平坦部をもつ。深さ60cmで短軸側の断面は逆台形状となる。

93は須恵器壺片。器表には焼き膨れがみえ、口縁部は外反し端部を折り返して玉縁状とする。94は土師器皿E類、95、96は外面横ナデを施すC類。95は橙色系、94、96は灰白色系で器表にはやや砂が浮く。②グループに属するか。97は瓦質土器の底部片で高台径232mmの大型品である。上部構造は不明であるが、1条突帯をもつ体部片、直立する短い口縁部片などが共伴しており、円筒状の深鉢の可能性があるか。

SK21（第18、47図）

北1区、SB04の西隣に位置し、P126を切る。長軸106cm、短軸76cm、深さ34cmの不整楕円形で、近代以降となる型紙刷りの染付碗片が2点出土する。

SK22（第18図、第58図98）

北1区。長軸149cm、短軸138cm、深さ37cmの略円形で、上面には10～30cm台の礫が散在する。

98は木胎の腐食した総黒色系の漆器椀と思われ、漆パレットに使用された見込部分の器形だけが残っている。漆絵は朱色細線で描かれる。分析No.9資料である。他には土師器皿片5点が共伴する。

SK23（第18、47図、第58図99～102）

北1区、SB04の東4m程に位置する長軸312cm、短軸245cmの大型楕円形土坑である。深さは32cm、床面は丸底で周囲はなだらかに立ち上がる。

99は内外面に鋸釉を施す越中瀬戸の小壺とした。口縁部は短くゆるやかに外反し端部は丸くおさめる。口クロ目は比較的明瞭で胎土は堅くにぶい橙褐色となる。登窯製品か。100は肥前染付碗。外面に小松文のコンニャク印判がはいる。IV期。101は流紋岩製の砥石で、周囲4面が使用される。102は銭貨2枚が接着しており、銭文は不明である。なお、他にも肥前IV期を主体とした染付碗・皿、刷毛目碗等の破片が多数出土している。

SK24（第18、48図）

北1区、SE03・SK17の中間に位置する。長軸128cm、短軸112cm、深さ56cmの略円形で、土師器皿細片と共に砂目跡をもつ肥前II期の灰釉皿が出土している。

SK33（第20、48図、第59図103～105）

北1区、SE10の南西隣に位置する。長軸125cm、短軸120cmの隅丸方形で不整形のSK42に一部を切られるが、実測遺物はSK33・42で取り上げられている。

103は淡橙色の土師器皿E類。104、105は11cm台の灰白色系内黒中皿。104はC類、105は外面横ナデが不明瞭のためD類とした。

SK34（第15図、第59図106）

北1区、SE12と同遺構である。106は土師器皿E類。淡橙色で器表はややザラつく。

SK35（第19、48図、第59図107・108）

北1区。長軸188cm、短軸170cmの隅丸方形で、検出面からの深さは35cmとなる。

土師器皿E類(107)、B類(108)で構成される。共にややザラつく器表をもつ。

SK43（第20図、第59図109）

北1区、SD09の西隣に位置する。長軸150cm、短軸106cm、深さ78cmの近世土坑である。

109は白化粧を施す肥前IV期の刷毛目装飾の鉢である。見込を蛇の目釉剥ぎとし、高台は高く見込中央を薄く盛り上げるように深く削っている。他にも肥前製品が共伴するが、いずれも細片である。

SK46（第14、48図、第59図110～112）

北2区北側の調査区際に位置する。長軸138cm、短軸130cmの略円形で深さは58cm、土坑断面の形状は半円状となり北側片方に10～30cm台の礫が集まる。

110は淡黄橙硬質の土師器皿E群。111は口縁を内湾気味とする白磁皿E群。焼成はあまく胎土は陶器質となる。112は見込に十字花文がはいる青花皿B1 VI群。高台内は無釉とする。漆継ぎの跡がみられる。

SK47 (第13、49図、第59図113・114)

北2区、SB08の北側桁行筋に重なる。長軸約170cm、短軸94cmの不整形土坑で、遺構内ではP194・195に切られ、東から延びてくるSD13を切る。検出面からの深さは56cmである。

113は土師器皿E類でP194・195出土品と合わせて取り上げられている。口縁部の外反は強く内面全体が油煤痕で覆われる。114は青磁無文碗。口縁部はゆるやかに内湾する。

SK48 (第13、49図、第59図115)

北2区。長軸200cm、短軸166cmの不整形土坑。P202・203に切られ、SK49を切る。

115は1辺15mm前後のサイコロ形土製品である。焼きはややあまく角が丸くなっている。他には橙色硬質系を主体とした古相を示す土師器皿片19点が出土している。

SK51 (第14、49図)

北2区、SB06の北東隅柱部に位置する。長軸106cm、短軸64cmの楕円形で、深さ24cmの土層断面には柱根の痕跡等はみられない。

実測遺物はないが、土師器皿片6点、表面にスサ痕の付く焼土塊12点が出土する。

SK58 (第24、49図、第59図116)

南1区、SB15の南側に位置する。長軸106cm、短軸63cmの楕円形で深さは23cmとする。

116は北宋錢の元豊通寶である。他には土師器皿片7点、瓦質土器の鉢片1点が共伴する。

SK59 (第24、49図、第59図117)

南1区、SB14の北東脇に隣接する。長軸154cm、短軸146cmの隅丸方形で、底面は平たく深さは30cm前後と均一で周囲はゆるやかに立ち上がる。

117は肥前Ⅱ期の染付皿。文様は定かではないが、全面施釉で畳付にはわずかに砂が付着する。

SK64 (第28、50図、第59図118～121)

南1区、SB11の北東隅柱柱穴P359に切られる。長軸約120cm、短軸55cmの楕円形で、深さは40cmとP359よりも深くなる。

118～120は橙色系(118・120)、白色系(119)の土師器皿C類で表面はややザラつく。いずれも横ナデを明瞭に施す硬質タイプで、古相を示すか。121は粘板岩製の丁寧な作りの硯である。表面の大部分は剥離するが、海部の落ち込みは墨色平滑で使用の痕跡がうかがわれる。裏面は両側に足がつき、全体にやや赤味がかるのは被熱のためか。

SK65 (第28、50図、第59図122～124)

南1区、SB12等の南側に位置する。長軸384cmの大型方形土坑で南2区に延びるが、検出面削平のため全容は不明である。立ち上がりはなだらかで深さは34cm、南北方向に延びる幅40cm前後の溝に切られる。

122は肥前灰釉皿。見込に4箇所の胎土目跡があるⅠ期の製品で、底部は碁笥底状に削り込む。123は備前擂鉢の片口部片。内傾する口縁帶は厚く短く、外面の凹線は2条と減ずる。内面の擂目は放射状ではなく多方向に施される。16世紀末～17世紀前半の年代観をもつ近世1期とした。124は高台がやや踏ん張る内赤外黒色系漆器椀。樹種はブナ属で、塗膜分析では炭粉渋下地層が観察されている。分析No.5資料である。他には肥前Ⅲ期の擂鉢片1点等がみられる。

SK66（第28、50図）

南1区。長軸200cm近く、短軸106cmの不整形でSK63に切られる。検出面からの深さは40cmで、肥前の陶胎染付の火入片が珠洲焼甕片等に混じって出土している。

SK67（第25、51図、第60図125～127）

南1区、SB09の構成柱穴とした。長軸114cm、短軸110cmの不整方形で、底面には礫が伴い36cmの深さがある。

なお、実測遺物125～127は第5節SB09で扱っており、SK67からは土師器皿片55点、青花皿片1点が出土している。

SK68（第23、51図）

南1区の中央南にまとまる土坑群の一つである。一辺135～140cmの隅丸方形の掘り方中央には、四隅を数本の竹材で押された直径約100cmの竹製タガがあり、周囲には板材が散在する。おそらく桶状の木製容器が据えられていたものと思われ、容器内の堆積層とみられる土層5は粘性の極めて強い黄褐色粘土層となる。

遺物は少なく、近世以降とみられる白磁皿細片1点が出土する。

SK69（第27、51図、第60図128）

南1区、SK68の南側に並ぶ直径140cm台の円形土坑である。深さ34cmで下駄や底板部分等を含む複数点の木製品が認められる。

128は差歛下駄で、方形となる台の法量は長さ約15cm、幅約6cmと小振りである。歯は断面台形で接地面の磨り減りは少ない。樹種は台・歯共に軽軟材とされるモクレン属である。他には線描蓮弁文の青磁碗C群、越中瀬戸鉢の体部細片等が1点ずつ出土する。

SK70（第24、52図、第60図129・130）

南1区。長軸190cm、短軸160cmの不整方形で、SK71を切りSB14に一部重なる。

129は瓦体部片で平瓦の可能性があるか。全面に薄い鋸釉状の釉薬がかかる。焼成は良好、胎土は明褐色系で大小の砂粒を含む。130はディサイト製の砥石。研面は3面で中央は使用のためゆるやかに凹む。他には近代以降の染付碗片等が共伴する。

SK71（第24、52図、第60図131）

南1区。SK70に切られSB14の構成柱穴よりも新しい。

131は越中瀬戸灰釉皿の高台部を面子状に打ち欠いたものである。内堀、外底無釉で高台は輪状に削り出す。登窯製品。なお、SK70と同様に近代以降の染付碗片が出土している。

SK72（第28、52図）

南1区、SB11内に位置する。長軸176cm、短軸120cmの楕円形で、SB12の構成柱穴に切られ、SB13に伴うP374を切るか。深さは22cmと浅く立ち上がりはなだらかである。

実測遺物はないが、土師器皿片8点、大窯後半段階の瀬戸・美濃鉄釉瓶1点、青磁盤の体部細片1点等が出土する。

SK73（第23、52図、第60図132）

南1区。直径約100cm、深さ24cmの浅い円筒形状の土坑である。覆土内に桶の底板やタガが残るため、それらに伴う木製容器が埋設されていたものと思われる。

132は流紋岩製の砥石。側面共に4面を使用し、横断面は平行四辺形状となる。他には肥前III・IV期の陶器皿・擂鉢片等が出土する。

SK74 (第23、52図、第60図133・134)

南1区、桶埋設土坑である。長軸168cm、短軸130cmの掘り方の北側に寄せるように直径約90cmの3枚からなる桶底板とSK68にみられるような竹製タガが2段遺存する。

133は越中瀬戸擂鉢の口縁部片。口縁帯を外方につまみ出すA2類とした。つまみ出しあはまいが黒川窯の可能性があるか。134は長さ10.6cmの二本軸の簪で、片方には丸型皿状の耳搔きがつく。銅製品で金鍍金が施されている。他には近代以降と思われる染付皿片1点、黒瓦片1点等が共伴する。

SK76 (第24図、第61図135)

南1区、SB15の構成柱穴P389に切られる。長軸162cm、短軸80cmの略楕円形で、マツ属芯持丸木の柱根(135)、土師器皿片1点が出土する。

SK77 (第24、53図、第61図136)

南1区、SB14内に位置し、SK78に切られる。推定長軸約120cm、短軸66cmの隅丸方形で、深さは32cmと浅い。

136は口縁部に油煤痕をもち、器表がややザラつく土師器皿E類である。越前焼擂鉢片(IVd群)1点が共伴する。

SK78 (第24、53図、第61図137・138)

南1区、SB14内の西側梁間筋近くに位置する。直径100cm弱の円筒状土坑で、ほぼ垂直に立ち上がる深さ70cmの穴底周囲には10~20cm台の礫1段が石組状に巡る。水溜状に用いられたものか。

137は土師器皿B類と思われる口縁部片。幅1.8~2.5cm、長さ4.0cmの細片であり、内面の口縁部から体部側面にかけて鮮やかな金箔が貼りつけられている。また、金箔の剥がれた箇所には黒色の漆下地が残っており接着用に用いられたものと思われる。138は外面に牡丹唐草文のはいる青花皿B1群である。共伴の土師器皿はいずれも細片であり、他には珠洲焼擂鉢片(VI期)1点、京都鳴滝石の可能性のある披熱した硯片1点が出土する。

SK80 (第23・27、53図、第61図139)

南1区。長軸202cm、短軸130cmの瓢箪型不整形土坑で、深さは26cmと浅く層序も単純である。

139は越中瀬戸擂鉢片。口縁部の縁帯が三角形状となるA3類とした。小森あるいは山下窯か。他にも肥前等の近世陶磁器片が共伴する。

SK81 (第23・27、53図、第61図140~143)

南1区、SK80に隣接・近似する長軸172cm、短軸154cm、深さ16cmの不整形土坑である。

140は見込に蛇の目状のアルミナ砂、141は高台径が広く見込にコンニヤク印判の五弁花がはいる中皿で、漆継ぎが施される。共に肥前(波佐見)の染付皿で、それぞれ、V期、IV期の製品である。142はロクロ成形の鉄釉甕で口縁端部は外側下方に肥厚する。肥前V期とした。143は高台部を除いて鉄釉のかかるロクロ擂鉢で、口縁部を偏平玉縁状とする。胎土は灰白色堅微、砂粒の含みは少ない。出土品の多くは近世~近代以降の陶磁器片である。

SK89 (第25図、第62図144・145)

南1区、SB09の構成柱穴とされる。長軸126cm、短軸78cm、深さ40cmの不整楕円形で、P287に切られる。

土坑からは硬質で砂粒の含みの少ない26点の土師器皿片が出土しており、その内の実測遺物144・145については、第5節SB09で説明を加えている。

SK90 (第22、54図、第62図146~150)

南1区の調査区南際で、SB16の北側桁行筋に重なる。長軸216cm、短軸195cmの不整円形で土層は

深さ30cmのレンズ状堆積となる。

146は外面ナでの明瞭な土師器皿C類、147、148は内面全体に煤の付着するB類で外面ナデは不明瞭である。149は外面に線描蓮弁文のはいる青磁碗C群。150は器高が低く口縁部外面に文様帶をもつ青花碗。底部を欠くが、焼成が柔らかく内外面に貫入のはいる粗製碗とした。

SK92（第23、54図、第62図151）

南1区。現長300cm、短軸84cmの溝状遺構で、北側は市道区に延びる。深さは16cmと浅い。

151はやや深めとなる肥前染付皿。内側面に文様がみられ、肥前の銅緑釉皿等が共伴する。IV期。

SK94（第17・22、55図、第62図152・153）

南1区。長軸250cm、短軸210cm、深さ18cmの隅丸方形大型土坑でSB21の構成柱穴に切られる。

152は白色系土師器皿E類で口縁部と見込に明瞭な油煤痕がみられる。完形品である。153は青磁鉢の体部片。器形は復元しづらいが6角柱状の筒形容器となるか。各側面の釉を飾り剥いで素地を出し陽刻文様を削り出している。内面は施釉されるが、外底は無釉とする。底部は体部より外側へ張り出すようであるが、高台共に欠損しており詳細は不明である。他には端反りの白磁皿細片4点と共に土師器皿片が複数点みられるが、器壁が厚く器表がザラつく等古相を示してはいない。

SK96（第22、55図、第62図154）

南1区、SB20の西側桁行筋に重なる。長軸92cm、短軸73cmの不整方形で、52cmの深さがある。

154は長さ7.7cmの土製品状の塊で、二次被熱により橙色に変色した壁土の残欠か。ワラ状のものを押しつけたような痕跡もみられ、同様の大小塊が数点出土している。

SK102（第17図、第62図155～158）

南1区、SB22の西側桁行筋に重なる。長軸160cm、短軸110cmの不整方形で、南側を二段掘りとする。

器表がややザラつく淡黄色の土師器皿で、155（E類）、156（C類）、157・158（B類）で構成される。156の口縁部は外反が強く、底部は内反りとなる。

SK107（第22図、第62図159）

南1区、SB22の東側桁行筋に重なる。長軸180cm、短軸80cmの隅丸長方形で、73cmの深さをもつ。

159は口縁部が鉄鉢状に大きく内湾する越前焼擂鉢。口縁端部はわずかに面取りし擂目は湾曲部以下に密に施される。また、体部外面中位には重ね焼きの痕跡が残る。IV群。なお、共伴する別の越前焼擂鉢片はSD18・21出土品と接合する他、越中瀬戸擂鉢片も出土している。

SK111（第17、56図、第62図160～162）

南1区。長軸316cm、短軸約270cmの大型楕円形土坑。立ち上がり中段でゆるい二段掘りとなり、深さ60cmの土層断面は底の丸いレンズ状となる。

160は硬質淡黄色の土師器皿E類。161、162は瀬戸・美濃製品。161は鉄釉天目茶碗で体部の立ち上がりは強く下半部には比較的色の濃い錆釉を施すが、鉄釉の釉色が明るいため大窯3段階とした。漆継ぎがみられる。162は器壁の薄い灰釉端反皿で大窯1段階。他にも多数の土師器皿片が共伴するが、器表が砂粒でザラつくタイプが大半を占める。

SK117（第17、56図、第62図163～165）

市道区。長軸176cm、深さ40cmで、西側は攪乱溝に切られ形状等は不明である。

163は白色系、164は淡橙色系の土師器皿E類。やや硬質で砂粒が浮く。165は瓦質土器の底部片。体部は直線的に立ち上がり、底部にはわずかに簀の子状の圧痕が残る。内面は披熱変色しており、行火とした。

SK118 (第18図、第62図166～168)

市道区内で検出された幅215cm、深さ47cmの隅丸方形土坑であるが、南1区との調査区境はつながりを欠き本来の形状等は不明である。

166、167は瀬戸・美濃天目茶碗。166は体部の立ち上がりが強く口縁端部は玉縁状に仕上げる。体部下半の鋲釉は薄く、割れ口には漆継ぎがみられる。釉調は明るく大窯3段階とした。167は内反り高台で畳付幅、高台脇の削り出し幅ともに狭く全体に比較的濃い鋲釉がかかる。大窯2段階。168は腰折れの青磁皿で、口縁部はないが稜花皿となるか。見込には花弁状の印花文、高台内は蛇の目釉剥ぎとし畳付は施釉される。なお、他には土師器皿細片169点も出土するが、肥前製品や釉薬瓦片等も共伴しており、近世以降の遺構とみられる。

SK120 (第24・25図、第62図169)

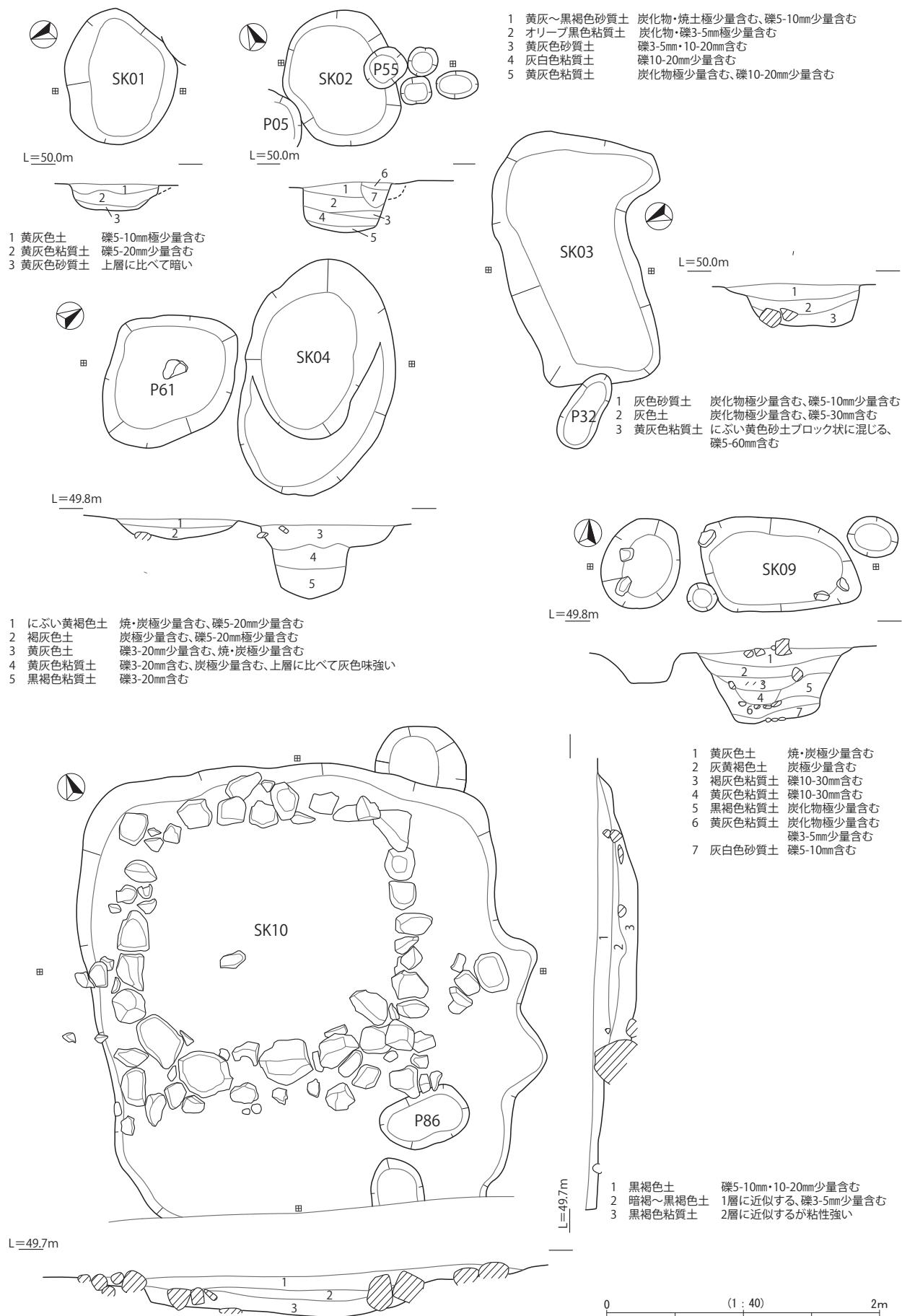
市道区内に位置する長軸206cm、短軸174cmの略楕円形土坑で、中央を搅乱溝がとおる。

169は灰色須恵質の平瓦片である。外面にはタタキ、内面にはハケ状具によるナデ調整が施され、胎土は堅く焼き締まり海綿骨針を含む。

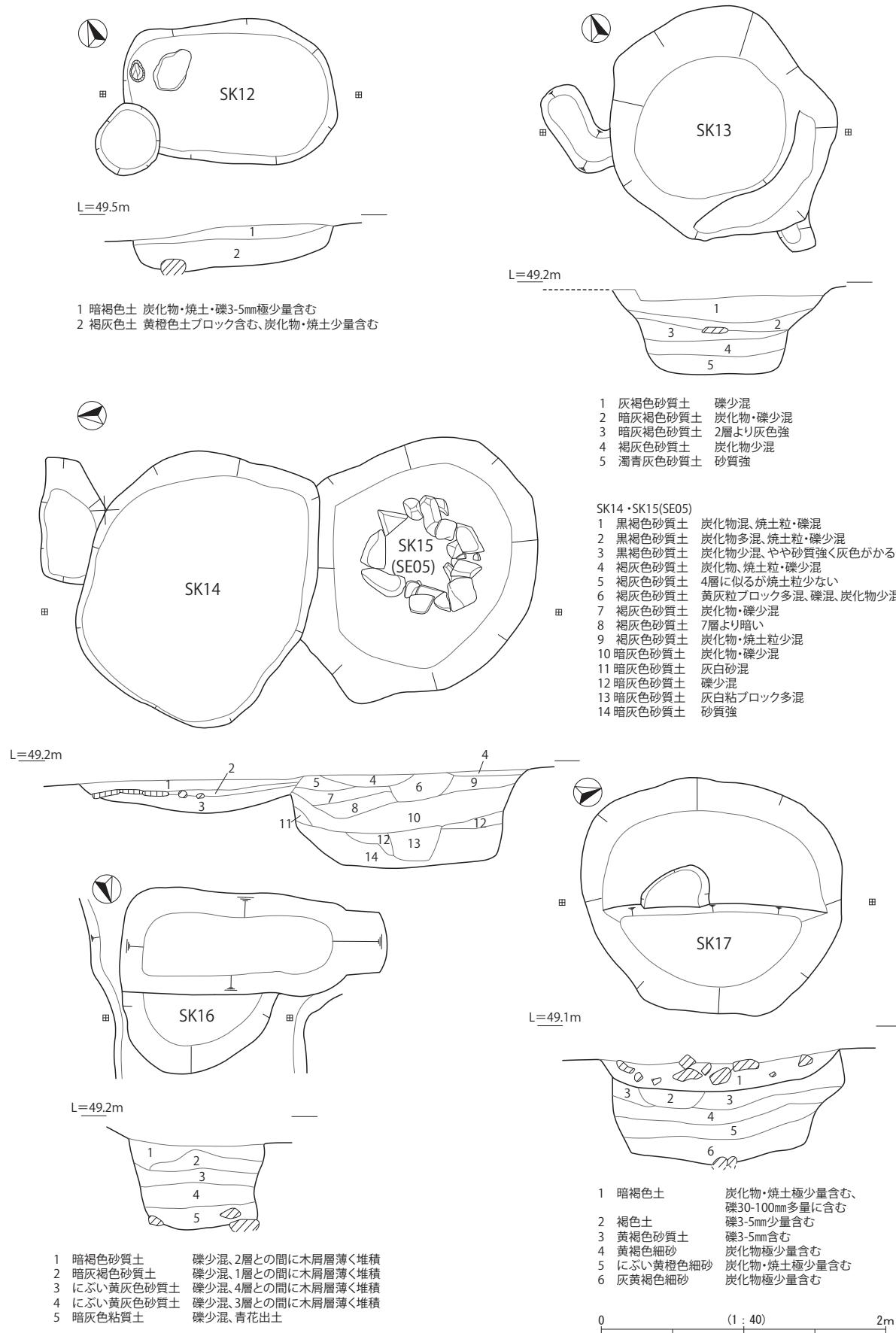
SK124 (第21、56図、第62図170)

南2区、大溝SD18の西脇に位置する。長軸126cm、短軸118cmの隅丸方形形状で、深さ54cmの断面形状は逆台形箱型となる。SK125と同遺構である。

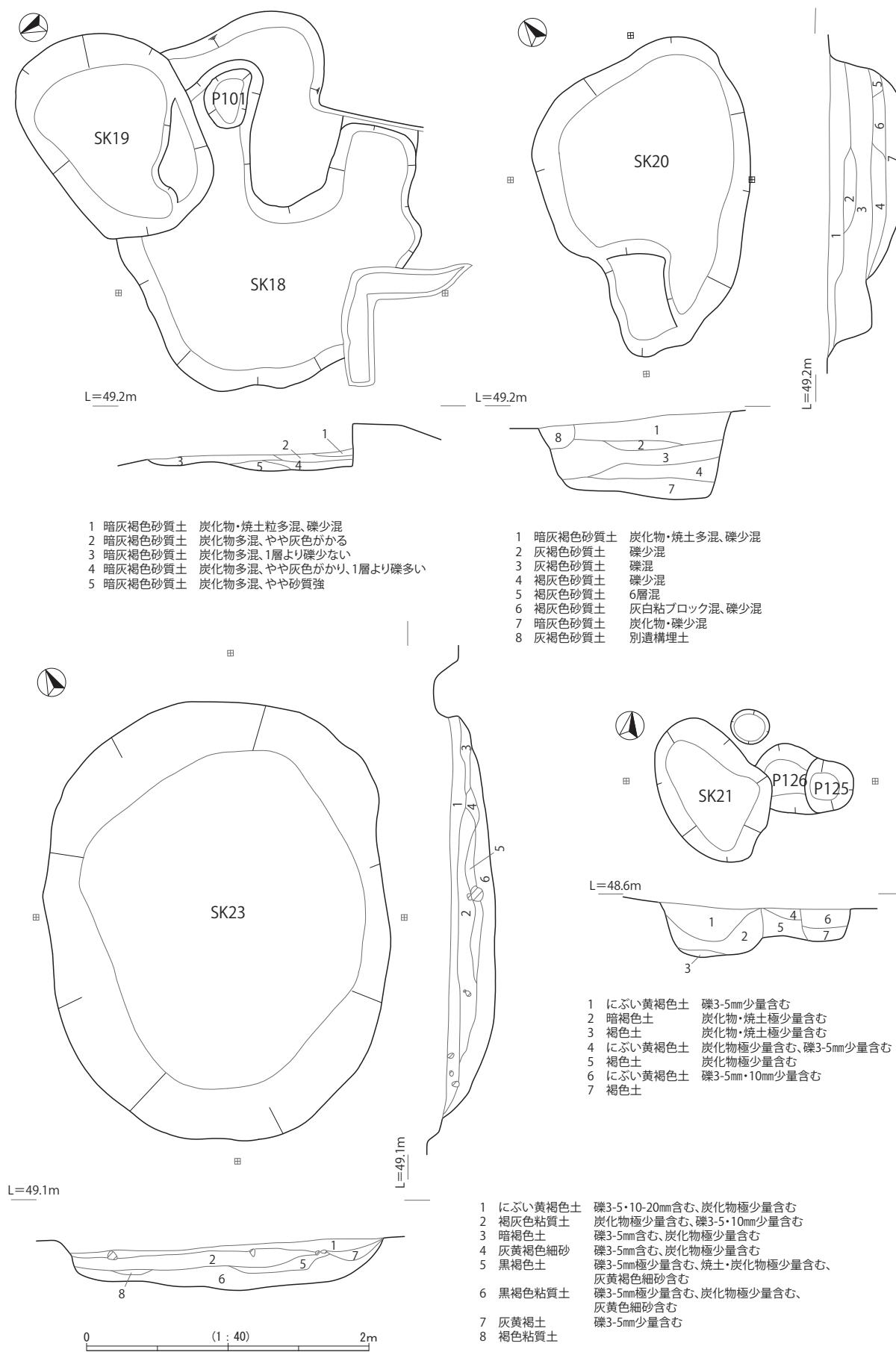
170は口径160mmの大型の土師器皿B類。内面全体に油煤痕が広がる。白色系の硬質土器で凸圈線はほとんどみられない。



第45図 土坑（SK）遺構図1

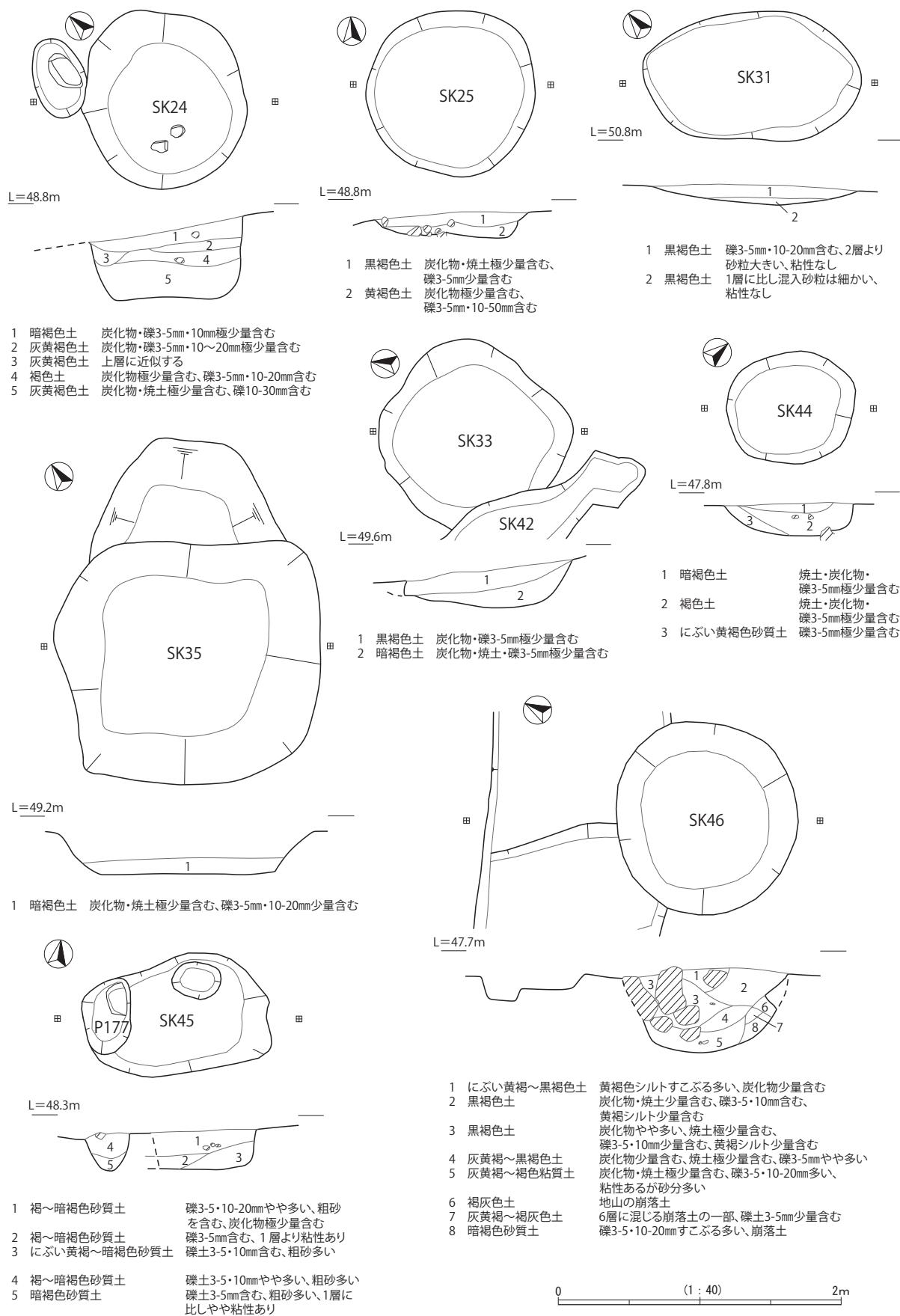


第46図 土坑 (SK) 遺構図2

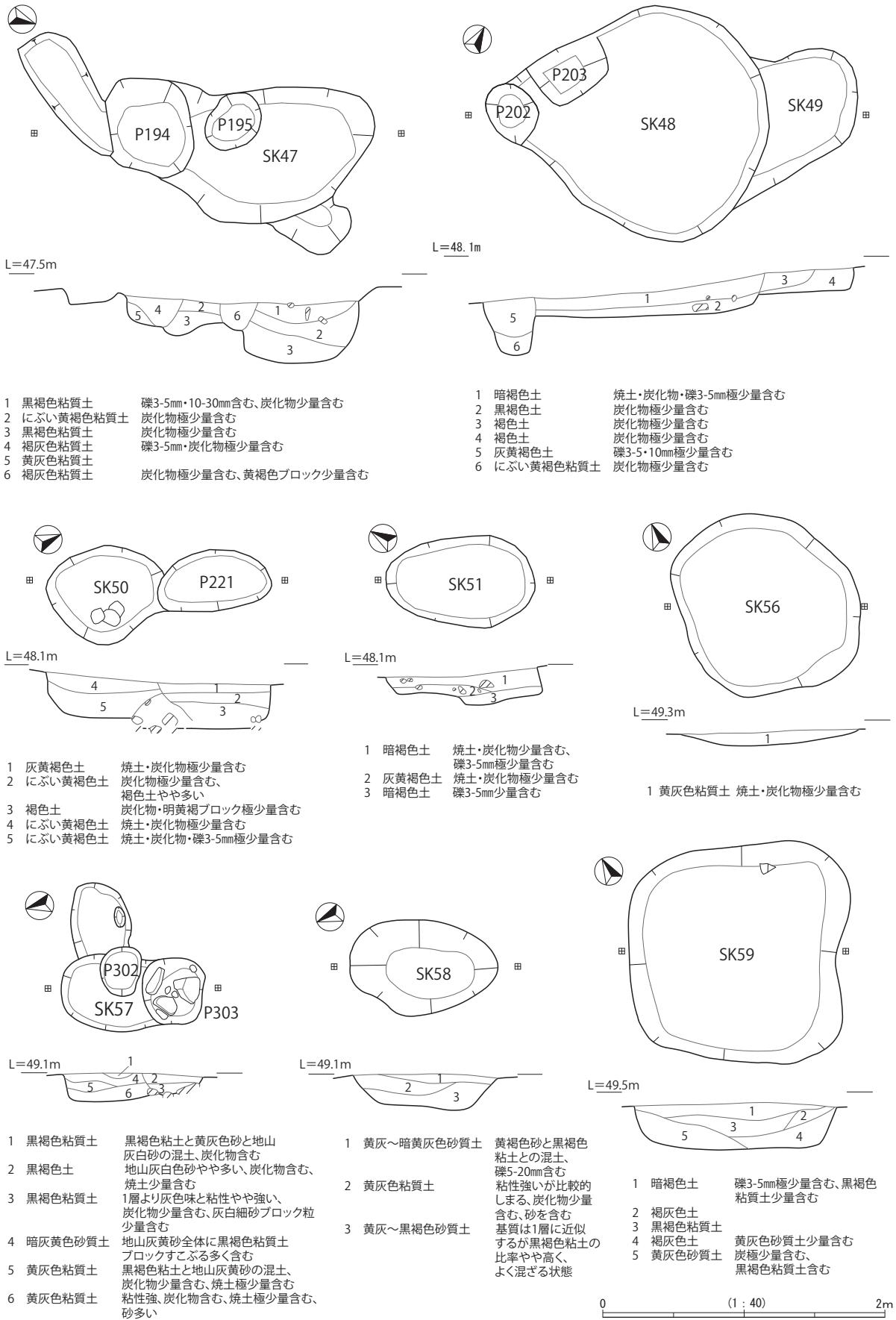


第47図 土坑(SK) 遺構図3

第3節 土 坑 (S K)

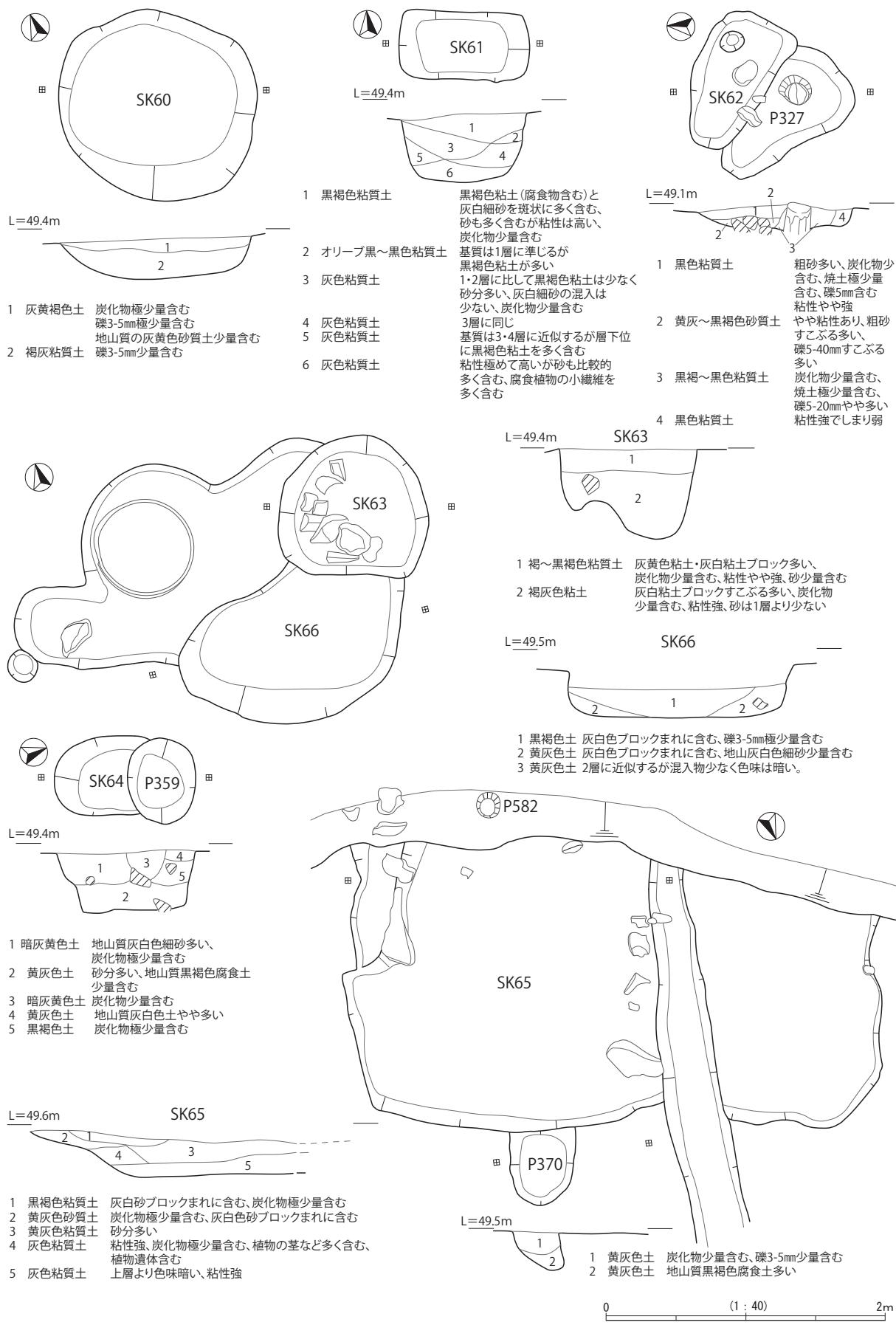


第48図 土坑 (SK) 遺構図 4

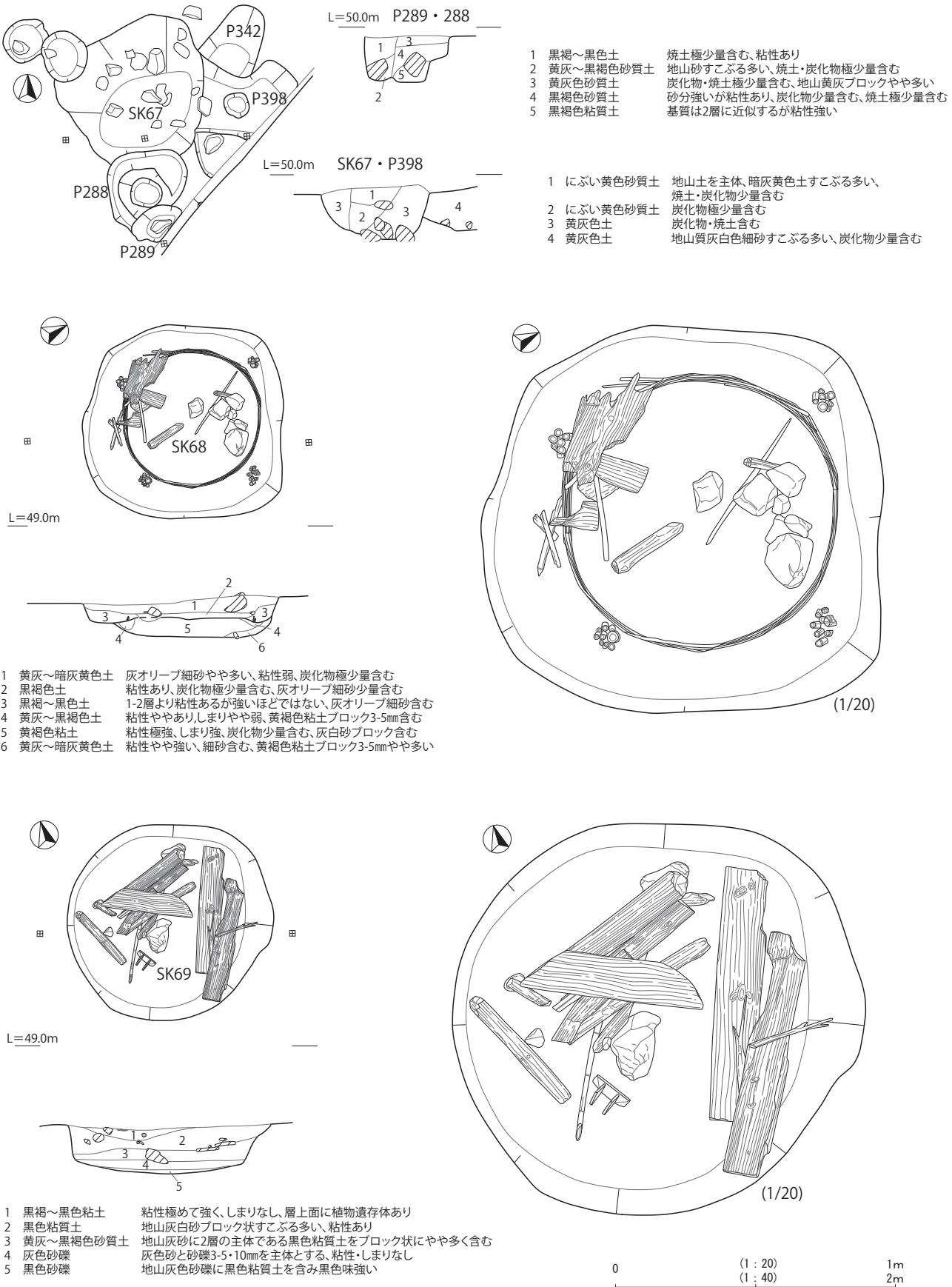


第49図 土坑（SK）遺構図5

第3節 土坑 (SK)

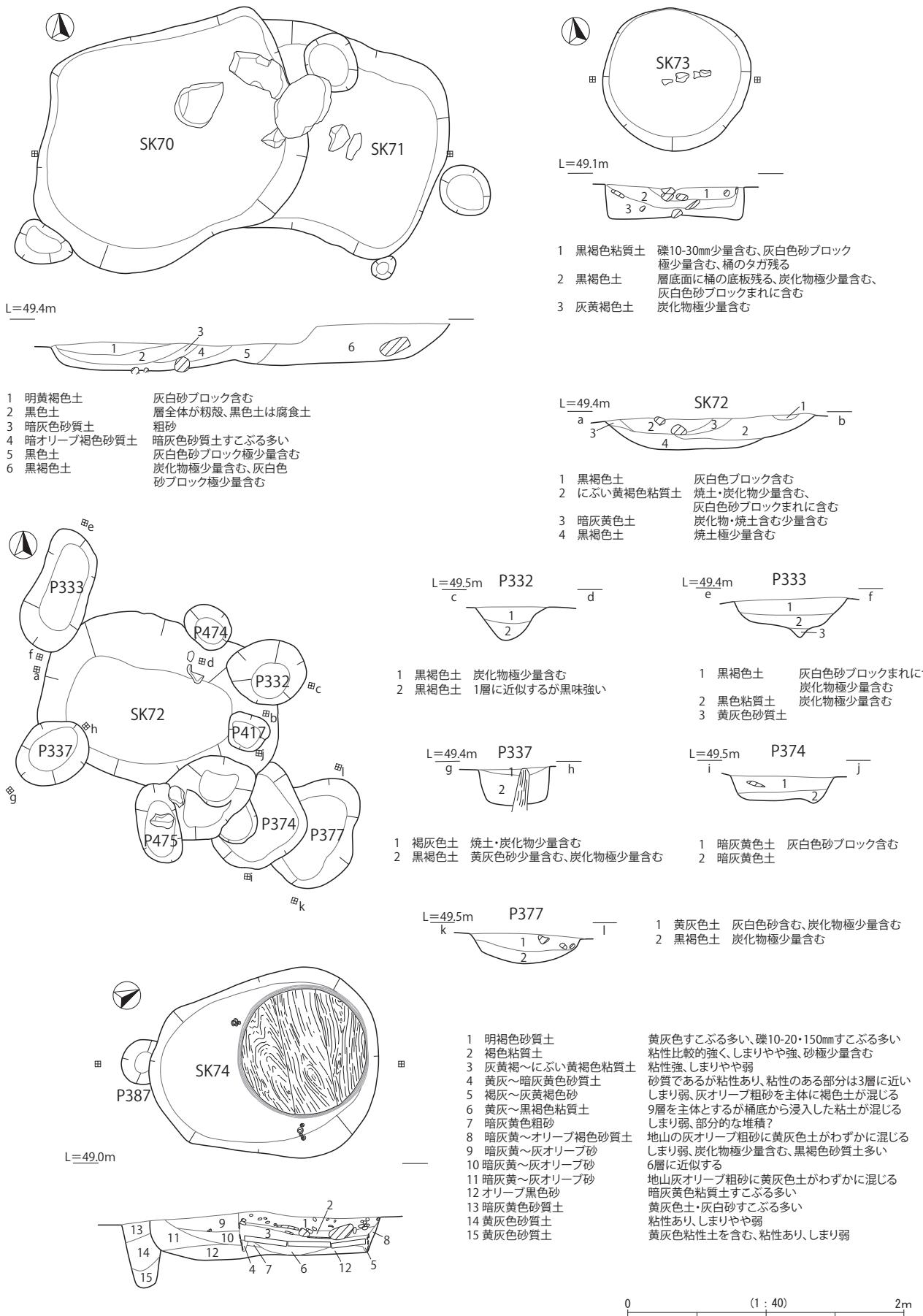


第50図 土坑 (SK) 遺構図 6

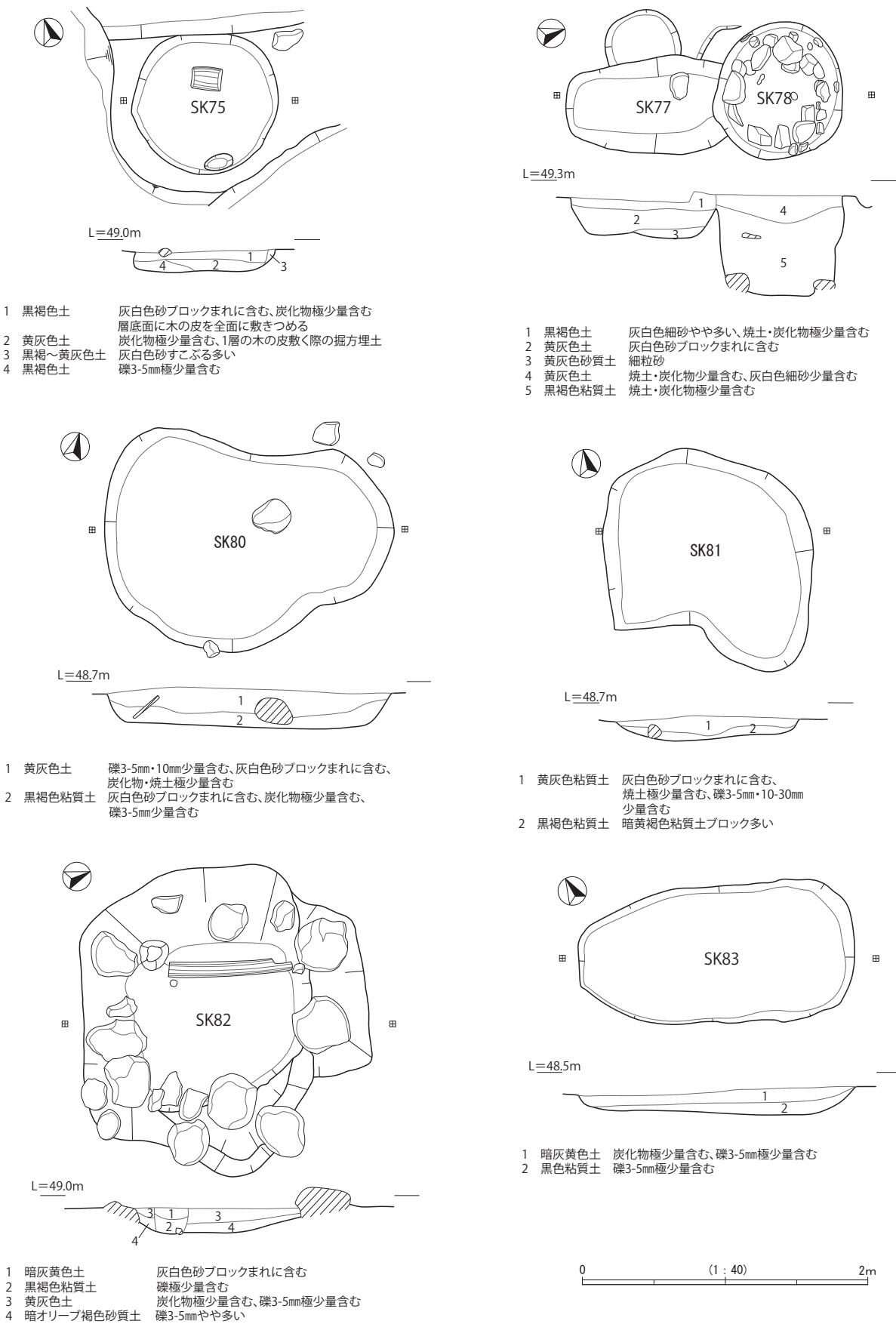


第51図 土坑（SK）遺構図7

第3節 土 坑 (S K)

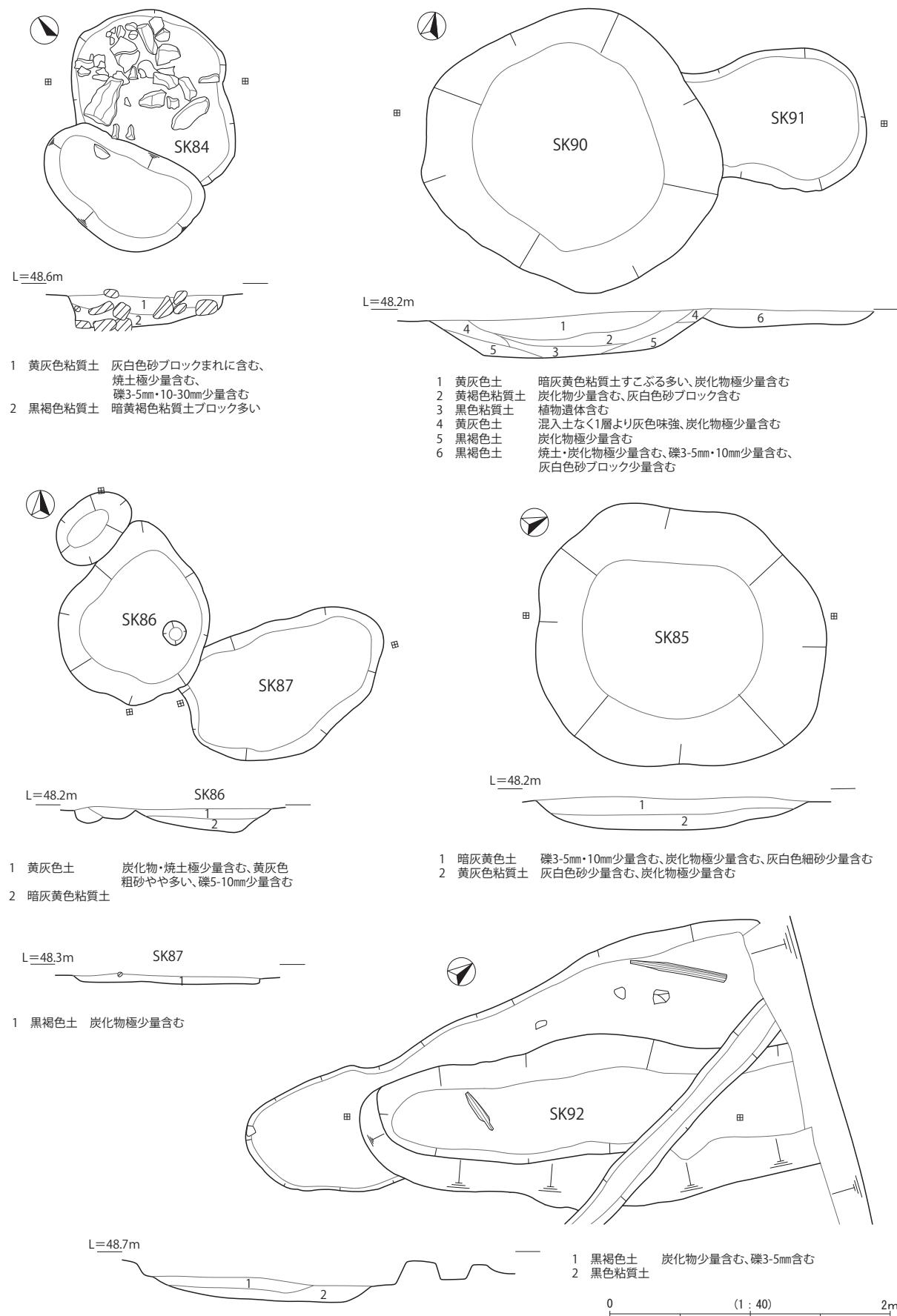


第 52 図 土坑 (SK) 遺構図 8

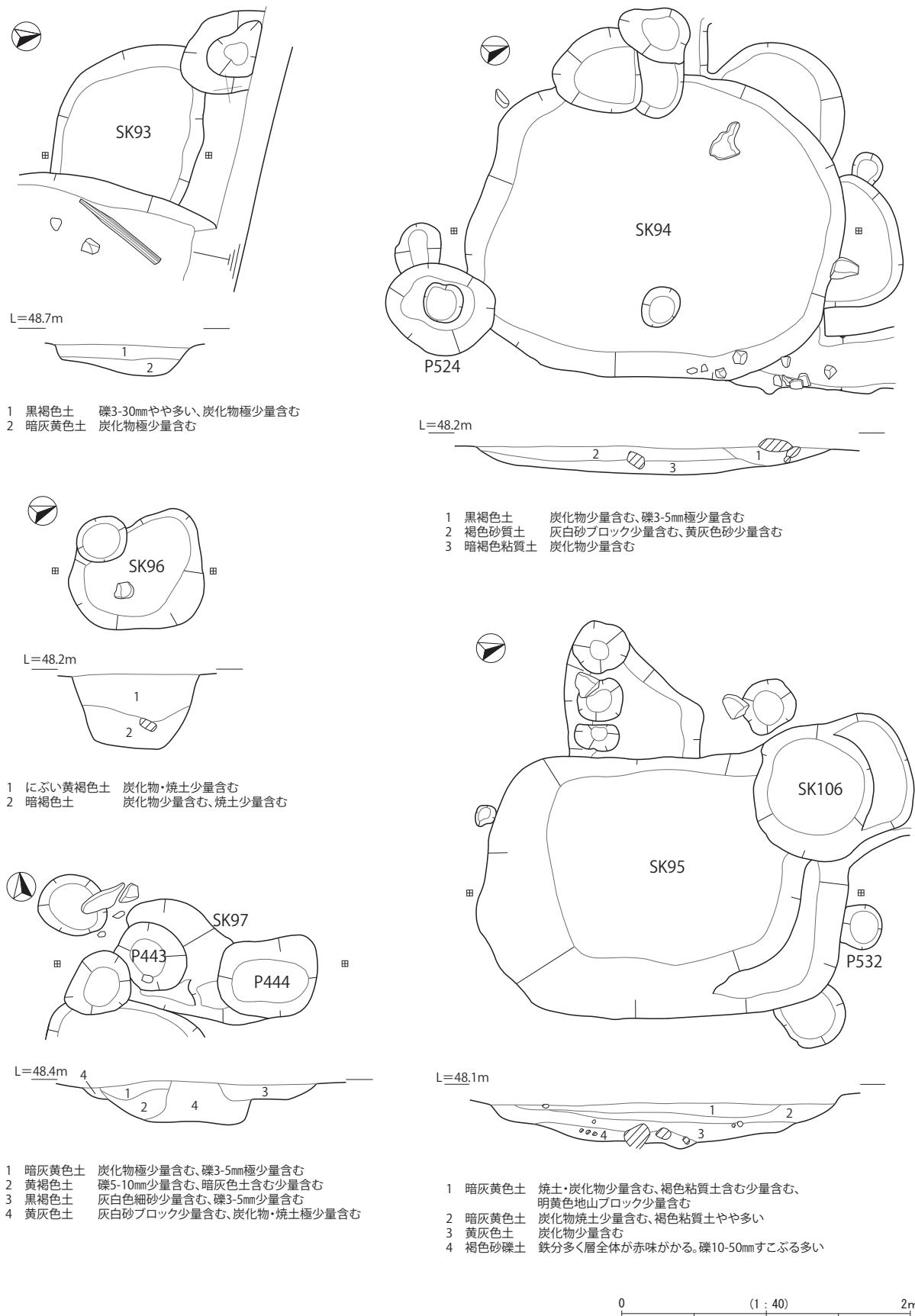


第53図 土坑（SK）遺構図9

第3節 土坑 (SK)

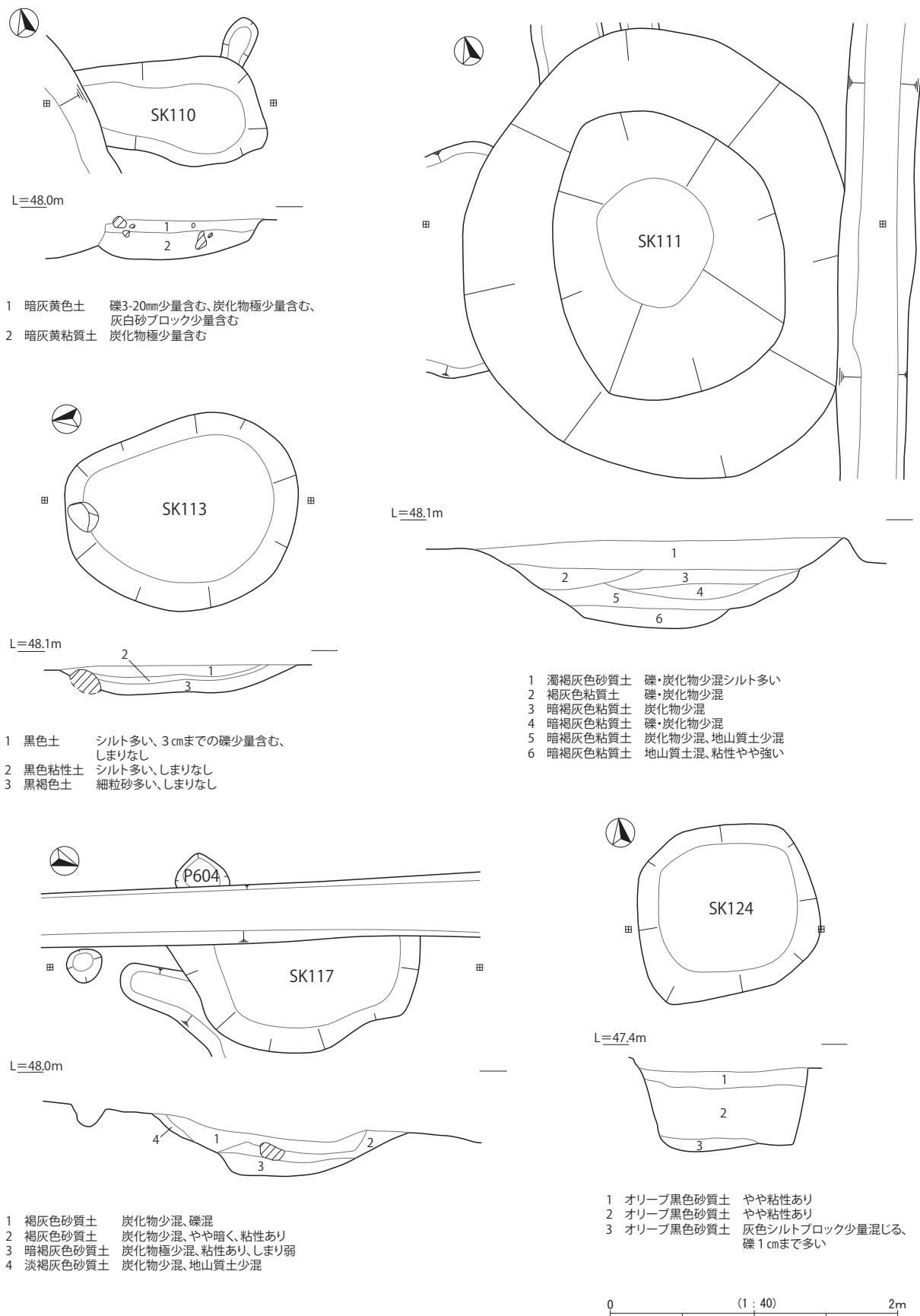


第54図 土坑 (SK) 遺構図 10

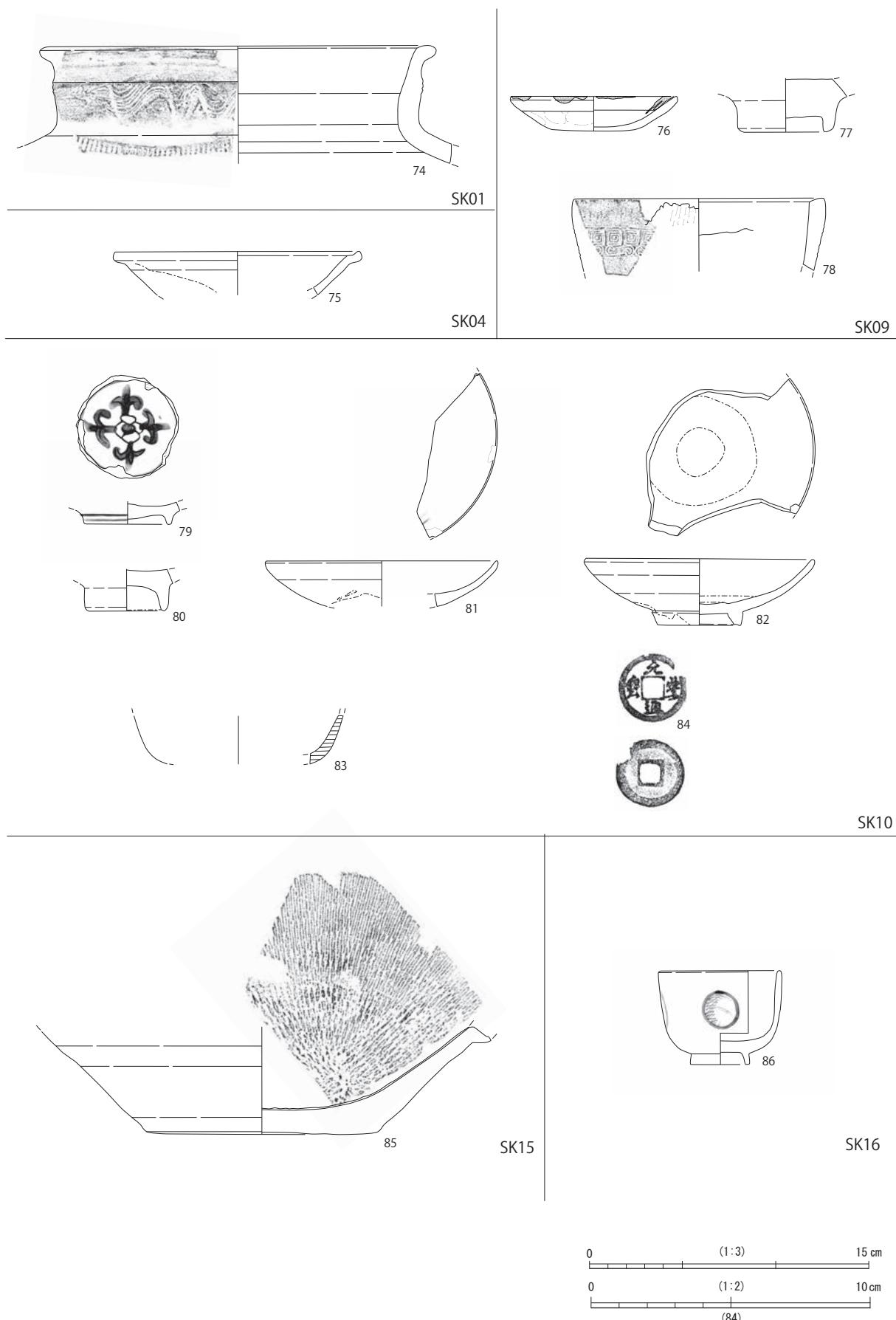


第55図 土坑（SK）遺構図 11

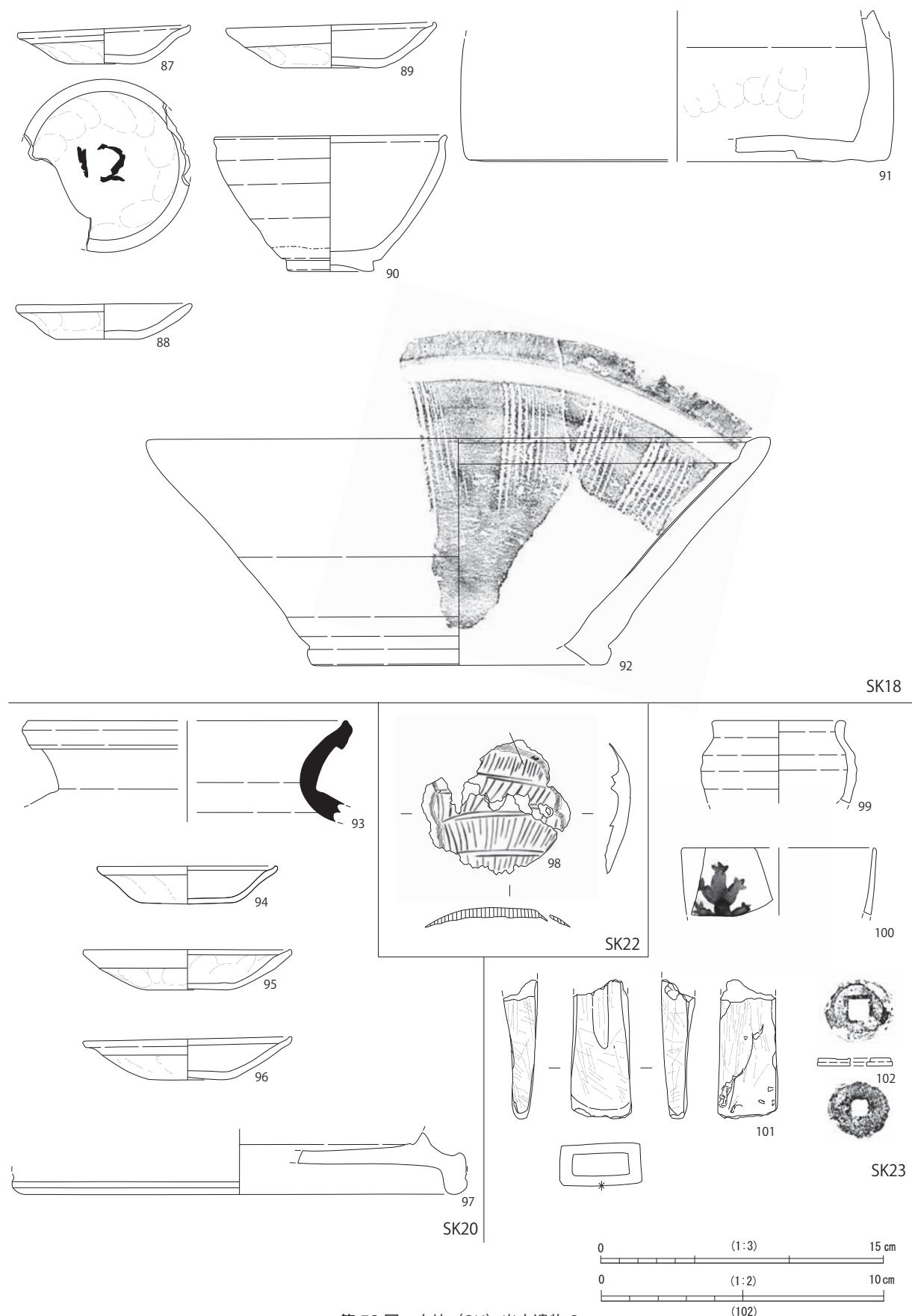
第3節 土坑 (SK)



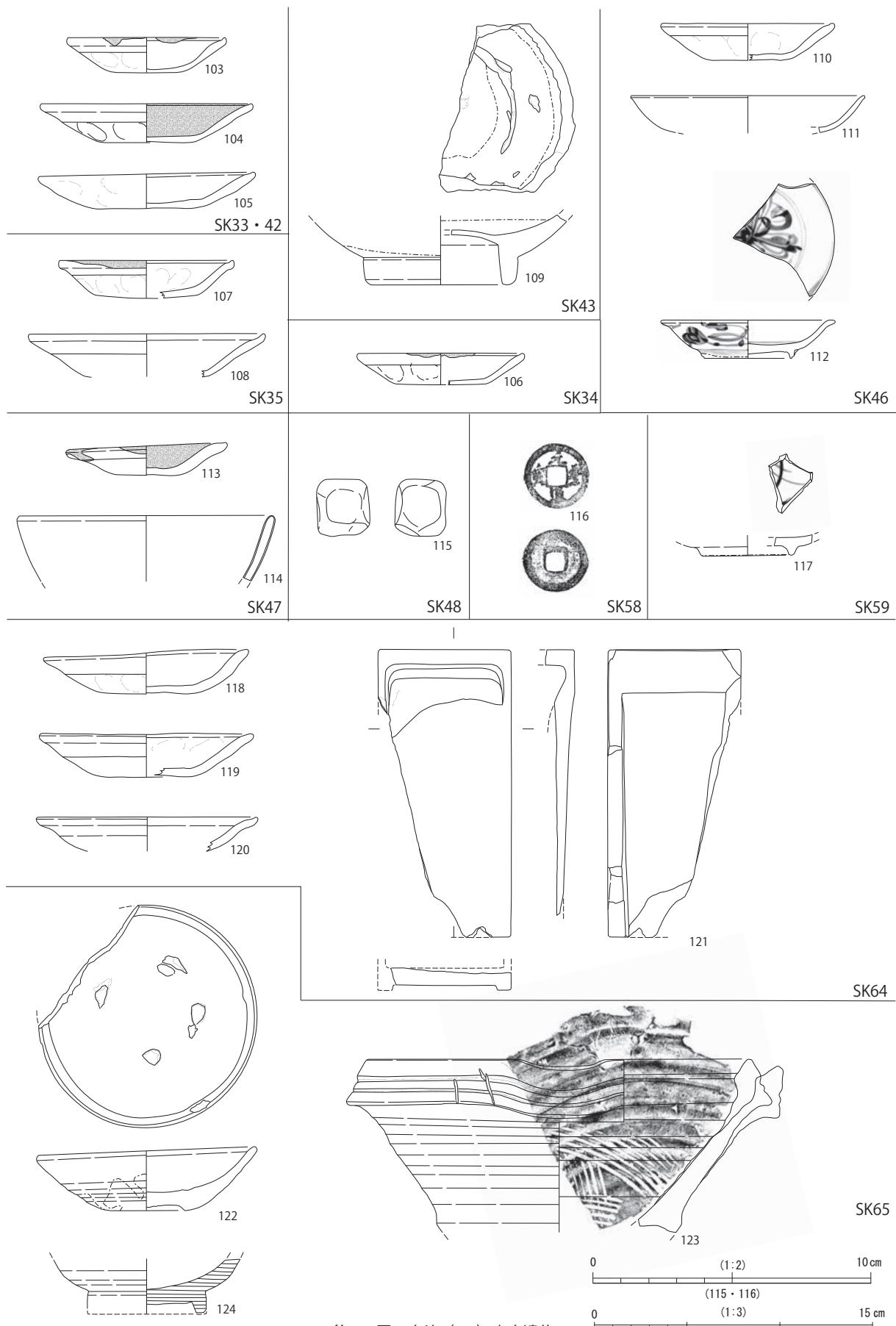
第56図 土坑 (SK) 遺構図 12



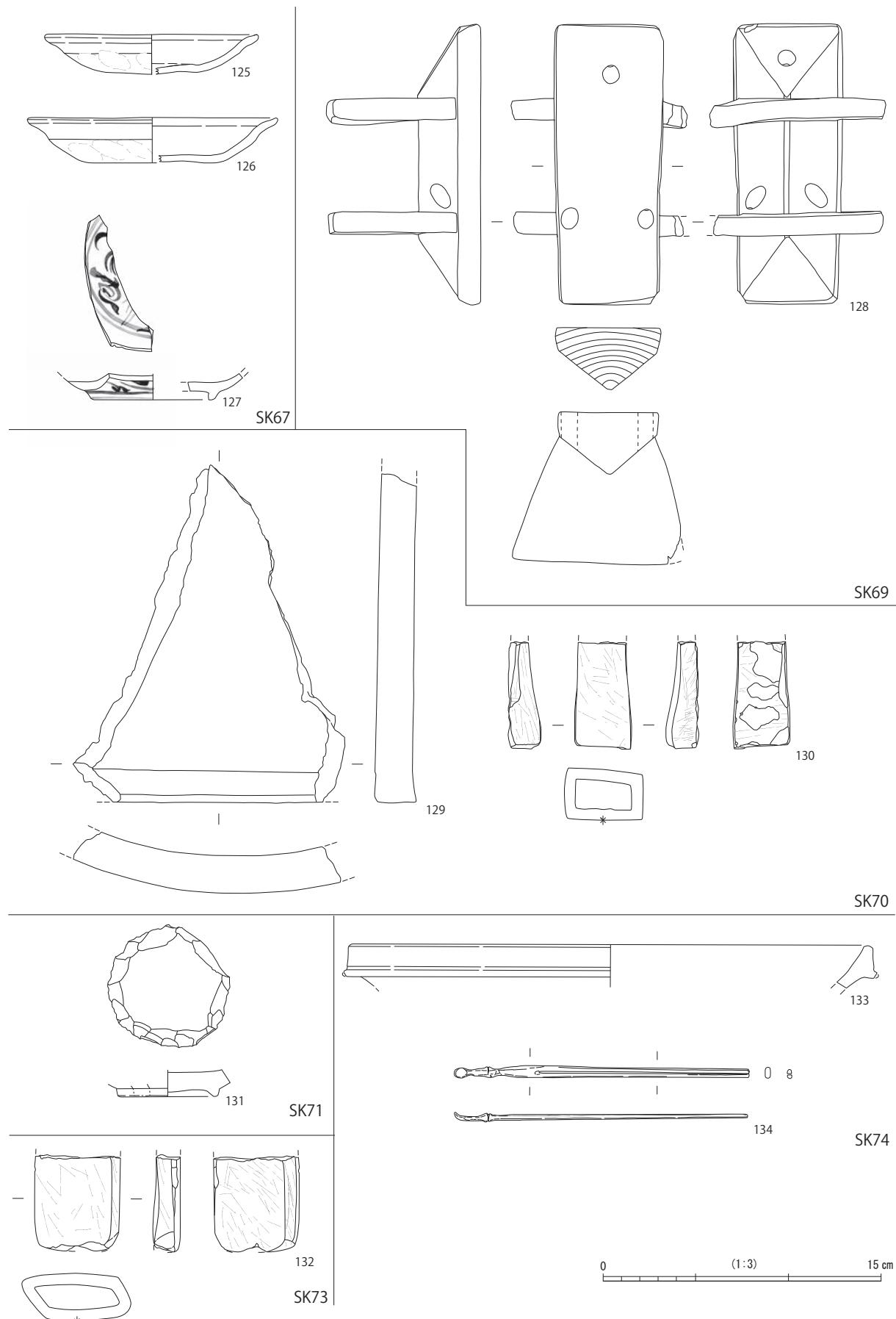
第57図 土坑（SK）出土遺物 1



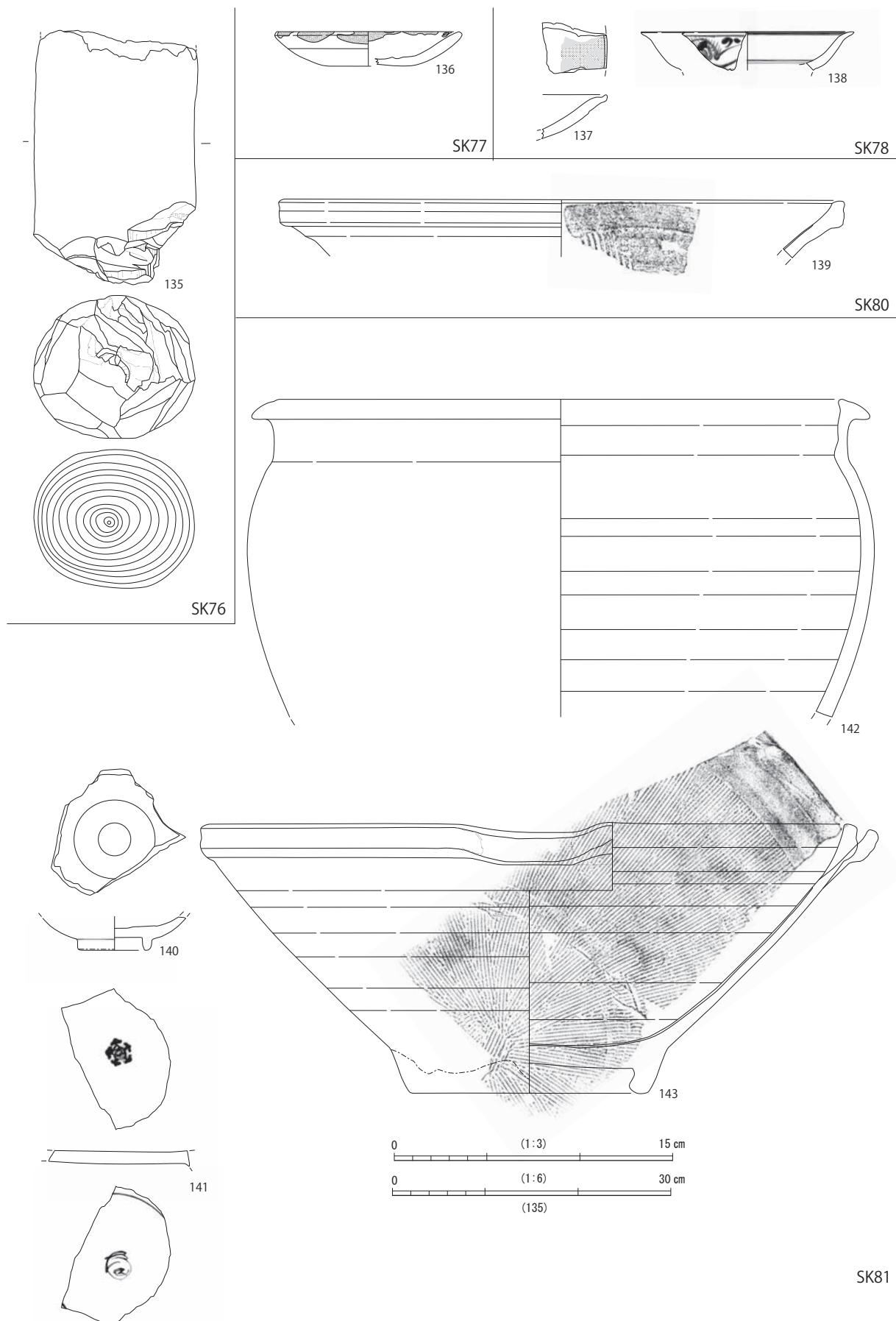
第 58 図 土坑 (SK) 出土遺物 2



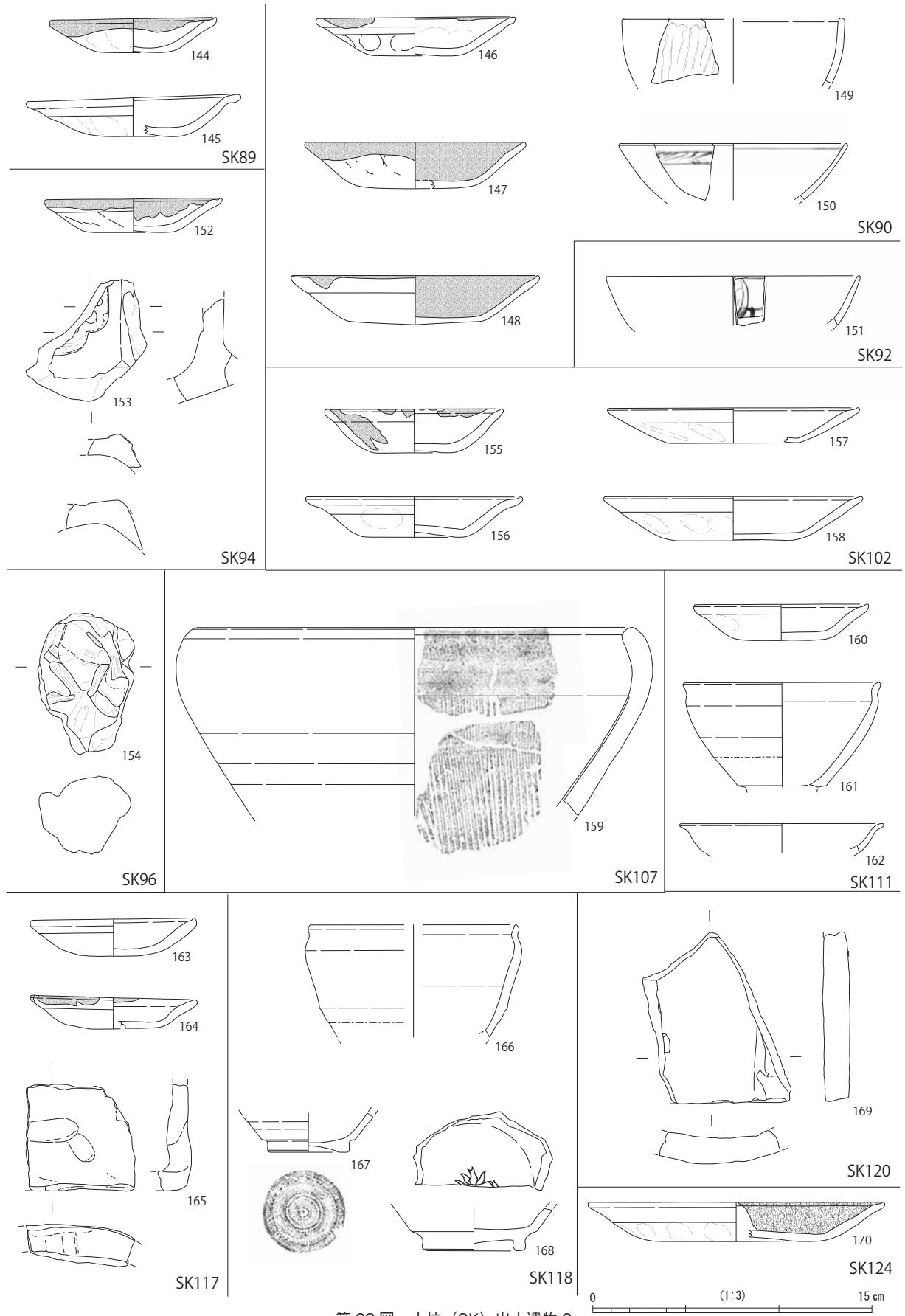
第59図 土坑（SK）出土遺物3



第60図 土坑(SK)出土遺物4



第61図 土坑（SK）出土遺物 5



第62図 土坑(SK)出土遺物6

第4節 溝（SD）・落ち込み

調査区内における溝状遺構の検出例は少なく、長短を含めた28基に溝（SD）番号が付されている（第63図）。ここでは実測遺物を伴う遺構を中心に報告を加えるが、それらの規模等は第12表に示し、溝全体からは破片数にして約870点の土器・陶磁器類が出土している。また、北1・3区境界付近に位置する不整形の落ち込み遺構も当節に加えた。



第63図 第4・5次 溝 (SD)・落ち込み配置図

第4節 溝 (SD)・落ち込み

遺構名	調査区	遺構図版	規模(cm)			遺物図版	土器・陶磁器類 破片数(点)	備考
			長さ	幅	深さ			
SD05	北1区	第18・19図	356	26~48	14~18	第72図171	越前壺:1 肥前陶器皿:1	
SD06	北1区	第18図	104~	34~50	10	—	肥前染付碗:1	SK30・P122(SB04)に切られる
SD09	北1区	第20、64図	630~	66~94	8~17	—	土師器皿:3 青磁花皿:1	調査区外(北側)に延びる
SD10	北1区	第15図	140~	180	27	第72図172・173	土師器皿:34 珠洲壺:1 珠洲擂鉢:1 越前壺:1 越前壺:1 越前擂鉢:1 肥前擂鉢:1 瀬戸・美濃染付皿:1	
SD11	北1区	第15図	80~	46	15	第72図174	越前中壺:1	北3区側に延びる
SD13	北2区	第13・14、64図	1306	58~114	44~64	第72図175~200	土師器皿:328 瀬戸・美濃天目碗:1 瀬戸・美濃灰釉腰折皿:1 珠洲壺:7 珠洲擂鉢:1	P258(SB08)に切られる
SD14	北2区	第14図	1,080~	35~62	33~38	—	土師器皿:23 瀬戸・美濃灰釉皿:1 珠洲壺:1 珠洲擂鉢:2 近代碗:3 近代皿:14 近代鉢:1	調査区外(西側)に延びる
SD15	北2区	第13・14、64図	292~	208	36~66	第73図201	土師器皿:2 瀬戸・美濃天目碗:1 青磁碗:1 越中瀬戸壺:1 肥前磁器碗:3 肥前陶器皿:1 瀬戸・美濃染付皿:1 陶器瓶:1	調査区外(西側)に延びる
SD17	南1区	第23・24図	620~	18~60	5~15	—	土師器皿:74 青花皿:1 珠洲壺:2 越前壺:1 越前擂鉢:1 越中瀬戸擂鉢:4 肥前陶器皿:5	
SD18 (SX06)	市道区 南1・2区	第16・21・26図 第65~70図	5,250~	184~352	36~114	第73・74図202~219	土師器皿:81 瀬戸・美濃天目碗:4 瀬戸・美濃灰釉皿:5 瀬戸・美濃鉄釉皿:2 越中瀬戸皿:1 越中瀬戸擂鉢:1 青磁碗:1 青磁大皿:1 白磁皿:3 青花碗:3 青花皿:1 瓦質深鉢:2 珠洲壺:12 珠洲擂鉢4 越前壺:6 越前擂鉢:21 土師質擂鉢:13 肥前染付碗:3 肥前片口:1 肥前擂鉢:8	調査区外(南北側)に延びる SE26を切る SE24・28に切られる SD24・26を切る SX06と同遺構(破片数は含まず)
SD20	南1区	第28図	176~	90	9	—	土師器皿:1 肥前陶器皿:1	
SD21	南1区	第17図	158~	34	18	第74図220	須恵器壺:1 越前擂鉢:4	
SD22	南1区	第21・22図	254~	56	15	第74図221	土師器皿:2 青磁皿:1 青花皿:1	SD18に切られるか
SD24	南2区	第26・27、71図	1,550~	112~178	17~68	—	土師器皿:1	SB17に切られる SD18に切られる
SD26	南2区	第26図	390~	30~60	31	—	土師器皿:1	SD18に切られる
SD27	北3区	第14・15図	800~	110~180	23~29	第75図222~227	土師器皿:28	
SD28	南2区	第21図	270~	120	42	第75図228	土師器皿:2	調査区外(西側)に延びる
落ち込み	北1区	第18図	600~	350	30~60	第75図229~245	土師器皿:62 瓦質擂鉢:4	SE03に切られる

第12表 溝(SD)・落ち込み規模等一覧表

SD05（第18・19図、第72図171）

北1区。長さ350cm台、幅30～40cm台、深さ10cm台の浅く直線状に完結する溝状遺構である。方位軸は南北方向に近いが、溝底の高低差はほとんどない。

171は内面灰釉上に白土で波状の刷毛目装飾を施した肥前陶器皿。外底無釉、見込蛇の目釉剥ぎとするIV期の製品である。

SD09（第20、64図）

北1区。溝の北側が調査区外に延び、最大幅が1mに満たない深さ10cm台の深い溝状遺構である。南北の高低差は10cm前後で、北側に低くなっている。溝の約3m東にはSE10が位置する。

遺物量は少ないが、土師器皿片3点、底部を面子状に打ち欠いた青磁稜花皿片1点が出土する。

SD10（第15図、第72図172・173）

北1区、北東調査区際の搅乱落ち込み内で検出された幅180cmの方形土坑状遺構である。

土師器皿E類(172)、B類(173)がみられる。硬質であるが、173は器壁が厚く体部の伸びは直線的で外反はみられない。近世以降の可能性があるか。また、土師器皿片の他、珠洲焼、越前焼等の中世遺物に混じり、肥前V期の鉄釉擂鉢片1点、瀬戸・美濃染付皿片1点が出土している。

SD11（第15図、第72図174）

北1・3区境に位置する、幅50cm弱、深さ10cm台の溝状遺構である。

174は口径19.5cm、口縁上面幅1.6cmの越前焼中壺である。口縁は短く立ち上がり、断面は方形状となる類例の少ない器形で、16世紀とした。

SD13（第13・14、64図、第72図175～200）

北2区中央部近くで南側にゆるやかな弧をもち完結する、長さ約13mの溝状遺構である。幅は両端部を除き約1m前後、深さは40～60cm台で断面をU字状とし、溝底からは珠洲焼壺(200)が出土している。また、遺構の切り合いでSB08の構成柱穴であるP258に切られる。何らかの施設等を画する区画溝ともみられるが、弧の内側にはSB06・07が切り合をもちながら位置している。

遺物量は豊富で、土師器皿175～198はE類(175～185)、C類(186～190)、B類(191～198)で構成される。白色系の185以外はすべて淡橙・橙色系の硬質土器で、器表にやや砂が浮く個体が多い。C類の外面ナデは明瞭で、B類の体部の立ち上がりは丸みをもち、見込のナデは全体に不明瞭である。①グループに属する一群と思われる。199は瀬戸・美濃鉄釉天目茶碗。器壁は薄く体部は丸みを帯び口縁を短く折り返す。高台周辺にかかる鋸釉は濃く、大窯2段階とした。200は珠洲焼壺。口縁部はくの字状に立ち上がり、端部を引き出し中位はゆるやかに隆起する。外面にはやや粗く角度の広い綾杉状叩打がはいる。IV期。なお、土師器皿片は合わせて328点が出土するが、実測遺物同様にほとんどが橙色系の硬質土器で占められる。ただし、外底面の中央を押し上げるへそ皿G類は確認できていない。また、古瀬戸後IV新期の年代観をもつ灰釉腰折皿片も1点出土している。

SD14（第14図）

北2区北部で、SE17から西に約10m以上延びる近代溝である。幅は40cm台の箇所が大半で、深さは30cm台、溝底の標高はSE17側が47.32m、調査区西際が46.91mと西側方向に向けて10mで約40cmの高低差がみられる。

実測遺物はないが、土師器皿片、珠洲焼片等に混じり、近代以降の陶磁器片（碗・皿・鉢）18点が出土する。

SD15（第13・14、64図、第73図201）

北2区、SD14南側の調査区際に位置する。西側は調査区外に延びる幅208cmの土坑状遺構で、北側

側面には30～40cm台の石が一列に並ぶ。

201は瀬戸・美濃磁器の型打皿で、見込中央に唐獅子牡丹が染付される。ガラス質の胎土をもつ腰折れ端反りの3寸皿で、19世紀以降近代の製品である。他にも幕末以降の肥前染付碗等が出土する。

SD17（第23・24図）

南1区、現長6.2mの東西溝で、西は搅乱坑に切られ先細りとなる東先端部はSB14内に延びる。深さは5～15cmと浅い。

土師器皿の細片多数と共に青花皿等の中世遺物もみられるが、肥前II期の陶器皿が共伴する。

SD18（第16・21・26、65～70図、第73・74図202～219）

南2区～市道区西際を直線的に抜ける現長52.5m、幅2～3m台の南北方向に軸をもつ大溝で、両端は調査区外に延びる。おおよそ擂鉢状となる土層断面は全域10箇所（セクションポイントa～t）で観察されているが（第65図）、南1区のe-f（第66図）、南2区のi-j（第67図）、q-r（第68図）、s-t（第69図）等の断面観察では、当初の掘削規模をやや縮小した形での大溝の再利用状況が確認できる。また、最南端の壁断面s-tにはSD18の東西両岸にしまりの強い版築状の盛土29-42層（東側）、あ-け層（西側）が観察されており、大溝に伴う土壘状の構築物が備えられていた可能性がある。溝の検出面からの深さは36～114cmと幅をもつが、溝底の標高は南2区の最南端で47.34m、市道区の最北端で46.63mと南から北に向かって約70cmの高低差をもつ。なお、このSD18の南側延長部分については、その後の第9次調査で南2区の南端からわずか6mの丘陵裾部でゆるやかに立ち上がり完結することが確認されており（第113・123図）、大規模な区画溝としての機能がうかがえる。

202はE類、203は器壁が厚く外面横ナデの不明瞭なB類の土師器皿である。204は瀬戸・美濃鉄釉天目茶碗。胎土は灰白色で鉄釉下の白色層は化粧土のようにもみえる。大窯1段階。205は瀬戸・美濃灰釉丸皿。断面を逆三角形とする付高台で体部はゆるやかに湾曲する。大窯2段階。206も同様の底部をもち、大窯1・2段階とした。207は越中瀬戸灰釉丸皿。付高台で見込と高台内を無釉とする。胎土は硬質灰白色で層状に剥離する部分がある。皿A1aとする大窯小森窯の製品か。見込中央には漆がやや厚く付着している。208は高台径14.4cmの青磁大皿底部片。畳付を含めて全面施釉であり、チャツを用いた龍泉窯の製品とみられる。209は広い高台をもつ白磁皿底部。端反りのC I群か。漆継ぎがみられる。210は青花皿。見込には花卉文、高台内は無文とし畠付は釉剥ぎされる。端反りタイプのB1群とした。211は1条の突帯を巡らす瓦質土器の体部片。内湾して立ち上がる深鉢か。212は珠洲焼甕。口縁部は大きく屈曲し端部は丸くおさめる。外面には粗い叩きが施される。IV期。213は越前焼甕口縁部片。口縁上面幅は3.3cmと大きく肥厚し外面の稜はなだらかで、稜の上部は沈線状となる。IV 7群。214は土師質の擂鉢。焼成はあまく特に内面は使用のためか器表が粗く凹凸がみられる。口縁部の肥厚はわずかで口縁下には弱い沈線が巡り、擂目は1束おきに施される。胎土に海綿骨針を含む越前焼を模倣した在地製品と思われる。215、216は越前焼擂鉢。215の口縁部は内傾して面をもつ。内面の沈線はやや下がり、間隔のあく擂目は沈線を大きく超える。IV c群。216は口縁上面に面をもたず沈線は下がり、間隔のあく擂目は沈線を超えない。古相を示すIV a群である。217は肥前の片口。片口部はみられないが口縁端部は外側に折り返して肥厚させ、外面肩部には1条のゆるやかな膨らみがみられる。釉は暗オリーブ色の濃い灰釉が厚めにかかり、内面には同心円状の叩きが施されるI期の製品である。218は肥前の擂鉢。口縁端部を内側に小さく鋭く肥厚させ端面をもつ。口縁部内外面に鉄釉をかけ以下は無釉。擂目は放射状に間隔をあけ、底部には回転糸切り痕がみられる。II期。219は幅10mm前後の不明鉄製品。両端はほぼ完結し、屈曲部以下は偏平とする。なお、近世以降の遺物となる217は溝の中層、218は上層からの出土である。他にも第12表に示したとおり中

世～近世にかけての雑多な遺物が多数みられるため、七尾城下町時代も含め、その廃絶後にも区画溝的な機能をもつ遺構として規模を縮小しながら再利用されたものと思われる。

SD21（第17図、第74図220）

南1区で東西方向に途切れるようにして続く溝の一部か。幅30cm台で深さも10cm台と浅い。

220は越前焼擂鉢。口縁上面は水平に近く、擂目の間隔の広いIVc群である。内面は使用のため平滑となる。SD21の東側に位置するSK107出土品と接合する。

SD22（第21・22図、第74図221）

南1・2区境界付近でSD18に向かう、現長250cm台、幅50cm台、深さ10cm台の溝状遺構である。SD18に切られるか。

221は内外面に貫入のはいる腰折れの青磁稜花皿。底部を欠くが、口縁部内面に4条の線彫り文様がみられる。

SD24（第26・27、71図）

南2区の山裾を沿うように掘られたやや湾曲気味の現長15m台、幅1m台の溝状遺構で、SD18付近では60cm台の深さがある。SB17の構成柱穴、SD18に切られるが、遺物量は少なく土師器皿片が1点みられるだけである。

SD27（第14・15図、第75図222～227）

北3区で検出された、ゆるやかに湾曲する現長約8m、幅1m台、深さ20cm台の溝状遺構である。北1・2区側への延びはみられないが、出土する土師器皿の様相や溝の形状は北2区のSD13に近い。ただし、最も近接する溝底のレベルが、SD27（47.9m台）とSD13（47.3m台）では60cm近くの差があり、検討を要する。

出土遺物は土師器皿だけで、実測遺物はE類（222～224）、C類（225）、B類（226・227）で構成される。E類はいずれも橙色系の硬質土器で口縁端部を明瞭につまみ上げる。225は白色系の硬質土器。外面のナデは強くしっかりと稜をもち、見込のナデは時計回りに1周したところで「2」字状にナデ上げる。226、227は体部の立ち上がりが丸みをもち、口縁端部の引き出しは強い。いずれも橙色系で227の見込ナデ及び凸圈線は弱く巡る。SD13と同様の①グループに属する土器群とみられる。

SD28（第21図、第75図228）

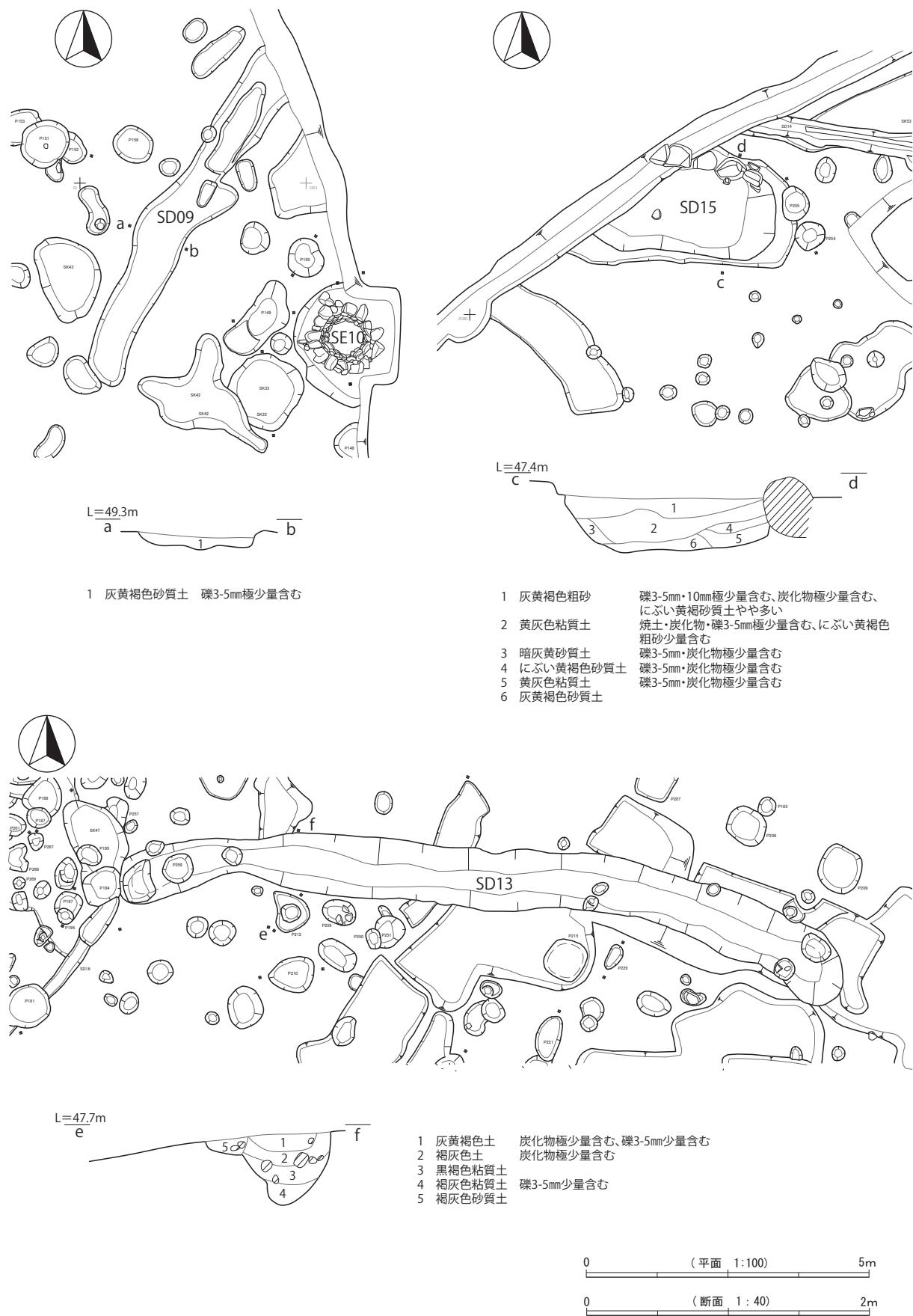
南1・2区境界付近に位置し、幅120cm、深さ40cm台の方形二段掘りで西側は調査区外に延びる。

228は土師器皿E類。橙色系の硬質土器で内外面に油煤痕が広がる。口縁端部の引き出しは強い。

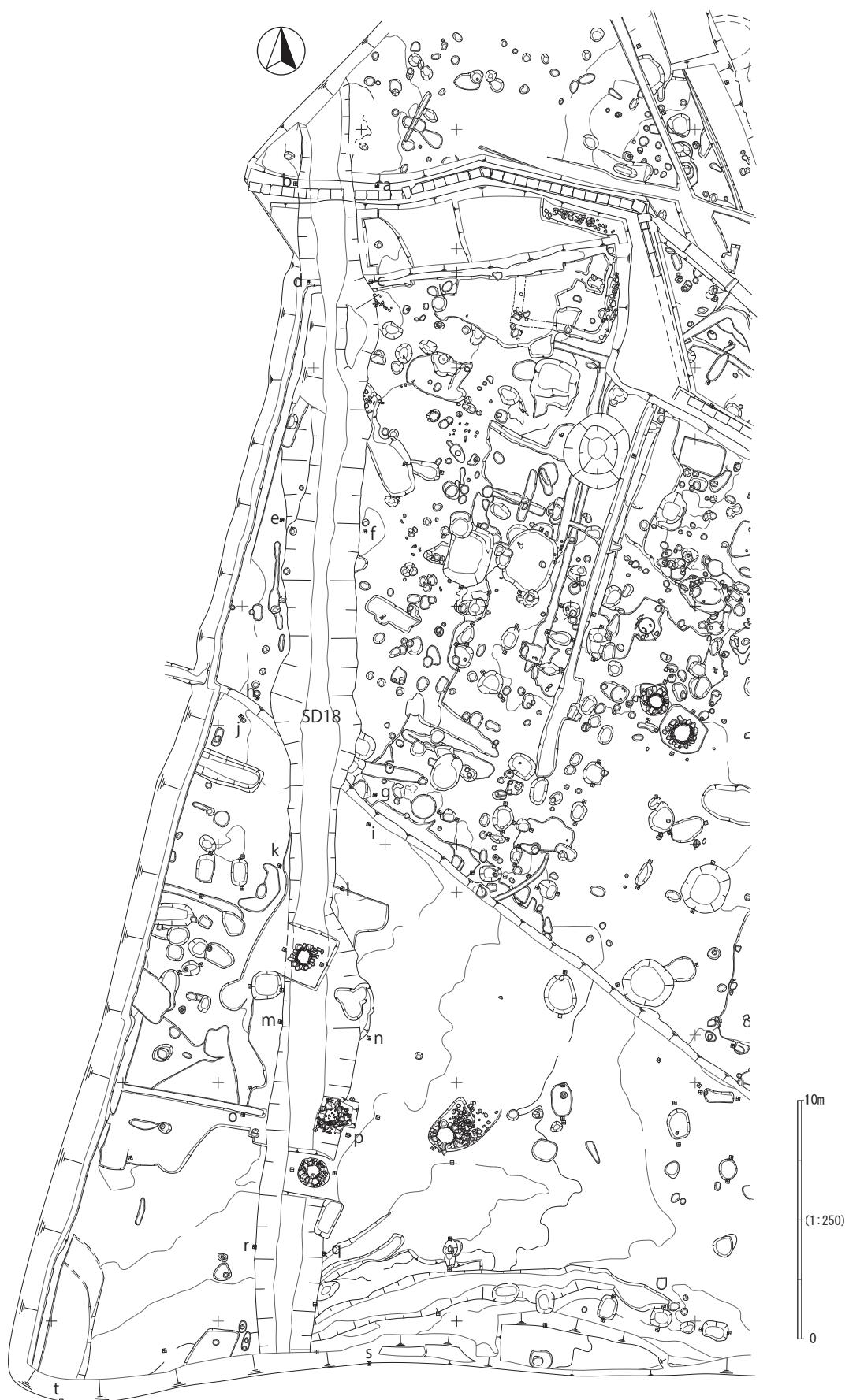
落ち込み（第18図、第75図229～245）

北1・3区の境界付近に位置し、北3区側への延びは定かでない。現長6m、幅3.5m、深さ30～60cm台の不整形落ち込みで性格等は不明であるが、土師器皿がある程度まとまって出土している。

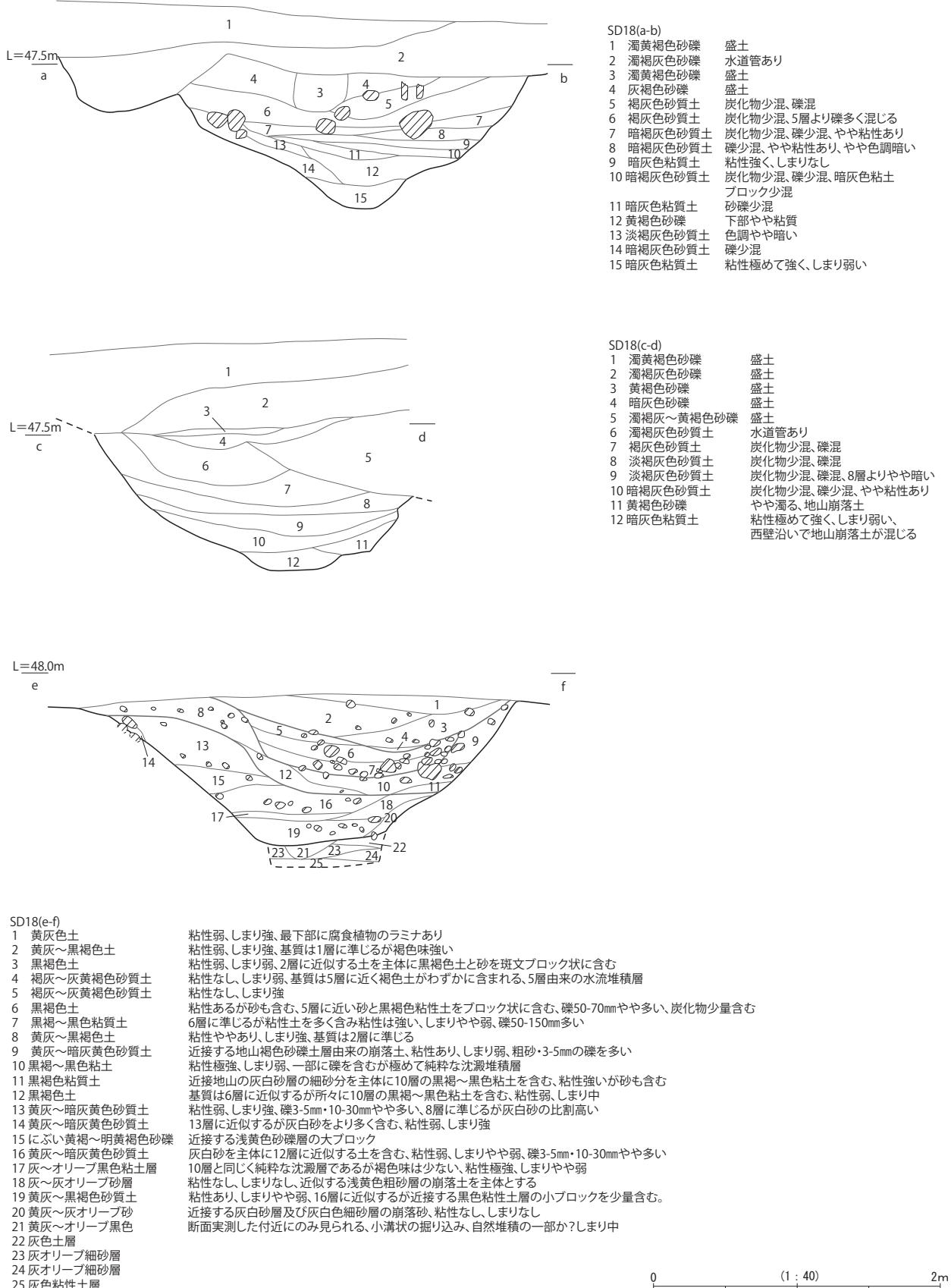
土師器皿はE類（229～237）、C類（238・239・241・242）、D類（240）、B類（243・244）で構成される。白色系が大半を占め、橙色系は235、243、244と少ないが、全体にまとまっている印象を受ける。240は他のC類と形状は近いが、胎土に砂気が多く外面ナデは不明瞭である。243、244の見込ナデは弱く凸圈線も痕跡を残す程度である。焼成は全般に硬質気味であるが砂粒の浮く個体も多く、①グループ後半～②グループを主体とするか。245は瓦質土器擂鉢。口縁端部は面をもたずに丸くおさめ、内面には越前焼を意識したような深めの凹線が巡る。擂目はやや間隔をあけて施されるが、一部斜め方向のものもみられる。胎土には海綿骨針がはいる、在地産か。



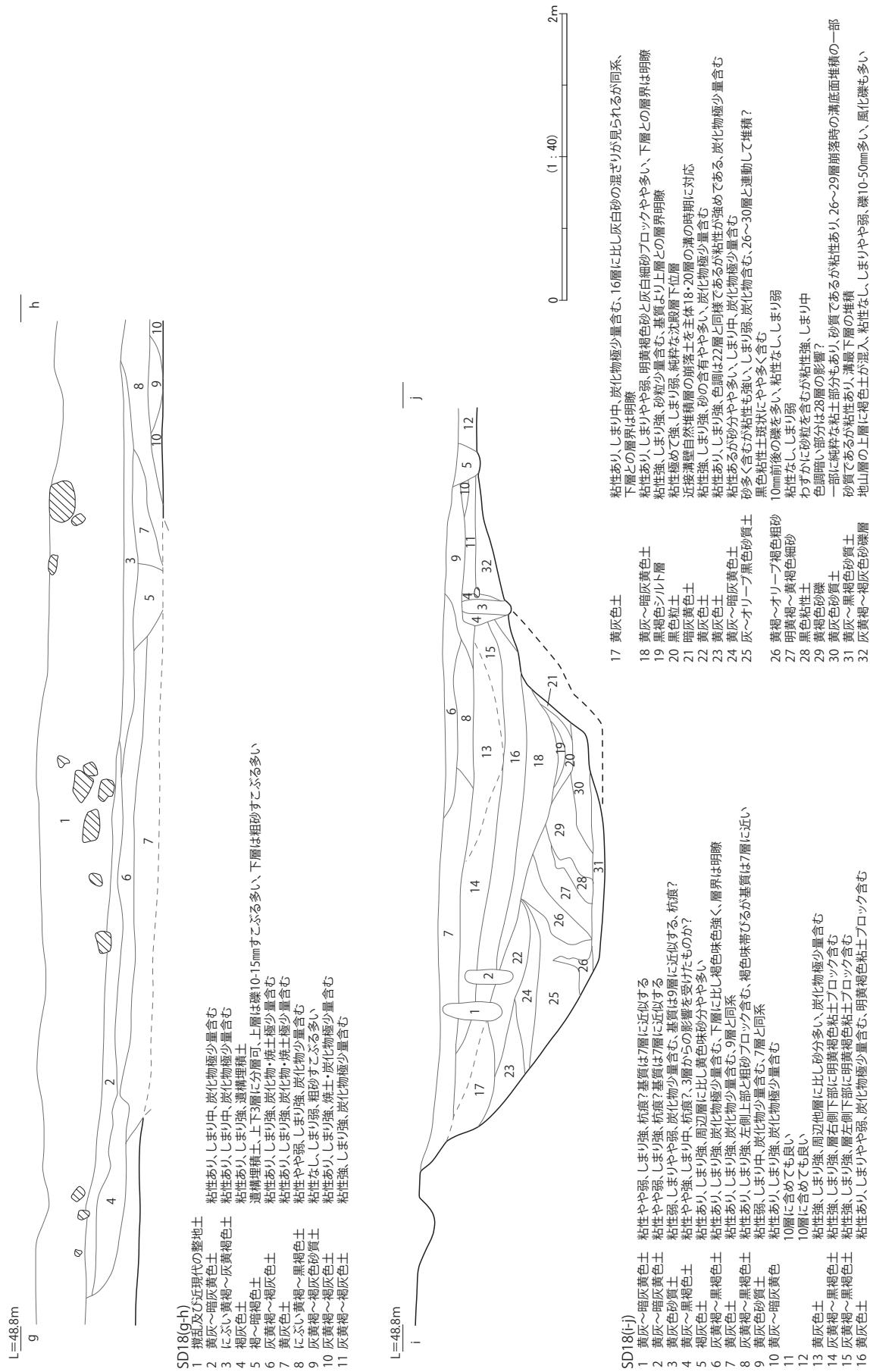
第64図 溝（SD）遺構図1



第65図 溝（SD）遺構図2

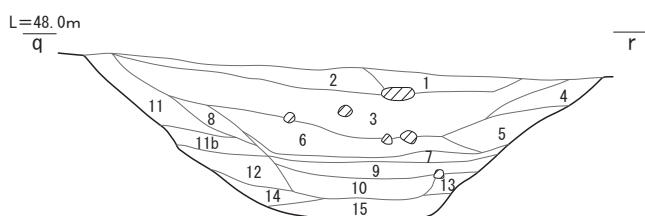
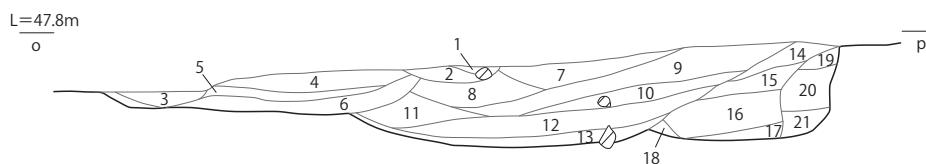
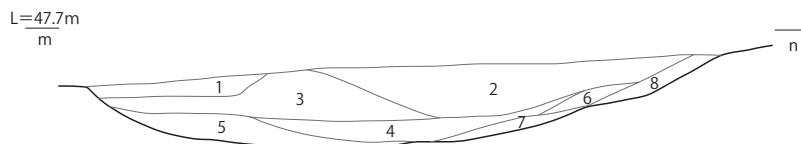
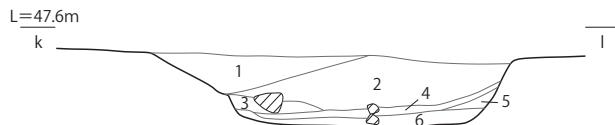


第66図 溝（SD）遺構図3



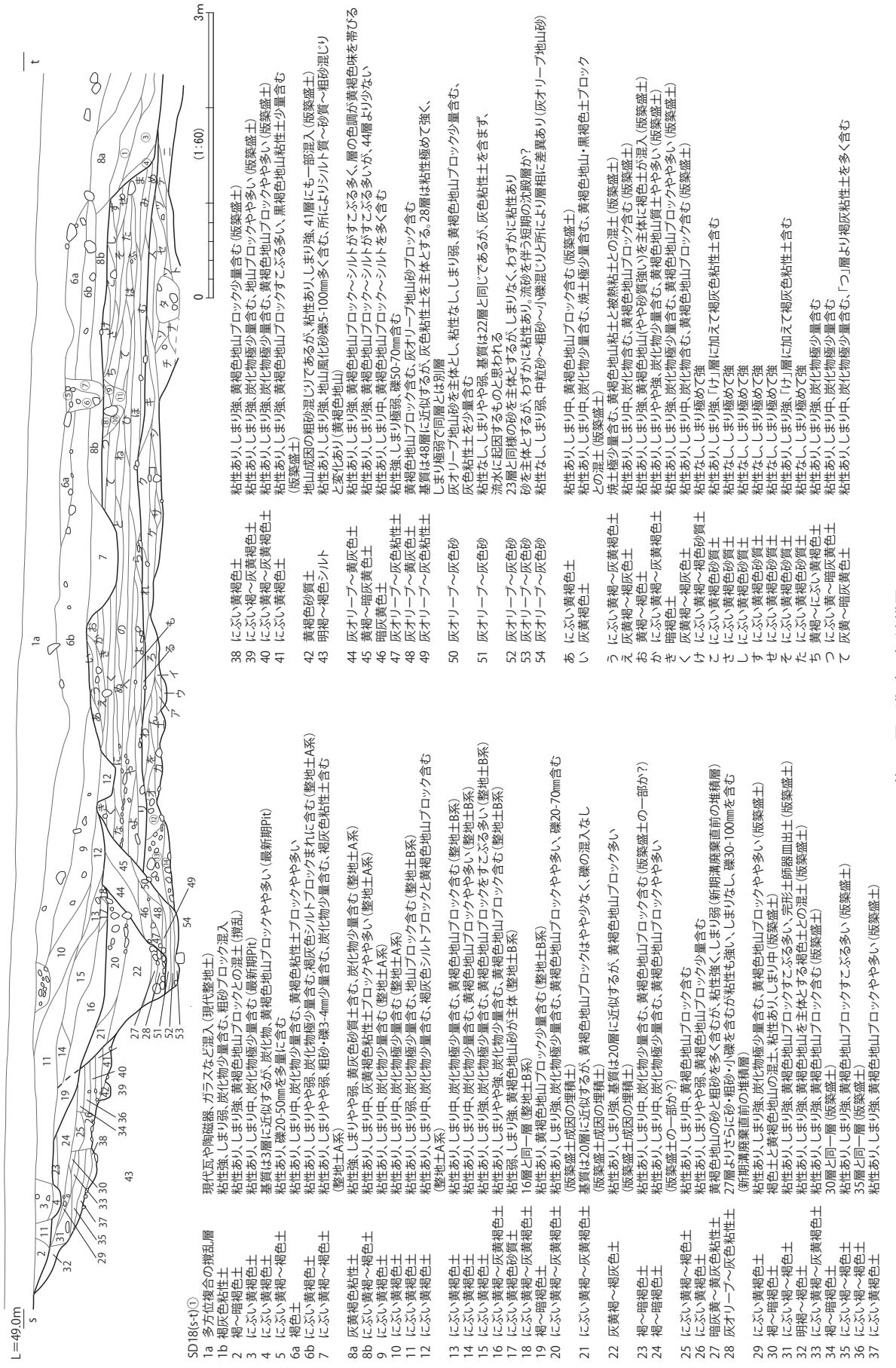
第67図 溝(SD) 遺構図4

第4節 溝 (SD)・落ち込み



0 (1 : 40) 2m

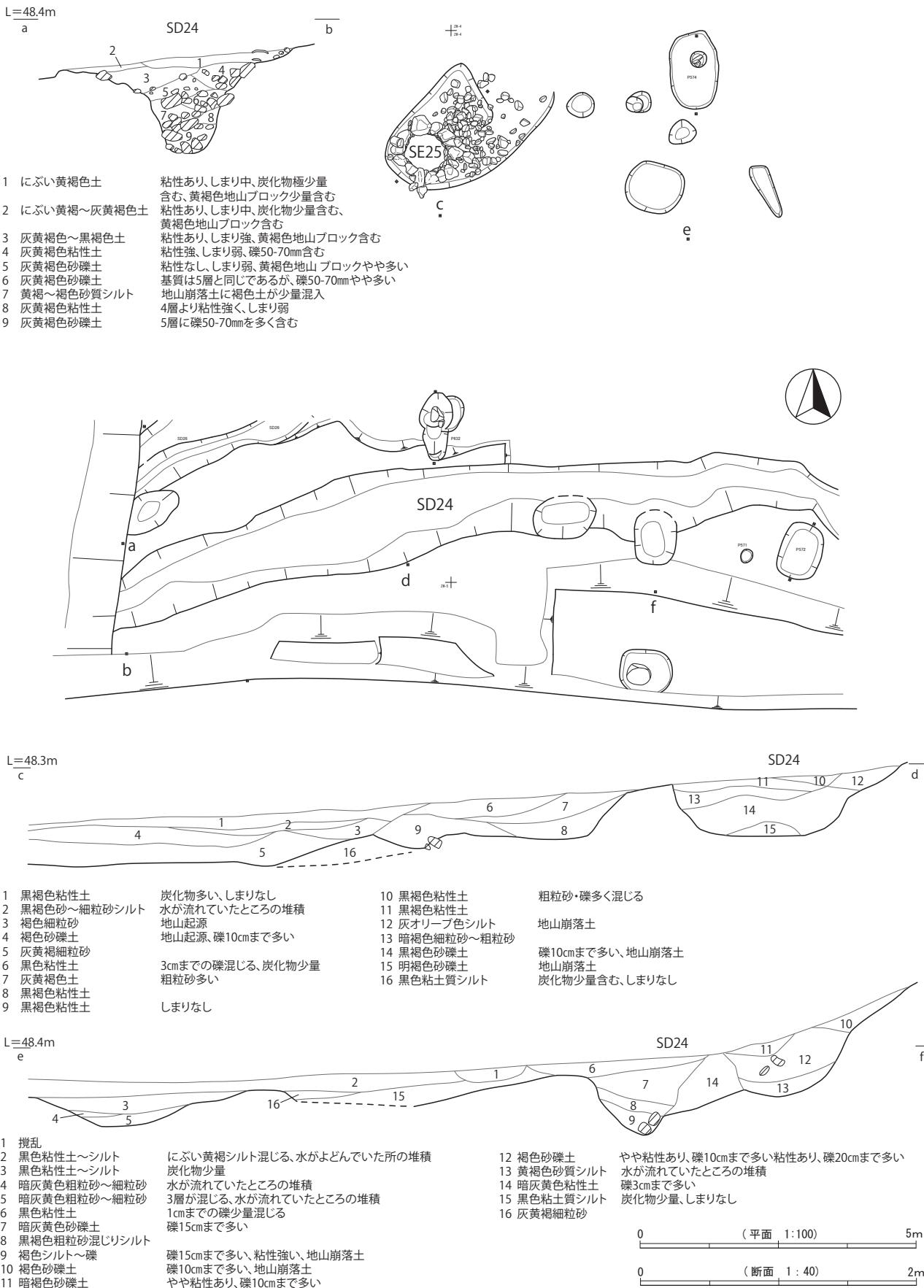
第68図 溝 (SD) 遺構図 5



第 69 図 溝 (SD) 遺構図 6

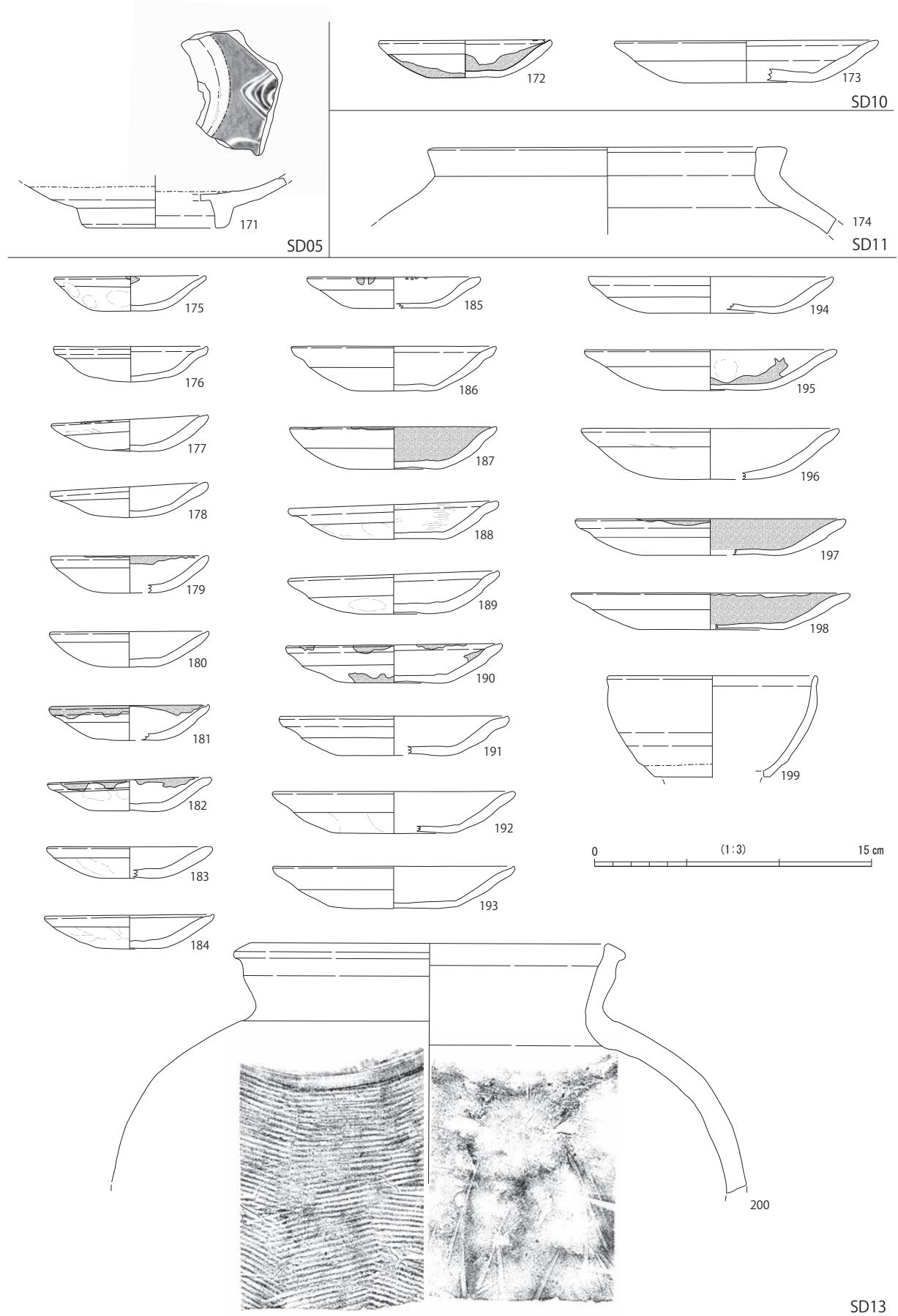
SD18(s-t)②	
と 灰黃褐色砂質土 な にぶい黄橙～灰黃褐色土 に 灰黃褐色土 ぬ にぶい黄橙～灰黃褐色土 ね 暗灰黃～黃灰色土 の 灰黃～暗黃色土 は 黃灰～黃灰色土 ひ 暗灰黃～黃灰色土 ふ 黃灰色粘性土 へ 暗灰黃～黃灰色砂質土 ほ 灰黃褐色土 ま 灰黃褐色土 み 灰黃褐色土 む 灰黃～褐灰色土 め 灰黃褐～褐灰色土 も 灰黃褐～褐灰色土 や 灰黃褐～黑褐色土 ゆ 褐灰色砂質土 よ 灰黃褐～黑褐色土 ら 灰黃褐～褐灰色砂礫土 り 黑褐色土 る 褐灰～黑褐色土 れ 褐灰色砂質土 ろ 灰黃褐～褐灰色砂質土 わ 灰黃～黃灰色砂 を 灰黃褐～褐灰色砂 ん 灰黃褐～褐灰色砂	粘性あるが、「け」～「た」層に近似する砂を含む、しまり強 粘性あり、しまり強 粘性あり、しまり強、褐灰色粘性土を主体に灰白砂と暗褐色土が混じる、炭化物極少量含む 粘性あり、しまり中、「に」層に比し暗褐色土の混入は少ない 粘性あり、しまり中、褐灰色粘性土を主体に灰白砂を含む 基質は「ぬ」・「ね」層に近似する 粘性あり、しまり中、灰色味やや強く、上層の系統より下層の「ほ」層群にやや近い 粘性あり、しまり中 粘性強、しまり中、他層と異なり極めて均質な基質から成る、炭化物極少量含む 粘性あり、しまり強、炭化物極少量含む、黄褐色地山ブロック含む、上層と異なり砂を多く含む 粘性あり、しまり強、黄褐色地山ブロック少量含む、「へ」層より褐色味強く、砂の比率は少ない 粘性やや強、しまり強、炭化物極少量含む、黄褐色地山ブロック少量含む 粘性やや強、しまり強、基質は「ま」層に近似する 粘性やや強、しまり強、炭化物極少量含む、黄褐色地山ブロック少量含む 基質は「む」層と同じ、やや粘性強 粘性あり、しまり強、「へ」層と「よ」層の混土 粘性あり、しまり強、炭化物極少量含む、黄褐色地山風化岩少量含む、褐灰色粘性土少量含む わずかに粘性あり、しまり弱、黄褐色地山風化岩少量含む、褐灰色粘性土少量含む 粘性あり、しまり強、炭化物少量含む、褐灰色粘性土ブロックやや多い、黄褐色地山ブロック含む 粘性なし、しまり弱、中粒砂～粗砂・小礫を主体とする 粘性あり、しまり強、炭化物極少量含む、黄褐色地山ブロックやや多い、基質は「や」層に近似する 粘性あり、しまりやや弱、褐灰色粘性土と下位の「ろ」層の砂が混じる 粘性わずかにあり、しまり弱、「ろ」層の砂に褐灰色粘性土が混じる 細粒砂を主体に褐灰色粘性土を含むため、粘性もあり、しまりやや弱、炭化物極少量含む 砂は細粒を主体とする。粘性なし、しまりやや弱、炭化物極少量含む 粘性なし、しまりやや弱、炭化物極少量含む 粘性なし、しまりやや弱、黄褐色地山ブロック少量含む
ア 明褐色～褐色砂 イ 褐色砂礫 ウ 褐色砂礫 エ 灰黃褐～褐灰色砂 オ 灰黃褐～褐灰色砂 カ 灰黃褐～褐灰色砂礫 キ 灰黃褐～褐灰色粘性土 ク 黑褐色土 ケ 褐灰～黑褐色土 コ 灰黃褐～褐灰色土 サ 黑褐色土 シ 灰黃褐～褐灰色土 ス 褐灰色粘性土 セ 黑褐～黑色粘性土 ソ 灰黃褐～褐灰色砂質土 タ 灰黃褐～褐灰色砂 チ 灰黃褐～褐灰色砂 ツ 灰黃褐～褐灰色粘性土 ト 褐灰色粘性土 ナ 褐灰色粘性土 ニ 暗灰黃～褐灰色砂質土 ヌ 褐灰色粘性土	粘性なし、しまり弱、「ん」層に近似する砂層であるが、全体が酸化により明褐色味を帯びる 粘性なし、しまりなし、中・粗粒砂と小礫～3mmから成り、酸化著しい 粘性なし、しまりなし、中・粗粒砂と小礫～20mmから成り、酸化著しい わずかに粘性あり、しまり弱、細粒砂を主体とし、沈殿層的様相強い 「工」層の砂に黄褐色地山ブロック・地山風化礫5-50mmすこぶる多い、粘性なし わずかに粘性あり、「オ」層に加えて礫が混じる 粘性強、しまり中、シルト～細粒砂を含み、粒状感あり、炭化物極めてまれに含む、灰白砂ブロック少量含む 粘性あり、しまり強、炭化物極少量含む、焼土極少量含む、下層の「ヌ」層と上層の「ほ」層の混土の様相 粘性あり、しまり強、炭化物極少量含む、「ワ」層に準じる 粘性あり、しまり中、黄褐色地山ブロック含む、細粒砂～中粒砂を所々に含む 粘性あり、しまり強、上層に比し灰黃褐色土の混入不少 粘性強、しまり強、シルト～細粒砂すこぶる多い、黄褐色地山ブロック含む 粘性強、しまり強、炭化物少量含む、黄褐色地山ブロック少量含む 粘性なし、しまり弱、中・粗粒砂を主体とする、礫3-5mm含む、上層の黒褐色粘性土からの色調への影響あり 中粒～粗粒砂を主体とし基質には粘性なし、黒褐色粘性土及び黄褐色地山ブロック・風化岩を多く含む 基質は「タ」層と同じであるが、黄褐色地山ブロック5-50mmを多く含み、黒褐色粘性土ブロックも多い 粘性強、しまり強、礫3-5mmやや多い、均質な層相灰黃褐～褐灰色粘性土 基質は「ツ」層と同じであるが、地山風化礫3-5mmをより多く含む 粘性強、しまり中、粘性土であるが中粒～粗粒砂すこぶる多い 粘性あり、しまり中、地山風化礫3-5mm及び中粒～粗粒砂を多く含む 粘性あり、しまり弱、中粒～粗粒砂と灰黃褐色粘性土との混土層 粘性強、しまり強、まれに地山風化礫3-5mmを含む（黄褐色地山の上位層）
① 灰黃～黃灰色砂質土 ② 灰黃褐～褐灰色砂質土 ③ 灰黃褐色砂質土 ④ 黃灰色土 ⑤ 灰黃褐色土 ⑥ にぶい黄褐～灰黃褐色土 ⑦ にぶい黄褐～灰黃褐色土 ⑧ にぶい黄褐～褐色土 ⑨ にぶい黄～暗黃色砂質土 ⑩ にぶい黄～黃褐色砂質土 ⑪ 灰黃～暗黃色砂質土 ⑫ 灰黃褐～褐灰色土 ⑬ 灰黃褐～褐灰色砂質土 ⑭ 灰オリーブ～黃灰色粗砂	「け」～「た」層の崩落したものと思われ、黃灰色砂とにぶい黄褐色土が混ざる、粘性あり、しまり強（西側落ち込み埋積土） 基質は①層に近似するが、より砂を多く含む、しまり強（西側落ち込み埋積土） 基質は②層に近似するが、褐色味強い（西側落ち込み埋積土） ①～③層に近いが、黃灰色粘性土を多く含む、粘性あり、しまりやや弱（西側落ち込み埋積土） 粘性あり、しまりなし、1a層に近似するが、しまりはまったくなし（新規Pit） 粘性あり、しまり弱、礫10-100mm含む（新規Pit） 粘性あり、しまり弱、6a・6b・8b層に近似する土に黃灰色粘性土が混入（新規Pit） 粘性あり、しまり中、灰黃色砂質土との混土（中期Pit） 粘性あり、しまり弱（中期Pit） 粘性あり、しまり中、風化地山の黃褐色シルト～砂およびブロック・礫を主体とする（中期Pit） 粘性あり、しまり弱、「キ」～「シ」層に見られる砂と粘性土との混土（中期Pit） 粘性あり、しまり弱、暗褐色土ブロック5-10mm含む、地山風化礫5-30mmやや多い、地山ブロック含む（SD24の続き？） 粘性なし、しまり極弱、中粒～粗粒砂を主体に地山風化礫10-70mmを多量に含む、黄褐色地山ブロックやや多い（SD24の続き？） 中粒～粗粒砂を主体とし、礫・地山風化礫・黄褐色地山ブロック土含む、粘性なし、しまりなし（SD24の続き？）

第70図 溝（SD）遺構図7（SD・s-t土色統一）

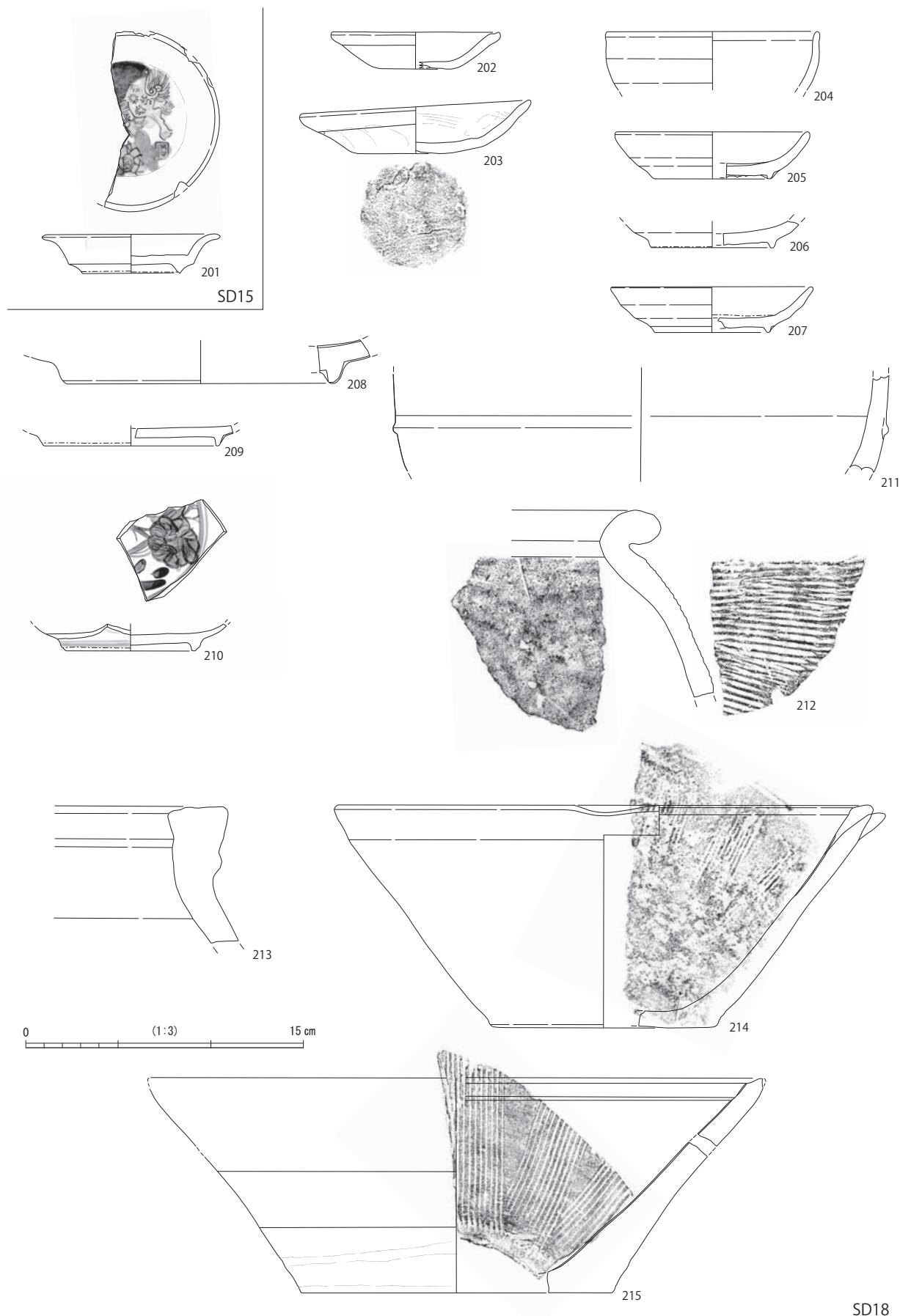


第71図 溝（SD）遺構図8

第4節 溝（SD）・落ち込み

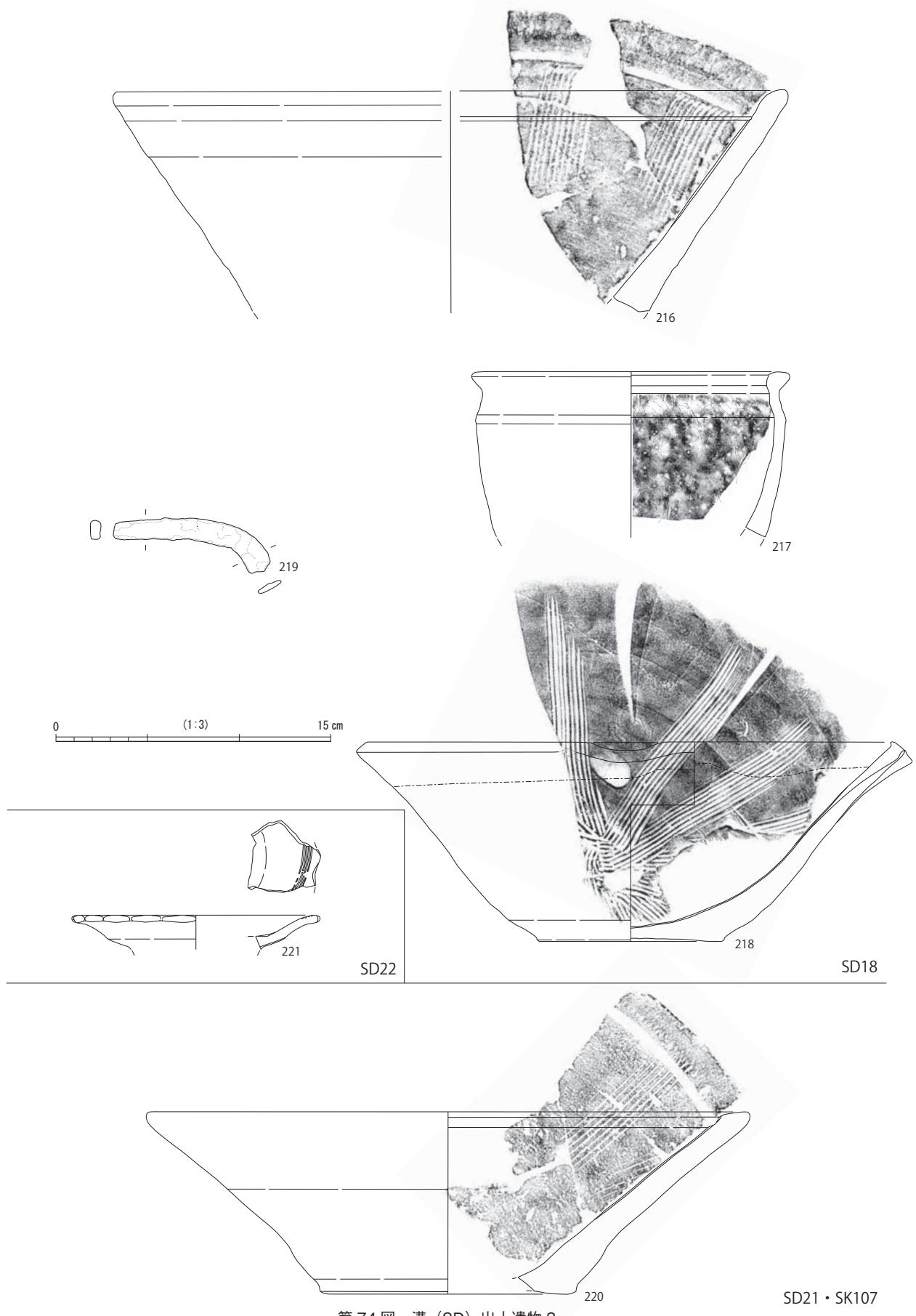


第72図 溝（SD）出土遺物 1

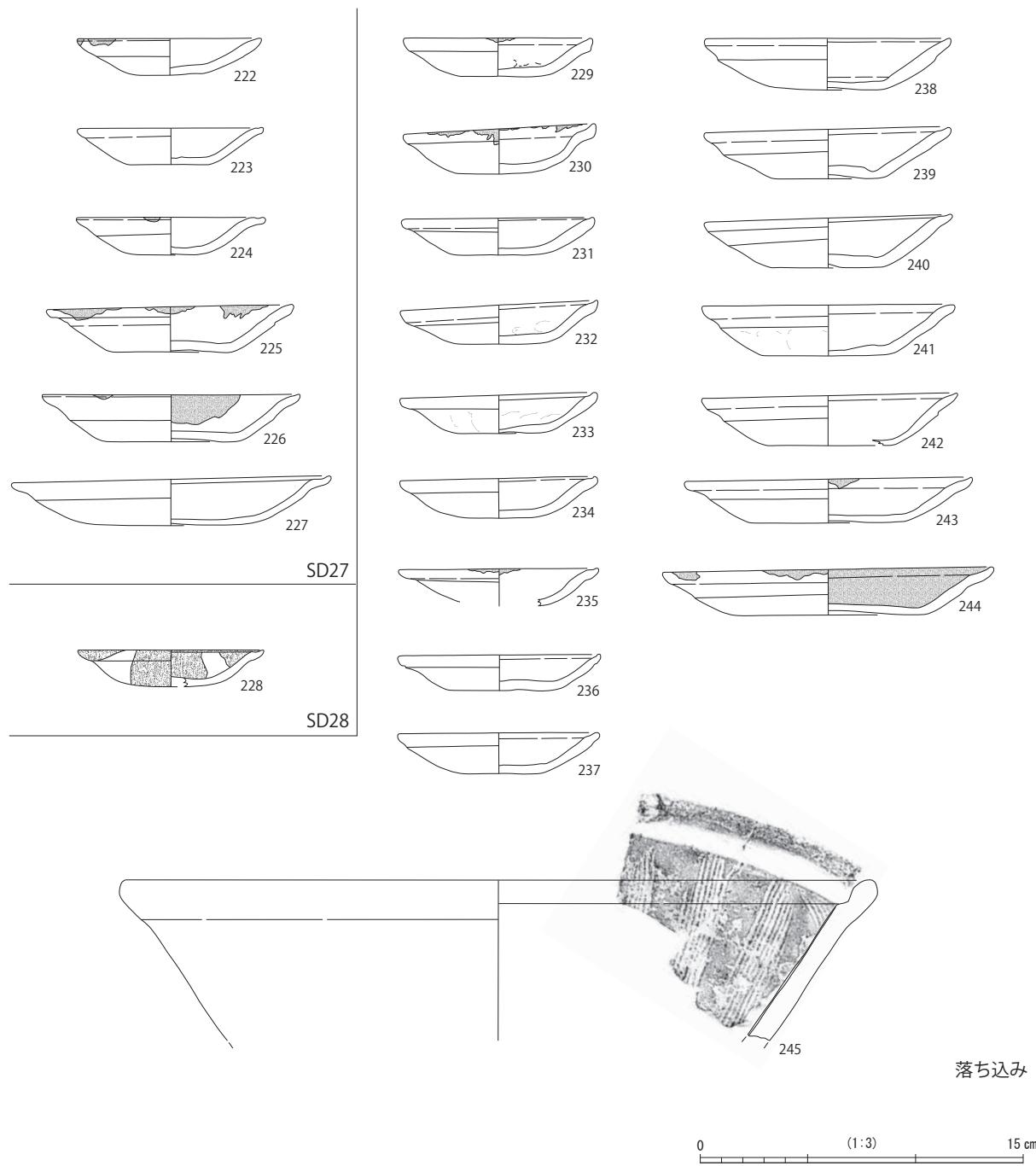


第73図 溝（SD）出土遺物2

第4節 溝 (SD)・落ち込み



第74図 溝 (SD) 出土遺物 3



第75図 溝（SD）・落ち込み出土遺物 4

第5節 掘立柱建物 (SB)・ピット (Pit)

(1) 掘立柱建物 (SB)

掘立柱建物 (SB) 25棟を復元した。主に北1区で4棟 (SB01～04)、北2区で4棟 (SB05～08)、南1区で13棟 (SB09～16、SB18～22)、南2区で1棟 (SB17)、市道区で3棟 (SB23～25) を確認している（第76図）。いずれも側柱構造をもつ建物で、各項目の規模等については第13表にまとめた。また、各建物柱穴からの出土遺物は器種・数量等が押さえられているが、その多くは時期の特定が難しい土師器皿片である。



第76図 第4・5次 掘立柱建物 (SB) 配置図

遺構名	調査区	遺構図版	建物構造	柱間配置 (梁×桁)	梁間柱間寸法		梁行長 (m)	桁行柱間寸法		桁行長 (m)	床面積 (m ²)	主軸方位 (棟方向)	柱穴規模 (cm)	遺物図版	備考
					(m)	(m)		(m)	(m)						
SB01	北1区	第20・25、77図	側柱	2×1～間	2.4・4.9 (西梁)	7.3 (西梁)	3.7・a (北桁) 3.4・a (南桁)	3.7～(北桁) 3.4～(南桁)	51.1～	N-67°W (東西)	70～90	第96図246	調査区外(東側)に延びる柱根無し SB02と重複		
SB02	北1区 市道区	第25、78図	側柱	1×3間	2.7 (北梁) (2.7) (南梁)	2.7 (北梁) (2.7) (南梁)	1.8・2.6・2.5 (西桁) 1.8・2.7・(2.4) (東桁)	6.9 (西桁) 6.9 (東桁)	18.6	N-22°E (南北)	50～140	—	柱根有り (P72・93) 肥前白磁皿片 (P72) SB01と重複		
SB03	北1区	第20・25、77図	側柱	2×1～間	2.5・3.6 (西梁)	6.1 (西梁)	3.0・a (北桁) 3.0・a (南桁)	3.0～(北桁) 3.0～(南桁)	30.5～	N-64°W (東西)	40～130	第57図75	調査区外(東側)に延びる柱根有り (P64)		
SB04	北1区	第18、78図	側柱	2×3間	1.7・2.1 (西梁) (3.9) (東梁)	3.8 (西梁) (3.9) (東梁)	2.4・1.8・(2.1) (北桁) 2.0・2.1・2.1 (南桁)	(6.3) (北桁) 6.2 (南桁)	23.6	N-77°W (東西)	30～100	第96図252	柱根無し		
SB05	北2区	第14、78図	側柱	1×2間	3.6 (西梁) (3.6) (東梁)	3.6 (西梁) (3.6) (東梁)	1.8・1.8 (北桁) 1.8・(1.8) (南桁)	3.6 (北桁) (3.6) (南桁)	13.0	N-64°W (東西)	60～70	—	柱根無し		
SB06	北2・3区	第14、79図	側柱	2×2間	1.7・2.8 (西梁) 4.5 (東梁)	4.5 (西梁) 4.5 (東梁)	2.1・2.4 (北桁) 4.5 (南桁)	4.5 (北桁) 4.5 (南桁)	20.3	N-76°W (東西)	50～110	—	柱根無し SB07と重複		
SB07	北2・3区	第14、79図	側柱	3×3間	1.5・1.8・2 (西梁) 4.5 (東梁)	4.5 (西梁) (4.5) (東梁)	1.2・2.4・2.8 (北桁) 1.5・2.1・2.8 (南桁)	6.4 (北桁) 6.4 (南桁)	28.8	N-65°W (東西)	30～100	—	柱根無し SB06と重複		
SB08	北2区	第13・14、80図	側柱	2×3～間	1.8・4.7 (東梁)	6.5 (東梁)	2.1・2.7・2.1・a (北桁) 2.1・2.7・a (南桁)	6.9～(北桁) 4.8～(南桁)	44.9～	N-64°W (東西)	50～100	—	調査区外(西側)に延びる柱根無し		
SB09	南1区	第24・25、80図	側柱	2×3～間	2.7・2.1 (西梁)	4.8 (西梁)	2.1・2.1・1.8・a (北桁) 1.8・1.8・a (南桁)	6.0～(北桁) 3.6～(南桁)	28.8～	N-75°W (東西)	70～150	第60図125～127 第62図144・145	調査区外(東側)に延びる柱根無し SB10と重複		
SB10	南1区	第24・25、81図	側柱	3×3～間	2.1・1.8・2.7 (西梁)	6.6 (西梁)	2.4・1.8・2.1・a (北桁) 1.8・a (南桁)	6.3～(北桁) 1.8～(南桁)	41.6～	N-80°W (東西)	40～80	—	調査区外(東側)に延びる柱根無し SB09と重複		
SB11	南1区	第28、81図	側柱	1×4間	3.8 (北梁) 3.8 (南梁)	3.8 (北梁) 3.8 (南梁)	1.7・1.8・1.8・1.9 (西桁) 1.8・1.7・1.8・1.9 (東桁)	7.2 (西桁) 7.2 (東桁)	27.4	N-20°E (南北)	60～100	第97図279・280	柱根有り (P383・384) SB12・13と重複		
SB12	南1区	第28、82図	側柱	2×3間	(2.4)・2.1 (北梁) 2.7・1.8 (南梁)	(4.5) (北梁) 4.5 (南梁)	(2.5)・3.2 (西桁) 1.7・2.0・1.8 (東桁)	(5.6) (西桁) 5.5 (東桁)	24.8	N-23°E (南北)	60～90	第97図274	柱根無し SB11・13と重複		
SB13	南1区	第28、82図	側柱	1×2間	3.9 (北梁) 3.9 (南梁)	3.9 (北梁) 3.9 (南梁)	2.1・3.1 (西桁) 2.1・3.1 (東桁)	5.2 (西桁) 5.2 (東桁)	20.3	N-20°E (南北)	60～100	—	柱根無し SB11・12と重複		
SB14	南1区	第24・28、83図	側柱	1×3間	3.3 (西梁) 3.3 (東梁)	3.3 (西梁) 3.3 (東梁)	1.7・1.7・1.7 (北桁) 1.7・1.7・1.7 (南桁)	5.1 (北桁) 5.1 (南桁)	16.8	N-76°W (東西)	30～50	第97図273	柱根無し		
SB15	南1区	第23・24、82図	側柱	1×3間	4.5 (西梁) 4.5 (東梁)	4.5 (西梁) 4.5 (東梁)	3.3・2.7・2.6 (北桁) 3.1・2.8・2.6 (南桁)	8.6 (北桁) 8.5 (南桁)	38.7	N-72°W (東西)	60～120	第97図271 第98図281・283	柱根有り (P308・312・389・390・395)		
SB16	南1・2区	第22、83図	側柱	1×2間	3.9 (西梁) 3.9 (東梁)	3.9 (西梁) 3.9 (東梁)	8.4 (北桁) 6.0・2.4 (南桁)	8.4 (北桁) 8.4 (南桁)	32.8	N-90°W (東西)	80～160	第99図308・309	柱根有り (P401・574・581)		
SB17	南2区	第27、83図	側柱	1～×3間	2.4・a (西梁)	2.4～(西梁)	2.7・2.4・2.1 (北桁)	7.2 (北桁)	17.3～	N-83°W (東西)	90～110	—	調査区外(南側)に延びる柱根有り		
SB18	南1区	第22・23、84図	側柱	3×3間	1.2・1.8・1.2 (西梁) 2.7・1.6 (東梁)	4.2 (西梁) 4.3 (東梁)	6.7・1.9 (北桁) 3.0・1.8・3.8 (南桁)	8.6 (北桁) 8.6 (南桁)	37.0	N-76°W (東西)	40～130	第98図287	柱根無し SB19と重複		
SB19	南1区	第22・23、85図	側柱	1×2間	3.6 (北梁) 3.6 (南梁)	3.6 (北梁) 3.6 (南梁)	3.0・2.4 (西桁) 3.0・2.4 (東桁)	5.4 (西桁) 5.4 (東桁)	19.4	N-18°E (南北)	40～110	—	柱根無し SB18と重複		
SB20	南1区	第21・22、84図	側柱	2×5～間	3.9・3.3 (北梁)	7.2 (北梁)	2.4・2.7・2.1・a (西桁) 1.8・1.7・1.7・1.8・1.8・a (東桁)	7.2～(西桁) 8.8～(東桁)	63.4～	N-20°E (南北)	60～90	第98図294	南2区(南側)に延びる柱根無し SB21と重複		
SB21	南1区	第22、85図	側柱	1×2間	4.9 (北梁) 2.2・2.7 (南梁)	4.9 (北梁) 4.9 (南梁)	2.1・2.8 (西桁) 2.7・2.2 (東桁)	4.9 (西桁) 4.9 (東桁)	24.0	N-15°E (南北)	20～100	第98図288・299	柱根無し SB20と重複		
SB22	南1区 市道区	第17・18・22、85図	側柱	1×2間	3.7 (北梁) 3.7 (南梁)	3.7 (北梁) 3.7 (南梁)	3.3・3.0 (西桁) 3.6・2.7 (東桁)	6.3 (西桁) 6.3 (東桁)	23.3	N-28°E (南北)	30～80	—	柱根無し		
SB23	市道区	第13・17、86図	側柱	1×3～間	3.8 (東梁)	3.8 (東梁)	3.6・a (北桁) 1.6・2.0・2.7・a (南桁)	3.6～(北桁) 6.3～(南桁)	23.9～	N-75°W (東西)	30～90	—	調査区外(西側)に延びる柱根有り SB24・25と重複		
SB24	市道区	第13・17、86図	側柱	2×3間	2.1・2.4 (西梁) 0.8・(3.7) (東梁)	4.5 (西梁) (4.5) (東梁)	2.4・2.1・1.5 (北桁) 2.7・(3.3) (南桁)	6.0 (北桁) (6.0) (南桁)	27.0	N-57°W (東西)	40～110	—	柱根無し SB23・25と重複		
SB25	市道区	第17、86図	側柱	1×2間	3.0 (北梁) (3.0) (南梁)	3.0 (北梁) (3.0) (南梁)	1.6・2.1 (西桁) 1.8・(2.0) (東桁)	3.7 (西桁) (3.8) (東桁)	11.1	N-17°E (南北)	30～100	—	柱根無し SB23・24と重複		

第13表 掘立柱建物(SB)規模等一覧表

SB01（第20・25、77図、第96図246（P05））

北1区の南東側に位置し、主軸方向については、建物の東側が調査区外に延びると想定し、方位をN-67°Wとする東西棟とした。梁間2間（7.3m）、桁行1間（3.7・3.4m）以上の規模で床面積は51.1m²を超え、今回復元した建物の中では大型の部類にはいる。現状5基の柱穴で構成され、柱間寸法は梁間2.4m、4.9m、桁行3.7m、3.4mと南側梁間は北側のほぼ倍の寸法をとる。柱穴は主に70～90cm台の略円形で柱根はみられず、穴底のレベルは49.42～49.46mとほぼ一定する。

遺物はP05から土師器皿片4点と漆継ぎ痕跡のある青花皿(246)が出土。外面に牡丹唐草文がはいる端反りのB1群である。また、P90からは土師器皿の細片2点が出土する。

SB02（第25、78図）

SB01の梁間筋に一部が重なる梁間1間（2.7m）、桁行3間（6.9m）の南北棟である。床面積は18.6m²で主軸方位をN-22°Eにとり、南側の梁間は市道区側に延びる。南東部の隅柱柱穴が確認されていないため、7基の柱穴で構成され、柱間寸法は梁間2.7m、桁行1.8～2.7mで北側の桁行が1.8mとやや狭くなっている。柱穴の規模はP72・73が100cmを超える不整形をなし、P72・93には柱根が残る。穴底のレベルは49.26～49.46mとある程度の高低差がみられる。

遺物は実測されていないが、P73・89から土師器皿片2点、P72からは肥前II期に該当すると思われる型打成形の白磁皿片が出土している。

SB03（第20・25、77図、第57図75（SK04））

北1区SB01の北側に隣接する建物で、SB01と同様に東側は調査区外に延びると想定し、主軸方位をN-64°Wとする東西棟とした。梁間2間（6.1m）、桁行1間（3.0m）以上の規模で床面積は30.5m²以上と推定され、建物内にはSE01が位置する。現状5基の柱穴で構成され、柱間寸法は梁間2.5m、3.6m、桁行3.0mでSB01と同じように北側の梁間が狭くなる。柱穴は最も小さいP69で40cm弱台となるが、南西隅柱の位置にあたるSK04は内側径でも130cm台と大きく規模に統一性はみられない。また、穴底のレベルもSK04は49.15mとやや深く、他の柱穴は49.28～49.45mでP64には柱根が残る。

遺物はP52・64・166で土師器皿片3点、SK04からは土師器皿片2点、珠洲焼甕・擂鉢片2点に混じり、外底を無釉とする肥前II期の灰釉溝縁皿(75)が出土する。

SB04（第18、78図、第96図252（P115））

北1区の南西側で市道区境界付近に位置する。ここでは梁間2間（3.8m）、桁行3間（6.2m）の主軸方位をN-77°Wとする東西棟として復元したが、北東隅柱柱穴が不明で対になるP115も他の柱穴に比べ数倍の大きさがあるため、P117を南東隅柱とする2×2間の建物となる可能性もある。現状の復元では8基の柱穴で構成され、柱間寸法は梁間1.7m、2.1m、桁行1.8～2.4mと想定され、柱穴の規模は30～100cm台と幅をもつ。

遺物はP117・118・119・122・134で土師器皿片6点、P115からは土師器皿片33点、珠洲焼甕・擂鉢片3点、越中瀬戸の素焼皿(252)が出土する。胎土は橙色でロクロ成形、堅く焼き締まり底部を回転糸切りとする。やや柱状高台気味のB2a類とされる18世紀前半（III-1期）の製品である（堀内2017）。

SB05（第14、78図）

北2区の中央部に位置する。梁間1間（3.6m）、桁行2間（3.6m）の主軸方位をN-64°Wにとる梁・桁同寸の東西棟で、南東隅柱柱穴は攪乱坑と重なり未検出となっている。床面積は13.0m²と小振りでSB25の11.1m²に次ぐ規模である。5基の柱穴で構成され、柱間寸法は梁間3.6m、桁行1.8mで柱穴の規模は60～70cm台の略方形、穴底のレベルは47.74～47.79cmと一定のまとまりをもつ。また、建物

の中央をSD13が通り抜けるが、両者の新旧関係は定かではない。なお、各柱穴から遺物は出土していない。

SB06（第14、79図）

SB05の南側に位置する。北2・3区にまたがり、南東隅柱柱穴は北3区に延びる。調査区境のため、未検出の柱穴がみられるが、梁間2間（4.5m）、桁行2間（4.5m）の東西棟として復元した。床面積は20.3m²で主軸方位をN-76°Wにとり、柱根は確認されていない。6基の柱穴で構成され、柱間寸法は梁間1.7m、2.8m、桁行2.1m、2.4mと幅をもつ。柱穴は50～110cm台の不整梢円形で、穴底のレベルはP240が47.58mとやや深く、その他は47.78～47.87mとなる。

遺物は未実測であるが、P226・240で土師器皿片6点、SK51からは土師器皿片6点、焼けた壁土の可能性がある焼土塊12点が出土している。

SB07（第14、79図）

北2・3区でSB06と重複する。梁間3間（4.5m）、桁行3間（6.4m）の東西棟で、床面積は28.8m²、主軸方位をN-65°Wにとり、南東隅柱柱穴は北3区に延びる。柱根のみられない10基の柱穴で構成され、柱間寸法は梁間1.2m、1.5m、1.8m、桁行1.2～2.8mと東側の梁間側柱が調査区境のためか不明確で、東側の桁行が2.8mとやや広めになっている。柱穴の規模は30～100cm台と幅をもつが、隅柱柱穴については4本ともに30～40cm台の小形略円形で、穴底のレベルは47.72～47.94mと他に比べ高めである。

遺物はP223・232・236・237で15点、SK55で4点の土師器皿片が出土するが、時期等の特定は難しい。

SB08（第13・14、80図）

北2区南西隅に位置し、建物の西側は調査区外に延びると想定した。梁間2間（6.5m）、桁行3間（6.9m）以上の床面積44.9m²を超える大振りの東西棟で、主軸方位をN-64°Wにとる。柱根は確認されておらず、現状8基の柱穴で構成され、柱間寸法は梁間1.8m、4.7m、桁行2.1m、2.7mと南側の梁間が広くとられ、その広めの建物空間内にはSE16が位置する。柱穴の規模は50～100cm台、穴底のレベルは47.04～47.31mで、その内梁間筋のレベルは47.23～47.31mとやや高めである。また、遺構の切り合い関係からは、東側から延びるSD13より新しく位置づけられる。

遺物はP188・192・258から土師器皿片5点が出土する。

SB09（第24・25、80図、第60図125～127（SK67）・第62図144・145（SK89））

南1区の北東隅に位置し、建物の東側は調査区外に延びる。梁間2間（4.8m）、桁行3間（6.0m）以上とみられる東西棟で、床面積は28.8m²を超え、主軸方位をN-75°Wにとる。柱穴は全体に70～150cm台と大きく不整形で柱根はみられない。現状8基の柱穴で構成され、柱間寸法は梁間2.7m、2.1mと長短が認められ、桁行については2.1m、1.8mと比較的短くまとまる。穴底のレベルは49.29～49.53mとバラつきがみられる。SB10と重複する。

遺物はP281・297・315・317で土師器皿片25点が出土。SK67出土の土師器皿片55点の内、125（C類）、126（B類）はともに口縁部の外反と横ナデが明瞭で体部の立ち上がりは丸みをおび、126は隣接するSK89出土品と接合する。127は端反りの青花皿B1 VII群。見込文様は玉取獅子で、畳付を釉剥ぎし高台内を無釉とする。SK89からは26点の土師器皿片が出土し、144は黄白色系のE類、145は淡橙色のC類で、145は口縁部の横ナデが強く稜が明瞭となる。なお、両土坑からの土師器皿はいずれも古相を示しており、①グループに属するものか。

SB10（第24・25、81図）

南1区北東隅の市道区境に位置し、建物の東側は調査区外に延びる。SB09の南北桁行を跨ぐよう

に建てられた梁間3間（6.6m）、桁行3間（6.3m）以上の東西棟とみられ、床面積は41.6m²以上で主軸方位をN-80°Wにとる。柱穴の規模は梁間に60～80cm台のやや大きめのものがみられるが、その他は40cm台の略楕円形にほぼまとまり、重複するSB09の大柱穴とは異なる様相を示す。現状では柱根のない8基の柱穴で構成され、柱間寸法は梁間2.1m、1.8m、2.7m、桁行1.8～2.4mで、穴底のレベルは49.34～49.76mと東側に高い傾向がみられる。

遺物はP352・394・450・461から土師器皿片26点が出土している。実測されてはいないが何点かは器壁6mmを超える厚手の製品であり、③グループに属する新相を示すものと思われる。

SB11（第28、81図、第97図279（P383）・280（P386））

南1区の南東側に位置し、SB12・13と重複する。梁間1間（3.8m）、桁行4間（7.2m）の柱筋の通った南北棟で、床面積は27.4m²、N-20°Eに主軸方位をとる。柱穴の規模は、70～80cm台の略楕円形にほぼまとまり、穴底のレベルは48.79～49.19mと東側の桁行柱穴がやや高めとなる。10基の柱穴で構成され、柱間寸法は梁間3.8m、桁行1.7～1.9mとほぼ等間に並び、P383・384には柱根が残る。なお、遺構の切り合い関係からはSB11～13の3棟中で最も新しくなる可能性がある。

遺物はP334から土師器皿片5点と越中瀬戸の鉄釉瓶片1点、P366・373・378で土師器皿片11点が出土。P383では土師器皿片1点と柱根(279)がみられる。柱根は残存径15.6cmの芯持丸木で、樹種は軽軟なカラスザンショウとし底面を粗く調整する。P386は出土土師器皿4点中の1点を実測(280)、口径11cm弱とやや小型であるが口縁部の横ナデがみられる土師器皿C類である。見込は「2」字状ナデ上げとし口縁は外反しない。なお、南東隅柱柱穴となるP487からは、未実測ではあるが中世の土師器皿片1点に加え錫絵で樓閣等を描き緑釉を流し掛けする土瓶片が1点出土する。18世紀後半以降の混入品か。

SB12（第28、82図、第97図274（P339））

SB11の南側半分に重複する梁間2間（4.5m）、桁行3間（5.5m）の南北棟で、柱穴の切り合い関係からはSB11よりも古く位置づけられる。床面積は24.8m²、N-23°Eに主軸方位をとり、柱穴の規模は60～90cm台の略楕円形で、穴底のレベルは49.19～49.34mとなる。西側桁行で未検出のものもあるが8基の柱穴で構成され、柱間寸法は梁間1.8～2.7m、桁行1.7～2.0mと西側の梁間寸法がやや広くとられている。柱根はみられない。

遺物はP339で土師器皿片2点に加え、外面にコンニャク印判状の文様の一部がみえる肥前の染付碗(274)が出土。IV期18世紀前半の製品と思われる。また、P360・369で土師器皿片11点、P367で土師器皿片5点、越前焼甕片1点、大窯後半段階の鉄釉瓶片1点が出土している。

SB13（第28、82図）

SB12と同様にSB11の南側半分に重複する梁間1間（3.9m）、桁行2間（5.2m）の南北棟で、主軸方位はSB11と同じN-20°Eにとる。床面積の20.3m²は3棟中最も小規模で、遺構の切り合いでSB11・12両建物の柱穴に切られる。柱穴の規模はおおむね60～100cm台の略楕円形で、柱根はみられず、穴底のレベルは48.85～49.14mとややバラつく。6基の柱穴で構成され、柱間寸法は梁間3.9m、桁行2.1m、3.1mと南側の桁行寸法が広めにとられている。

遺物は実測されていないが、P371・388で土師器皿片10点、P374で土師器皿片4点、肥前の陶胎染付碗片1点、錫絵染付で文様を描く土瓶片1点がみられ、P382で土師器皿片3点、珠洲焼擂鉢片1点が出土する。なお、P374の土瓶片はSB11・P487出土の土瓶片に様相が近く、同時期の製品とみられる。

SB14（第24・28、83図、第97図273（P321・322））

南1区SB11の北側に近接する梁間1間（3.3m）、桁行3間（5.1m）の柱筋の通った東西棟で、床面積は16.8m²、主軸方位をN-76°Wにとる。柱根はみられないが、柱穴の規模は30～50cm台の小振りの略円形でまとまりがあり、穴底のレベルは48.79～49.00mとなる。8基の柱穴で構成され、柱間寸法は梁間3.3m、桁行1.7mと等間隔に配置される。建物内の西側中央には金箔土師器皿が出土したSK78（第53図）がある。

遺物はP321・322で土師器皿片6点とともに、第1～3次調査では確認できなかった種類の埴堀（273）が出土している。口縁先端部と片側の半分近くを欠くが、残存高5.4cm、底径3.2cm、小型の樽状容器の一方に縦方向の把手が張り付くタイプで、底部はやや丸みをおび内外面ともに還元状態の灰色を呈する。全国的に類例の少ない真鍮埴堀であり、七尾城下内における銅と亜鉛の合金による金メッキ生産の可能性が想定される（名古屋市博他2019）。なお、第1次調査の6区SK11からも同タイプとみられる埴堀片（第157図72）が出土している（七尾城跡Ⅱ2021）。また、P361・480からは土師器皿片3点が出土する。

SB15（第23・24、82図、第97図271（P308）・第98図281（P389）・283（P395））

南1区の東側、市道区寄りに位置する。梁間1間（4.5m）、桁行3間（8.6m）の東西棟で、床面積38.7m²、主軸方位をN-76°Wにとる。柱筋は比較的よく通り、P308・312・389・390・395と南側桁行に主に柱根を残すが、柱穴の規模は特に北側桁行が60～120cm台と不揃いで、穴底のレベルは48.68～48.97mとなる。8基の柱穴で構成され、柱間寸法は梁間4.5m、桁行2.6～3.3mである。

遺物はP308(271)、P389(281)、P395(283)出土の柱根がある。樹種は271がサクラ属、281がスダジイ、283がヌルデとそれぞれに異なる材が使用されている。なお、P308ではその他に土師器皿片2点、肥前（IV期）の京焼風陶器碗の可能性のある口縁部片1点、P389で土師器皿片3点、越中瀬戸の鋳釉擂鉢体部片1点、P395で土師器皿片5点が共伴し、また、P312・390で土師器皿片4点、P399で土師器皿片4点、珠洲焼甕片1点が出土する。

SB16（第22、83図、第99図308（P574）・309（P581））

南1・2区にまたがる建物で、構成する柱穴は明確ではないが、南側桁行のP401・574・581および北東隅柱付近に位置するSX03内に柱根が残るため、梁間1間（3.9m）、桁行2間（8.4m）の東西棟として復元した。床面積は32.8m²で、主軸方位をN-90°Wにとる。現状4基の柱穴で構成され、柱穴の規模は80～160cm台と幅をもち、形状も不揃いで、穴底のレベルは47.72～48.25mとなる。柱間寸法は梁間3.9m、南側桁行で6.0m、2.4mとした。

遺物はP574(308)、P581(309)出土の柱根がある。308は半裁状の加工木で樹種はセンダン、309は芯持丸木のクリ材である。その他、P401・581、SK113からは土師器皿片10点が出土する。

SB17（第27、83図）

南2区の最南際に位置し、建物の南側は調査区外に延びる。建物規模は不明であるが、ここでは梁間1間（2.4m）以上、桁行3間（7.2m）の東西棟として復元した。床面積は17.3m²以上で、主軸方位をN-83°Wにとる。柱穴の規模はほぼ90～110cm台の略楕円形をとるが、長軸方向は不揃いである。現状5基の柱穴で構成され、柱間寸法は梁間2.4m、桁行2.1～2.7m、穴底のレベルは柱根の残る調査区際柱穴の48.74mに対し、桁行柱穴は47.85～48.09mと一段（約60～90cm）下がっている。

遺物はP579で朝鮮の褐釉徳利の可能性のある口縁部片1点が出土している。

SB18（第22・23、84図、第98図287（P422～425））

南1区の中央、市道区寄りに位置する。柱穴の配置はバラつくが、梁間3間（4.3m）、桁行3間（8.6m）の東西棟として復元した。床面積37.0m²で、主軸方位をN-76°Wにとる。柱根はみられず柱

穴の多くに数十cm台の石が複数個敷き詰められており、礎石状に用いられたものか。10基の柱穴は、西側梁間と南側桁行に比較的よく残るが、規模・形状ともに不揃いで、穴底のレベルは48.19～48.51m、柱間寸法は梁間1.2m、1.8m、桁行1.8～3.8mとなる。SB19と重複する。

遺物は土師器皿片がSK100で1点、P422～425で34点出土している。287はその内の1点で、器表がややザラつく淡橙色の土師器皿E類である。

SB19（第22・23、85図）

SB18の中央南側に重複する梁間1間（3.6m）、桁行2間（5.4m）の南北棟で、両建物間での遺構の切り合い関係は認められない。床面積は19.4m²で、主軸方位をN-18°Eにとり、柱穴の規模は40～110cm台と大～小がある。柱根のみられない6基の柱穴で構成され、穴底のレベルは南東隅柱柱穴が48.30mとやや高く、その他は48.06～48.18mとなる。柱間寸法は梁間3.6m、桁行3.0m、2.4mと北側桁行がやや広めにとられている。

遺物はP414で珠洲焼壺片1点、P501で土師器皿片3点が出土する。

SB20（第21・22、84図、第98図294（P529））

南1区の西側で、調査区際を南北に走る大溝SD18の東岸に位置する。梁間2間（7.2m）、東側桁行5間（8.8m）以上の南北棟で、南側は調査区境で1段下がる南2区側に延びるとみられる。床面積は今回復元した建物の中では最も大型の63.4m²以上となり、主軸方位をN-20°Eにとる。柱根の認められない現状11基の柱穴で構成され、柱穴の規模は略楕円形の60～90cm台、穴底のレベルは47.83～48.05mでおおよそのまとまりをもつ。柱間寸法は梁間3.9m、3.3m、西側桁行は3間2.1～2.7m、東側桁行は5間1.7～1.8mとし東西桁行の間数が揃わないが、東桁柱穴はほぼ等間隔に並ぶ。

遺物はP429・430・437・449・518・529・531で29点の土師器皿が出土する。294（P529）はその内の1点。体部が直線的に立ち上がる器壁の薄い土師器皿B類で、内面には「2」字状ナデ上げがみられる。

SB21（第22、85図、第98図288（P447・448）・299（P552））

SB20の北側に一部重複する、梁間1間（4.9m）、桁行2間（4.9m）の南北棟として復元した。床面積は24.0m²で、主軸方位をN-15°Eにとる。7基の柱穴で構成され、柱穴の規模は側柱で20～40cm台と細く、隅柱で40～100cm台の幅をもつ。柱間寸法は梁間4.9m、桁行2.1～2.8mで、南側梁間の中間柱は棟持柱の可能性があるか。穴底のレベルは北側隅柱が47.63・47.69mとやや低く、その他は47.98～48.11mとなる。

遺物はP447・448で瀬戸・美濃の灰釉端反皿(288)がみられる。口縁部を欠くが、器壁は厚く高台断面は台形となる。大窯1段階。299はP552出土の青磁瓶の底部である。釉調は薄く、畳付は雑に釉剥ぎされ少量の白色砂が付着する。その他、P511からは土師器皿片4点が出土している。

SB22（第17・18・22、85図）

南1区のSB18・21間上方に位置し、北側隅柱は市道区側に延びる。調査区境の遺構空白域を一部含むが、梁間1間（3.7m）、桁行2間（6.3m）の南北棟として復元した。床面積23.3m²、主軸方位をN-28°Eにとる。柱根は無く、6基の柱穴で構成され、規模は30～80cm台、穴底のレベルは48.02～48.28mとなる。柱間寸法は梁間3.7m、桁行2.7～3.6mとし、北側桁行をやや広めにとる。

遺物はP516・616・625から土師器皿片30点が出土するが、いずれも細片で時期等の特定は難しい。

SB23（第13・17、86図）

市道区西端に位置し、SB24・25と重複する。建物の西側は調査区外に延びる可能性もあり、梁間1間（3.8m）、桁行3間（6.3m）以上の東西棟として復元した。床面積23.9m²以上、N-75°Wに主軸

方位をとる。現状6基の柱穴で構成され、柱穴の規模は30～90cm台で南東隅柱柱穴が特に小さく、穴底のレベルは46.90～47.22mとなる。柱間寸法は梁間3.8m、南側桁行1.6～2.7mとするが、北側桁行とは柱の配置が対にならない。なお、柱穴の切り合い関係からはSB24より新しい。

遺物はP591・596で土師器皿片4点が出土する。

SB24（第13・17、86図）

SB23より古いとみられる梁間2間（4.5m）、桁行3間（6.0m）の東西棟で、床面積27.0m²、主軸方位をN-57°Wにとる。8基の柱穴で構成され、柱穴の規模は北側桁行については略円形の50～60cm台とほぼ揃うが、全体では40～110cm台で、穴底のレベルは46.93～47.18mとなる。柱間寸法は南東隅柱柱穴を欠くため、西側梁間で2.1m、2.4m、北側桁行で1.5～2.4mとなる。

遺物はP590で壁土とみられる焼土塊1点、また、P592・598・599からは土師器皿片5点が出土する。

SB25（第17、86図）

SB23・24に重複する梁間1間（3.0m）、桁行2間（3.7m）の南北棟で、床面積は11.1m²と今回復元した建物中、最も小規模となる。南東隅柱を欠く5基の柱穴で構成され、柱穴の規模は30～100cm台、穴底のレベルは46.86～47.19m、柱間寸法は梁間3.0m、桁行1.6～2.1mとなる。

遺物は西側桁行側柱のP601で土師器皿片9点が出土している。

（2）ピット（Pit）

その他、掘立柱建物の復元柱穴以外のピットについて、各実測遺物にそってみていく。なお、調査区全体では700基弱のピットに番号が付され、破片数にして約1,400点の土器・陶磁器類が出土している。

P61（第20図、第96図247）北1区。SB03を構成する柱穴SK04の南側に隣接するが切り合いはみられない。247は肥前の一重網目文碗。呉須はくすみ文様は粗い。Ⅲ期。

P81（第19図、第96図248）北1区。248は陶胎質の粗製青花碗である。外面には草花文様、内面の口縁圈線以下は無文とする。焼成はあまく呉須はくすみ、胎土は淡橙色となる。漳州窯系の製品か。

P97（第24図、第96図249）北1区。市道区境に近く、方形の石組をもつSK10の西側に隣接する。249は肥前波佐見の磁器皿。器壁は厚く内面染付、外面鉄絵で見込にはコンニャク印判の五弁花がはいる。Ⅴ期。

P100（第19図、第96図250）北1区。250は残存長64.7cmの柱根であるが、周囲には対応するピットは確認できない。芯持丸木のクリ材である。

P101（第19図、第96図251）北1区。SK18の一角に位置する。251は瀬戸・美濃の鉄釉把手付水柱とした。底部を欠くが下ぶくれ形の体部に断面7角形の注口と厚手の把手が付く。体部下半に残る鉄釉は薄く、注口割口には漆継ぎがみられる。一般的な器種ではなく、鉄釉の状況等から大窯3・4段階とした。

P155（第19図、第96図253・254）北1区。P156と共に近世遺構SE11に切られる。253は底部中央を押し上げる橙色系土師器皿G類。器形は大きく歪む。254は白色系土師器皿B類。外面のナデは弱く体部の伸びは直線的である。②グループに属するか。

P156（第19図、第96図255）北1区。P155に切られる。255は口径11.4cmの土師器皿C類。焼きがややあまく器形の歪みは大きい。口縁部及び内面に油煤痕・煤が付着する。

P162～164（第19図、第96図256）北1区。3基のピットが切り合いながら隣接する。256は土

師器皿C類。薄手で外面ナデは明瞭であるが、全体に軟質で砂粒が多く器表が剥離する。なお、未実測であるが、P162からは大窯1・2段階の瀬戸・美濃灰釉小皿片1点が出土する。

P190 (第13図、第96図257) 北2区、SB08内に位置する。257は土師器皿E類。白色系硬質土器で内面の大部分に油煤痕が付く。

P191 (第13・89図、第96図258) 北2区。P190と同じくSB08内に位置し、SD16を切る。258は土師器皿C類。硬質内黒で「2」字状ナデ上げがみられる。

P206 (第13図、第96図259) 北2区、SB08内に位置する。259は薄手の端反り青花碗B2群である。外面に龍字文様、口縁部内面には二重圈線を回し胴部は無文とする。

P227 (第14・88図、第260) 北2区、SB07に隣接するが建物構成ピットとの切り合いはみられない。260は内外面に鋸釉を施す越中瀬戸擂鉢。擂目はシャープで内面は使用のため平滑となる。胎土は橙色硬質、口縁部の立ち上がりはやや屈曲気味となるが端部は欠く。大窯黒川窯とした。

P228 (第14図、第96図261) 北2区、SB07に隣接する。261は高台を削り出し輪高台とする瀬戸・美濃天目茶碗。高台幅は狭く高台内の削り込みも浅いが、高台周辺にかかる鋸釉は薄く、大窯3段階とした。

P249 (第14図、第96図262) 北2区。262は白橙色系の土師器皿E類。砂粒の含みが多く焼きはあまり。未実測であるが、大窯3・4段階の瀬戸・美濃天目茶碗片1点が共伴する。

P257 (第13図、第96図263) 北2区。SB08に隣接する。263は灰白色系の土師器皿C類。内黒で器表はくすみザラつく。

P260 (第13図、第96・97図264～266) 北2区。SB08内に位置し、P191と同じくSD16を切る。264は白色系土師器皿E類。265は青磁稜花皿。口縁部内面には数条の線彫文様が巡る。266は長さ35mm前後の多角形あるいは六葉状の銅製飾り金具で、釘隠しの可能性がある。鍍金を施した座金の周囲を折り曲げ、中央には径18mmの円形飾りを三爪で装着する。

P270 (第15図、第97図267) 北2区、SE14の北側掘り方に接する。267は体部が直立気味に立ち上がる瓦質土器片。胴部がゆるやかに湾曲するため円形浅鉢とした。脚の付く可能性がある。

P288・289 (第25図、第97図268・269) 南1区、SB09の構成遺構SK67を切る。268は土師器皿B類。口縁部の横ナデ・外反は比較的明瞭で、見込圈線からの「2」字状ナデ上げが認められる。269は総黒色系の漆器椀で、内面に漆の合わせ痕があるため、漆パレットへの転用がうかがわれる。見込には赤色漆絵の痕跡がみられ、樹種はホオノキ属である。分析No.6資料。

P292 (第25・90図、第97図270) 南1区、SB09・10内に位置する。多くのピットが集中する区域で、P292も別の建物を構成する柱穴の一つとなる可能性が高い。270は残存長56cmの柱根で、クリの芯持丸木である。

P318 (第24・89図、第97図272) 南1区、SB09の構成柱穴P317に切られる。272は口縁部内外面に油煤痕の付く土師器皿E類。口縁部の器壁は厚い。

P345 (第25・90図、第97図275) 南1区、SB10に隣接する。275は初鑄年が寛文8年(1668)以降とされる新寛永の寛永通寶である。

P346 (第24図、第97図276) 南1区。276は外面線描蓮弁文の青磁碗C群である。

P357 (第25・89図、第97図277) 南1区、SB09の構成柱穴P358を切る。277は白磁皿底部で、高台部を円形に打ち欠いてメンコ状とする。釉調は灰白色にくすみ、畳付を含めて底部無釉とする。端反りタイプのC群粗製か。

P375 (第28・92図、第97図278) 南1区、SB12の構成柱穴P376を切る。278は肥前II期の灰釉溝

縁皿。内反り高台で見込に砂目跡がみられる。

P394（第25・89図、第98図282）南1区、SB09の構成柱穴P297を切る。282は土師器皿E類で、外面に黒斑がみられる。柱根も残しており、SB09の建替の可能性もあるか。

P397（第23・93図、第98図284）南1区、SB15内に位置し柱根を残す。284は瀬戸・美濃灰釉丸皿。体部内面には丸ノミ状の工具によるソギがはいる。大窯2段階の製品である。

P417（第28図、第98図285）南1区、SB11内に位置する。285の器壁は厚く体部は丸みをもって立ち上がる。土師器皿E類としたが近世の可能性があるか。肥前II期の擂鉢片1点が共伴する。

P420（第23・94図、第98図286）南1区、SB18の東隣に位置する。中央のピットは柱根の抜き取り穴の可能性がある。286は土師器皿E類で平面形はやや歪む。

P454（第25図、第98図289）南1区、SB09内に位置する。289は口縁部外面の横ナデが不明瞭な土師器皿D類で、底部は内反り風となる。

P458（第25図、第98図290）南1区、SB10の北隣に位置する。290は硬質白色系の土師器皿E類である。

P466（第24図、第98図291・292）南1区。291は瓦質土器の筒形香炉で、器壁は厚く口縁部は外反する。脚が付くか。外面には16弁菊花のスタンプ文が巡る。292は口径42.2cmの越前焼中甕。口縁部はわずかに肥厚し上面を水平とする。外面の稜は尖る。IV 1群。

P504（第22図、第98図293）南1区。293は長さ24mm、厚さ4mm、黒色頁岩の碁石である。他にも瀬戸・美濃天目茶碗片1点が出土する。

P536（第22図、第98図295）南1区。295は焼成のあまい越前焼擂鉢。擂目はやや間隔をあけ、沈線は口縁直下に明瞭に巡る。IV d群。

P542（第21図、第98図296）南1区、大溝SD18の法面上部に位置する。296は軟質全面施釉の白磁皿B群底部片。見込に5箇所の目跡、高台畳付に同じく5箇所の抉りをもつ。

P543（第16図、第98図297）南1区、SD18の東際に位置する。297は瀬戸・美濃天目茶碗。口縁端部外面は偏平気味に弱い面をもち、釉調は明るい。大窯4段階。

P551（第22図、第98図298）南1区、SE20の掘り方際を切る。298はへそ皿となる土師器皿G類である。底部の押し上げは弱く器壁は厚い。当区ではほとんどみられないタイプである。

P557（第24図、第99図300）南1区、SB14の西側梁間筋に重なる。300は珠洲焼擂鉢底部片か。焼成はあまく外面はにぶい褐色に発色する。ただし、見込の単独擂目は珠洲焼には一般的ではなく、在地産の可能性もあるか。

P559（第17図、第99図301・302）南1区、市道区境に位置する。301は砂粒でザラつく白色系の土師器皿E類。302は内外面に媒状の付着物がみられるB類である。

P561（第21図、第99図304）南2区、SE26の上方に重なる。304は見込が凹む青花蓮子碗の底部片である。釉は透明感がなくムラがあり高台畳付を釉剥ぎし無釉とする。見込文様の法螺貝はややくすむ。C群粗製。

P563（第21図、第99図305）南2区。305は越中瀬戸灰釉皿である。釉は外反する口縁部を中心にかかり、見込周辺と体部下半は無釉とする。削り出し高台の断面は三角形状となり、やや盛り上がる見込全体は平滑である。登窯製品のC3類とした。

P564（第21図、第99図306）南2区。306は残存径13.1cmの柱根で、クリの芯持丸木である。

P567（第21図、第99図307）南2区、西側は調査区外に延びる。307は土師器皿E類。やや砂粒が浮くが白色系の硬質土器である。

P583 (第13図、第99図310) 市道区。310は土師器皿E類。内外面が油煤痕で覆われるため、焼成具合等は不明である。

P588 (第13図、第99図311) 市道区。311は北宋錢、篆書体の元豊通寶とみられる。

P617 (第17図、第99図312) 市道区、SB22の北側梁間筋に重なる。312は土師器皿E類。薄手の白色系で砂粒が浮く。

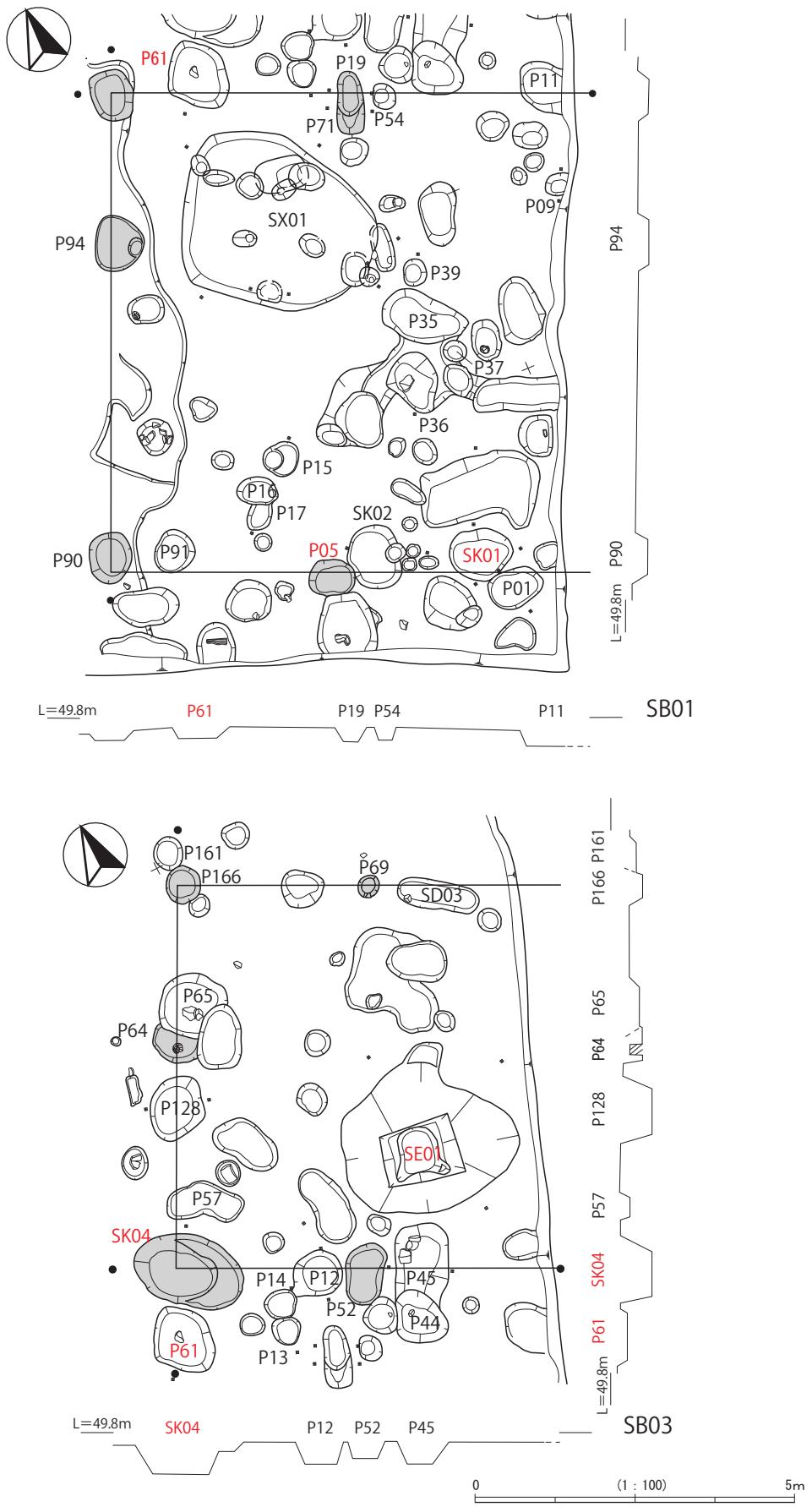
P618 (第18図、第99図313・314) 市道区。313は青磁無文碗で底部厚は20mmと厚い。削りの浅い見込文様がはいり、高台内は蛇の目釉剥ぎとする。314は肥前の大型陶器皿の底部片。底部周辺は無釉で、見込には4箇所の砂目跡がみえる。Ⅱ期。

P620 (第17図、第99図315) 市道区。315は青磁碗C群の口縁部片。線描蓮弁文の剣先は不明瞭である。

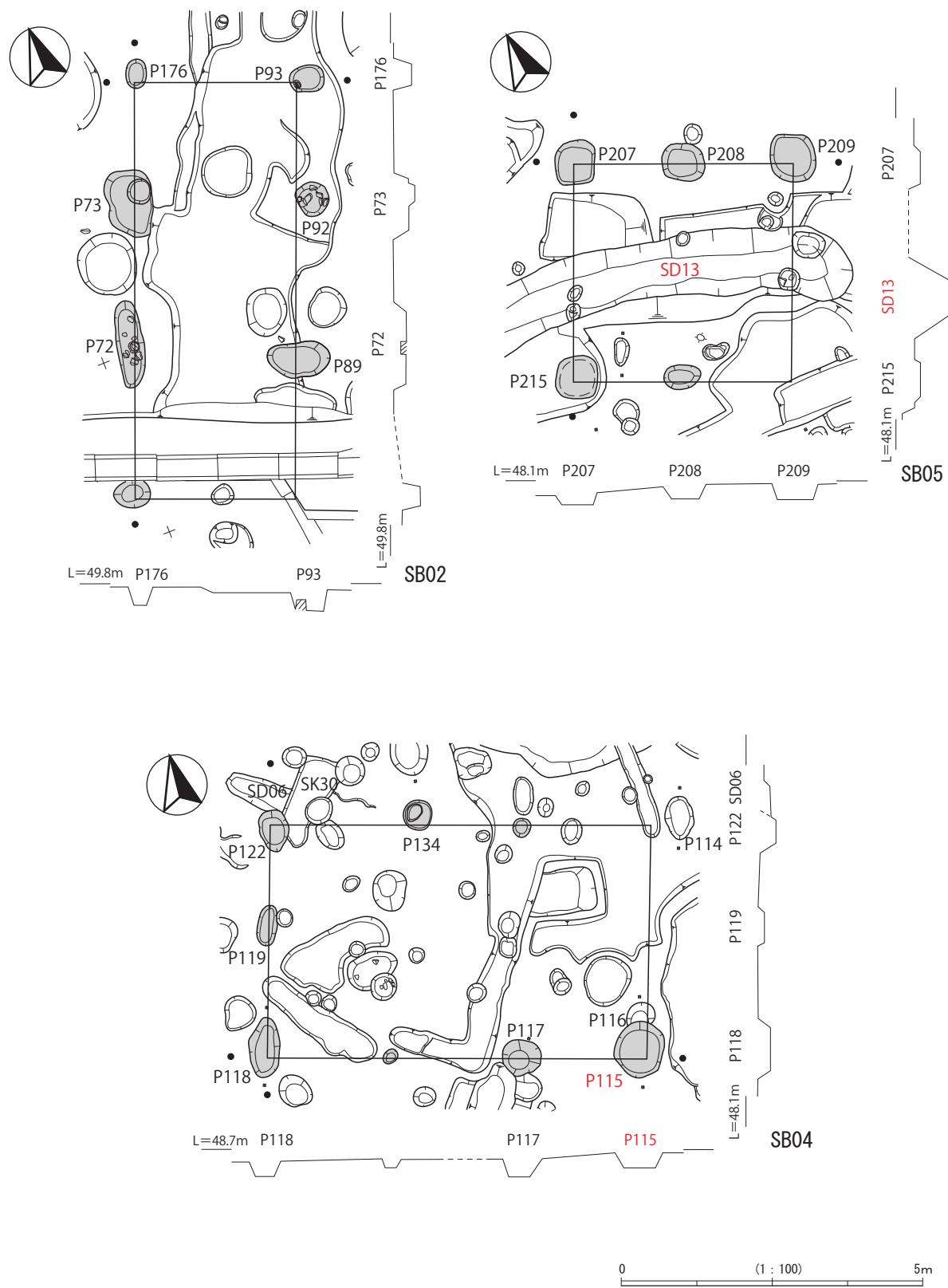
P634 (第17図、第99図316～319) 北3区。土師器皿はE類(316・317)、C類(318)で構成される。E類は橙色系、C類は白色系の硬質土器で318は雑な見込ナデに「2」字状ナデ上げがはいる。①グループに属するか。319は瓦質土器の筒形香炉で、体部下方に渦巻状のスタンプ文が連續して回る。

P638 (第18図、第100図320～323) 北3区。320は外面横ナデ、内面「2」字状ナデ上げを施す白色系の土師器皿C類。321は瀬戸・美濃天目茶碗。口縁端部はやや長く直立し体部は丸みを帯びる。体部下半の鋳釉は濃く、大窯1段階。322は青花皿B1群。外面には牡丹唐草文がはいる。323は口縁部と脚部を欠く瓦質土器の花瓶体部片で金属器を写した仏具とされる。16弁菊花のスタンプ文が部分的に重なりながら巡る。胎土中に海綿骨針はみられない。

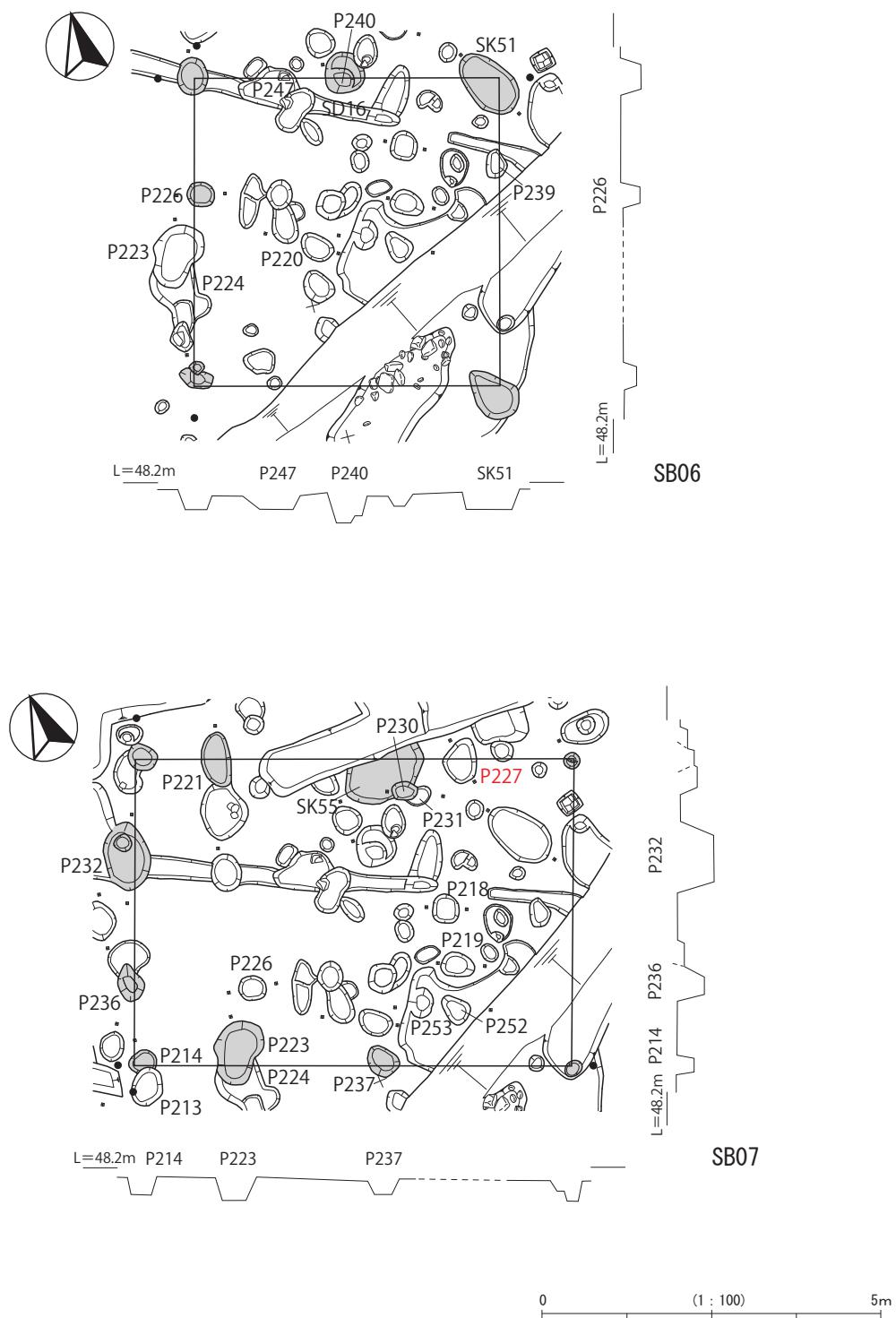
P644 (第14図、第100図324) 北3区、北2区境に位置する。324は轍の羽口。外径10cm弱の筒形で、内径基部は約4cmとし先端に向けてやや広がる形状となる。七尾城下で通常みられる羽口よりも大きく、砂粒の含みも多い。近世以降か(魚水2022)。



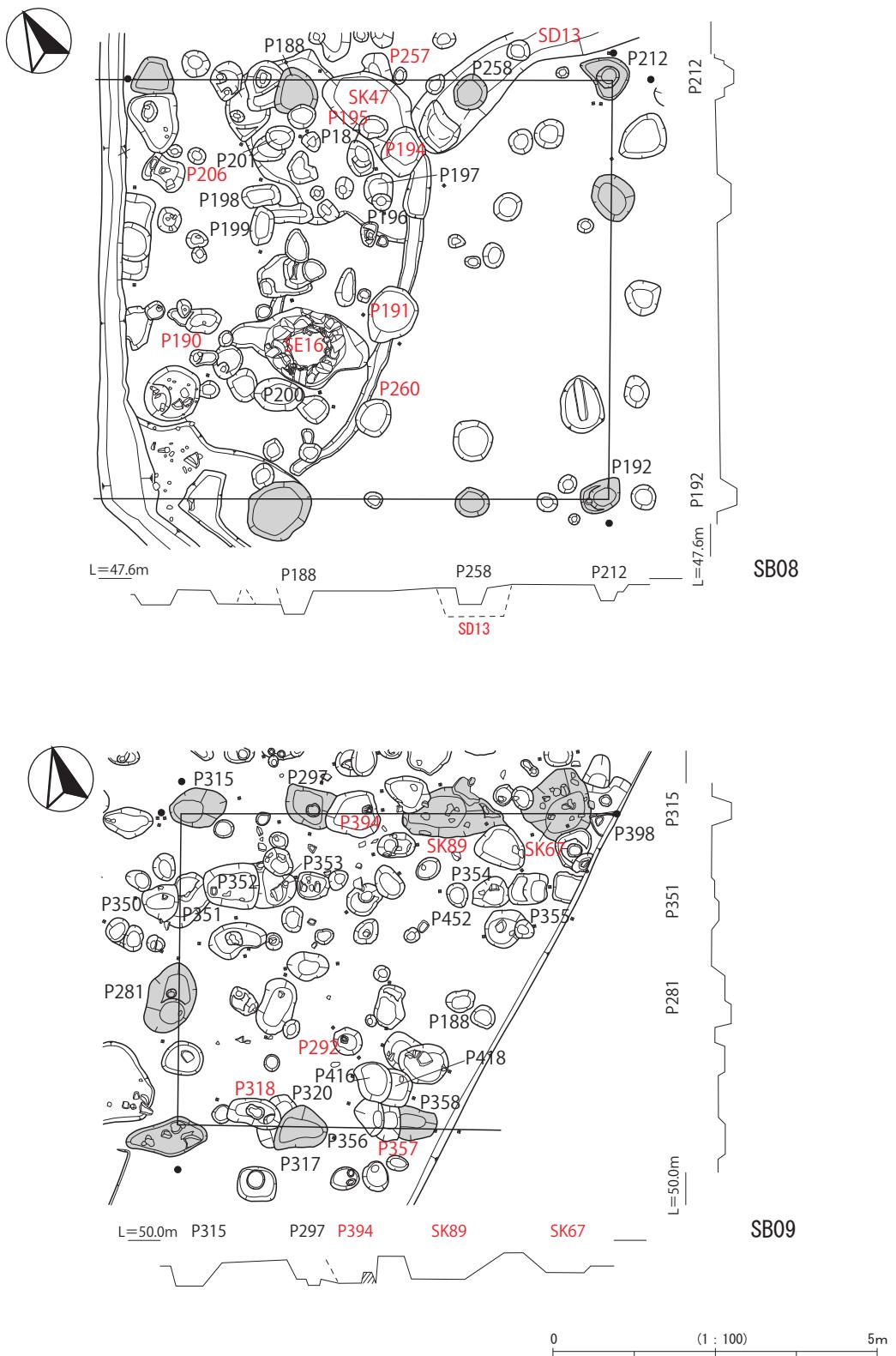
第77図 掘立柱建物(SB)遺構図1(赤字:実測遺物出土遺構)



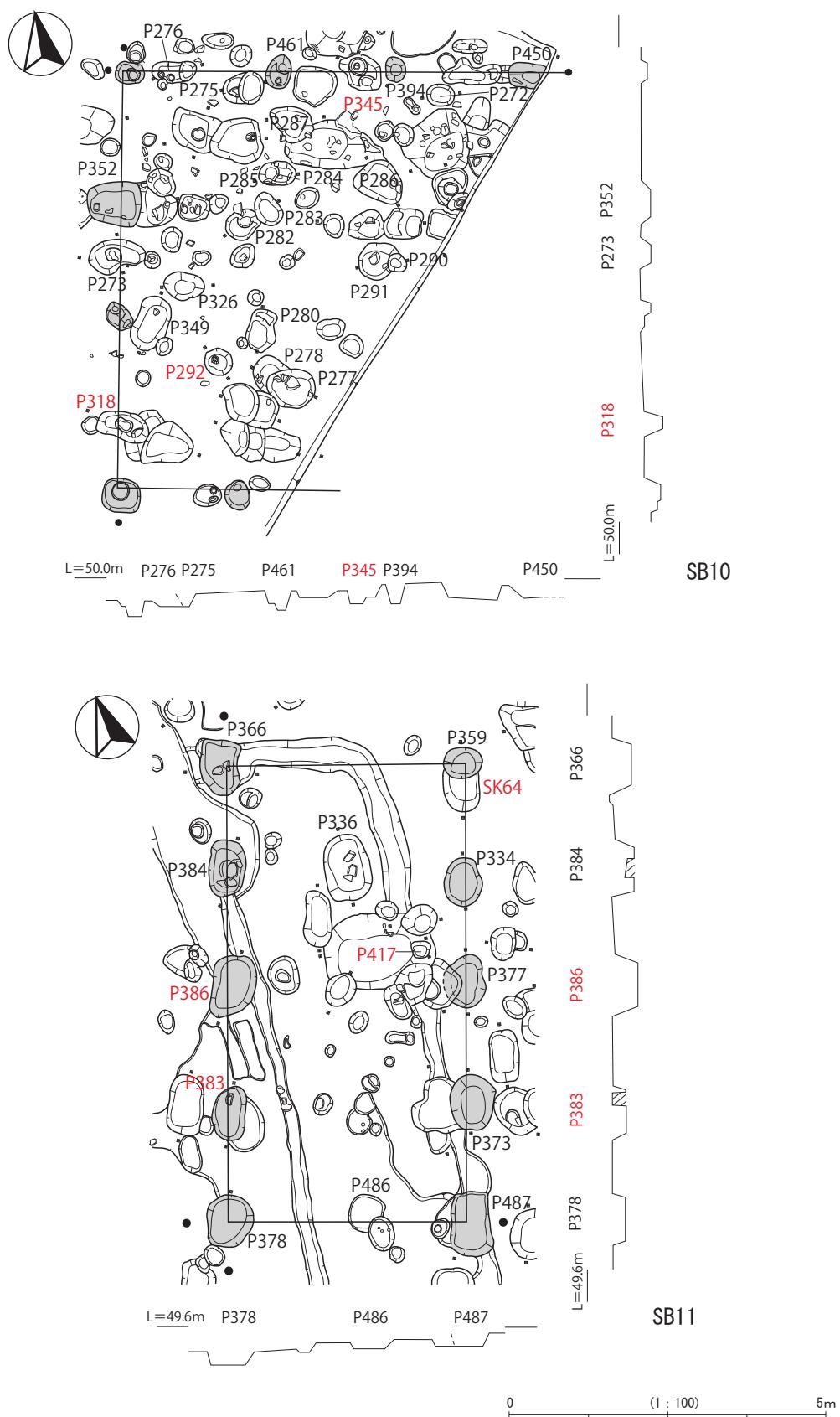
第78図 掘立柱建物 (SB) 遺構図2 (赤字: 実測遺物出土遺構)



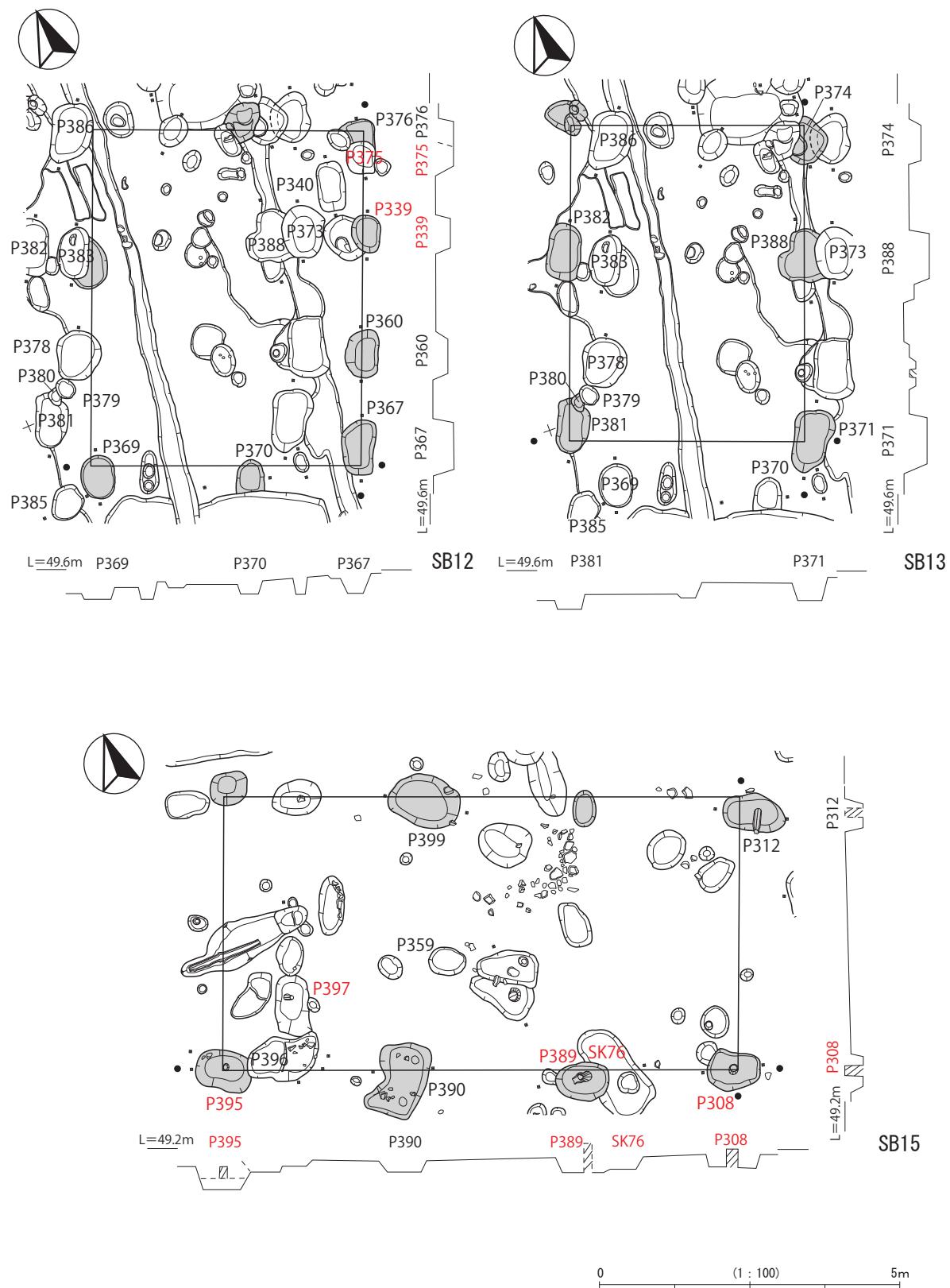
第79図 掘立柱建物(SB) 遺構図3(赤字:実測遺物出土遺構)



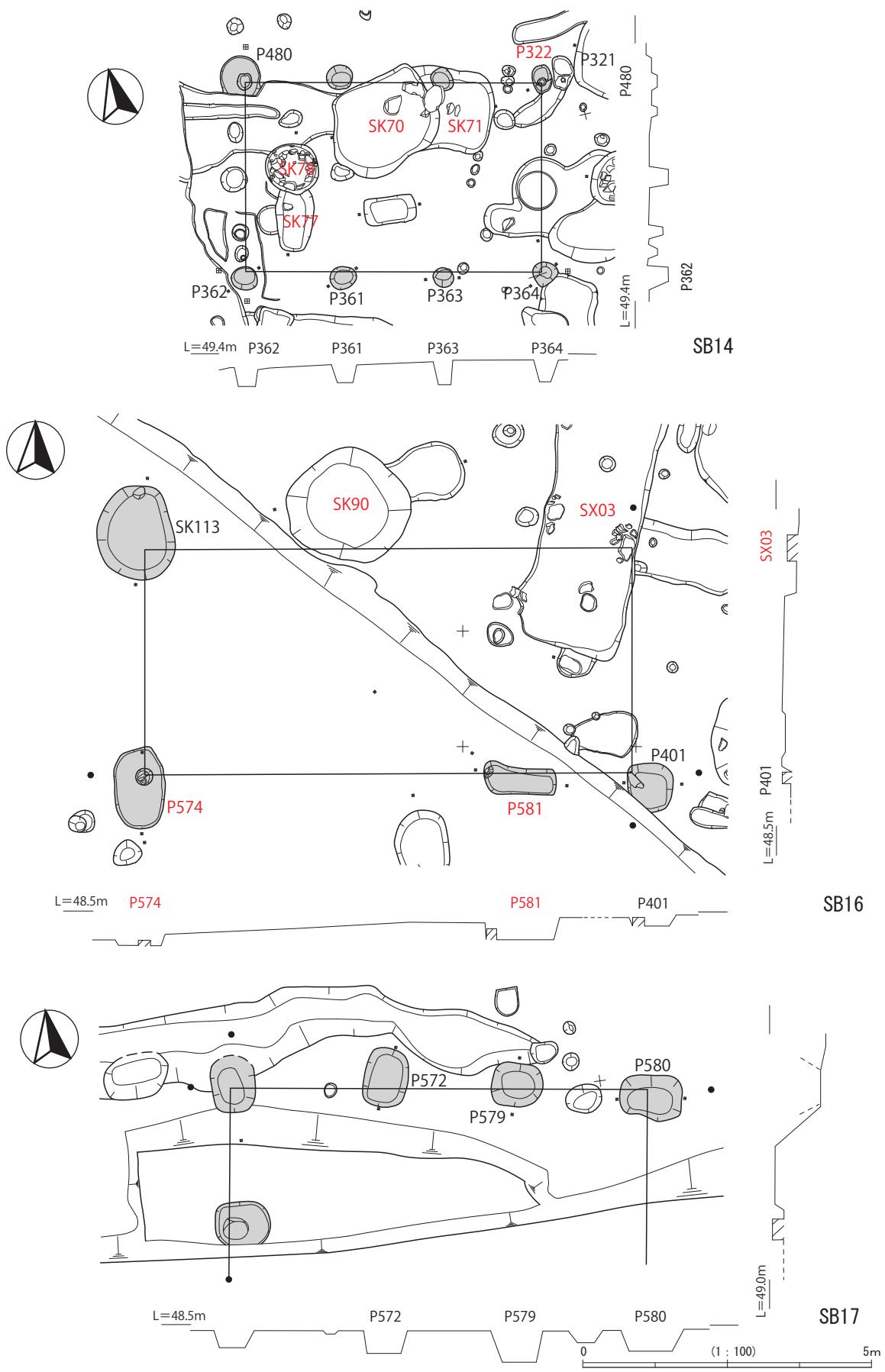
第80図 掘立柱建物 (SB) 遺構図4 (赤字: 実測遺物出土遺構)



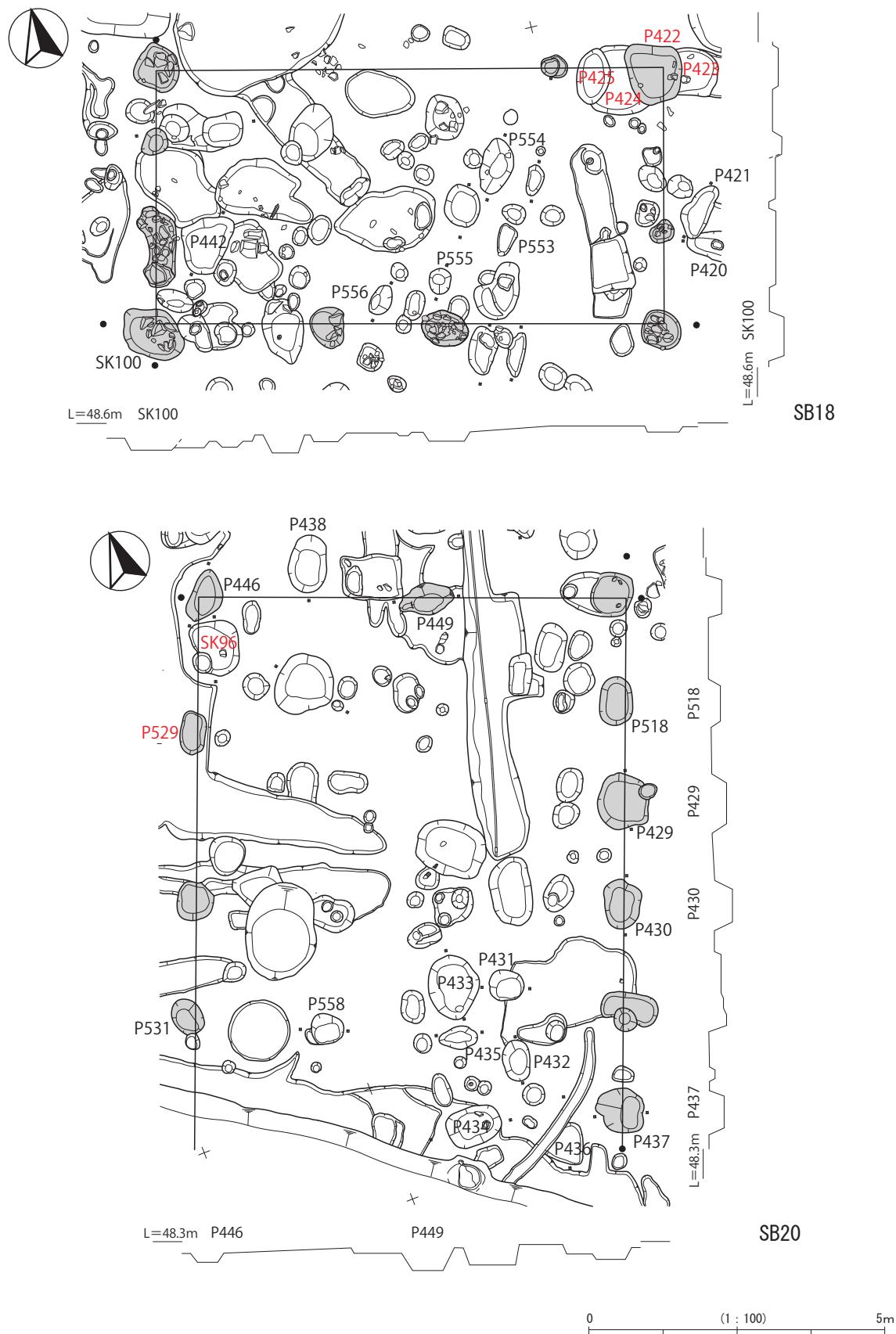
第81図 掘立柱建物(SB) 遺構図5(赤字:実測遺物出土遺構)



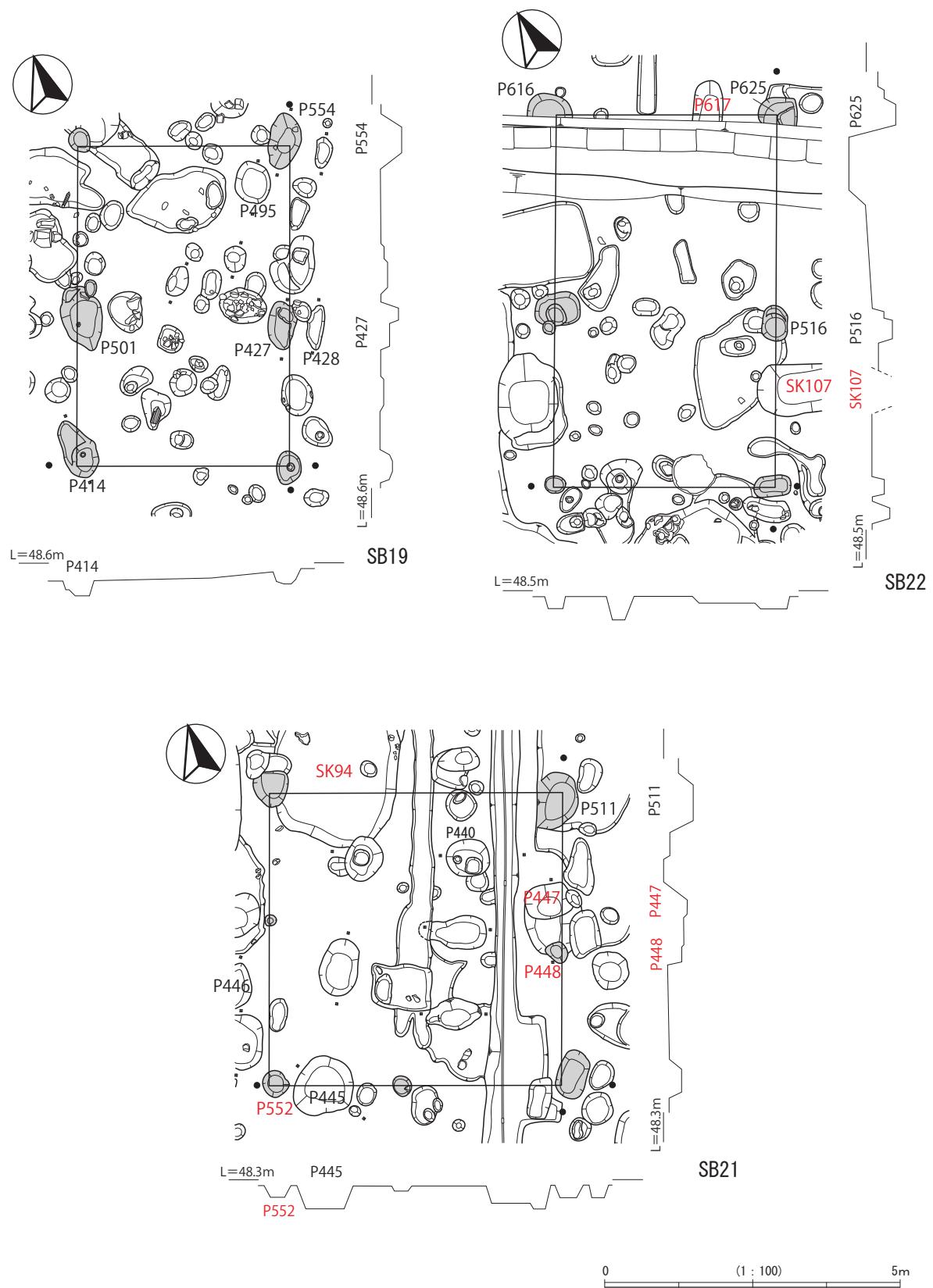
第82図 掘立柱建物 (SB) 遺構図6 (赤字: 実測遺物出土遺構)



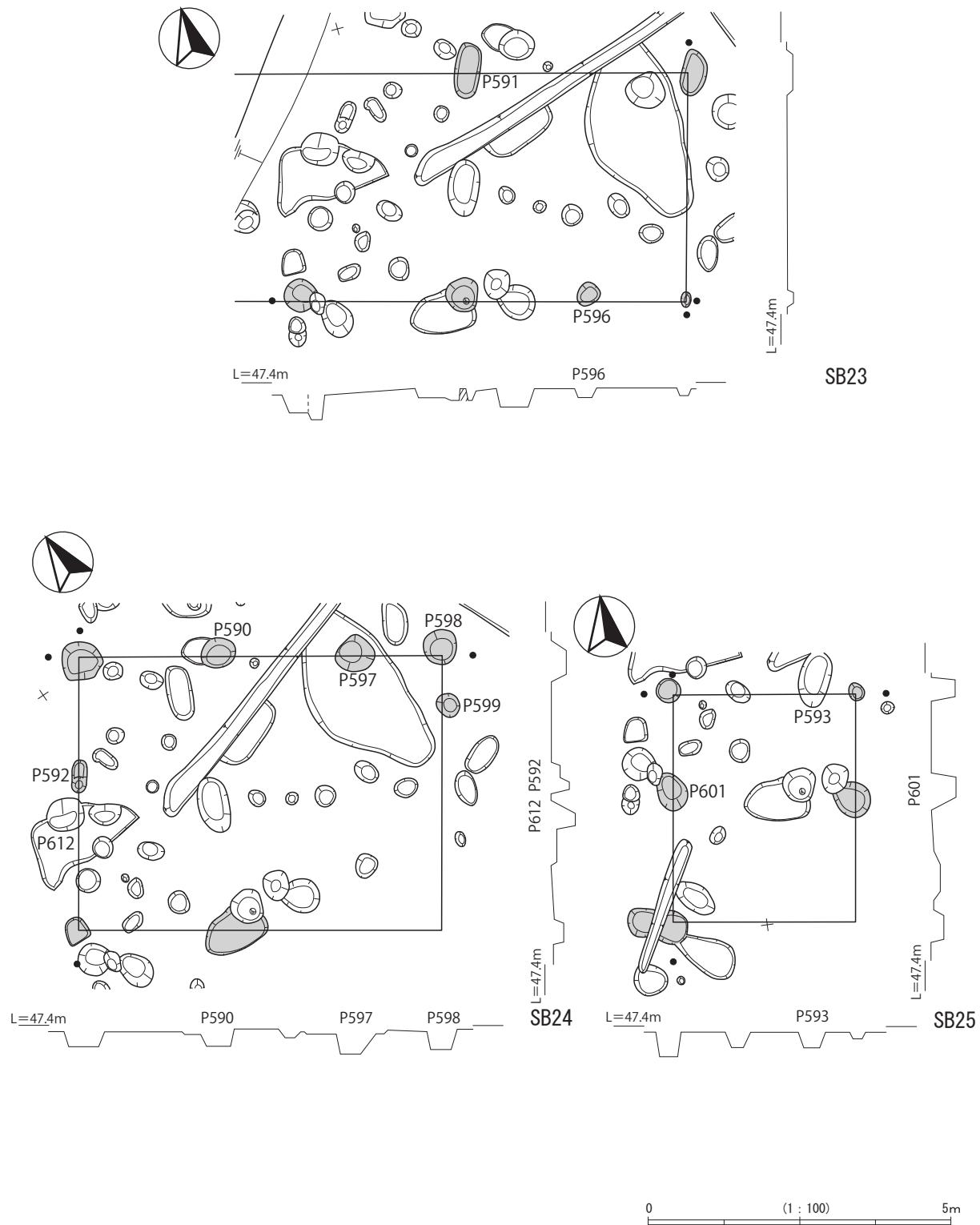
第83図 掘立柱建物(SB) 遺構図7(赤字: 実測遺物出土遺構)



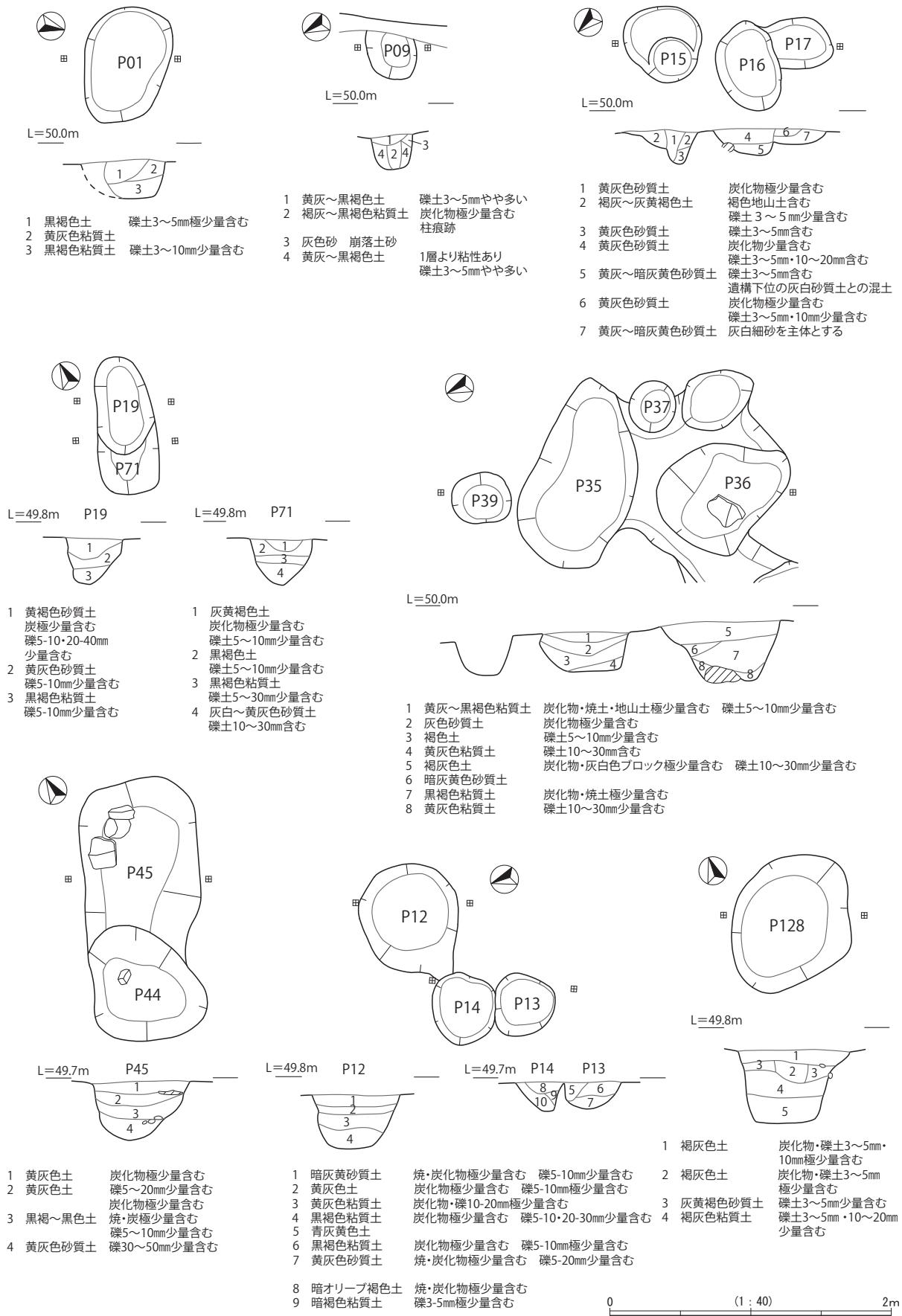
第84図 掘立柱建物 (SB) 遺構図8 (赤字: 実測遺物出土遺構)



第85図 掘立柱建物(SB)遺構図9(赤字:実測遺物出土遺構)

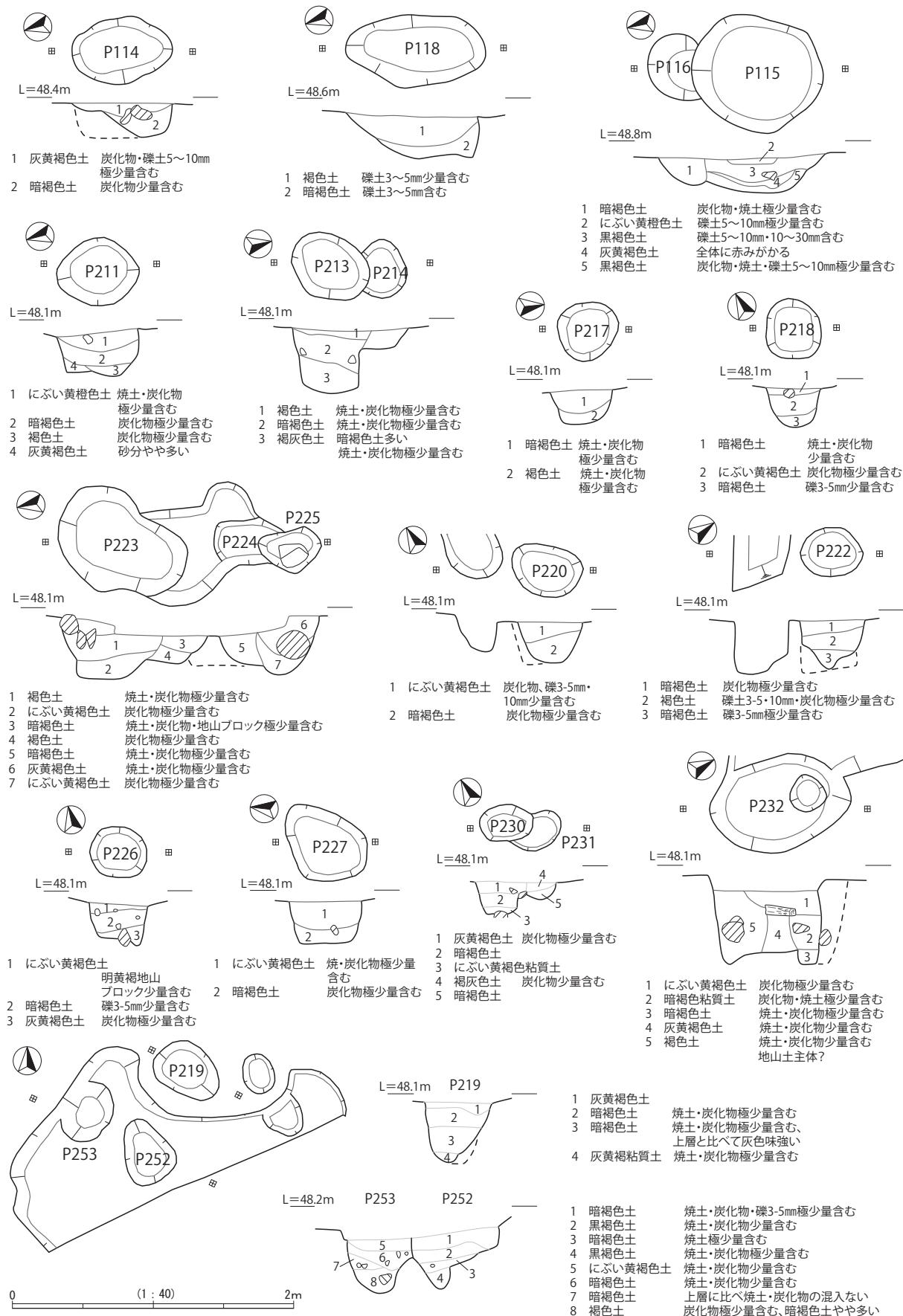


第86図 掘立柱建物 (SB) 遺構図 10

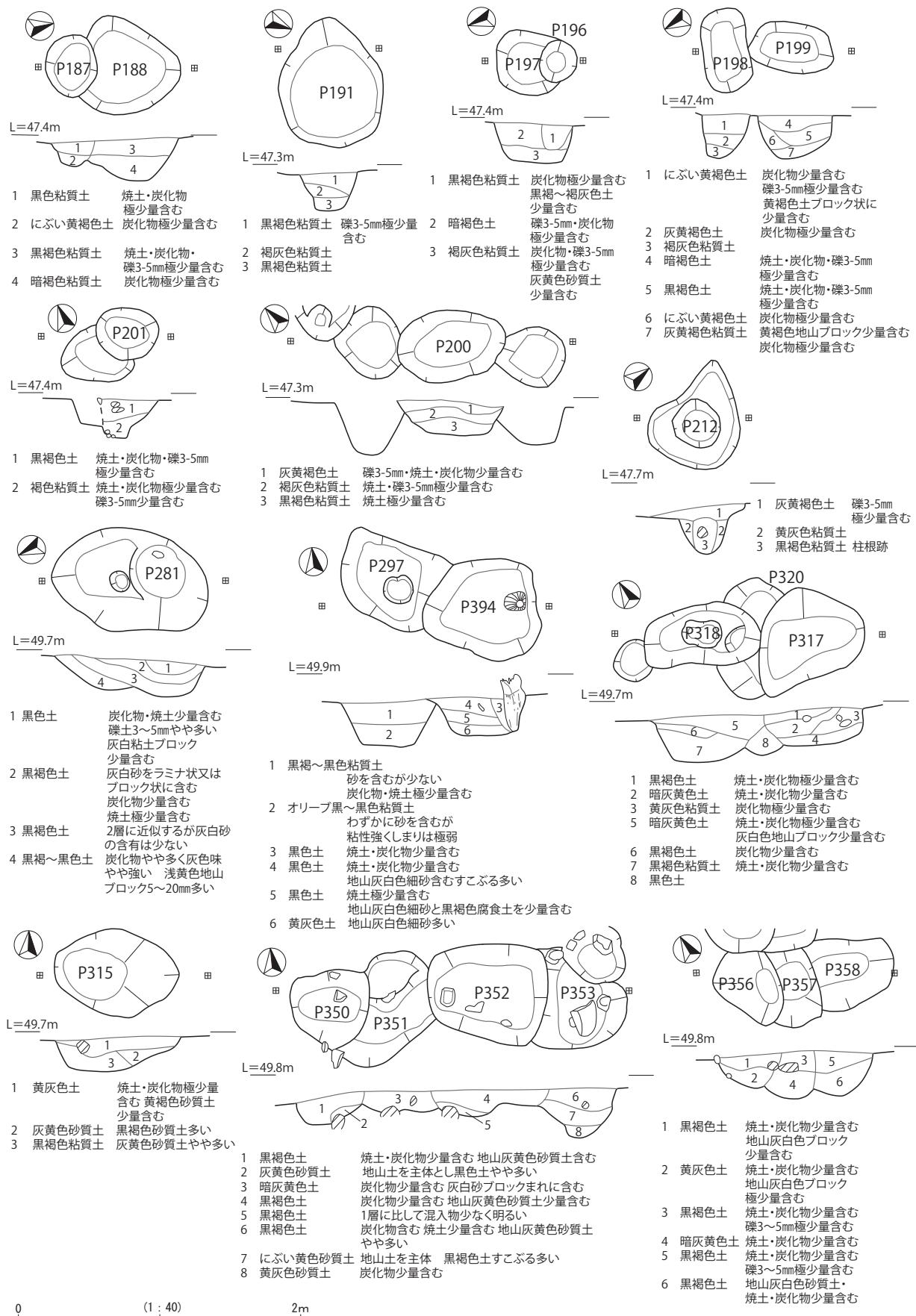


第87図 掘立柱建物周辺ピット1 (SB01・03)

第5節 掘立柱建物 (SB)・ピット (Pit)

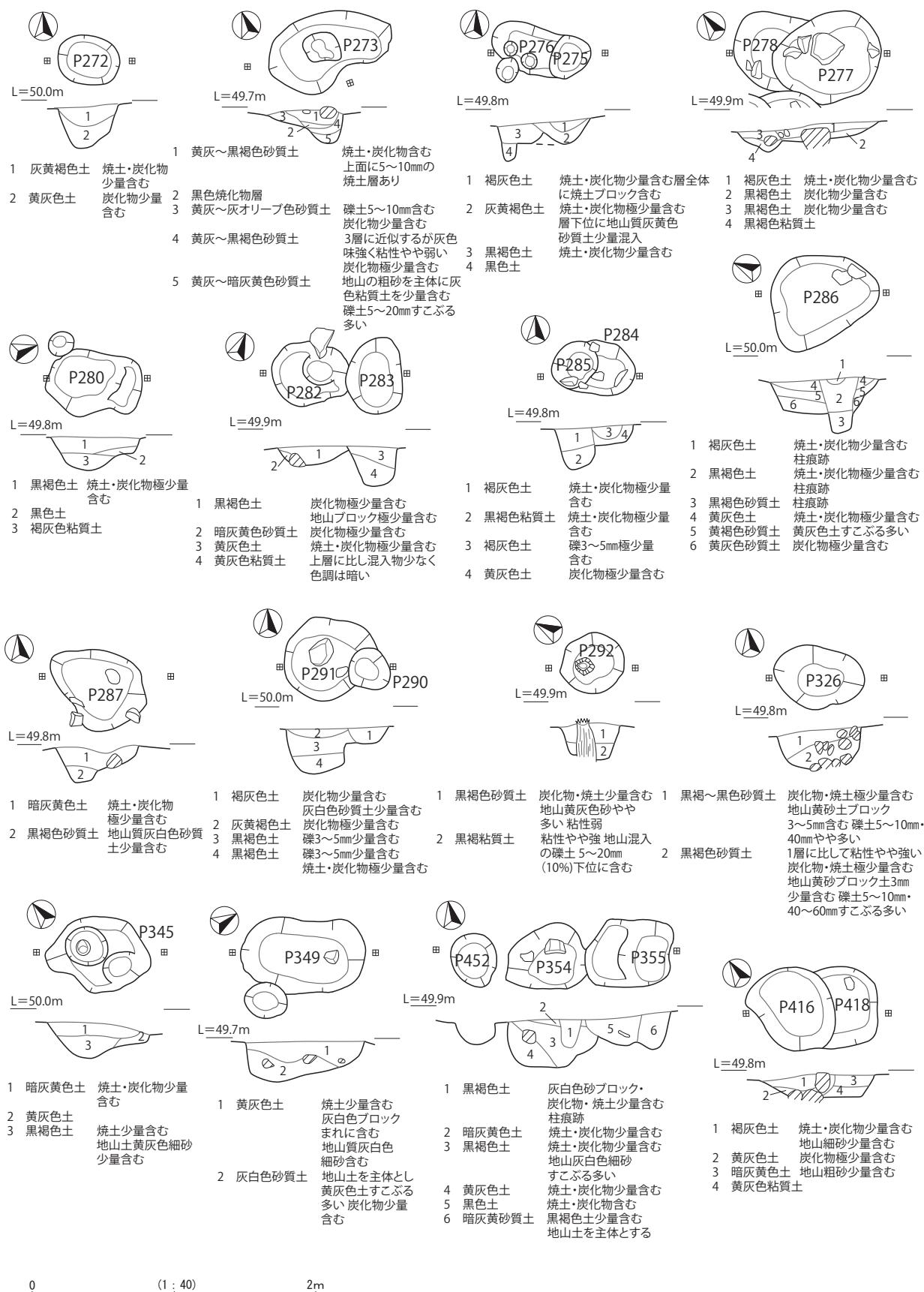


第88図 掘立柱建物周辺ピット2 (SB04・06・07)

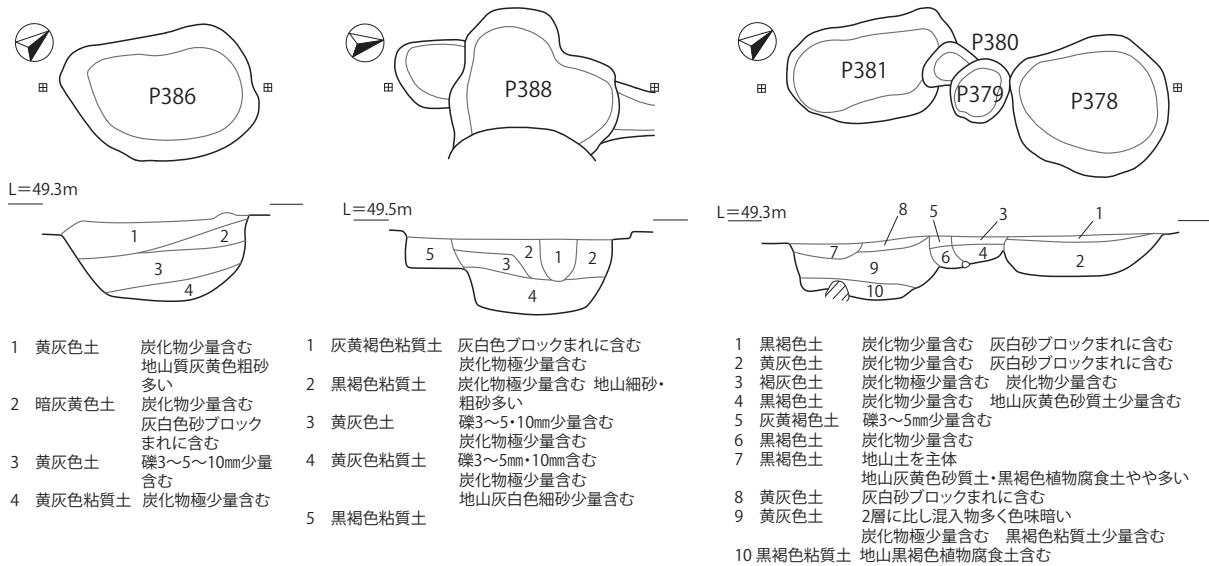
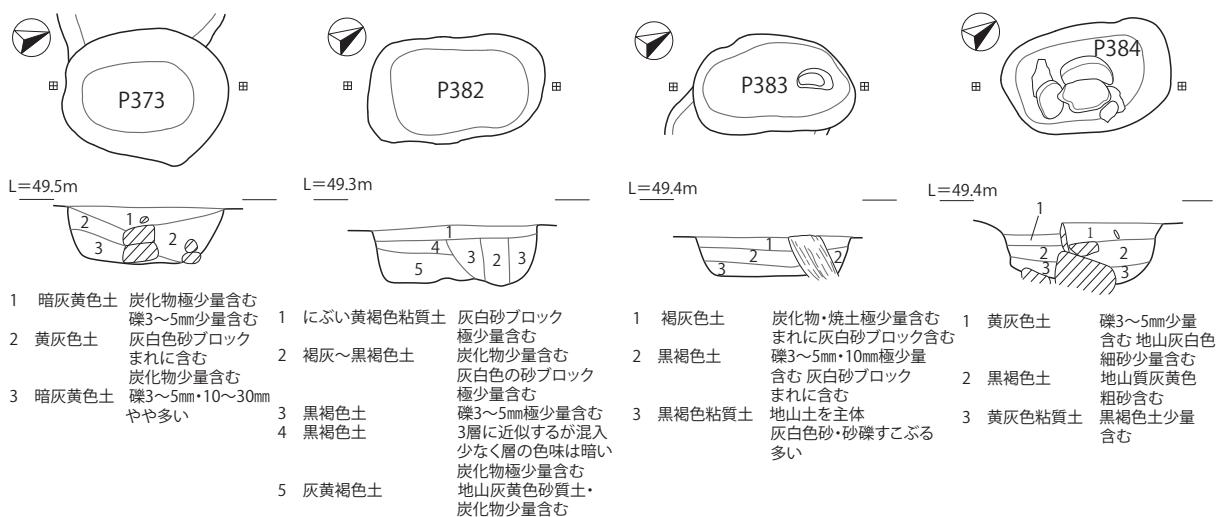
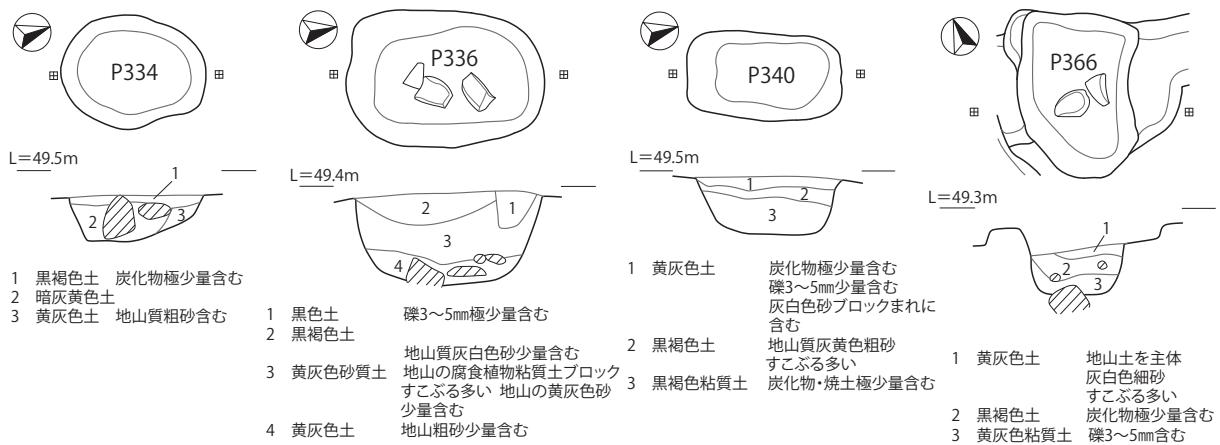


第89図 掘立柱建物周辺ピット3 (SB08・09・10)

第5節 挖立柱建物 (SB)・ピット (Pit)



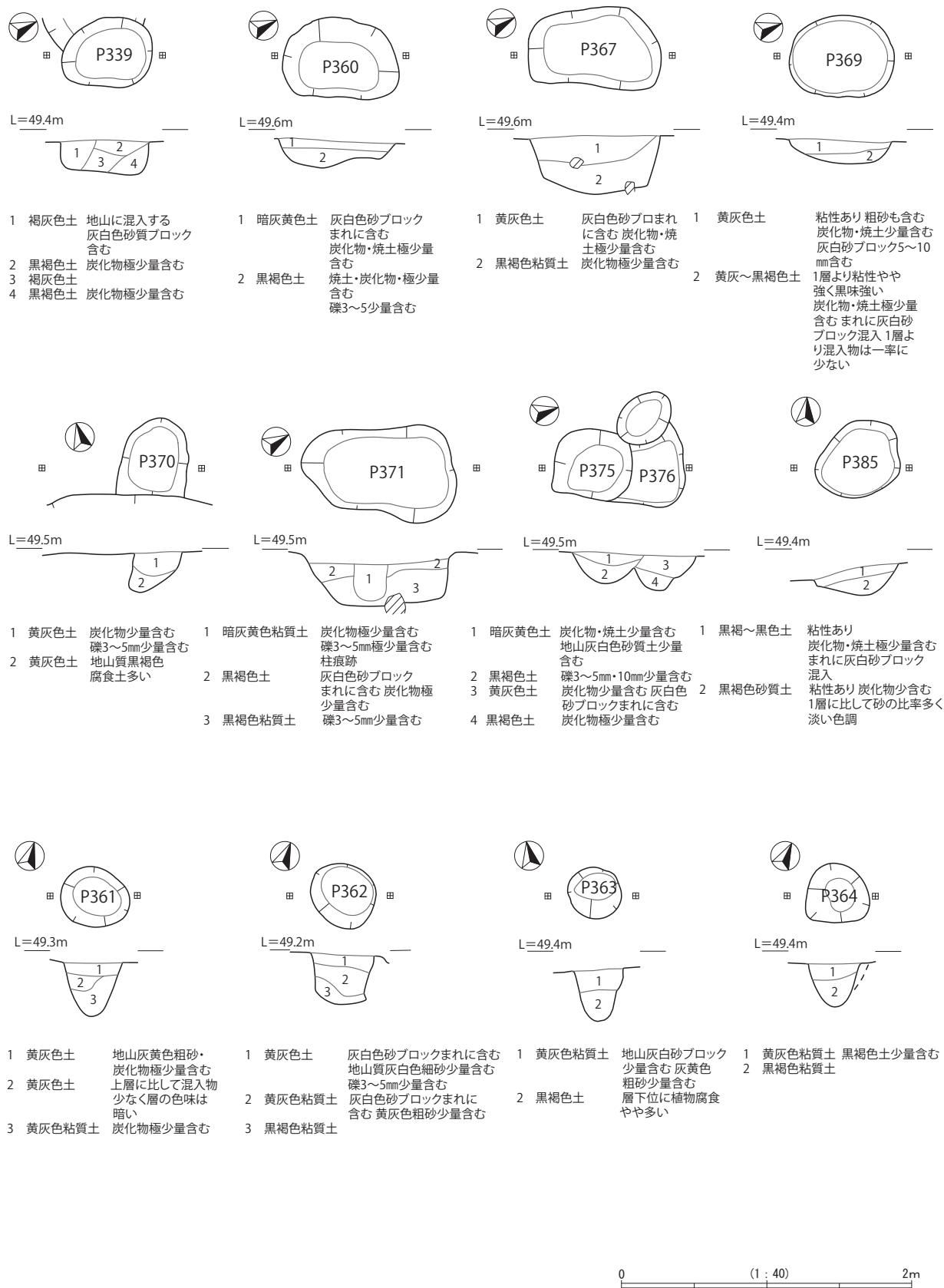
第90図 挖立柱建物周辺ピット4 (SB09・10)



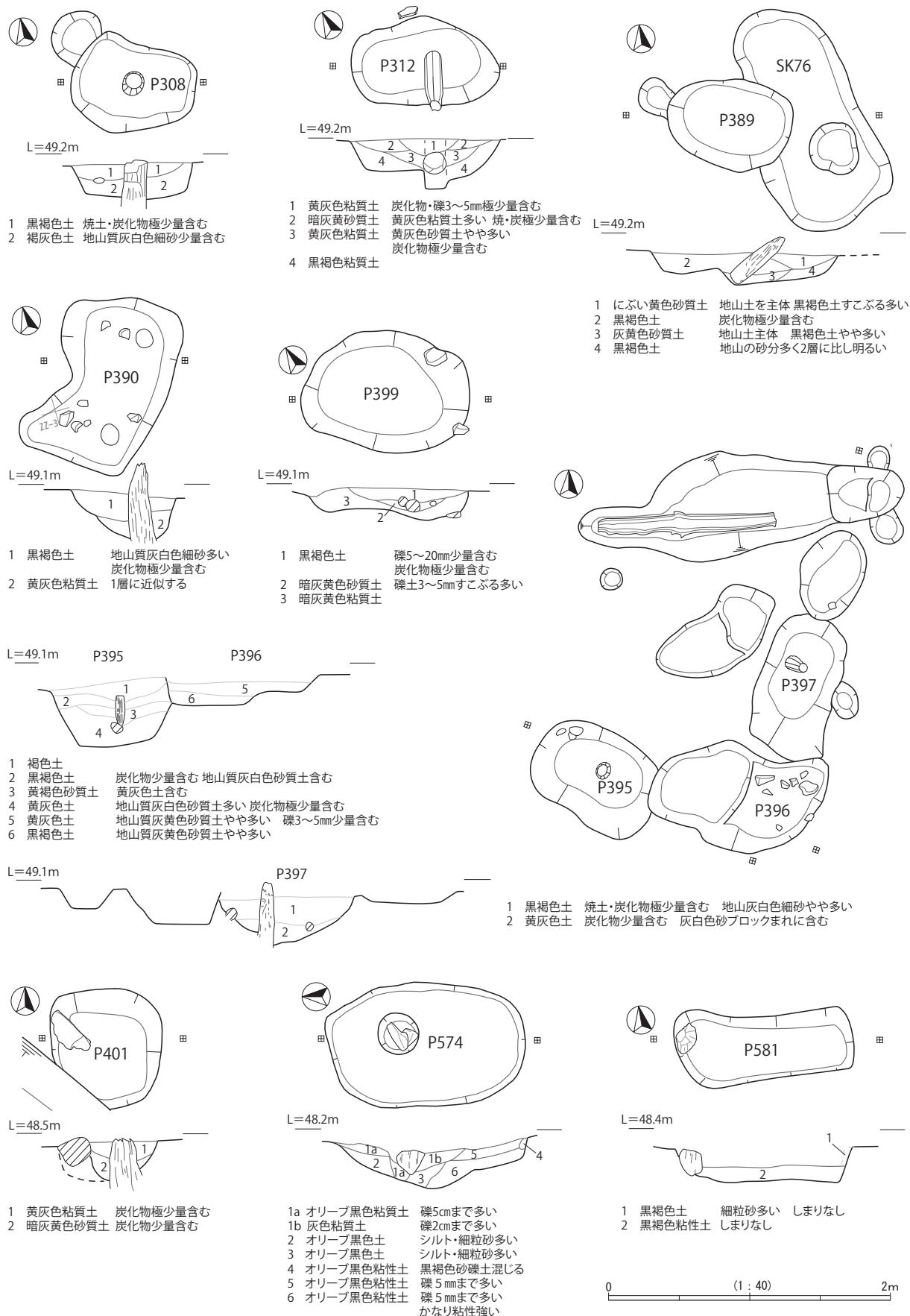
0 (1 : 40) 2m

第91図 掘立柱建物周辺ピット5 (SB11・12・13)

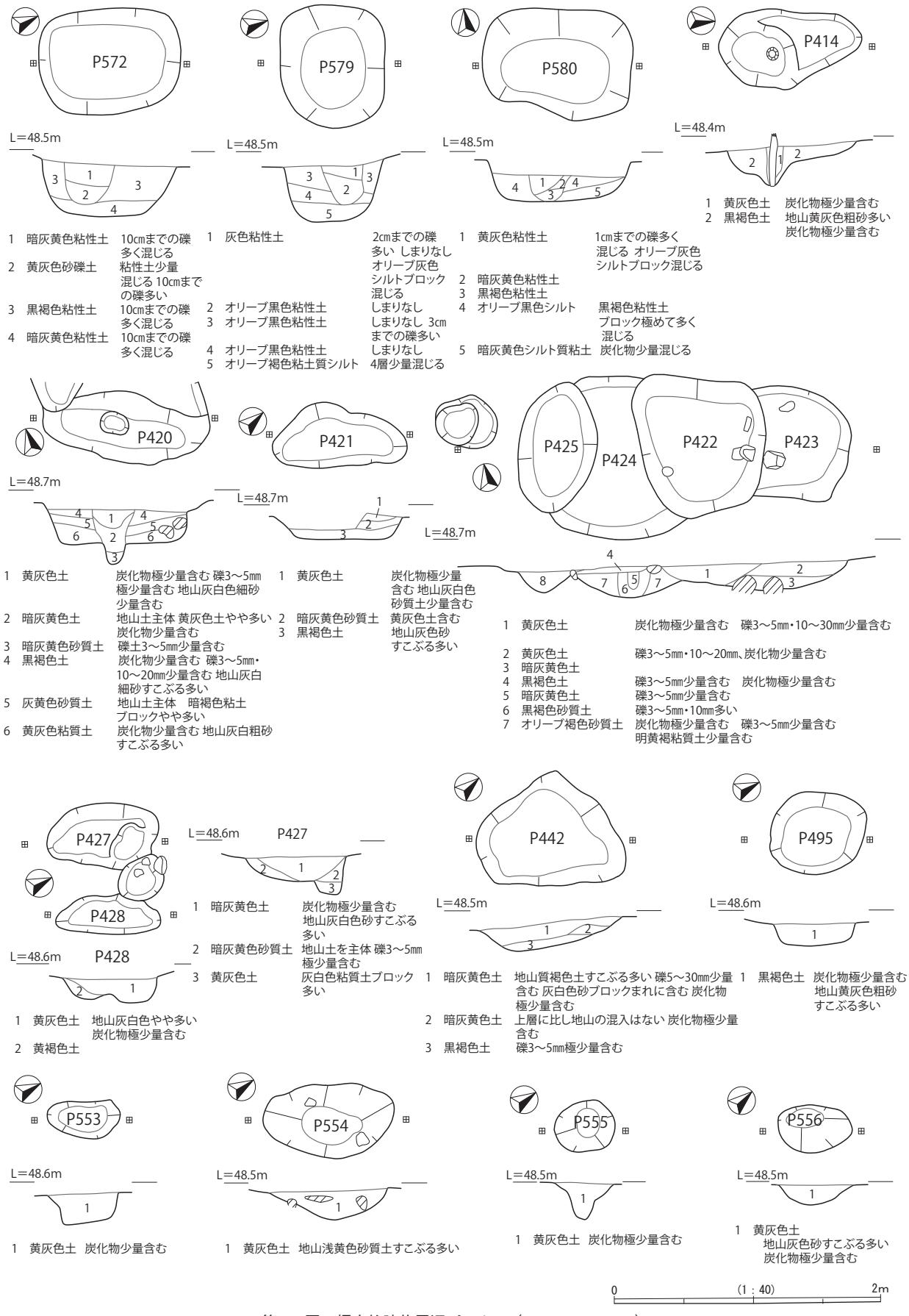
第5節 掘立柱建物 (SB)・ピット (Pit)



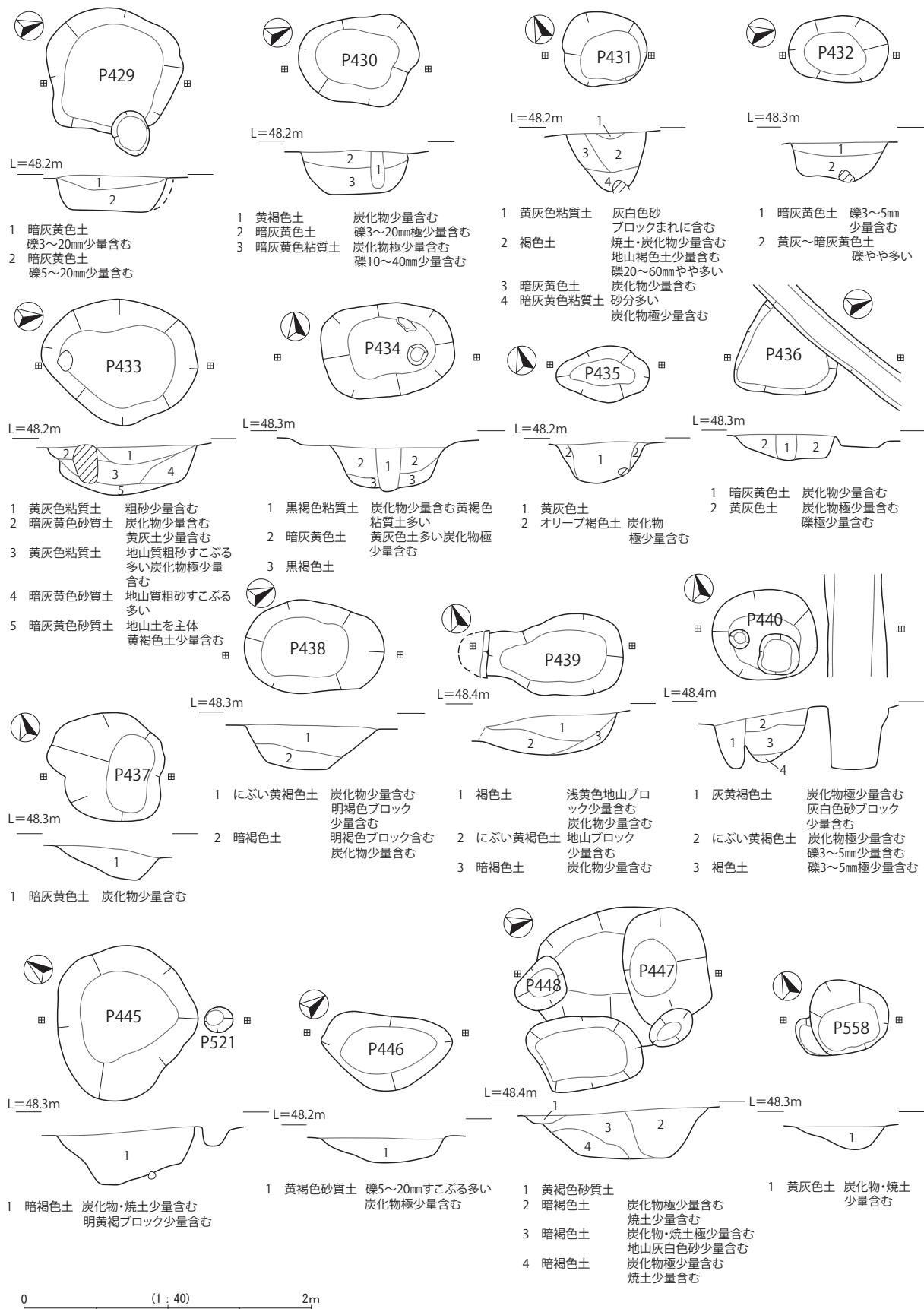
第92図 掘立柱建物周辺ピット6 (SB12・13・14)



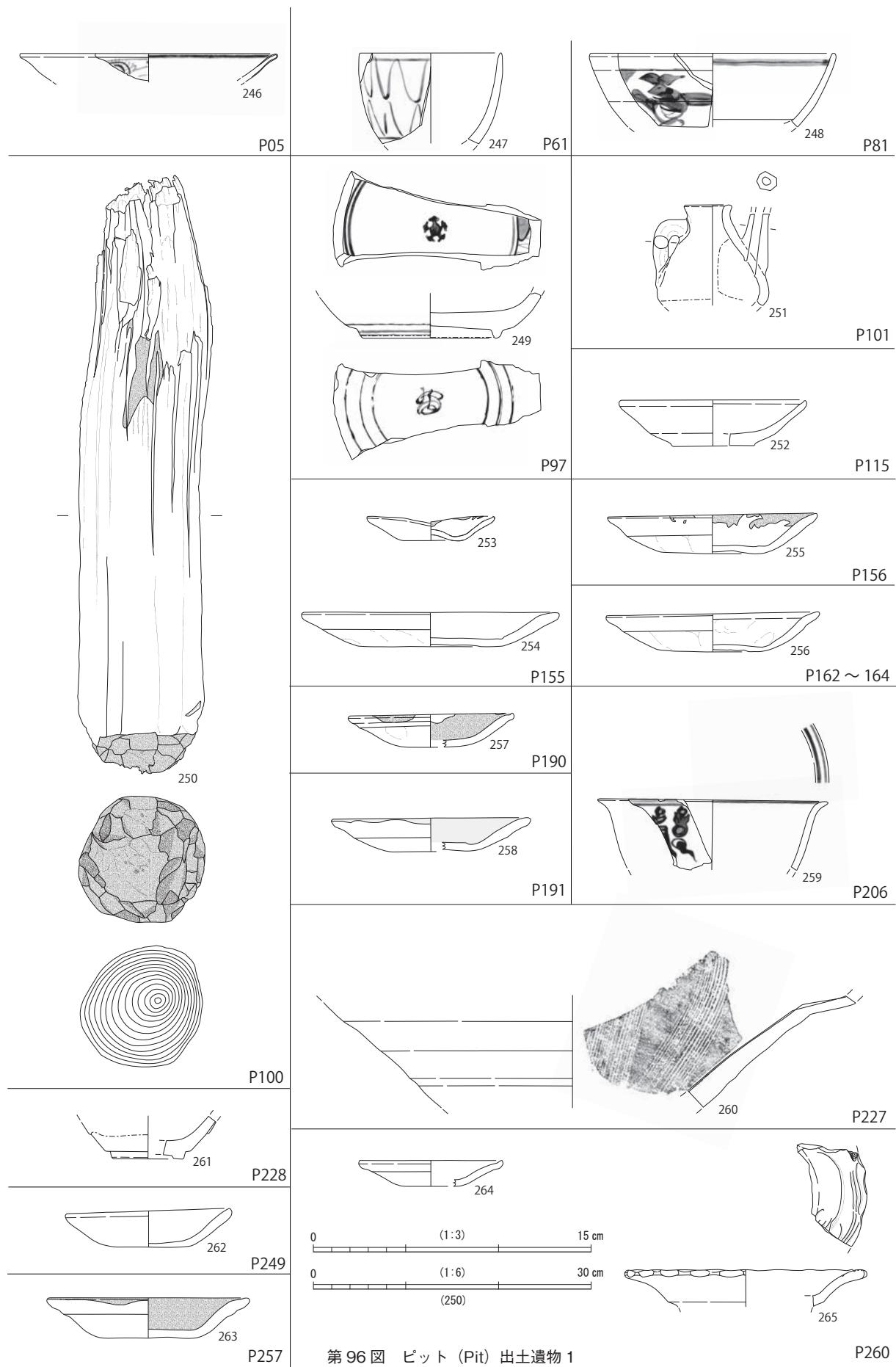
第93図 掘立柱建物周辺ピット7 (SB15・16)



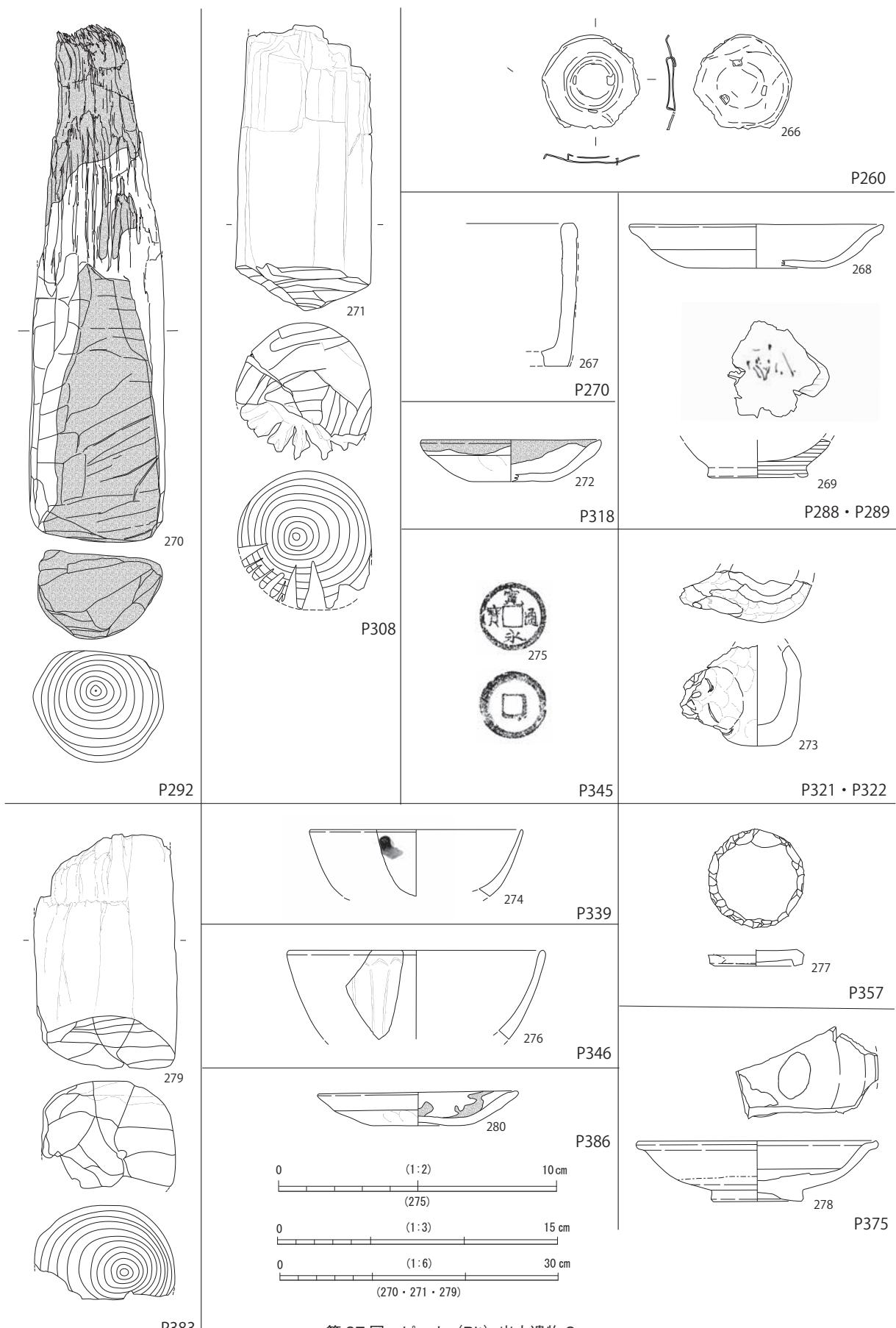
第94図 掘立柱建物周辺ピット8 (SB17・18・19)



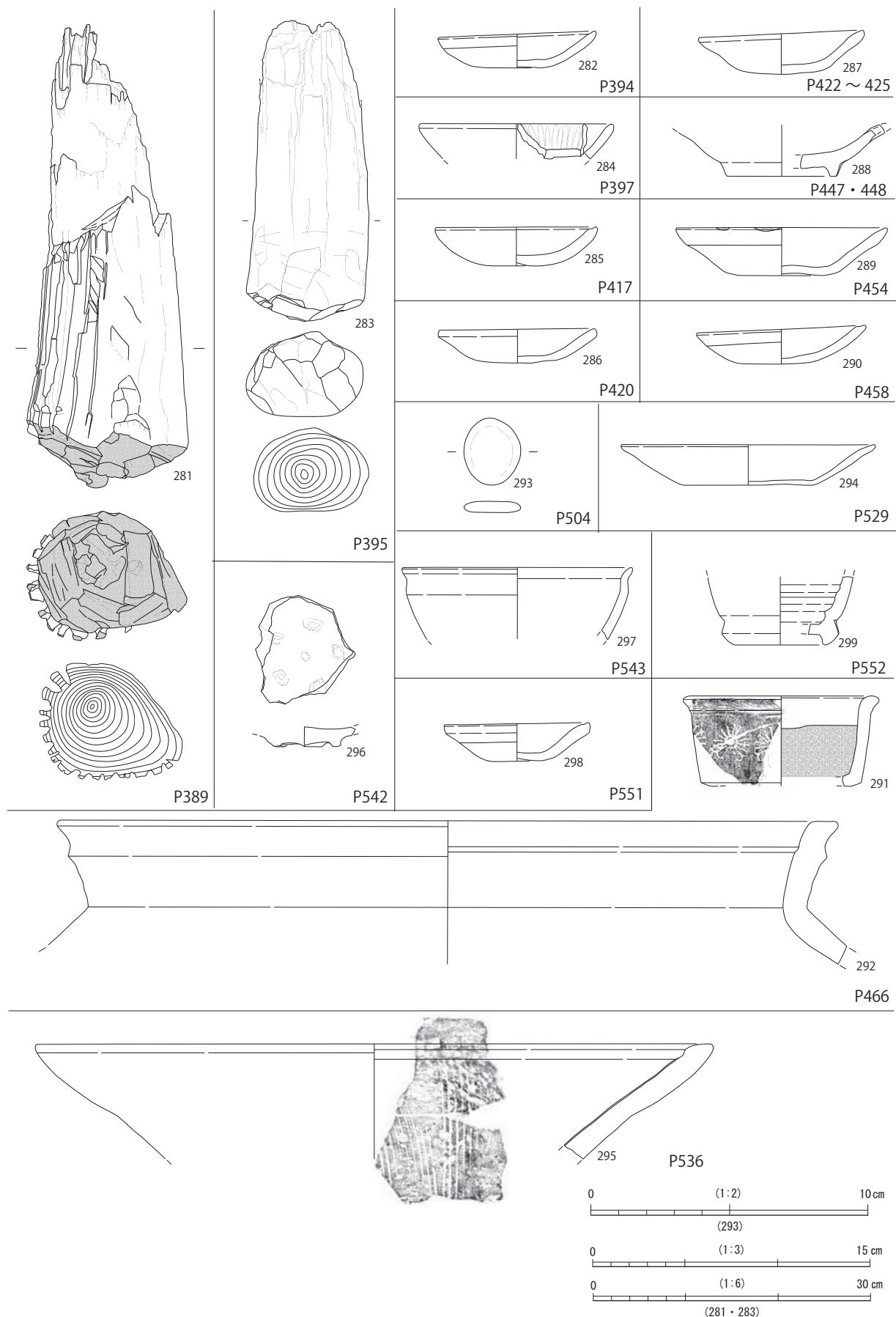
第95図 掘立柱建物周辺ピット9 (SB20・21)



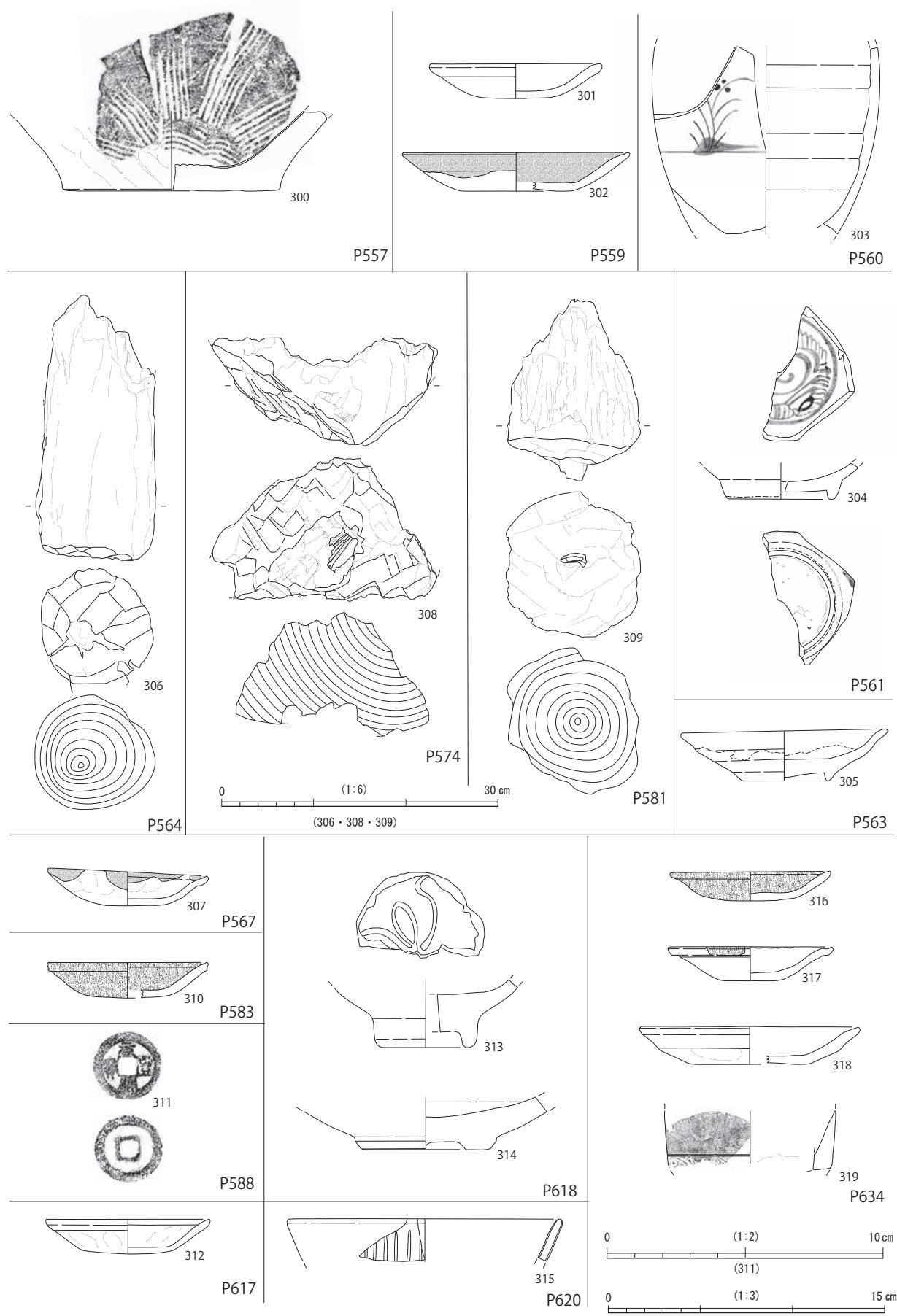
第96図 ピット (Pit) 出土遺物 1



第97図 ピット(Pit)出土遺物2

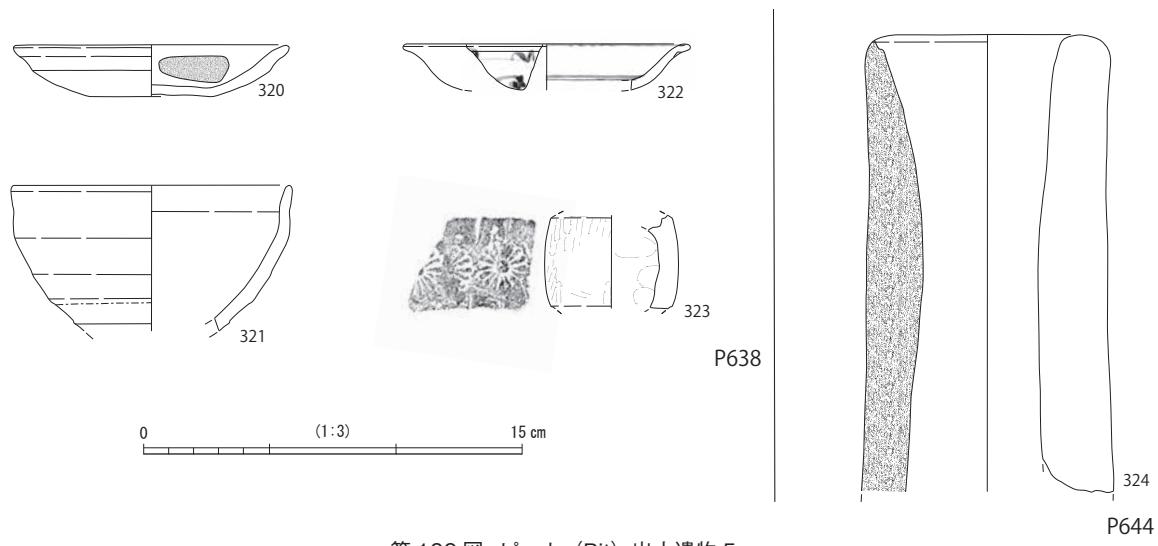


第98図 ピット (Pit) 出土遺物 3



第99図 ピット (Pit) 出土遺物 4

第5節 掘立柱建物 (SB)・ピット (Pit)



第100図 ピット (Pit) 出土遺物 5

第6節 S X

土坑（SK）、溝（SD）等との判別が難しい遺構をSXとした。調査区全域でSX01～08の遺構番号が付くが、SX08は南2区南西部の整地土に該当するため、ここでは除外して規模等を示した（第14表）。なお、SX全体からは破片数にして約420点の土器・陶磁器類が出土している。



第101図 第4・5次 SX配置図

遺構名	調査区	遺構図版	規模(cm)			遺物図版	土器・陶磁器類 破片数(点)	備考
			長軸	短軸	深さ			
SX01	北1区	第25、102図	330	264	4~6	—	土師器皿：1 肥前陶器皿：1	
SX02	北2区	第14・15、103図	970	350	40~50 (高さ)	第105図325~334	須恵器坏：1 土師器皿：58 瀬戸・美濃天目碗：1 瀬戸・美濃鉄釉皿：1 青花皿：1 珠洲窯・壺：9 越前甕：6 越前擂鉢：9 肥前染付碗：1 肥前染付皿：1 肥前陶器鉢：1 近代碗・皿等：33	塚状盛土
SX03	南1区	第22、104図	564	166	14	第105図335~337	土師器皿：10 瀬戸・美濃天目碗：1 青花碗：1 越中瀬戸皿：2 肥前鉄釉碗：1 肥前染付皿：1	SB16と重なる
SX04	南1区	第23、104図	310	238	32	—	土師器皿：6 越前甕：1 肥前皿：4 肥前擂鉢：1	
SX05	南2区	第26図	594~	180~	23	—	土師器皿：8 青花皿：1 越前擂鉢：1 肥前磁器碗：1 肥前擂鉢：1	
SX06 (SD18)	南2区	第21・26図	2,450~	200~330	55~76	第106図338~352	土師器皿：205 瀬戸・美濃天目碗：2 青磁皿：1 白磁皿：1 青花碗：1 青花皿：2 瓦質風炉：1 珠洲窯・壺：5 珠洲擂鉢：3 越前甕：6 越前擂鉢：16 越中瀬戸擂鉢：2 肥前碗：4 瀬戸・美濃染付小鉢：1	南2区のSD18と同遺構
SX07	北3区	第18図	220	190	13~20	—	土師器皿：10	

第14表 SX規模等一覧表

SX01（第25、102図）

北1区、SB01内に位置する。長軸330cm、短軸264cmの不整橢円形で、深さは4~6cmと浅い。内部には幾つものピットがみられるが、SX01との関係は不明である。

遺物量は少なく、土師器皿細片1点の他、II期の肥前灰釉陶器皿片1点が出土している。

SX02（第14・15、103図、第105図325~334）

北2区の遺構検出時に確認された高さ40~50cm台の塚状の広がりである。全体に10cm前後的小礫を含む盛土状の高まりで、盛土の下端ラインは東西方向に15mほど広がるが不定形である。中央にセクションベルトを残しつつ慎重に下部遺構を探ったが、盛土範囲内での顕著な掘り込み等は確認できなかった。

325は黄橙色系の土師器皿C類。見込ナデはわずかに凹む程度である。326は珠洲焼小壺底部片。立ち上がりは急で底面には静止糸切りがみられる。V期か。327は越前焼中甕。口縁部の断面は方形に近く、外面の稜は平坦となり直上に沈線が巡る。IV7群。328は越前焼擂鉢。口縁部は内傾先細りとする。沈線は浅く、擂目は沈線で止まる。IVb群。329は肥前染付皿で見込には草花文様がみえる。高台は小さく高台内は兜巾状となる。II期の製品である。330は流紋岩、331は砂岩の砥石で330は長辺4面を砥面とし、331の正面には数条の深い使用痕がみられる。332はディサイトの石鉢。腰部の立ち上がりが丸みを帯びる。333は粘板岩の方形硯で片側には7~8mmの縁をもつ。京都鳴滝硯である。334は黒色頁岩の碁石。長さは24mmとやや大きめである。なお、SX02出土破片は盛土内の遺物をすべて含んだものであり、1a層からの近代碗・皿片等をはじめ多数の雑多な製品が認められる。

SX03（第22、104図、第105図335～337）

南1・2区境に位置する。長軸564cm、短軸166cmの大型隅丸長方形で深さは10cm台と浅く、底面は全域を平らとする。SB16の隅柱の位置に重なるが、柱穴は確認されておらず切り合い等は不明である。

335は瀬戸・美濃鉄釉天目茶碗の口縁部片。器壁は厚く口縁端部を玉縁状とする。茶系が強く明るい釉色であり大窯4段階とした。336は越中瀬戸灰釉丸皿底部片。内堀部には菊花の印花文がはいり外底無釉の付高台とするA1a類である。大窯小森窯か。337は青花碗の底部片。見込を広く水平とする器形で、呉須の発色はにぶく高台内を無釉とする。D群粗製とした。他には、細片であるが肥前磁器片2点が出土している。

SX04（第23、104図）

南1区。長軸310cm、短軸238cmの隅丸方形で、SK81・83・84等の近世土坑に近接する。覆土には炭化物を少量含み、最下層9層は貼床状の粘土（シルト）層である。

遺物量は少ないが、肥前製品が一定量出土する。

SX06（第21・26図、第106図338～352）

南2区で検出された大溝SD18の続きであり、遺物はSX06として取り上げている。

土師器皿338・339（E類）、341（B類）は白色系の硬質土器で胎土中に黒雲母が目立つ。340は器壁が厚く内面は油煤痕で覆われる。外面横ナデは不明瞭でD類とした。342は腰折れの青磁稜花皿。内側面には粗い劃花文様がみえ、口縁の一部を漆継ぎで補修している。343は外面口縁帯に文様を施す青花碗。焼成があまく呉須の発色は不鮮明である。漆継ぎがみられる。C群粗製とした。344は青花皿B1群。外面文様は牡丹唐草文である。345は珠洲焼壺。くの字口縁をもち胎土は軟質で、外面には粗いタタキを施す。V期。346～348は越前焼擂鉢。346の口縁部はゆるやかに内傾し直下に浅い沈線が巡る。IVc群。347、348は内傾気味の端面の丸い先細りとなる口縁をもち、擂目は沈線を超える。IVb群。349は肥前染付碗で腰の張る器形となる。III期。350は肥前陶胎染付碗。胎土が灰色のため器面全体に化粧土をかけその上に粗い鉄絵装飾を施す。疊付には細かい砂が付着する。IV期。351は瀬戸・美濃の染付小鉢とした。胎土はガラス質で型成形とする。19世紀以降の製品である。352は越中瀬戸鋳釉擂鉢。口縁部は水平気味に肥厚し端部は丸くおさめる。胎土は淡橙色硬質で白色砂粒が目立つ。口縁端部上面が凹むB2類とした。なお、出土破片については中世が大半を占めるが、肥前等の近世遺物も少量認められる。



第102図 SX 遺構図1

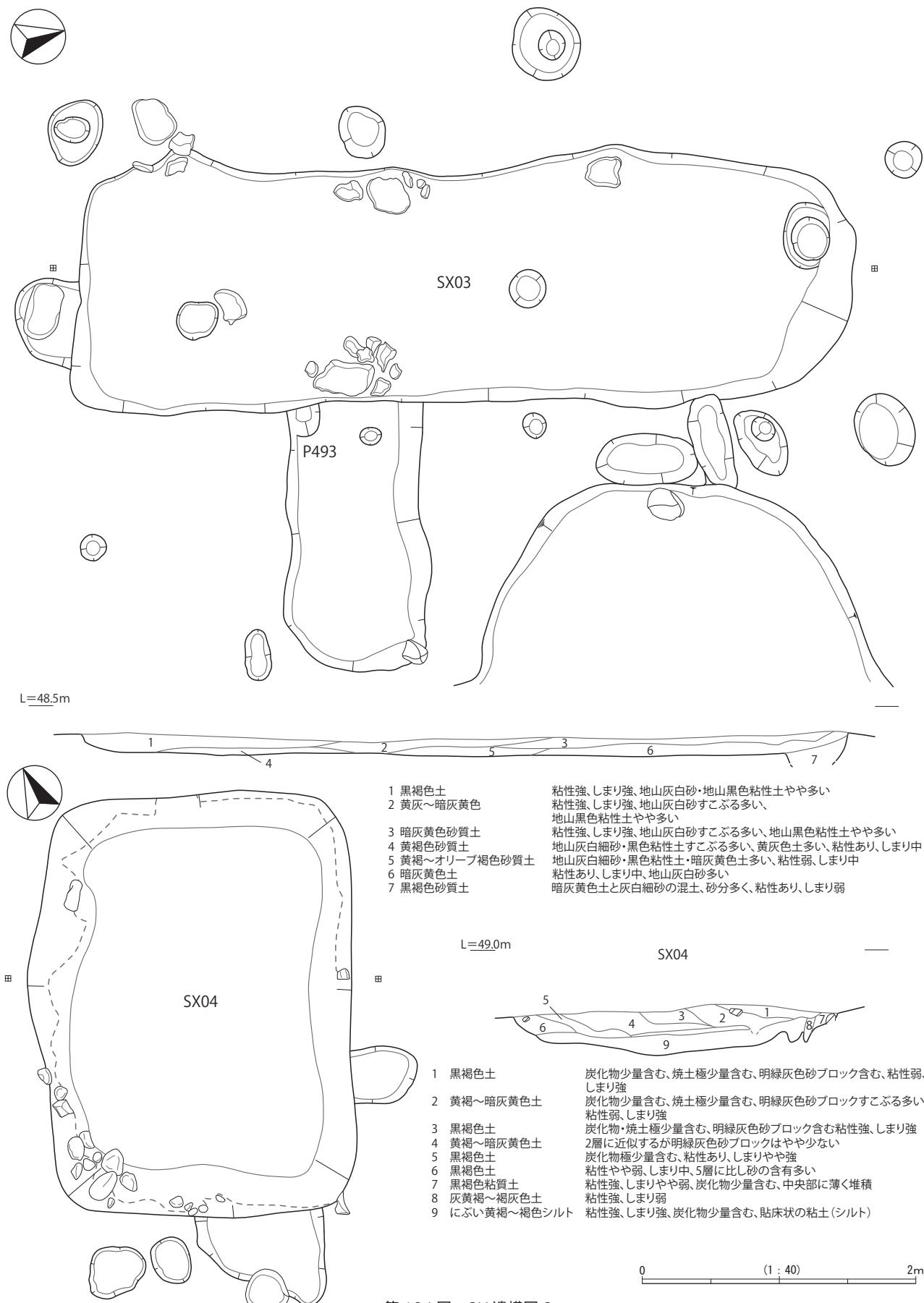


- 1a 黒褐色土
- 1b 黒褐色土
- 2 にぶい黄褐色～褐色土
- 3 にぶい黄褐色～暗褐色土
- 4 褐～灰黄褐色土
- 5 暗褐色土
- 6 にぶい黄褐色土
- 7 暗褐色～黒褐色土
- 8 にぶい黄褐色～暗褐色砂質土
- 9 暗褐色砂質土
- 10 にぶい黄褐色～暗褐色土
- 11 暗褐色土
- 12 暗褐色砂質土
- 13a 暗褐色砂質土
- 13b 暗褐色砂質土
- 14 暗褐色砂質土
- 15 暗褐色土
- 16 にぶい黄褐色～暗褐色砂質土
- 17 暗褐色砂質土
- 18 暗褐色砂質土
- 19 暗褐色砂質土
- 20 暗褐色～黒褐色砂質土
- 21 黒褐色砂礫土
- 22 暗褐色土
- 23 にぶい黄褐色～暗褐色砂質土
- 24 暗褐色砂質土
- 25 褐～暗褐色砂質土
- 26 暗褐色砂質土
- 27 暗褐色～暗褐色砂質土
- 28 暗褐色砂質土
- 29 暗褐色砂質土

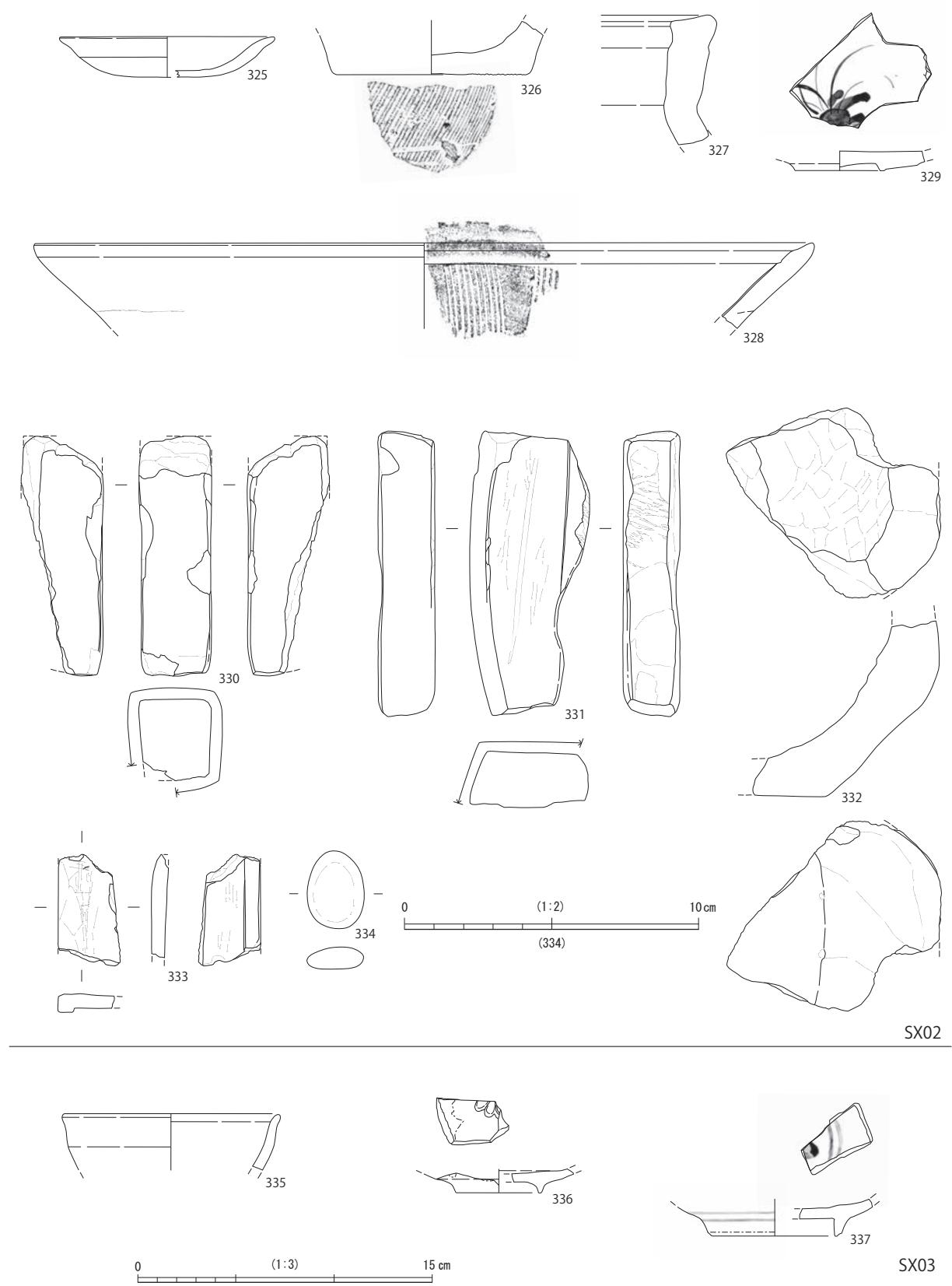
しまり弱、層中の礫は多くない、現表土、竹根の影響により精緻な土層観察と分層は困難、礫土3~5mm・10~20mm・50~100mm含む(5~20%)
 しまり弱、層中の礫は多くない、現表土、比較的近年の削平であると思われる
 しまり弱、3層に比し礫はやや少ない、色調は薄め、3層崩落土
 磨き度は高い、石積盛土?礫土3~5mm・10~20mm・50~100mm含む(40~50%)
 10層よりしまるが5層以下より弱い、炭化物極少量(1%未)礫土3~5mm・10mm含む(5%)畦状を呈す
 炭化物・焼土極少量(1%未)礫土3~5mm・10~50mm含む(5%)下位層に比べ色調は暗め
 炭化物・焼土極少量(1%未)礫土3~5mm・10~20mm含む(3%)褐色地山含む(10%)上下層との層界は明瞭・平坦
 炭化物・焼土極少量(1%未)礫土3~5mm含む(4%)
 磨き度は高い、石積盛土?礫土3~5mm・10~20mm含む(7%)
 炭化物極少量(1%未)礫土3~5mm・10~30mm含む(5%)5~28層に近似するが砂分多い
 烧土極少量(1%未)礫土3~5mm含む(3%)9層に比し礫は少なく砂分少ない
 磨き度は高い、石積盛土?礫土3~5mm・10~30mm含む(5%)14~15層などと異なり1a層の基質土に近い土を混入する
 31層の砂質土と11層に近い土との混土に礫土3~5・10~30mmを多く含む(30%)
 磨き度は高い、石積盛土?礫土3~5mm・10mm含む(3%)やや粗めの粗砂混じり
 磨き度は高い、石積盛土?礫土3~5mm・10~20mm含む(15%)
 磨き度は高い、石積盛土?礫土3~5mm・10~20mm含む(50%)
 磨き度は高い、石積盛土?礫土3~5mm・10~20mm・50~100mm含む(60%)粗砂多い(20%)
 磨き度は高い、石積盛土?礫土3~5mm・10~20mm・50~150mm含む(40%)赤褐色砂礫含む、粗砂含む(30%)
 比較的古い段階での削平後堆積土
 繊密度は23層より低い、粗砂含む(10%)
 磨き度は高い、石積盛土?礫土3~5mm・10~20mm含む(7%)
 粗砂含む(5%)31層に比し粗砂多く、わずかに褐色味を帯びる
 炭化物少量(1%)31層より粗砂多く(5%)わずかに褐色味を帯びる
 磨き度は高い、石積盛土?礫土3~5mm・10~20mm含む(3%)粗砂含む(5%)
 炭化物・焼土極少量(1%未)礫土3~5mm・10~20mm含む(3%)5層に比し色調明るく砂分多い
 炭化物極少量(1%未)礫土3~5mm・10~20mm含む(2%)28~31層の中間層相

- 30 褐～暗褐色砂質土 層相は31層に近似する、色調や礫の含有量は29層に近い、礫土3~5mm含む(2%)
- 31 褐～暗褐色砂質土 29層に比し極少ない、礫土3~5mm極少量(1%未)でほとんどみられない、細砂を主体とする
- 32 褐色砂礫土 細砂を主体とする粗砂～礫土50mmからなる、脆弱、地山?
- 33 赤褐～暗褐色砂質土 磨き度は高い、石積盛土?礫土3~5mm・10~30mm含む(50%)地山?
- 34 暗褐色砂質土 28層と32層の混土

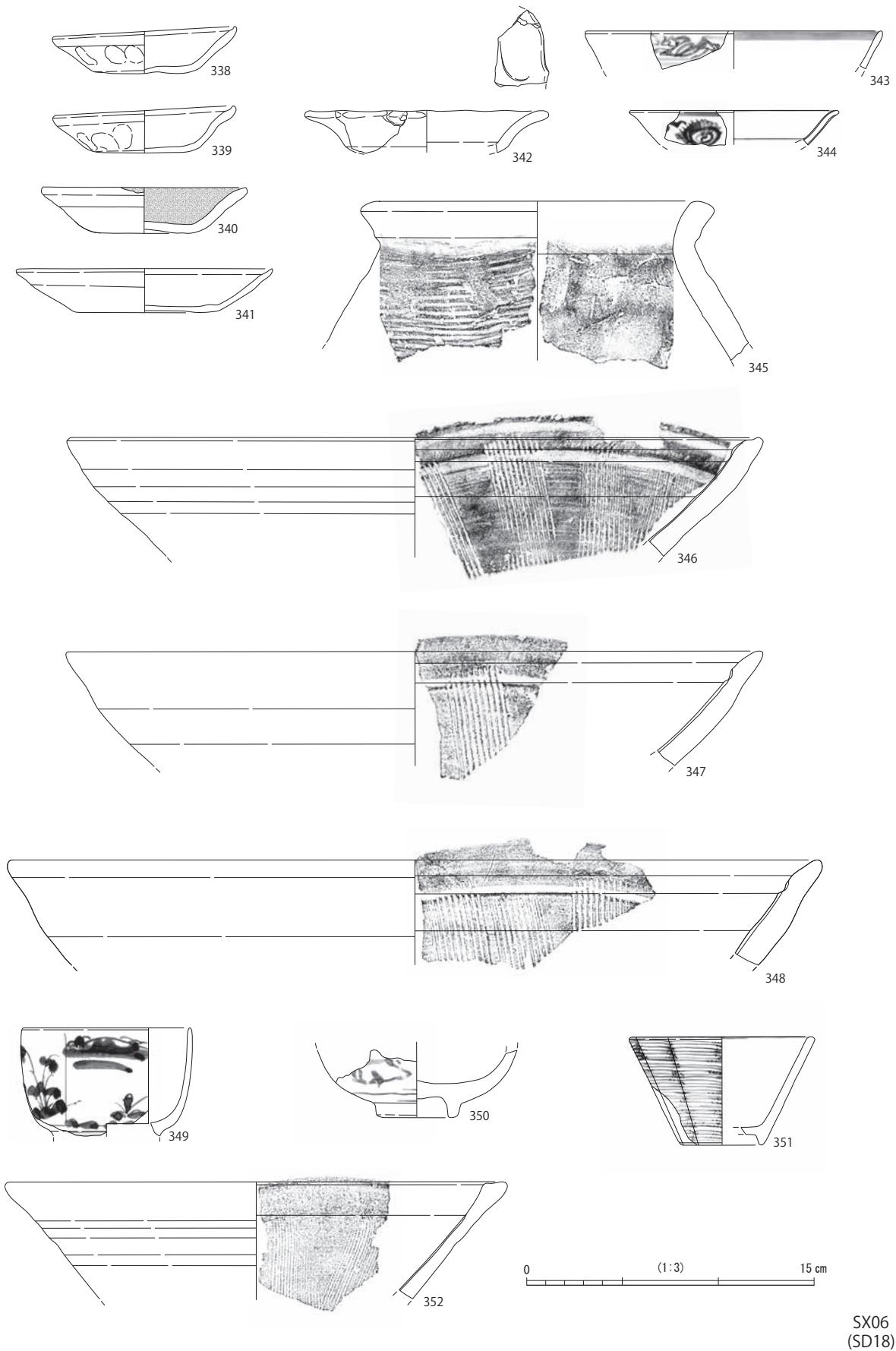
第103図 SX 遺構図2



第104図 SX 遺構図3



第105図 SX出土遺物1



第106図 SX出土遺物2

第7節 包含層等

包含層等（第107～112図353～406）

ここでは、包含層、遺構検出、表土除去等、遺構外からの出土遺物を主に取り上げる。包含層等全体で2,806点の土器・陶磁器破片を確認しているが、近世以降の陶磁器類も801点（肥前等426点、近代以降375点）と相応の量比（28.5%）を占めている。

353～355は口径9cm台の土師器皿E類。いずれも口縁端部をわずかにつまみあげ、353、354は口縁部に油煤痕が付着する。

356は瀬戸・美濃灰釉丸碗。典型的な外面印花文はみられないが、口縁上部に蓮弁風の单位文が刷毛状にはいる。大窯1段階。357～359は瀬戸・美濃灰釉端反皿類。358、359の見込には印花文、高台内には輪トチの痕跡が残る。大窯1・2段階。360は越中瀬戸の鉄釉耳付水注か。口径の広い短い頸部にやや肩の張る体部をもち、露胎とする底面は回転糸切りとする。なお、底部の釉境には数箇所の手跡が付き、底をもっての浸け掛けの様子がうかがえる。注口の張り出しあは小さく、装飾性の強い横耳が注口にかぶさるように取り付く瀬戸・美濃製品にはみられない仕様である。胎土は灰白色で堅く口唇部上面は釉剥ぎされる。調査区に隣接する神明神社前の山裾からの表採品である。

361は青磁無文碗の底部。見込には放射線状に線彫文様がはいり、円形気味に打ち欠かれた高台内は無釉とする。362は青磁深鉢の底部とした。外面には底部から2cm余りの位置に直径1cm、高さ5mm弱の鉢状の円形浮文を約2cm間隔で張り付けている。釉のかかりは薄く、高台畳付を除いて全面施釉される。全形は不明であるが、静嘉堂文庫美術館所蔵の青磁牡丹唐草文深鉢（青磁浮牡丹太鼓胴水指）の底部にも近く、水指の可能性もあるか。363は高台径が153mmとなる大型の青磁皿である。高台内を蛇の目釉剥ぎとしチャツを用いて畳付を釉掛けする明代龍泉窯の製品である。漆継ぎがみられる。364は見込が饅頭心となる青花碗。見込に牡丹唐草文、高台内に「大明年造」とはいるE VI群である。365～368は青花皿である。365、366は見込にそれぞれ玉取獅子、十字花文を描く端反りのB1 VII群、B1 VI群。367は見込に「長命富貴」、高台内に「天下太平」とはいる端反りタイプのB2 IX群である。368は碁笥底外面の露胎幅が15mm前後と広く、外面に略字文、見込に吉祥文字文がはいるC III群。見込の一部に砂が降る傷物ではあるが漆継ぎで補修されている。

369は珠洲焼研磨壺。口縁部は外反し端部は玉縁状に大きく肥厚する。肩の張る器形で外面全体に灰がかかる。V期。370、371は珠洲焼擂鉢。口縁は体部の延長線上に先細りに伸び、内面の段はほとんどなく粗い波状文を回す。胎土は砂氣を帶びる。VI期後半か。

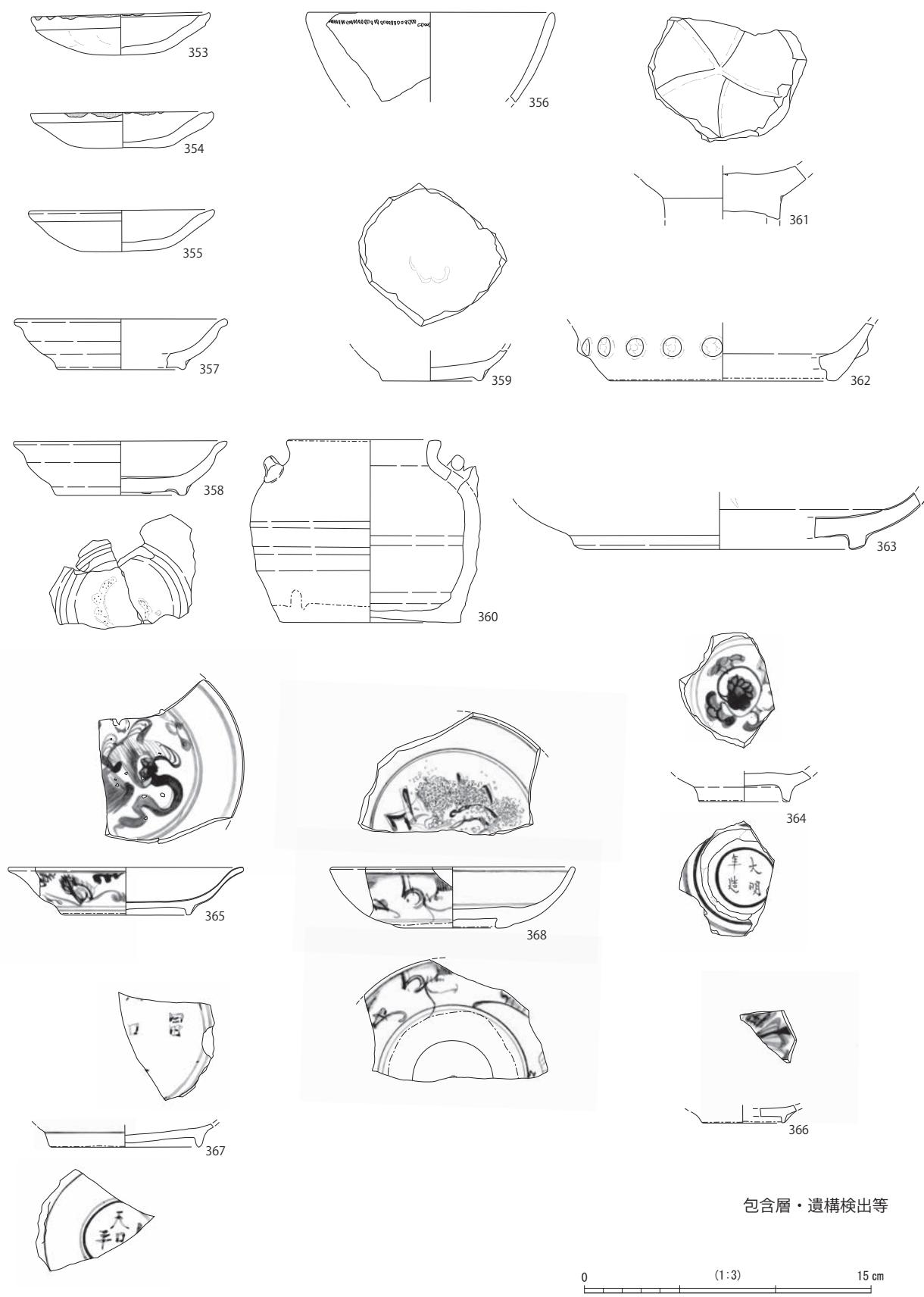
372は肥前の染付碗。外面文様は網目文となるか。底部周辺を無釉とする17世紀中葉II期の製品である。373、374は見込蛇の目釉剥ぎ上に淡黄白色のアルミナ砂を塗布する染付碗で、高台はハの字状とし見込中央には丸状の略文がはいる。肥前V期。375は肥前染付皿。見込全体に草花文様を配し、高台内は兜巾状となる。II期。376は見込蛇の目釉剥ぎ、高台周辺を無釉とする肥前白磁皿。IV期。

377は器壁が厚く灰釉のたっぷりとかかる肥前I期、全面施釉の陶器碗である。378は越中瀬戸の鉄釉丸碗。削り出し輪高台周辺を無釉とし、内外面ともに黒褐色釉を部分的に流しがけする。胎土は灰白色硬質で、登窯17世紀の製品である。379は見込蛇の目釉剥ぎ、380、381は高台周辺を無釉とし、見込に3箇所のハリ目跡と雑な鉄絵文様を施す陶器碗。381は外面腰部に判読不明の墨書がみえる。ともに19世紀以降の製品である。382～384は最も古手となる肥前I期の陶器皿。382は口縁部を波状としその内面には鉄釉を塗る。白濁の強い藁灰釉に底部周辺を無釉とし高台上にはハマの一部が付着する。383、384は見込に胎土目跡がみられる。385～391は越中瀬戸の鉄・灰釉皿類で、385～

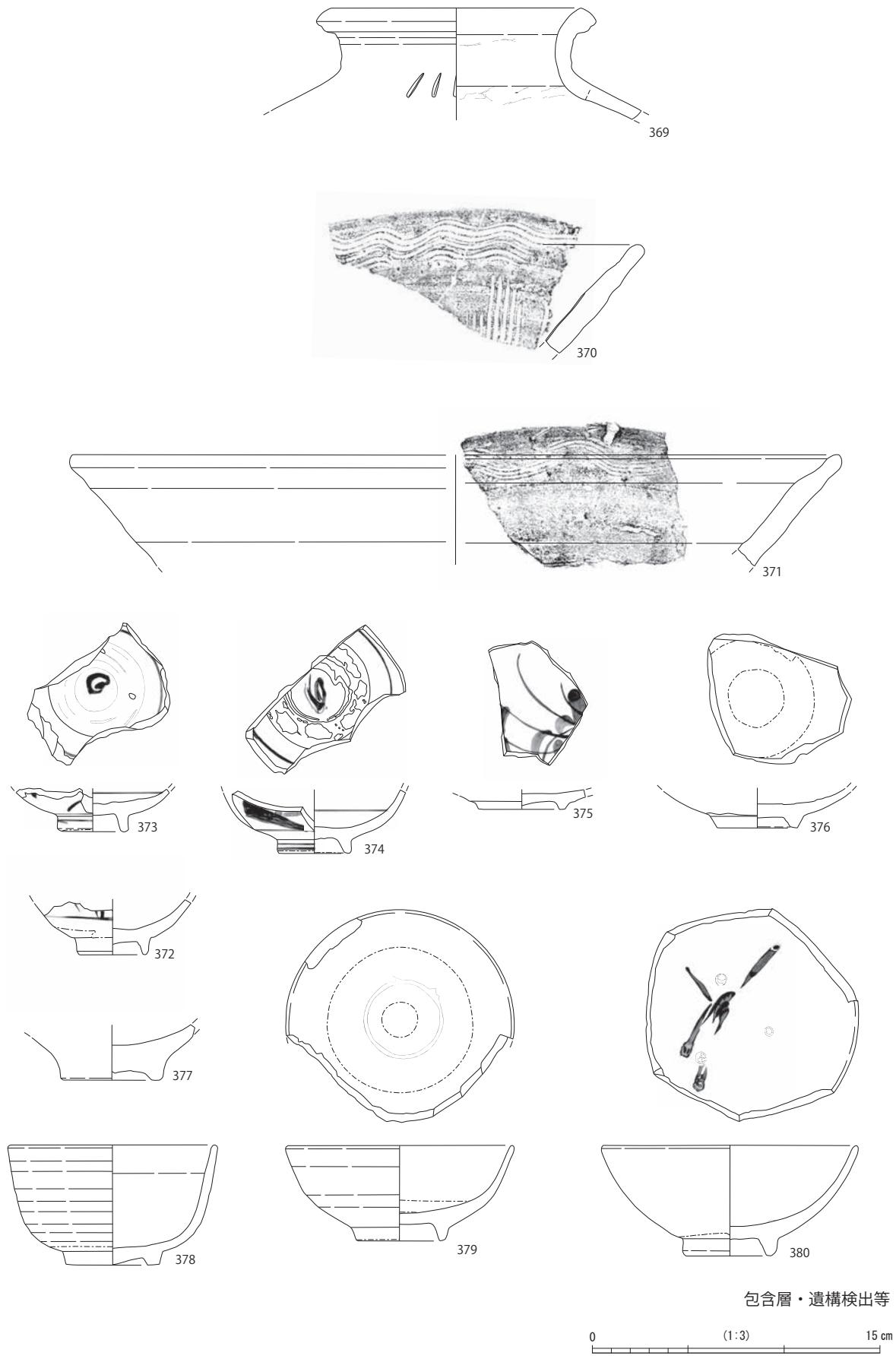
389は高台断面を三角形状に削り出す皿C3類。いずれも内外口縁部を除き無釉で、386、387は鉄釉の上に灰釉の流しがけがみられる。口縁部は内湾、外反等のバリエーションがあり、389は見込境に弱い段をもつ。390は口径140mmの大型品で削り出し輪高台の皿C4類、391は口縁部が直立する向付タイプの皿D類で、いずれも17世紀以降の登窯製品である。392は肥前灰釉瓶。釉は濃緑色で体部下方～底部は無釉とし、内面には青海波の叩きがはいる。I期。393は筒丸形の磁器碗で、外面に赤字で「一〇袴商會石□」と縦にはいる。現代。なお、372以降の近世以降の製品については、その多くが南1区からの出土品である。

394は口径96mm、底径60mm、器高61mmの朱漆塗りの筒形盃である。底部は黒色漆塗りの碁笥底とし、朱で列点状の記号をいれる。樹種はハンノキ亜属。塗膜分析の結果、広義の輪島塗で幕末以降の製品とされる。市道区包含層出土、分析No.12資料。395は内面朱漆、外面黒色系漆塗りの折敷底板である。周縁には曲物を留める木釘孔が並ぶ。樹種はマツ属。白木地ではない朱漆塗折敷の出土は少なく、上質品としての地の粉漆下地が施されており、武士クラスの家財とされる。分析No.3資料。396～400は下駄である。396・398・399は一木作りの連歯下駄であるが、樹種はそれぞれケヤキ・スギ・モクレン属と異なる。397は一木の底部中央を浅いアーチ状にくり抜き前後の歯を作り出した駒下駄で、台の前後は先細りとなる。樹種はケヤキで近世以降の作と思われる。400は平面細槽円形の台をもつ差歎下駄である。台にはぞ孔を設け歯を貫通・固定させる露卯下駄で、樹種は台・歯共にヒノキ属である。

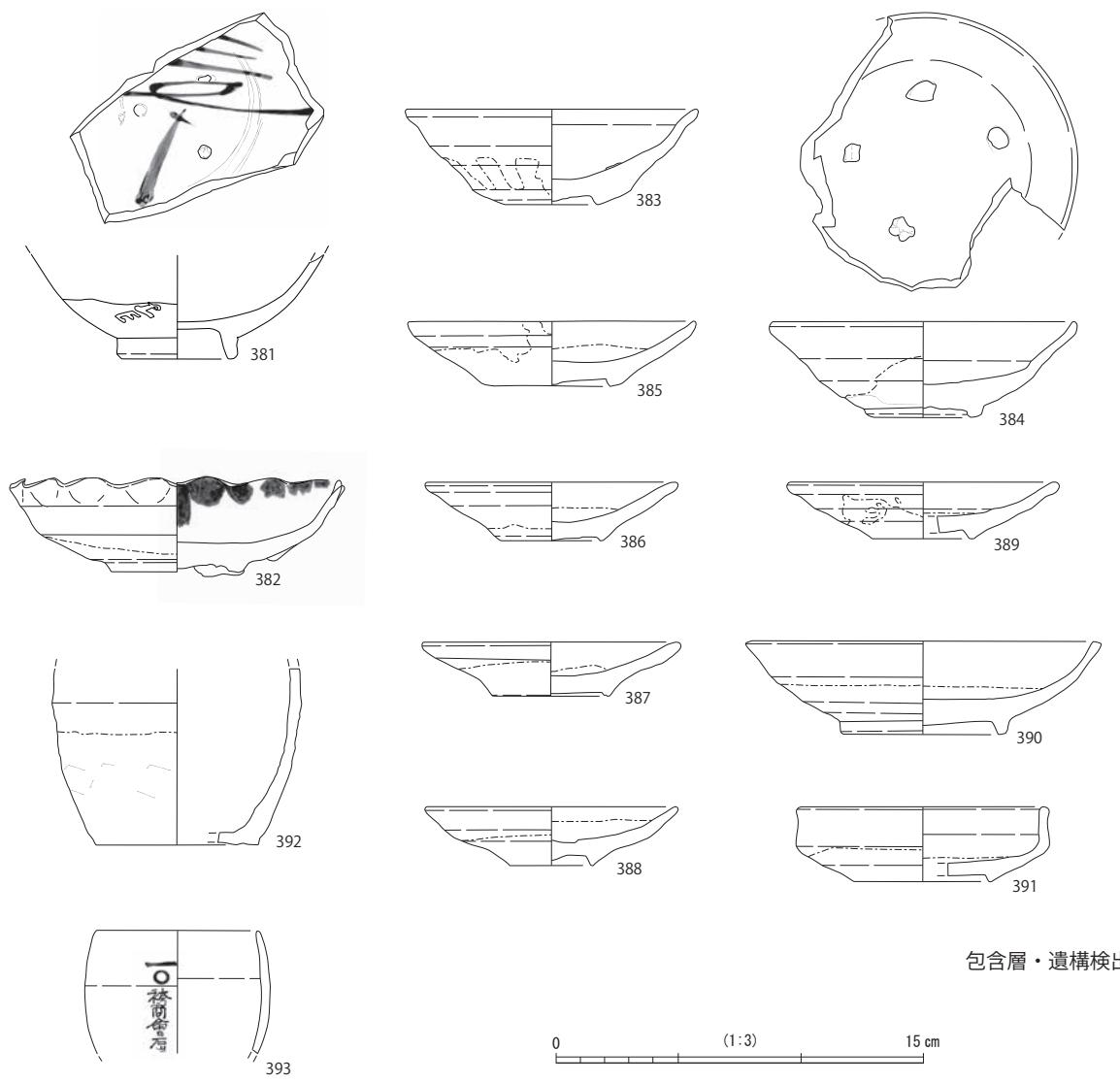
401、402は砥石である。401は小型品で片面に筋状の研磨痕を数条もつ。流紋岩製で部分的に被熱がみられる。402は表裏2面の研面をもつ。粘板岩製である。403は安山岩製の粉挽臼下臼。溝は磨り減り、臼面の一部にタール状の付着物がみられる。404は銭文不明。405は明銭の永楽通寶、406は寛永通寶の波銭で、初鋳年が明和6年(1769)の裏文が11波のものである。



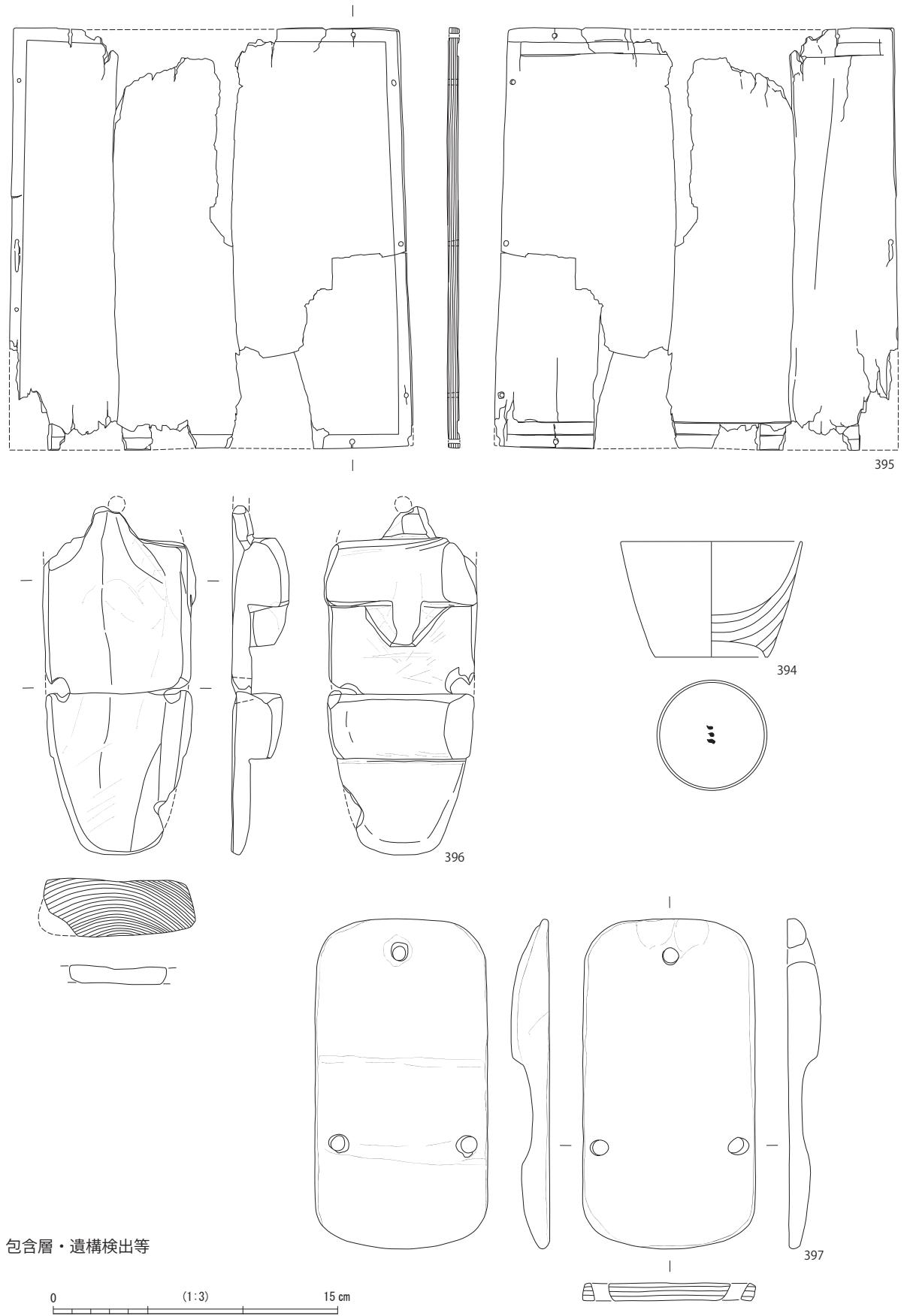
第107図 包含層等出土遺物 1



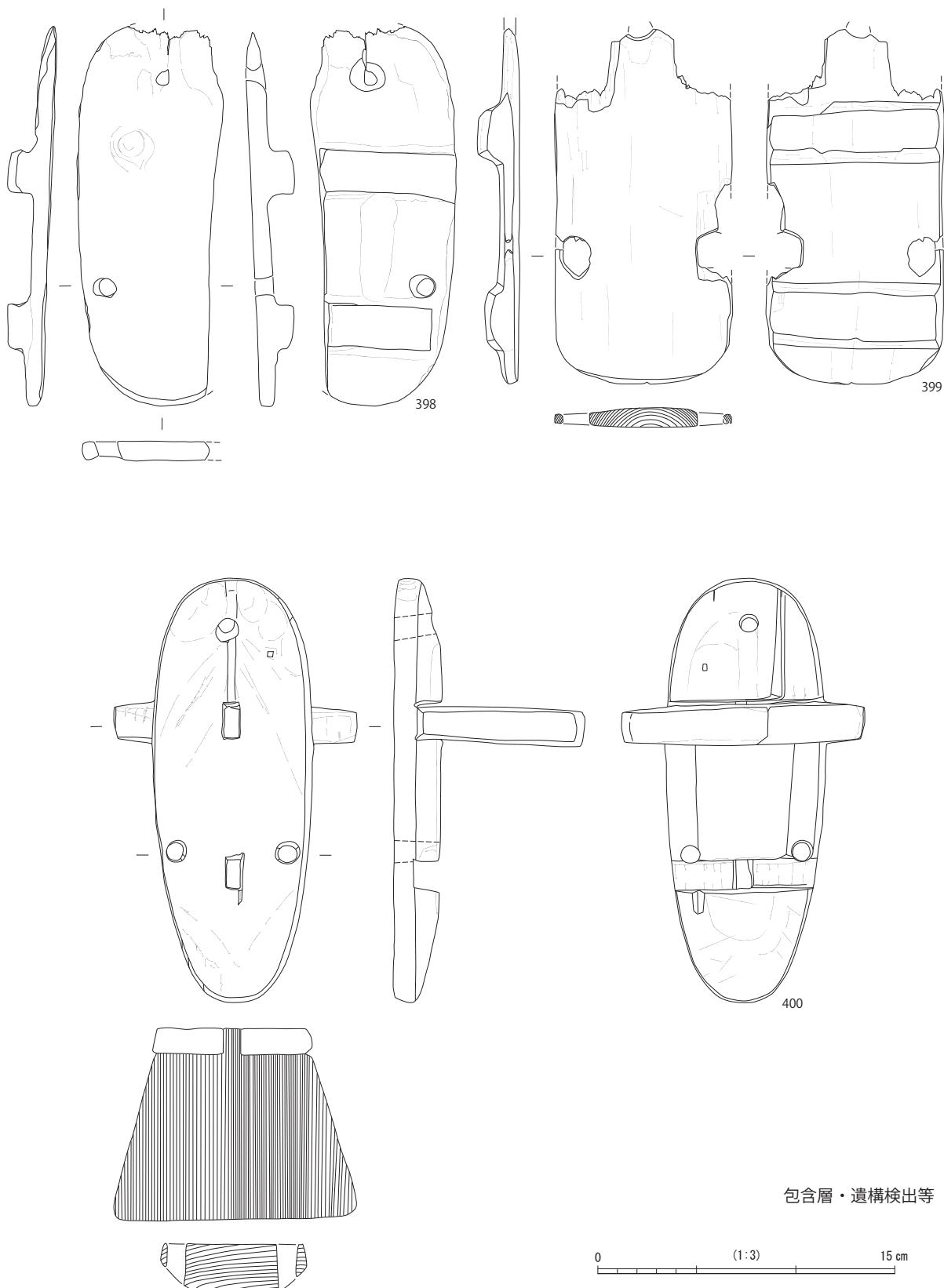
第108図 包含層等出土遺物2



第109図 包含層等出土遺物 3



第110図 包含層等出土遺物 4



第111図 包含層等出土遺物 5



包含層・遺構検出等

第112図 包含層等出土遺物 6

種別 No.	遺物 No.	調査 年次	区名	出土遺構等	種類	器種	分類等	法量(mm)			遺存率	焼成	調整・成形 内面 外面		胎土・素地	色調 内面 外面		釉薬	実測 No.	特記事項
								口径	底径	器高			「の」字状 ナデ上げ	「[2]」字状 ナデ上げ	礫僅、粗砂並、焼土塊、 黒雲母、海綿骨針	灰白	灰白			
	1	2008	北1区	SE01 4層	土師器	皿	E	89.5	46.0	19.0	完	良	「の」字状 ナデ上げ	「[2]」字状 ナデ上げ	礫僅、粗砂並、焼土塊、 黒雲母、海綿骨針	灰白	灰白		D001	口縁に油煙痕
	2	2008	北1区	SE01 1層	土師器	皿	C	112.0	50.0	21.0	3/12	良	ナデ ²	ナデ ²	粗砂少、海綿骨針	灰白	灰白		D002	内面に油煙痕
	3	2008	北1区	SE01 10-11層	漆器椀															第22表参照
	4	2008	北1区	SE01 最下層	筒状木製品															第22表参照
	5	2008	北1区	SE01 10層	横櫛															第22表参照
	6	2008	北1区	SE02	曲物底板															第22表参照
38	7	2008	北1区	SE03 下層	土師器	皿	E	92.0	48.0	21.0	完	良	「の」字状 ナデ上げ	ナデ ²	礫僅、粗砂並、焼土塊、 黒雲母、海綿骨針	にぶい黄橙	にぶい黄橙		D004	
	8	2008	北1区	SE03 上層	土師器	皿	D	106.0	42.0	18.0	2/12	良	「[2]」字状 ナデ上げ	ナデ ²	礫僅、粗砂並、焼土塊、 黒雲母、海綿骨針	にぶい黄橙	にぶい黄橙		D005	
	9	2008	北1区	SE04	土師器	皿	E	90.0	43.0	16.5	4/12	良	ナデ ²	ナデ ²	粗砂少、黒雲母、 海綿骨針	にぶい黄橙	にぶい黄橙		D003	黒斑
	10	2008	北1区	SE04	土師器	皿	E	98.0	46.0	19.0	3/12	良	「の」字状 ナデ上げ	ナデ ²	礫僅、粗砂並、焼土塊、 黒雲母、海綿骨針	灰白	灰白		D006	口縁に油煙痕
	11	2008	北1区	SE06 挖り方	土師器	皿	E?	103.0	60.0	14.5	2/12	良	ナデ ²	ナデ ²	粗砂並、海綿骨針	褐灰	褐灰		D007	黒斑
	12	2008	北1区	SE07	肥前	染付皿	IV	126.0		(27.0)	2/12	良	ロクロ	ロクロ	堅織	灰白、施釉	透明釉	染03	見込蛇の目釉剥ぎ	
	13	2008	北1区	SE08 上層	土師器	皿	E	90.0	34.0	15.5	6/12	良	ナデ ²	ナデ ²	礫僅、粗砂並、焼土塊、 黒雲母、海綿骨針	橙	橙		D008	
	14	2008	北1区	SE08 下層	土師器	皿	C	116.0	50.0	20.0	3/12	良	ナデ ²	ナデ ²	礫僅、粗砂並、黒雲母、 海綿骨針	橙	橙		D247	
	15	2008	北1区	SE08 最下層	土師器	皿	C	119.0	48.0	23.5	9/12	良	「[2]」字状 ナデ上げ	ナデ ²	礫少、粗砂並、焼土塊、 黒雲母、海綿骨針	にぶい橙	にぶい橙		D015	
	16	2008	北1区	SE08 下層	土師器	皿	C	120.0	56.0	23.0	5/12	良	ナデ ²	ナデ ²	礫少、粗砂並、焼土塊、 黒雲母、海綿骨針	橙	橙		D011	口縁に油煙痕
	17	2008	北1区	SE08 最下層	土師器	皿	B	134.0	66.0	22.5	11/12	良	「[2]」字状 ナデ上げ	ナデ ²	礫少、粗砂並、焼土塊、 黒雲母、海綿骨針	にぶい橙	にぶい橙		D014	
	18	2008	北1区	SE08 下層	土師器	皿	B	134.0	72.0	22.5	4/12	良	ナデ ²	ナデ ²	粗砂並、焼土塊、 黒雲母、海綿骨針	にぶい橙	にぶい橙		D010	外面に煤付着
	19	2008	北1区	SE08 上層	土師器	皿	B	152.0		(26.5)	1/12	良	ナデ ²	ナデ ²	粗砂並、焼土塊、 黒雲母、海綿骨針	橙	橙		D009	
	20	2008	南1区	SE08 下層	土師器	皿	B	140.0	70.0	22.0	9/12	良	ナデ ²	ナデ ²	礫少、粗砂少、海綿骨針	灰白	灰白		D143	呪符墨書か
	21	2008	北1区	SE08 下層	須恵器	甕	—					小片	ハケ	タタキ	粗砂並	灰	灰		D012	
39	22	2008	北1区	SE08	珠洲	擂鉢	VI	(270.0)		(72.0)	口縁 1/12	良	ロクロナデ、 擂目	ロクロナデ、 擂目	礫少、粗砂多、海綿骨針	灰	灰		D013	擂目12条
	23	2008	北1区	SE08 上・下・最下層	珠洲	擂鉢	VI	366.0	160.0	169.0	9/12	良	ロクロナデ、 擂目	ロクロナデ、 擂目	礫多、粗砂多、海綿骨針	赤赤	赤赤		D029	擂目9条
	24	2008	北1区	SE08 SE09・SE09 最下層	珠洲	擂鉢	VI	370.0	162.0	156.0	6/12	良	ロクロナデ、 擂目	ロクロナデ、 擂目	礫多、粗砂多、海綿骨針	灰白	赤灰～灰白		D030	口縁内面に波状文
	25	2008	北1区	SE08	漆器椀														第22表参照	
	26	2008	北1区	SE09 最下層	土師器	皿	E	89.0	40.0	15.0	2/12	良	ナデ ²	ナデ ²	礫僅、粗砂少、黒雲母、 海綿骨針	にぶい褐	にぶい褐		D086	
40	27	2008	北1区	SE09 最下層	土師器	皿	E	97.0	48.0	20.0	2/12	良	「[2]」字状 ナデ上げ	ナデ ²	礫僅、粗砂少、海綿骨針	灰白	灰黃		D020	
	28	2008	北1区	SE09 最下層	土師器	皿	B	134.0		(27.5)	2/12	良	ナデ ²	ナデ ²	粗砂並、焼土塊、 海綿骨針	にぶい黄橙	にぶい黄橙		D021	黒斑
	29	2008	北1区	SE09	青花	皿	B?		89.0	(12.0)	底部小 片	良	ロクロ	ロクロ	堅織	灰白、施釉	透明釉	染01		
	30	2008	北1区	SE09	越前	鉢	IV	150.0	117.0	63.5	2/12	良	ロクロナデ	ロクロナデ	粗砂少、堅織	暗赤褐、 にぶい赤褐	にぶい赤褐		D017	花器か
	31	2008	北1区	SE09、SE09 最下層 SE08 最下層	珠洲	擂鉢	VI	276.0	134.0	130.0	10/12	良	ロクロナデ、 擂目	ロクロナデ、 擂目	礫多、粗砂多、焼土塊、 海綿骨針	灰、灰赤	にぶい赤褐		D031	擂目8条
	32	2008	北1区	SE09	備前	擂鉢	6期b	340.0		(51.0)	2/12	良	ロクロナデ	ロクロナデ	粗砂少、堅織	灰	灰		D016	
	33	2008	北1区	SE09	覗														第23表参照	
	34	2008	北1区	SE10 上層	土師器	皿	C	112.0	55.0	21.5	6/12	良	ナデ ²	ナデ ²	礫少、粗砂並、焼土塊、 海綿骨針	橙	浅黄橙		D018	
	35	2008	北1区	SE10	志加浦	鉢	—	326.0		(88.0)	1/12	良	ヨコナデ ²	タテナデ ²	粗砂並、海綿骨針	灰	灰		D019	
	36	2008	北1区	SE10 下層	漆器椀														第22表参照	
41	37	2008	北1区	SE11	肥前	陶器鉢	IV		124.0	(41.0)	底部 3/12	良	ロクロナデ	ロクロナデ ケグリ	粗砂少、堅織	にぶい赤褐 刷毛目	にぶい赤褐 白化粧土		D078	刷毛目
	38	2008	北1区	SE12	土師器	皿	E	88.0	41.0	16.5	6/12	良	「の」字状 ナデ上げ	ナデ ²	粗砂並、焼土塊、 海綿骨針	にぶい黄橙	にぶい黄橙		D024	口縁に油煙痕
	39	2008	北1区	SE12	土師器	皿	E	90.0	45.0	19.5	6/12	良	「の」字状 ナデ上げ	ナデ ²	礫僅、粗砂並、海綿骨針	浅黄橙	浅黄橙		D023	
	40	2008	北1区	SE12	土師器	皿	C	118.0	53.0	22.0	9/12	良	ナデ ²	ナデ ²	礫僅、粗砂並、黒雲母、 海綿骨針	にぶい黄橙	にぶい黄橙		D022	
	41	2008	北1区	SE12	土師器	皿	C	118.0	57.0	23.0	6/12	良	「[2]」字状 ナデ上げ	ナデ ²	礫僅、粗砂並、焼土塊、 海綿骨針	浅黄橙	浅黄橙		D025	
	42	2008	北1区	SE12	漆器椀														第22表参照	
	43	2008	北2区	SE13 積み内最下部 SE13	瀬戸美濃	天目茶碗	大窯3	114.0		(43.0)	1/12	良	ロクロ	ロクロ	粗砂少	灰白、施釉	鐵釉	D081		
	44	2008	北2区	SE14	鐵鍋		—												第24表参照	
	45	2008	北2区	SE15 上層・下層	瓦質土器	擂鉢	—	347.0		(75.0)	口縁 1/12	良	摩滅により 不明、 不眞、 擂目	摩滅により 不明、 不眞、 擂目	粗砂少	灰	灰		D089	摩滅により擂目条 数不明
	46	2008	北2区	SE15 上層	越前	甕	IV		233.0	(50.0)	底面 4/12	良	ナデ ²	ナデ ²	粗砂少	灰	灰		D079	外面上に自然釉の垂れ 内面に陥沢
42	47	2008	北2区	SE15 上層	越前	擂鉢	IV		145.0	(66.0)	底部小片	良	ロクロナデ、 擂目	ロクロナデ	粗砂並	浅黄	浅黄		D080	内面平滑
	48	2008	北2区	SE16 挖り方	土師器	皿	E	88.0	32.0	20.0	2/12	良	ナデ ²	ナデ ²	礫僅、粗砂並、海綿骨針	灰白	灰白		D122	
	49	2008	南1区	SE18 挖り方	土師器	皿	E	88.0	42.0	18.0	2/12	良	ナデ ²	ナデ ²	礫少、粗砂並、黒雲母、 海綿骨針	灰黃	灰黃		D141	
	50	2008	南1区	SE18	越中瀬戸	擂鉢	B2	334.0		(32.0)	口縁小片	良	ロクロナデ、 擂目	ロクロナデ	礫少、粗砂並	褐灰	褐灰		D142	素地は灰褐色
	51	2008	南1区	SE19	土師器	皿	E	98.0	58.0	21.0	2/12	良	「の」字状 ナデ上げ	ナデ ²	礫僅、粗砂並、海綿骨針	にぶい黄橙	にぶい黄橙		D158	
	52	2008	南1区	SE19	瀬戸美濃	平碗	後IV	134.0		(40.0)	口縁小片	良	ロクロ	ロクロ	粗砂少	にぶい黄橙、 施釉	鐵釉	D139		
	53	2008	南1区	SE19	青花	皿	B1 VII		74.0	(9.0)	底部 2/12	良	ロクロ	ロクロ	堅織	灰白、施釉	透明釉	染16 漆継ぎ		
	54	2008	南1区	SE19 包含層	越前	擂鉢	IV c	346.0	150.0	117.0	4/12	良	ロクロナデ、 擂目	ロクロナデ	礫少、粗砂少	にぶい赤褐	にぶい赤褐		D240	擂目10条
	55	2008	南1区	SE20	土師器	皿	C	106.0	48.0	24.0	3/12	良	ナデ ²	ナデ ²	礫僅、粗砂並、黒雲母、 海綿骨針	黄灰	黄灰		D117	
	56	2008	南1区	SE20	越前	擂鉢	IV		183.0	(106.0)	底部 1/12	良	ロクロナデ、 擂目	ロクロナデ	礫少、粗砂並	にぶい橙	にぶい赤褐		D091	擂目9条
42	57	2008	南1区	SE22	土師器	皿	D?	112.0	57.0	23.0	2/12	良	ナデ<							

種別 No.	遺物 No.	調査 年次	区名	出土遺構等	種類	器種	分類等	法量(mm)			遺存率	焼成	調整・成形		胎土・素地	色調		実測 No.	特記事項			
								口径	底径	器高			内面	外面		内面	外面					
第23表参照																						
43	61	2009	南2区	SE26	円面観								ヨコナデ、 ナデ		粗砂多、海綿骨針	淡赤橙 淡橙	淡赤橙	D40				
	62	2009	北3区	SE27	土師器	皿	E	92.0	48.0	19.0	3/12	良	ヨコナデ、 ナデ	ヨコナデ、 ナデ	ヨコナデ、 ナデ	ヨコナデ、 ナデ	ヨコナデ、 ナデ	D40				
	63	2009	北3区	SE27 石1～3段目	土師器	皿	D	110.0	51.0	21.0	8/12	良	摩耗の為 不明瞭	摩耗の為 不明瞭	摩耗の為 不明瞭	摩耗の為 不明瞭	摩耗の為 不明瞭	D56	摩耗著しく調整不 明瞭			
	64	2009	北3区	SE27	土師器	皿	D	113.0	56.0	24.0	完	良	[2]字状 ナデ上げ	ヨコナデ、 ナデ	ヨコナデ、 ナデ	ヨコナデ、 ナデ	ヨコナデ、 ナデ	D7	口縁ゆがみあり			
	65	2009	北3区	SE27 石1～3段目	土師器	皿	B	134.0	78.0	26.0	7/12	良	摩耗の為 不明瞭	ヨコナデ、 ナデ	ヨコナデ、 ナデ	ヨコナデ、 ナデ	ヨコナデ、 ナデ	D54				
	66	2009	北3区	SE27 (暗褐砂質土)	土師器	皿	B	160.0	94.0	26.0	8/12	良	[2]字状 ナデ上げ	ヨコナデ、 ナデ	ヨコナデ、 ナデ	ヨコナデ、 ナデ	ヨコナデ、 ナデ	D5	外外面摩耗激しい			
42	67	2009	北3区	SE27 (暗褐砂質土)	土師器	皿	B	162.0	85.0	28.0	6/12	良	[2]字状 ナデ上げ	ヨコナデ、 ナデ	ヨコナデ、 ナデ	ヨコナデ、 ナデ	ヨコナデ、 ナデ	D6	油煤痕			
	68	2009	北3区	SE27 石1～3段目	土師器	皿	B	165.0	100.0	25.0	8/12	良	ヨコナデ、 ナデ	ヨコナデ、 ナデ	ヨコナデ、 ナデ	ヨコナデ、 ナデ	ヨコナデ、 ナデ	D55	油煙痕			
	69	2009	北3区	SE27	土師器	皿	B	170.0	103.0	28.0	3/12	良	ヨコナデ、 ナデ、ハケメ	ヨコナデ、 ナデ	ヨコナデ、 ナデ	ヨコナデ、 ナデ	ヨコナデ、 ナデ	D41	油煙痕			
	70	2009	北3区	SE27 石1～3段目	瀬戸美濃	端反・丸皿	大業1・2		58.0	12.0	底部完	良	ロクロ	ロクロ	粗砂少、貫入・気泡	にぶい黄橙 施釉	灰釉	D9	輪ト跡			
	71	2009	北3区	SE27 石3段目～最下段	青磁	皿	景德鎮 窯系			27.0	小片	良	ロクロ	ロクロ	織密、気泡	灰白、施釉	青磁釉	D8	菊皿			
	72	2009	北3区	SE27	青花	皿	B1	116.0		(21.0)	口縁 1/12	良	ロクロ	ロクロ	堅緻	灰白、施釉	透明釉	染2				
43	73	2009	北3区	SE27	青花	皿	B1VII		82.0	(29.0)	底部 2/12	良	ロクロ	ロクロ	堅緻	灰白、施釉	透明釉	染1	高台量付無釉			
	74	2008	北1区	SK01	珠洲	壺	III	214.0		(64.0)	口縁 1/12	良	ロクロナデ タキ	ロクロナデ タキ	粗砂並、海綿骨針	灰白	灰	D047	口縁頸部外面に波状又			
	75	2008	北1区	SK04	肥前	陶器皿	II	134.0		(24.0)	口縁 2/12	良	ロクロ	ロクロ	細砂少、堅緻	浅黄、施釉	灰釉	D026	S803 溝縁皿			
	76	2008	北1区	SK09	土師器	皿	E	90.0	54.0	19.0	9/27	良	[の]字状 ナデ上げ	ヨコナデ、 ナデ	穢僅、粗砂少、海綿骨針	灰黄	灰黄	D050	口縁に油煙痕			
	77	2008	北1区	SK09	青磁	碗	無文		51.0	(28.5)	高台完	良	ロクロ	ロクロ	堅緻	灰白、施釉	青磁釉	D048				
	78	2008	北1区	SK09	瓦質土器	香炉	筒形	136.0		(39.5)	口縁小片	良	ロクロ	ミガキ	粗砂少、黒雲母、 海綿骨針	浅黄	橙	D049	器面塗り 外面にスタンプ文			
57	79	2008	北1区	SK10	青花	碗	粗製C		47.0	(12.0)	底部完	良	ロクロ	ロクロ	堅緻	灰白、施釉	透明釉	染02	漳州窯系			
	80	2008	北1区	SK10	肥前	陶器碗	IV		44.0	(22.5)	高台 10/12	良	ロクロ	ロクロ	細砂少、堅緻	灰白、施釉	透明釉	D138	京焼風			
	81	2008	北1区	SK10	肥前	染付皿	IV	125.0		(24.5)	2/12	良	ロクロ	ロクロ	堅緻	灰白、施釉	透明釉	D137	見込蛇の目釉剥ぎ			
	82	2008	北1区	SK10	肥前	白磁皿	IV	124.0	44.0	36.0	6/12	良	ロクロ	ロクロ	堅緻	灰白、施釉	透明釉	D028	見込蛇の目釉剥ぎ			
	83	2008	北1区	SK10	漆器椀																	
	84	2008	北1区	SK10	錢貨																	
第22表参照																						
第25表参照																						
85	85	2008	北1区	SK15	肥前	擂鉢	III		124.0	(58.5)	底部 3/12	良	ロクロナデ、 播磨	ロクロナデ	粗砂少	赤褐	赤褐	D088	底面回転糸切り			
	86	2008	北1区	SK16	SK16下層	肥前	染付碗	V	66.0	31.0	51.0	9/12	良	ロクロ	ロクロ	堅緻	灰白、施釉	透明釉	染04			
58	87	2008	北1区	SK18	土師器	皿	E	92.0	45.0	20.5	10/12	良	[の]字状 ナデ上げ	ナデ	穢僅、粗砂並、海綿骨針	浅黄橙	浅黄橙	D027	底面に墨書			
	88	2008	北1区	SK18	土師器	皿	E	94.0	57.0	19.0	ほぼ完	良	[の]字状 ナデ上げ	ナデ	粗砂少、黒雲母、 海綿骨針	にぶい黄橙	にぶい黄橙	D035	口縁に油煙痕			
	89	2008	北1区	SK18	土師器	皿	C	112.0	57.0	24.5	完	良	[2]字状 ナデ上げ	ナデ	穢僅、粗砂並、海綿骨針	淡黄	灰白	D032				
	90	2008	北1区	SK18	燒土層	瀬戸美濃	天目茶碗	大業2	124.0	46.0	73.5	7/12	良	ロクロ	ロクロ	細砂少	灰黄	铁釉	D033			
	91	2008	北1区	SK18	瓦質土器	行火	—			(80.5)	底部小片	良	ナデ	ナデ	穢僅、粗砂並、黒雲母、 海綿骨針	黄灰	浅黄	D058	平面隅丸方形狀			
	92	2008	北1区	SK18 燒土層 遺構検出	須恵器	壺	IVb	332.0	162.0	121.0	2/12	良	ロクロナデ、 播磨	ロクロナデ	穢僅、粗砂並、燒土塊	浅黄	浅黄	D034	拂り目8条			
59	93	2008	北1区	SK20 上層	土師器	皿	—	170.0		(55.0)	口縁小片	良	ナデ	ナデ	穢僅、粗砂少	灰	灰	D038				
	94	2008	北1区	SK20 上層	土師器	皿	E	96.0	47.0	27.0	2/12	良	ナデ	ナデ	粗砂並、海綿骨針	にぶい黄橙	にぶい黄橙	D039				
	95	2008	北1区	SK20	土師器	皿	C	111.0	44.0	22.0	4/12	良	ナデ	ナデ	粗砂並、海綿骨針	橙	橙	D036				
	96	2008	北1区	SK20 上層	土師器	皿	C	111.0	44.0	23.0	6/12	良	ナデ	ナデ	粗砂並、海綿骨針	浅黄	浅黄	D037				
	97	2008	北1区	SK20 上層	瓦質土器	深鉢	—		232.0	(33.0)	底面 3/12	良	ナデ	ナデ	粗砂少、海綿骨針	褐灰	褐灰	D040				
	98	2008	北1区	SK22	漆器椀																	
第22表参照																						
99	99	2008	北1区	SK23	越中瀬戸	小壺	—	71.0		(44.0)	口縁 3/12	良	ロクロナデ	ロクロナデ	穢僅、粗砂少	にぶい褐、 施釉	鐵釉	D041	登窯			
	100	2008	北1区	SK23 6層	肥前	染付碗	IV	104.0		(36.0)	口縁小片	良	ロクロ	ロクロ	堅緻	灰白、施釉	透明釉	染05	コンニャク印判			
101	101	2008	北1区	SK23	砥石																	
	102	2008	北1区	SK23	錢貨																	
	103	2008	北1区	SK33・42	土師器	皿	E	86.0	44.0	19.0	6/12	良	[の]字状 ナデ上げ	ナデ	粗砂並、海綿骨針	にぶい黄	にぶい黄	D043	口縁に油煙痕			
	104	2008	北1区	SK33・42	土師器	皿	C	114.0	54.0	21.0	6/12	良	[2]字状 ナデ上げ	ナデ	穢僅、粗砂少、海綿骨針	黄灰	黄灰	D042	内黒			
	105	2008	北1区	SK33・42	土師器	皿	D	118.0	60.0	20.0	2/12	良	ナデ	ナデ	穢僅、粗砂少、海綿骨針	にぶい黄	にぶい黄	D246	内黒			
	106	2008	北1区	SK34	土師器	皿	E	90.0	46.0	18.0	3/12	良	ナデ	ナデ	粗砂少、海綿骨針	にぶい黄	橙	D045	口縁に油煙痕			
59	107	2008	北1区	SK35	土師器	皿	E	95.0	54.0	21.0	6/12	良	ナデ	ナデ	粗砂並、海綿骨針	にぶい黄	にぶい黄	D044	内面全面に油煙痕			
	108	2008	北1区	SK35	土師器	皿	B	128.0	68.0	23.5	3/12	良	ナデ	ナデ	穢僅、粗砂並、燒土塊、 海綿骨針	浅黄	浅黄	D046				
	109	2008	北1区	SK43	肥前	陶器鉢	IV		81.0	(37.5)	底部 4/12	良	ロクロ	ロクロケズリ	粗砂少	浅黄	施釉	白化粧土	D135	見込蛇の目釉剥ぎ		
	110	2008	北2区	SK46	土師器	皿	E	94.0	45.0	20.0	6/12	良	ナデ	ナデ	穢僅、粗砂並、海綿骨針	にぶい黄	にぶい黄	D082				
	111	2008	北2区	SK46	白磁	皿	E	125.0		(20.0)	口縁小片	良	ロクロ	ロクロ	堅緻	灰、施釉	透明釉	D083				
	112	2008	北2区	SK46 下層	青花	皿	B1VI	92.0	48.0	21.0	3/12	良	ロクロ	ロクロ	堅緻	灰白、施釉	透明釉	染09	漆縫ぎ 高台内無釉			
113	112	2008	北2区	SK46	青花	皿	E	88.0	31.0	18.0	完	良	[の]字状 ナデ上げ	ナデ	穢僅、粗砂少、燒土塊、 海綿骨針	黑	灰黄	D112	内面全体に油煙痕			
	114	2008	北2区	SK47 3層	青磁	碗	無文	136.0		(36.0)	口縁小片	良	ロクロ	ロクロ	堅緻	灰白、施釉	青磁釉	D090				
	115	2008	北2区	SK48	土製品	サイコ形	—	(長さ)	(幅)	(高さ)	完	良	—	ナデ	粗砂少	—	浅黄	D131	重さ3.7g			
	116	2008	南2区	SK58	錢貨																	
	117	2008	南1区	SK59	肥前	染付皿																

種別 No.	遺物 No.	調査 年次	区名	出土遺構等	種類	器種	分類等	法量(mm)			遺存率	焼成	調整・成形 内面 外面	胎土・素地	色調		釉薬	実測 No.	特記事項	
								口径	底径	器高					内面	外面				
59	120	2008	南1区	SK64	土師器	皿	C	120.0		(18.0)	口縁小片	良	ナデ ²	ナデ ²	粗砂並、黒雲母、 海綿骨針	にぶい黄褐	にぶい黄褐		D236	
	121	2008	南1区	SK64	硯															
	122	2008	南1区	SK65	肥前	陶器皿	I	120.0	40.0	25.0	10/12	良	ロクロ	ロクロ ² 、 ケズリ	粗砂少、焼土塊	橙、施釉		灰釉	D149	胎土目跡4箇所
	123	2008	南1区	SK65	備前	擂鉢	近世I	230.0		(94.0)	2/12	良	ロクロナデ ² 、 擂目	ロクロナデ ²	礫少、粗砂並、焼土塊	にぶい赤褐	灰褐		D148	口縁外面に凹線2条 擂目8条
60	124	2008	南1区	SK65	漆器椀															
	125	2008	南1区	SK67	土師器	皿	C	116.0	52.0	22.0	4/12	良	ナデ ²	ナデ ²	礫僅、粗砂少、焼土塊、 黒雲母、海綿骨針	にぶい橙	にぶい橙		D150	SB09
	126	2008	南1区	SK67 SK89	土師器	皿	B	136.0	74.0	25.0	4/12	良	ナデ ²	ナデ ²	礫僅、粗砂並、焼土塊、 黒雲母、海綿骨針	灰黃褐	灰黃褐		D151	SB09
	127	2008	南1区	SK67	青花	皿	B1VII		67.0	(14.0)	底部	良	ロクロ	堅織		灰白、施釉		透明釉	染17	SB09 高台内無釉
61	128	2008	南1区	SK69	差歎下駄															
	129	2008	南1区	SK70	瓦	平瓦	—	(183.0)	(145.0)	22.0	小片	良	ナデ ²	ナデ ²	礫少、粗砂多、黒雲母	明褐	明褐		D152	
	130	2008	南1区	SK70	砥石															
	131	2008	南1区	SK71	越中瀬戸	皿	—		55.0	(14.0)	底部	良	ロクロ	ロクロ ² 、 ケズリ	細砂少、堅織	にぶい橙	にぶい黄橙		D153	面子に転用
62	132	2008	南1区	SK73	砥石															
	133	2008	南1区	SK74 3層	越中瀬戸	擂鉢	A2	284.0		(23.0)	口縁小片	良	ロクロ	ロクロ	礫少、粗砂多	にぶい黄橙、 施釉		施釉	D154	
	134	2008	南1区	SK74	簪															
	135	2008	南1区	SK76	柱根															
63	136	2008	南1区	SK77	土師器	皿	E	102.0	50.0	18.5	3/12	良	ナデ ²	ナデ ²	粗砂並、海綿骨針	灰黃	灰黃		D159	口縁に油煙痕
	137	2008	南1区	SK78	土師器	皿	B			(23.0)	口縁小片	良	ナデ ²	ナデ ²	粗砂並、海綿骨針	にぶい橙	にぶい橙		D245	内面に金箔貼付
	138	2008	南1区	SK78	青花	皿	B1	116.0		(21.0)	口縁小片	良	ロクロ	ロクロ	白、施釉		透明釉	染18		
	139	2008	南1区	SK80	越中瀬戸	擂鉢	A3	306.0		(31.0)	口縁小片	良	ロクロナデ ² 、 擂目	ロクロナデ ²	礫少、粗砂並	にぶい橙、 施釉		施釉	D156	
64	140	2008	南1区	SK81	肥前	染付皿	V		40.0	(19.0)	高台完	良	ロクロ	ロクロ	堅織			透明釉	染34	波佐見 見込みにアルミナ砂
	141	2008	南1区	SK81	肥前	染付皿	IV			(9.0)	見込	良	ロクロ	ロクロ	堅織	灰白、施釉		透明釉	染33	波佐見 漆継ぎ
	142	2008	南1区	SK81	肥前	斐	V	334.0		(172.0)	3/12	良	ロクロ	ロクロ	細砂多、堅織	にぶい黄褐、 施釉		鐵釉	D155	
	143	2008	南1区	SK81	陶器	擂鉢	—	350.0	127.0	147.0	3/12	良	ロクロナデ ² 、 擂目	ロクロナデ ²	礫僅、粗砂少、堅織	灰黃、施釉		鐵釉	D157	擂目密
65	144	2008	南1区	SK89	土師器	皿	E	90.0	41.0	19.0	ほぼ完	良	「1」字状 ナデ上げ	ナデ ²	礫少、粗砂並、黒雲母、 海綿骨針	灰黃	灰黃		D160	SB09 口縁に油煙痕
	145	2008	南1区	SK89	土師器	皿	C	116.0	50.0	23.0	9/12	良	「2」字状 ナデ上げ	ナデ ²	礫少、粗砂並、海綿骨針	にぶい橙	にぶい橙		D161	SB09
	146	2008	南1区	SK90	土師器	皿	C	108.0	46.0	21.0	6/12	良	ナデ ²	ナデ ²	粗砂並、黒雲母、 海綿骨針	にぶい橙	にぶい橙		D162	口縁に油煙痕
	147	2008	南1区	SK90	土師器	皿	B	119.0	60.0	26.0	5/12	良	「2」字状 ナデ上げ	ナデ ²	礫少、粗砂並、海綿骨針	にぶい黄橙	にぶい黄橙		D163	内面全面に煤
66	148	2008	南1区	SK90	土師器	皿	B	134.0	72.0	27.0	5/12	良	ナデ ²	ナデ ²	礫少、粗砂並、海綿骨針	にぶい黄橙	にぶい黄橙		D164	内面全面に煤
	149	2008	南1区	SK90	青磁	碗	C	120.0		(35.0)	口縁小片	良	ロクロ	ロクロ	細砂少	灰白、施釉		青磁釉	D237	線描蓮弁文
	150	2008	南1区	SK90	青花	碗	粗製	124.0		(31.0)	口縁小片	良	ロクロ	ロクロ	堅織	灰白、施釉		透明釉	染26	内外面貫入
	151	2008	南1区	SK92	肥前	染付皿	IV	137.0		(27.0)	口縁小片	良	ロクロ	ロクロ	堅織	灰白、施釉		透明釉	染27	
67	152	2008	南1区	SK94 下層	土師器	皿	E	97.0	45.0	19.0	完	良	「1」字状 ナデ上げ	ナデ ²	礫僅、粗砂並、海綿骨針	浅黃橙	浅黃橙		D165	口縁~内面に油煙痕
	153	2008	南1区	SK94 下層	青磁	鉢	筒形				小片	良	ロクロ	ロクロ	堅織	灰白、施釉		青磁釉	D167	各面に陽刻文様
	154	2008	南1区	SK96	土製品	壁土カ	—	(77.0)	(52.0)	(42.5)					礫多、粗砂多、焼土塊、 海綿骨針、ささら 粗砂並、焼土塊、 海綿骨針	暗灰黃	にぶい橙		D166	二次被熱
	155	2008	南1区	SK102	土師器	皿	E	96.0	50.0	24.0	5/12	良	ナデ ²	ナデ ²					D170	口縁に油煙痕
68	156	2008	南1区	SK102 上層	土師器	皿	C	117.0	49.0	22.0	7/12	良	ナデ ²	ナデ ²					D168	
	157	2008	南1区	SK102	土師器	皿	B	136.0	69.0	19.0	2/12	良	ナデ ²	ナデ ²					D194	
	158	2008	南1区	SK102 SK102 上層	土師器	皿	B	140.0	73.0	24.0	8/12	良	「2」字状 ナデ上げ	ナデ ²	礫僅、粗砂並、焼土塊、 海綿骨針	淡黃	淡黃		D169	
	159	2008	南1区	SK107	越前	擂鉢	IV	234.0		(102.0)	1/12	良	ロクロナデ ² 、 擂目	ロクロナデ ²	礫少、粗砂並	にぶい褐、 橙		D206	擂目10条	
69	160	2008	南1区	SK111	土師器	皿	E	94.0	49.0	19.5	4/12	良	ナデ ²	ナデ ²	礫少、粗砂並、焼土塊、 黒雲母、海綿骨針	灰黃	灰黃		D173	
	161	2008	南1区	SK111	瀬戸美濃	天目茶碗	大窯3	106.0	(38.0)	(57.0)	3/12	良	ロクロ	ロクロ	粗砂少	灰白、施釉		施釉	D172	漆接ぎ
	162	2008	南1区	SK111	瀬戸美濃	端反皿	大窯1	110.0		(16.0)	口縁小片	良	ロクロ	ロクロ	細砂少	灰白、施釉		灰釉	D233	
	163	2009	市道区	SK117 上層	土師器	皿	E	89.0	35.0	21.0	ほぼ完	良	「1」字状 ナデ上げ	ヨコナデ ² ナデ ² オサキ	礫謹、粗砂並、焼土塊謹、 海綿骨針	浅黃橙	浅黃橙		D48	
70	164	2009	市道区	SK117 上層	土師器	皿	E	90.0	49.0	18.0	11/12	良	ヨコナデ ²	ヨコナデ ²	礫謹、粗砂並、焼土塊謹、 海綿骨針	にぶい橙	にぶい橙		D37	口縁に油煙痕
	165	2009	市道区	SK117 上層	瓦質土器	行火	—			(58.0)	小片	良	ヨコナデ ²	ヨコナデ ²	礫謹、粗砂並、焼土塊謹、 海綿骨針	にぶい黄橙	黄灰		D38	
	166	2009	市道区	SK118 下層	瀬戸美濃	天目茶碗	大窯3	(113.0)		(61.0)	小片	良	ロクロ	ロクロ	堅織	灰白、施釉		施釉	D28	漆継ぎ
	167	2009	市道区	SK118 下層	瀬戸美濃	天目茶碗	大窯2		43.0	(21.0)	底部完	良	ロクロ	ロクロ	堅織	灰白、施釉		鐵釉	D29	
71	168	2009	市道区	SK118 下層	青磁	皿	稜花皿	50.0	(23.0)	7/12	良	ロクロ	ロクロ	堅織	灰白、施釉		青磁釉	D30	印花文	
	169	2009	市道区	SK120	須恵質	平瓦	—	(92.0)	(79.0)	(15.0)	小片	良	ナデ ²	タキタ	礫少、粗砂並、海綿骨針	灰	オリーブ灰		D25	
	170	2009	南2区	SK124 (SK125)	土師器	皿	B	160.0	95.0	21.0	口縁小片	良	ヨコナデ ² ナデ ²	ヨコナデ ²	粗砂多、海綿骨針	灰黃	灰黃		D47	内面全体に油煤痕
	171	2008	北1区	SD05	肥前	陶器皿	IV		80.0	(27.0)	底部小片	良	ロクロ	ロクロ ² 、 ケズリ	粗砂少	にぶい黄褐、 施釉		灰釉 白土	D243	見込蛇の目剥ぎ
72	172	2008	北1区	SD10	土師器	皿	E	94.0	50.0	20.5	4/12	良	ナデ ²	ナデ ²	礫僅、粗砂少、黒雲母、 海綿骨針	にぶい黄褐	浅黃橙		D052	内面、口縁部に 油煙痕
	173	2008	北1区	SD10	土師器	皿	B	144.0	67.0	23.0	2/12	良	ナデ ²	ナデ ²	礫少、粗砂少、黒雲母、 海綿骨針	灰黃	灰黃		D051	黒斑
	174	2008	北1区	SD11	越前	中壺	—	195.0		(48.0)	口縁小片	良	ナデ ²	ロクロナデ ²	礫僅、粗砂少、堅織	灰黃	褐、灰黃		D138	口縁上面幅1.6cm 16C
	175	2008	北2区	SD13	土師器	皿	E	83.5	37.0	19.0	9/12	良	ナデ ²	ナデ ²	礫僅、粗砂並、焼					

種別 No.	遺物 No.	調査 次年	区名	出土遺構等	種類	器種	分類等	法量(mm)			焼成	調整・成形 内面 外面		胎土・素地	色調 内面 外面		釉薬	実測 No.	特記事項			
								口径	底径	器高		[1]字状 ナデ上げ	[1]字状 ナデ上げ	[1]字状 ナデ上げ	[2]字状 ナデ上げ	[2]字状 ナデ上げ						
72	180	2008	北2区	SD13	土師器	皿	E	87.0	37.0	19.0	ほぼ完良	[1]字状 ナデ上げ	[1]字状 ナデ上げ	[1]字状 ナデ上げ	粗砂並、黒雲母、 海綿骨針	粗砂並、黒雲母、 海綿骨針	にぶい橙	にぶい橙	D099			
	181	2008	北2区	SD13	土師器	皿	E	88.0	34.0	19.5	11/12	良	[1]字状 ナデ上げ	[1]字状 ナデ上げ	[1]字状 ナデ上げ	礫少、粗砂並、黒雲母、 海綿骨針	礫少、粗砂並、黒雲母、 海綿骨針	橙	橙	D123	口縁に油煙痕	
	182	2008	北2区	SD13	土師器	皿	E	90.0	38.0	19.0	ほぼ完良	[1]字状 ナデ上げ	[1]字状 ナデ上げ	[1]字状 ナデ上げ	礫僅、粗砂並、焼土塊、 黒雲母、海綿骨針	礫僅、粗砂並、焼土塊、 黒雲母、海綿骨針	にぶい橙	にぶい橙	D104	口縁に油煙痕		
	183	2008	北2区	SD13	土師器	皿	E	90.0	55.0	17.0	5/12	良	[1]字状 ナデ上げ	[1]字状 ナデ上げ	[1]字状 ナデ上げ	粗砂少、黒雲母、 海綿骨針	粗砂少、黒雲母、 海綿骨針	にぶい橙	にぶい橙	D125		
	184	2008	北2区	SD13	土師器	皿	E	93.0	35.0	19.0	10/12	良	ナデ	ナデ	ナデ	礫僅、粗砂並、焼土塊、 黒雲母、海綿骨針	礫僅、粗砂並、焼土塊、 黒雲母、海綿骨針	にぶい橙	にぶい橙	D094		
	185	2008	北2区	SD13	土師器	皿	E	94.0	52.0	17.0	4/12	良	ナデ	ナデ	ナデ	礫少、粗砂並、焼土塊、 黒雲母、海綿骨針	礫少、粗砂並、焼土塊、 黒雲母、海綿骨針	灰白	灰白	D132	口縁に油煙痕	
	186	2008	北2区	SD13	土師器	皿	C	112.0	44.0	25.0	6/12	良	ナデ	ナデ	ナデ	礫僅、粗砂並、黒雲母、 海綿骨針	礫僅、粗砂並、黒雲母、 海綿骨針	にぶい橙	にぶい橙	D101		
	187	2008	北2区	SD13	土師器	皿	C	113.0	51.0	23.0	8/12	良	[2]字状 ナデ上げ	[2]字状 ナデ上げ	[2]字状 ナデ上げ	粗砂並、黒雲母、 海綿骨針	粗砂並、黒雲母、 海綿骨針	にぶい橙	にぶい橙	D093	内面ほぼ全面に 油煙痕	
	188	2008	北2区	SD13	土師器	皿	C	115.0	54.0	21.0	7/12	良	ナデ	ナデ	ナデ	礫僅、粗砂並、焼土塊、 黒雲母、海綿骨針	礫僅、粗砂並、焼土塊、 黒雲母、海綿骨針	にぶい橙	にぶい橙	D102		
	189	2008	北2区	SD13	土師器	皿	C	116.0	52.0	23.5	11/12	良	[2]字状 ナデ上げ	[2]字状 ナデ上げ	[2]字状 ナデ上げ	礫僅、粗砂並、焼土塊、 黒雲母、海綿骨針	礫僅、粗砂並、焼土塊、 黒雲母、海綿骨針	橙	橙	D105		
	190	2008	北2区	SD13	土師器	皿	C	118.0	56.0	22.0	10/12	良	ナデ	ナデ	ナデ	礫僅、粗砂並、焼土塊、 黒雲母、海綿骨針	礫僅、粗砂並、焼土塊、 黒雲母、海綿骨針	橙	橙	D092	内面及び底面に 油煙痕	
	191	2008	北2区	SD13	土師器	皿	B	126.0	64.0	21.5	2/12	良	[2]字状 ナデ上げ	[2]字状 ナデ上げ	[2]字状 ナデ上げ	礫僅、粗砂並、焼土塊、 黒雲母、海綿骨針	礫僅、粗砂並、焼土塊、 黒雲母、海綿骨針	橙	橙	D124		
	192	2008	北2区	SD13	土師器	皿	B	132.0	68.0	23.0	2/12	良	ナデ	ナデ	ナデ	礫僅、粗砂並、黒雲母、 海綿骨針	礫僅、粗砂並、黒雲母、 海綿骨針	橙	橙	D130		
	193	2008	北2区	SD13	土師器	皿	B	132.0	68.0	23.0	3/12	良	ナデ	ナデ	ナデ	礫少、粗砂並、焼土塊、 黒雲母、海綿骨針	礫少、粗砂並、焼土塊、 黒雲母、海綿骨針	にぶい橙	にぶい橙	D128	内面ほぼ全面に 油煙痕	
	194	2008	北2区	SD13	土師器	皿	B	134.0	70.0	20.0	4/12	良	ナデ	ナデ	ナデ	粗砂並、焼土塊、 黒雲母、海綿骨針	粗砂並、焼土塊、 黒雲母、海綿骨針	橙	橙	D108		
	195	2008	北2区	SD13	土師器	皿	B	138.0	64.0	22.0	4/12	良	ナデ	ナデ	ナデ	粗砂並、黒雲母、 海綿骨針	粗砂並、黒雲母、 海綿骨針	にぶい橙	にぶい橙	D097	見込に油煙痕	
	196	2008	北2区	SD13	土師器	皿	B	140.0	76.0	28.0	2/12	良	ナデ	ナデ	ナデ	礫僅、粗砂並、焼土塊、 黒雲母、海綿骨針	礫僅、粗砂並、焼土塊、 黒雲母、海綿骨針	橙	橙	D129		
	197	2008	北2区	SD13	土師器	皿	B	148.0	68.0	20.0	4/12	良	ナデ	ナデ	ナデ	礫僅、粗砂並、焼土塊、 黒雲母、海綿骨針	礫僅、粗砂並、焼土塊、 黒雲母、海綿骨針	にぶい褐	にぶい褐	D107	内面ほぼ全面に 油煙痕	
	198	2008	北2区	SD13	土師器	皿	B	152.0	76.0	20.0	2/12	良	[2]字状 ナデ上げ	[2]字状 ナデ上げ	[2]字状 ナデ上げ	礫僅、粗砂並、黒雲母、 海綿骨針	礫僅、粗砂並、黒雲母、 海綿骨針	内面ほぼ全面に 油煙痕	内面ほぼ全面に 油煙痕	D095		
	199	2008	北2区	SD13	瀬戸美濃	天目茶碗	大窓2	115.0			(56.0)	2/12	良	ロクロ	ロクロ	細砂少	にぶい黄橙、 施釉	にぶい黄橙、 施釉	鐵釉	D098		
	200	2008	北2区	SD13, SD13最下層 SD14	珠洲	壺	IV	213.0			(176.0)	2/12	良	ロクロ	ロクロ	礫僅、粗砂並、海綿骨針	礫僅、粗砂並、海綿骨針	灰	灰	D103		
73	201	2008	北2区	SD15	瀬戸美濃	染付皿	型打皿	97.0	51.0	21.0	6/12	良	ロクロ	ロクロ	ロクロ	白、施釉	白、施釉	透明釉	染14	近代		
	202	2008	南1区	SD18 南側下層	土師器	皿	E	92.0	40.0	20.0	3/12	良	ナデ	ナデ	ナデ	礫僅、粗砂少、焼土塊、 黒雲母、海綿骨針	礫僅、粗砂少、焼土塊、 黒雲母、海綿骨針	にぶい橙	にぶい橙	D179		
	203	2008	南1区	SD18 上面	土師器	皿	B	126.0	68.0	29.0	ほぼ完	良	[2]字状 ナデ上げ	[2]字状 ナデ上げ	[2]字状 ナデ上げ	礫多、粗砂多、焼土塊、 黒雲母、海綿骨針	礫多、粗砂多、焼土塊、 黒雲母、海綿骨針	にぶい橙	にぶい橙	D182		
	204	2008	南1区	SD18 北側上層	瀬戸美濃	天目茶碗	大窓1	116.0			(32.0)	良	ロクロ	ロクロ	ロクロ	細砂少	灰白、施釉	鐵釉	D249			
	205	2008	南1区	SD18 南側下層	瀬戸美濃	丸皿	大窓2	106.0	62.0	26.0	3/12	良	ロクロ	ロクロ	ロクロ	細砂少	灰白、施釉	灰釉	D178	高台内に輪トチ跡		
	206	2008	南1区	SD18 北側上層	瀬戸美濃	端附・丸皿	大窓1・2	66.0	(15.0)	6/12	良	ロクロ	ロクロ	ロクロ	細砂少	灰黃、施釉	灰釉	D176				
	207	2008	南1区	SD18 北側上下層	越中瀬戸	丸皿	A1a	107.0	62.0	25.0	1/12	良	ロクロ	ロクロ	ロクロ	粗砂少、堅織	粗砂少、堅織	灰釉	D183	見込に漆付着		
	208	2008	南1区	SD18 北側上層	青磁	皿	大皿	144.0	(24.0)	24.0	底部小片	良	ロクロ	ロクロ	ロクロ	堅織	白灰、施釉	青磁釉	D175			
	209	2008	南1区	SD18 北側上層	白磁	皿	C I	86.0	(11.0)	底部小片	良	ロクロ	ロクロ	ロクロ	堅織	白灰、施釉	透明釉	D192	漆織			
	210	2008	南1区	SD18 北側上層	青花	皿	B1	70.0	(15.0)	底部 3/12	良	ロクロ	ロクロ	ロクロ	堅織	灰白、施釉	透明釉	染19				
74	211	2009	市道区	SD18 (水路北) 下層	瓦質土器	深鉢	—			(5.3)	小片	良	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	粗砂並、海綿骨針	粗砂並、海綿骨針	にぶい黄橙、 灰黃	D50	突堤 内外面煤付着		
	212	2008	南1区	SD18 北側上層	珠洲	甕	IV			(101.0)	口縁小片	良	て具痕、 タキ	て具痕、 タキ	ロクロ	礫少、粗砂多、 海綿骨針	礫少、粗砂多、 海綿骨針	灰	D197	口縁に降灰		
	213	2008	南1区	SD18 南側下層	越前	甕	IV 7			(7.4)	口縁小片	良	ナデ	ナデ	ロクロ	礫少、粗砂並	礫少、粗砂並	褐、黃灰	D180	口縁上面幅3.3cm 在地製品か 播磨9条		
	214	2008	南1区	SD18 南側下層	土師質	擂鉢	—	288.0	122.0	121.0	8/12	良	ナデ	ナデ	ロクロ	礫少、粗砂多、 海綿骨針	礫少、粗砂多、 海綿骨針	浅黃橙	D181	在地製品か 播磨9条		
	215	2008	南1区	SD18 南側下層	越前	擂鉢	IV c	(336.0)	170.0	(117.0)	1/12	良	ロクロナデ 擂目	ロクロナデ 擂目	ロクロナデ 擂目	礫少、粗砂並、堅織	礫少、粗砂並、堅織	褐灰	D248	擂目11条		
	216	2008	南1区	SD18 上層・最下層 SK107	越前	擂鉢	IV a	370.0		(121.0)	3/12	良	ロクロナデ 擂目	ロクロナデ 擂目	ロクロナデ 擂目	粗砂並	明赤褐	橙	D244	擂目10条 内面下部平滑		
	217	2008	南1区	SD18 中央部中層	肥前	片口	I	174.0		(91.0)		良	て具痕、 タキ	て具痕、 タキ	ロクロ	粗砂少、堅織	粗砂少、堅織	灰釉	D177	釉は暗オーリー色		
	218	2008	南1区	SD18 中央部上層	肥前	擂鉢	II	300.0	102.0	110.0	4/12	良	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	礫僅、粗砂並	明赤褐	鐵釉	D174	擂目9条 底部回転式切り		
	219	2009	市道区	SD18 下層	鉄製品	—														第24表参照		
	220	2008	南1区	SD21 SK107	越前	擂鉢	IV c	330.0	140.0	100.0	1/12	良	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	礫多、粗砂多	にぶい黄橙、 灰黃	D171	擂目9条			
75	221	2008	南1区	SD22	青磁	皿	棱花皿	129.0		(19.0)	口縁小片	良	ロクロ	ロクロ	ロクロ	粗砂少、 海綿骨針	粗砂少、 海綿骨針	青磁釉	D191	口縁内面に線影り文		
	222	2009	北3区	SD27 アゼ西	土師器	皿	E	85.0	34.0	17.0	11/12	良	[1]字状 ナデ上げ	[1]字状 ナデ上げ	[1]字状 ナデ上げ	礫譲、粗砂並	礫譲、粗砂並	明褐	明褐	D2	口縁に油煙痕	
	223	2009	北3区	SD27	土師器	皿	E	87.0	34.0	17.0	完	良	[1]字状 ナデ上げ	[1]字状 ナデ上げ	[1]字状 ナデ上げ	粗砂少、黒雲母、 海綿骨針	粗砂少、黒雲母、 海綿骨針	明赤褐	明赤褐	D51		
	224	2009	北3区	SD27	土師器	皿	E	86.0	37.0	18.0	6/12	良	[2]字状 ナデ上げ	[2]字状 ナデ上げ	[2]字状 ナデ上げ	礫譲、粗砂並	礫譲、粗砂並	橙	橙	D4	油煤痕	
	225	2009	北3区	SD27 上層アゼ東	土師器	皿	C	115.0	56.0	22.0	完	良	[1]字状 ナデ上げ	[1]字状 ナデ上げ	[1]字状 ナデ上げ	粗砂少、海綿骨針	粗砂少、海綿骨針	浅黃橙	浅黃橙	D53		
	226	2009	北3区	SD27 アゼ西	土師器	皿	B	119.0	60.0	22.0	3/12	良	[1]字状 ナデ上げ	[1]字状 ナデ上げ	[1]字状 ナデ上げ	粗砂少、黒雲母、 海綿骨針	粗砂少、黒雲母、 海綿骨針	橙～褐灰	橙～褐灰	D3	歪み・油煤痕	
	227	2009	北3区	SD27	土師器	皿	B	148.0	84.0	24.0	完	良	ナデ	ナデ	ナデ	粗砂少、海綿骨針	粗砂少、海綿骨針	橙	橙	D1		
	228	2009	南2区	SD28	土師器	皿	E	84.0	40.0	17.0	4/12	良	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	粗砂多、海綿骨針	粗砂多、海綿骨針	にぶい褐	にぶい褐	D49	外外面に油煤痕</td	

種別 No.	遺物 No.	調査 次元	区名	出土遺構等	種類	器種	分類等	法量(mm)			遺存率	焼成	調整・成形 内面 外面		胎土・素地	色調		実測 No.	特記事項	
								口径	底径	器高			[2]字状 ナデ上げ	ナデ	内面	外面	釉薬			
75	240	2008	北1区	落ち込み (ZY-1)	土師器	皿	D	116.0	58.0	25.0	10/12	良	[2]字状 ナデ上げ	ナデ	礫僅・粗砂並、 海綿骨針	にぶい黄橙		D066		
	241	2008	北1区	落ち込み (ZY-1)	土師器	皿	C	118.0	62.0	24.0	10/12	良	ナデ	ナデ	粗砂並、海綿骨針	淡黄		D065		
	242	2008	北1区	落ち込み (ZY-1)	土師器	皿	C	119.0	58.0	24.0	9/12	良	ナデ	ナデ	粗砂並、海綿骨針	にぶい黄橙		D070		
	243	2008	北1区	落ち込み北 (ZZ-0)	土師器	皿	B	134.0	74.0	21.0	10/12	良	[2]字状 ナデ上げ	ナデ	礫僅・粗砂少、 海綿骨針	にぶい黄橙		D077		
	244	2008	北1区	落ち込み北 (ZZ-0)	土師器	皿	B	154.0	90.0	22.0	10/12	良	[2]字状 ナデ上げ	ナデ	礫僅・粗砂並、 黒雲母、 海綿骨針	にぶい黄橙	にぶい黄橙	D062	内全面に油煙痕	
	245	2008	北1区	落ち込み (ZY-1)	瓦質土器	擂鉢	—	353.0		(75.0)	2/12	良	ロクロナデ、 擂目	ロクロナデ	礫少・粗砂並、 海綿骨針	褐灰	褐灰	D061		
96	246	2008	北1区	P05	青花	皿	B1	140.0		(15.0)	口縁小片	良	ロクロ	ロクロ	堅織	灰白、施釉	透明釉	染36	SB01 添継ぎ	
	247	2008	北1区	P61	肥前	染付碗	III	78.0		(49.0)	2/12	良	ロクロ	ロクロ	堅織	灰白、施釉	透明釉	染08	吳須の発色にぶい	
	248	2008	北1区	P81	青花	碗	粗製	132.0		(40.0)	1/12	良	ロクロ	ロクロ	細砂少・堅織	にぶい黄橙、 施釉	透明釉	染07	瀬州窯系 吳須の発色にぶい	
	249	2008	北1区	P97	肥前	染付皿	V		75.0	(24.0)	4/12	良	ロクロ	ロクロ	堅織	灰白、施釉	透明釉	染06	波佐見	
	250	2008	北1区	P100	柱根														第22表参照	
	251	2008	北1区	P101	瀬戸美濃	把手付水注	大窓3・4	26.0		(55.0)	8/12	良	ロクロ	ロクロ	細砂少	灰白、施釉		鉄釉	D085	注口漆緞ぎ 注口断面7角形
	252	2008	北1区	P115	越中瀬戸	素焼皿	B2a	102.0	44.0	25.0	2/12	良	ロクロ	ロクロ	粗砂並	にぶい黄橙			D241	SB04
	253	2008	北1区	P155	土師器	皿	G	70.0	30.0	13.0	5/12	良	ナデ	ナデ	粗砂少・黒雲母、 海綿骨針	にぶい褐	にぶい褐		D242	口縁に油煙痕 歪み大きい
	254	2008	北1区	P155	土師器	皿	B	140.0	78.0	19.0	3/12	良	ナデ	ナデ	礫僅・粗砂少、 黒雲母、 海綿骨針	浅黄橙	浅黄		D054	
	255	2008	北1区	P156	土師器	皿	C	114.0	56.0	22.0	9/12	良	[2]字状 ナデ上げ	ナデ	粗砂並、海綿骨針	暗灰黄	浅黄		D053	口縁部・内面に油煙痕 歪み大きい
	256	2008	北1区	P162・163・164	土師器	皿	C	116.0	57.0	22.0	完	良	ナデ	ナデ	粗砂多・海綿骨針	橙、浅黄橙	青磁釉		D055	摩耗著しく調整不明瞭
	257	2008	北2区	P190	土師器	皿	E	90.5	39.0	18.5	8/12	良	「の」字状 ナデ上げ	ナデ	礫少・粗砂並、 海綿骨針	灰黄	灰白		D111	内大部分に 油煙痕
	258	2008	北2区	P191	土師器	皿	C	109.0	46.0	18.0	3/12	良	[2]字状 ナデ上げ	ナデ	礫僅・粗砂少、 海綿骨針	黑	にぶい黄橙		D109	内黒
	259	2008	北2区	P206	青花	碗	B2	126.0		(38.0)	口縁小片	良	ロクロ	ロクロ	堅織	灰白、施釉	透明釉	染10		
	260	2008	北2区	P227	越中瀬戸	擂鉢	—			(61.0)	胴部片	良	ロクロナデ、 擂目	ロクロナデ	粗砂少	暗赤褐	鐵釉	D110	擂目16条以上	
	261	2008	北2区	P228	瀬戸美濃	天目茶碗	大窓3		39.0	(23.5)	底部小片	良	ロクロ	ロクロケズリ	堅織	灰白、施釉	鉄釉	D115		
	262	2008	北2区	P249	土師器	皿	E	90.0	45.0	21.0	完	良	「の」字状 ナデ上げ	ナデ	礫少・粗砂多、 焼土塊、 海綿骨針	浅黄橙	浅黄橙		D114	
	263	2008	北2区	P257	土師器	皿	C	110.0	50.0	22.0	3/12	良	[2]字状 ナデ上げ	ナデ	礫少・粗砂並、 焼土塊、 海綿骨針	灰黄褐	にぶい黄橙		D116	内黒
	264	2008	北2区	P260	土師器	皿	E	78.0	30.0	14.0	2/12	良	「の」字状 ナデ上げ	ナデ	粗砂並・焼土塊、 海綿骨針	淡黄	淡黄		D118	
	265	2008	北2区	P260	青磁	皿	絵花皿	131.0		(20.0)	口縁 2/12	良	ロクロ	ロクロ	堅織	灰白、施釉	青磁釉	染15	口縁内面に線影り文	
97	266	2008	北2区	P260	飾り金具														第24表参照	
	267	2008	北2区	P270	瓦質土器	浅鉢	円形		77.0	小片	良	ロクロナデ	ロクロナデ	粗砂少・焼土塊	褐灰	褐灰			D119	
	268	2008	南1区	P288・289	土師器	皿	B	138.0	76.0	24.0	3/12	良	[2]字状 ナデ上げ	ナデ	礫少・粗砂並・焼土塊、 黒雲母・海綿骨針	にぶい黄橙	にぶい黄橙		D222	
	269	2008	南1区	P288・289	漆器椀														第22表参照	
	270	2008	南1区	P292	柱根														第22表参照	
	271	2008	南1区	P308	柱根														第22表参照	
	272	2008	南1区	P318	土師器	皿	E	98.0	48.0	23.0	4/12	良	ナデ	ナデ	礫僅・粗砂少、 海綿骨針	灰黄	灰黄		D221	口縁に油煙痕
	273	2008	南1区	P321・322	土製品	培塿			32.0	(54.0)	5/12	良	ナデ	ナデ	粗砂並・海綿骨針	灰	灰		D220	SB14 把手付き
	274	2008	南1区	P339	肥前	染付碗	IV	116.0		(46.0)	口縁 2/12	良	ロクロ	ロクロ	堅織	灰白、施釉	透明釉	染22	SB12	
	275	2008	南区	P345	銭貨														第25表参照	
	276	2008	南1区	P346	青磁	碗	C	140.0		(48.0)	口縁小片	良	ロクロ	ロクロ	堅織	灰白、施釉		青磁釉	D223	線描蓮弁文
	277	2008	南1区	P357	白磁	皿	C粗製?		50.0	(9.0)	底部完	良	ロクロ	ロクロ	堅織	灰白、施釉	透明釉		D225	メンコ状
98	278	2008	南1区	P375	肥前	陶器皿	II	132.0	50.0	33.0	2/12	良	ロクロ	ロクロ	堅織	灰、施釉		灰釉	D224	満縁皿 砂目跡
	279	2008	南1区	P383	柱根														第22表参照	
	280	2008	南1区	P386	土師器	皿	C	109.0	46.0	19.0	ほぼ完	良	[2]字状 ナデ上げ	ナデ	礫少・粗砂並、 海綿骨針	灰黄	灰黄		D226	SB11 内面の一部に 油煙痕
	281	2008	南1区	P389	柱根														第22表参照	
	282	2008	南1区	P394	土師器	皿	E	86.0	29.0	20.0	6/12	良	ナデ	ナデ	粗砂少・海綿骨針	褐灰	褐灰		D227	黒斑
	283	2008	南1区	P395	柱根														第22表参照	
	284	2008	南1区	P397	瀬戸美濃	丸皿	大窓2	106.0		(19.0)	口縁小片	良	ロクロ	ロクロ	細砂少	灰黄	施釉		D232	ソギ皿
	285	2008	南1区	P417	土師器	皿	E	88.0	40.0	21.0	6/12	良	「の」字状 ナデ上げ	ナデ	礫僅・粗砂並、 焼土塊、 海綿骨針	にぶい黄橙	褐灰		D208	底面黒斑
	286	2008	南1区	P420	土師器	皿	E	86.0	41.0	19.0	10/12	良	「の」字状 ナデ上げ	ナデ	礫僅・粗砂並、 焼土塊、 海綿骨針	灰黄	灰黄		D209	
	287	2008	南1区	P422～425	土師器	皿	E	90.0	39.0	24.0	4/12	良	ナデ	ナデ	粗砂並・焼土塊、 黒雲母・海綿骨針	にぶい黄橙	にぶい黄橙		D210	SB18
	288	2008	南1区	P447・448	瀬戸美濃	端反皿	大窓1		60.0	(28.0)	小片	良	ロクロ	ロクロ	粗砂少	浅黄	施釉		D212	SB21
	289	2008	南1区	P454	土師器	皿	D	115.0	50.0	26.0	3/12	良	ナデ	ナデ	礫僅・粗砂並、 焼土塊、 海綿骨針	灰黄褐	灰黄		D238	口縁部・内面に 油煙痕
	290	2008	南1区	P458	土師器	皿	E	92.0	38.0	21.0	11/12	良	「の」字状 ナデ上げ	ナデ	粗砂少・海綿骨針	にぶい黄橙	にぶい黄橙		D211	
	291	2008	南1区	P466	瓦質土器	香炉	筒形	106.0		(49.0)	2/12	良	ロクロナデ	ロクロナデ	礫僅・粗砂並、 焼土塊、 海綿骨針	にぶい黄橙	にぶい黄橙		D234	スタンプ文
	292	2008	南1区	P466	越前	中甕	IV 1	422.0		(78.0)	口縁小片	良	ナデ	ナデ	礫僅・粗砂少・堅織	黒褐	灰白		D213	口縁上面幅1.5cm 口縁一外側に降灰
	293	2008	南1区	P504	墓石														第23表参照	
	294	2008	南1区	P529	土師器	皿	B	138.0	70.0	22.0	5/12	良	[2]字状 ナデ上げ	ナデ	礫僅・粗砂並、 焼土塊、 海綿骨針	浅黄橙	浅黄橙		D214	SB20
	295	2008	南1区	P536	越前	擂鉢	IV d	368.0		(62.0)	口縁小片	良	ロクロナデ、 擂目	ロクロナデ	礫僅・粗砂並	浅黄橙	楕		D207	擂目9条
	296	2008	南1区	P542	白磁	皿	B		40.0	(11.0)	底部完	良	ロクロ	ロクロ	堅織	灰白、施釉	透明釉		D235	高台量付に抉り5箇所 見込に目盛5箇所
	297	2008	南1区	P543	瀬戸美濃	天目茶碗	大窓4	125.0		(3.9)	口縁小片	良	ロクロ	ロクロ	堅織	灰白、施釉		鉄釉	D217	
	298	2008	南1区	P551	土師器	皿	G	79.0	28.0	21.0	完	良	「の」字状 ナデ上げ	ナデ	礫僅・粗砂並、 焼土塊、 黒雲母・海綿骨針	にぶい黄橙	にぶい黄橙		D218	
	299	2008	南1区	P552	青磁	瓶	—		63.0	(37.0)	底部 3/12	良	ロクロ	ロクロ	堅織	灰白、施釉	青磁釉		D215	SB21 内面無釉

第19表 土器・陶磁器

種別 No.	遺物 No.	調査 次年	区名	出土遺構等	種類	器種	分類等	法量(mm)			遺存率	焼成	調整・成形		胎土・素地	色調		実測 No.	特記事項	
								口径	底径	器高			内面	外面		内面	外面			
	300	2008	南1区	P557	珠洲?	擂鉢	VI?		118.0	(44.0)	底部 4/12	やや 不良	ロクナデ、 擂目	ロクナデ	粗砂多、 燒土塊、 海綿骨針	にぶい黄 にぶい褐		D216	擂目7条 在地?	
	301	2008	南1区	P559	土師器	皿	E	94.0	49.0	19.0	6/12	良	「の」字状 ナデ上げ	ナデ	礫少、粗砂並、 燒土塊、 海綿骨針	にぶい黄 にぶい黄		D239		
	302	2008	南1区	P559	土師器	皿	B	124.0	64.0	21.0	3/12	良	「2」字状 ナデ上げ	ナデ	粗砂並、 燒土塊、 黑雲母、海綿骨針	灰黄褐	灰黄褐	D219	内外面に煤?	
	303	2009	南2区	P560 (SE28)	肥前	染付瓶	III			(10.2)	7/12	良	ロクロ	ロクロ	堅緻	灰白、施釉		透明釉	染5	
	304	2009	南2区	P561	青花	碗	C粗製		58.0	(19.0)	5/12	良	ロクロ	ロクロ	堅緻	灰白、施釉		透明釉	染6	
	305	2009	南2区	P563	越中瀬戸	皿	C3	112.0	50.0	28.0	口縁 6/12	良	ヨコナデ	ヨコナデ	堅緻	明赤褐、 施釉		灰釉	D52	
	306	2009	南2区	P564	柱根															
																			第22表参照	
	307	2009	南2区	P567	土師器	皿	E	88.0	40.0	20.0	6/12	良	ナデ、 指頭圧痕	ナデ、 指頭圧痕	粗砂少、 海綿骨針	にぶい黄 にぶい黄		D26	口縁に油煙痕	
	308	2009	南3区	P574	柱根															第22表参照
	309	2009	南2区	P581	柱根															第22表参照
99	310	2009	市道区	P583	土師器	皿	E	88.0	45.0	19.0	口縁 3/12	良	ヨコナデ、 ナデ	ヨコナデ、 ナデ	粗砂多、 海綿骨針	にぶい黄 にぶい黄		D32	外面に油煤痕	
	311	2009	市道区	P588	錢貨															第25表参照
	312	2009	市道区	P617	土師器	皿	E	90.0	48.0	19.0	口縁 7/12	良	ヨコナデ、 ナデ	ヨコナデ、 ナデ	粗砂多、 海綿骨針	灰白	灰白	D33		
	313	2009	市道区	P618	青磁	碗	無文		52.0	(36.0)	底 4/12	良	ロクロ	ロクロ	堅緻	にぶい黄 施釉		青磁釉	D34	
	314	2009	市道区	P618	肥前	陶器皿	II		72.0	(29.0)	底 7/12	良	ロクロ	ロクロ	堅緻	にぶい赤褐	にぶい褐	砂目跡	D36	
	315	2009	市道区	P620	青磁	碗	C	148.0		23.0	小片	良	ロクロ	ロクロ	織密、気泡	灰白、施釉		青磁釉	D35	
	316	2009	北3区	P634	土師器	皿	E	86.0	47.0	16.0	7/12	良	ナデ、 ヨコナデ	ナデ、 ヨコナデ	粗砂少、 黑雲母	にぶい橙 ~黒		D12	外面に油煙痕	
	317	2009	北3区	P634	土師器	皿	E	90.0	34.0	19.0	口縁 4/12	良	ナデ、 ヨコナデ	ナデ、 ヨコナデ	礫少、粗砂並、 黑雲母、 海綿骨針	にぶい橙	にぶい橙	D13	口縁に油煙痕	
	318	2009	北3区	P634	土師器	皿	C	120.0	58.0	21.0	5/12	良	「2」字状 ナデ上げ	ヨコナデ、 ナデ	粗砂並、 黑雲母、 海綿骨針	灰白	灰白	D11		
	319	2009	北3区	P634 5層	瓦質土器	香炉	筒形			29.0	3/12	良	ナデ	ミガニ、 沈線	粗砂並、 海綿骨針	黄灰	黄灰	D15	スタンプ文	
	320	2009	北3区	P638	土師器	皿	C	107.0	50.0	21.0	5/12	良	「2」字状 ナデ上げ	ヨコナデ、 ナデ	礫混、粗砂多、 燒土塊、 海綿骨針	灰白	灰白	D42	内面に油煙痕か	
	321	2009	北3区	P638	瀬戸美濃	天目茶碗	大窯1	112.0		58.0	1/12	良	ロクロ	ロクロ	砂粒微、密	灰	施釉	鉄釉	D14	
100	322	2009	北3区	P638	青花	皿	B1	114.0		18.0	1/12	良	ロクロ	ロクロ	堅緻	灰白	施釉	透明釉	染3	
	323	2009	北3区	P638	瓦質土器	花瓶	—		(37.0)	胴部 3/12	良	ミガキ、 押印	ナデ、 指頭圧痕	粗砂多、 黒雲母	明褐	褐灰	D43	スタンプ文		
	324	2009	北3区	P644	土製品	羽口	—	外径 96.0	内径 40.0	長さ (180.0)	2/12	良	ナデ	ナデ	礫微、粗砂多	にぶい橙	にぶい橙	D16	外面に煤付着	
	325	2008	北2区	SX02 1a～3層	土師器	皿	C	110.0	52.0	21.0	2/12	良	ナデ	ナデ	礫少、粗砂並、 燒土塊、 海綿骨針	浅黄褐	浅黄褐	D134		
	326	2008	北2区	SX02 1a～3層	珠洲	小壺	V		100.0	(28.0)	底部小片	良	ロクロナデ	ロクロナデ	礫僅、粗砂並	灰	灰黄	D113	底面静止糸切り	
	327	2008	北2区	SX02 3a上層	越前	中甕	IV7			(67.0)	口縁小片	良	ナデ	ナデ	粗砂少	にぶい褐	暗灰黄	D120	口縁上面幅2.2cm	
	328	2008	北2区	SX02 1a～3層	越前	擂鉢	IVb	399.0		(44.0)	口縁小片	良	ロクロナデ、 擂目	ロクロナデ	粗砂並	にぶい橙	にぶい橙	D133	擂目10条	
	329	2008	北2区	SX02 3a上層	肥前	染付皿	II		46.0	(10.0)	底部 6/12	良	ロクロ	ロクロ	堅緻	灰白、施釉		透明釉	染11	
	330	2008	北2区	SX02 1a～3層	砥石														第23表参照	
105	331	2008	北2区	SX02 1a～3層	砥石														第23表参照	
	332	2008	北2区	SX02 3a上層	石鉢														第23表参照	
	333	2008	北2区	SX02 3a下層	硯														第23表参照	
	334	2008	北2区	SX02	碁石														第23表参照	
	335	2008	南1区	SX03	瀬戸美濃	天目茶碗	大窯4	112.0		(28.0)	口縁小片	良	ロクロ	ロクロ	細砂少	にぶい黄 施釉		鉄釉	D144	
	336	2008	南1区	SX03	越中瀬戸	丸皿	A1a		44.0	(12.0)	底部小片	良	ロクロ	ロクロ	細砂少、 堅緻	にぶい黄 施釉		灰釉	D145	見込に印花文 施釉は体部上半のみ
	337	2008	南1区	SX03	青花	碗	D粗製		70.0	(18.0)	底部小片	良	ロクロ	ロクロ	堅緻	灰白、施釉		透明釉	染4	高台内無釉 吳須の発色にぶい
	338	2009	南2区	SX06 アゼ1 (清)	土師器	皿	E	97.0	50.0	25.0	ほぼ完	良	「の」字状 ナデ上げ	ヨコナデ、 ナデ	粗砂多、 燒土塊並、 黑雲母、 海綿骨針	浅黄褐	浅黄褐	D22	歪みあり	
	339	2009	南2区	SX06 調査区断面壁清掃	土師器	皿	E	96.0	51.0	25.0	9/12	良	「の」字状 ナデ上げ	ヨコナデ、 ナデ	礫僅、粗砂少、 燒土塊並、 黑雲母、 海綿骨針	浅黄褐	浅黄褐	D24	歪みあり	
	340	2009	南2区	SX06 アゼ2上層	土師器	皿	D	107.0	49.0	24.0	ほぼ完	良	ヨコナデ、 ナデ	ヨコナデ、 ナデ	粗砂少、 海綿骨針	黒	灰黄	D45	内面に油煙痕	
	341	2009	南2区	SX06 アゼ2 (満)	土師器	皿	B	134.0	78.0	23.0	口縁 11/12	良	ナデ、 ヨコナデ	ナデ、 ヨコナデ	粗砂少、 燒土塊や多、 黒雲母	浅黄褐～ にぶい橙	浅黄褐～ にぶい橙	D23		
	342	2009	南2区	SX06 アゼ1	青磁	皿	稜花皿	128.0		(22.0)	1/12	良	ロクロ	ロクロ	織密、貫入・氣泡	灰白、施釉		青磁釉	D19	添継ぎ 内面割花文
	343	2009	南2区	SX6 アゼ2上層	青花	碗	C粗製	156.0		(20.0)	1/12	良	ロクロ	ロクロ	堅緻	灰白、施釉		透明釉	染4 添継ぎ	
	344	2009	南2区	SX6 下層SE28付近	青花	皿	B1	110.0		(18.0)	小片	良	ロクロ	ロクロ	堅緻	灰白、施釉		透明釉	染10	
106	345	2009	南2区	SX06 調査区断面	珠洲	壺	V	185.0		(83.0)	口縁 3/12	良	ロクロナデ、 タキ	ロクロナデ、 タキ	礫少、粗砂並、 海綿骨針	灰	灰	D46	内面一部に煤付着	
	346	2009	南2区	SX06 アゼ1北上層	越前	擂鉢	IVc	364.0		(63.0)	口縁 2/12	良	ロクロナデ	ロクロナデ	礫並、粗砂多、 燒土塊並	にぶい橙	にぶい橙	D17	擂目(11条)	
	347	2009	南2区	SX06 アゼ3～4上層	越前	擂鉢	IVb	364.0		(60.0)	口縁小片	良	ロクロナデ	ロクロナデ	粗砂多	にぶい褐	にぶい褐	D20	擂目(10条)	
	348	2009	南2区	SX06 アゼ1北	越前	擂鉢	IVb	426.0		(55.0)	口縁 1/12	良	ロクロナデ	ロクロナデ	粗砂多	にぶい黄 にぶい橙	にぶい黄 にぶい橙	D18	擂目(10条)	
	349	2009	南2区	SX06 南側調査区断面8b層	肥前	染付碗	III	90.0		(57.0)	3/12	良	ロクロ	ロクロ	堅緻	灰白、施釉		透明釉	染7	
	350	2009	南2区	SX06 アゼ1～2上面	肥前	陶胎 染付碗	IV		42.0	(33.0)	底部 9/12	良	ロクロ	ロクロ	粗砂少、 貰入・氣泡	灰、施釉		透明釉	D44	
	351	2009	南2区	SX06 アゼ1～2上面	瀬戸美濃	染付小鉢	—	97.0	44.0	57.0	口縁 3/12	良	ロクロ	ロクロ	堅緻	灰白、施釉		透明釉	染9 型成形	
	352	2009	南2区	SX06 アゼ4下層	越中瀬戸	擂鉢	B2	263.0		62.0	口縁 1/12	良	ロクロナデ	ロクロナデ	礫少、粗砂多	暗赤灰	褐灰	D21		
	353	2008	北1区	棱出面	土師器	皿	E	94.0	44.0	22.0	ほぼ完	良	「の」字状 ナデ上げ	ナデ	礫僅、粗砂並、 海綿骨針	橙		D059	口縁に油煙痕	
	354	2008	北1区	遺構検出	土師器	皿	E	96.0	58.0	19.0	4/12	良	「の」字状 ナデ上げ	ナデ	礫僅、粗砂並、 燒土塊、 海綿骨針	灰黄		D056	口縁に油煙痕	
	355	2008	南1区	包含層	土師器	皿	E	98.0	44.0	22.0	10/12	良	「の」字状 ナデ上げ	ナデ	礫少、粗砂並、 海綿骨針	にぶい黄 にぶい黄		D187		
107	356	2008	北1区	棱出面	瀬戸美濃	丸碗	大窯1	132.0		(47.0)	口縁 2/12	良	ロクロ	ロクロ	細砂少	浅黄、施釉		鉄釉	D084	口縁外面に刷毛状跡
	357	2008	神社前表探	瀬戸美濃	端反皿	大窯1	109.0	67.0	27.0	2/12	良	ロクロ	ロクロ	細砂少	灰黄、施釉		鉄釉	D230	添継ぎ	
	358	2008	北2区	棱出面 包含層	瀬戸美濃	端反皿	大窯1	112.0	68.0	29.0	3/12	良	ロクロ	ロクロ	細砂少	にぶい黄 にぶい黄		鉄釉	D121	見込印花文 高台内に輪トチ跡
	359	2008	南1区	表土除去	瀬戸美濃	端反・丸皿	大窯1・2		52.0	(16.0)	底部完	良	ロクロ	ロクロ	細砂少	灰白、施釉		鉄釉	D228	見込印花文 高台内に輪トチ跡

第20表 土器・陶磁器観察表6

種別 No.	遺物 No.	調査 年次	区名	出土遺構等	種類	器種	分類等	法量(mm)			遺存率	焼成	調整・成形		胎土・素地	色調		実測 No.	特記事項
								口径	底径	器高			内面	外面		内面	外面		
107	360	2008	神社山裾表採	越中瀬戸	耳付水注	—	—	79.0	96.0	96.0	7/12	良	ロクロナデ	ロクロナデ	細砂少	灰白、施釉	鉄釉	D231	底面回転糸切り
	361	2008	南1区 包含層	青磁	碗	無文		(60.0)	(28.0)	—	7/12	良	ロクロ	ロクロ	粗砂少、堅緻	灰~灰褐色	青磁釉	D185	見込線彫り文
	362	2009	北3区 遺構検出	青磁	深鉢	—		119.0	30.0	1/12	良	ロクロ	ロクロ	堅緻、密、貫入・気泡	灰白、施釉	青磁釉	D10	水指?	
	363	2008	南1区 側溝	青磁	皿	大皿		153.0	(30.0)	底部小片	良	ロクロ	ロクロ	堅緻	灰白、施釉	青磁釉	D203	添継ぎ 高台内姫の目釉剥ぎ	
	364	2009	市道区 ZW-1 N5	青花	碗	E VI		48.0	(16.0)	3/12	良	ロクロ	ロクロ	堅緻	灰白、施釉	透明釉	染8	高台内「大明年造」	
	365	2008	南1区 P422 ~ 425上の包含層	青花	皿	B1 VII	124.0	70.0	25.0	4/12	良	ロクロ	ロクロ	堅緻	灰白、施釉	透明釉	染21	添接ぎ 高台内無釉	
	366	2008	北2区 検出面	青花	皿	B1 VI		44.0	(9.0)	底部小片	良	ロクロ	ロクロ	堅緻	白、施釉	透明釉	染12		
	367	2008	南1区 表土除去	青花	皿	B2 IX		78.0	(12.0)	底部3/12	良	ロクロ	ロクロ	堅緻	灰白、施釉	透明釉	見込「長命富貴」 高台内「天下太平」		
	368	2008	北2区 検出面	青花	皿	C III	128.0	58.0	32.0	4/12	良	ロクロ	ロクロ	堅緻	灰白、施釉	透明釉	染13	添継ぎ	
	369	2008	南1区 設立精査(東壁)	珠洲	壺	V	130.0		(58.0)	口縁3/12	良	ロクロナデ	ナデ	礫僅、粗砂並	灰	灰	D205		
108	370	2008	南1区 遺構検出	珠洲	擂鉢	VI			(58.0)	口縁小片	良	ロクロナデ、 擂目	ロクロナデ	礫多、粗砂多、海綿骨針	褐灰	褐灰	D196	口縁内面に波状文	
	371	2008	北1区 遺構検出	珠洲	擂鉢	VI	(404.0)		(59.0)	口縁小片	良	ロクロナデ	ロクロナデ	礫多、粗砂並、海綿骨針	灰	暗灰	D057	口縁内面に波状文	
	372	2009	市道区 設立	肥前	染付碗	II		36.0	(29.0)	底部7/12	良	ロクロ	ロクロ	堅緻	灰白、施釉	透明釉	D31	高台無釉	
	373	2008	南1区 設立精査	肥前	染付碗	V		37.0	(23.0)	底部完	良	ロクロ	ロクロ	堅緻	灰白、施釉	透明釉	染29	見込蛇の目釉剥ぎ	
	374	2008	南1区 検出面	肥前	染付碗	V		37.0	(43.0)	底部10/12	良	ロクロ	ロクロ	堅緻	灰白、施釉	透明釉	染32	見込蛇の目釉剥ぎ	
	375	2008	南1区 包含層	肥前	染付皿	II		46.0	(10.0)	底部8/12	良	ロクロ	ロクロ	堅緻	灰白、施釉	透明釉	染20		
	376	2008	南1区 包含層	肥前	白磁皿	IV		42.0	(21.0)	底部完	良	ロクロ	ロクロ	堅緻	灰白、施釉	透明釉	染28	見込蛇の目釉剥ぎ	
	377	2008	表採	肥前	陶器碗	I		53.0	(29.0)	底部10/12	良	ロクロ	ロクロ	細砂少	灰、施釉	灰釉	D229		
	378	2008	南1区 包含層 アセ北側上層	越中瀬戸	丸碗	—	106.0	64.0	63.0	6/12	良	ロクロ	ロクロ	粗砂少、堅緻	灰白、施釉	鉄釉	D184	登窯	
	379	2008	南1区 表土除去	陶器	碗	—	118.0	42.0	50.0	8/12	良	ロクロ	ロクロ	細砂少	淡黄、施釉	灰釉	D200	見込蛇の目釉剥ぎ	
109	380	2008	南1区 表土除去	陶器	碗	—	133.0	45.0	58.0	10/12	良	ロクロ	ロクロ	堅緻	浅黄、施釉	灰釉	染35	見込ハリ目跡	
	381	2008	南1区 設立	陶器	碗	—		50.0	(63.0)	底部11/12	良	ロクロ	ロクロ	堅緻	浅黄、施釉	灰釉	染31	外表面書 見込ハリ目跡	
	382	2008	北1区 摂乱	肥前	陶器皿	I	137.0	55.0	39.0	4/12	良	ロクロ	ロクロ	細砂少、堅緻	灰白、施釉	藁灰釉	D087	高台上にハマ付着	
	383	2008	南1区 設立精査	肥前	陶器皿	I	118.0	37.0	39.0	4/12	良	ロクロ	ロクロ	細砂少、堅緻	明赤褐、施釉	灰釉	D193	見込胎土目跡	
	384	2008	南1区 包含層	肥前	陶器皿	I	123.0	48.0	49.0	8/12	良	ロクロ	ロクロ	堅緻	にぶい黄褐、 施釉	灰釉	D186	見込胎土目跡	
	385	2008	北1区 市道側壁立	越中瀬戸	皿	C3	118.0	58.0	26.0	6/12	良	ロクロ	ロクロ	粗砂少	灰黃褐、施釉	灰釉	D060		
	386	2008	南1区 側溝	越中瀬戸	皿	C3	102.0	42.0	24.0	4/12	良	ロクロ	ロクロ	粗砂少	灰、施釉	鉄釉 灰釉	D201		
	387	2008	南1区 包含層	越中瀬戸	皿	C3	104.0	49.0	22.0	8/12	良	ロクロ	ロクロ	粗砂少	にぶい褐、 施釉	鉄釉 灰釉	D199		
	388	2008	南1区 包含層	越中瀬戸	皿	C3	102.0	34.0	24.0	6/12	良	ロクロ	ロクロ	粗砂少、堅緻	褐灰、施釉	灰釉	D188		
	389	2008	南1区 包含層	越中瀬戸	皿	C3	110.0	42.0	23.0	4/12	良	ロクロ	ロクロ	細砂少、堅緻	にぶい赤褐、 施釉	灰釉	D190		
110	390	2008	南1区 包含層	越中瀬戸	皿	C4	140.0	66.0	38.0	9/12	良	ロクロ	ロクロ	粗砂少	にぶい黄褐、 施釉	鉄釉	D198		
	391	2008	南1区 検出面	越中瀬戸	皿	D	98.0	56.0	31.0	4/12	良	ロクロ	ロクロ	粗砂少	灰黄、施釉	鉄釉	D204	向付	
	392	2008	南1区 包含層	肥前	陶器瓶	I		67.0	(72.0)	底部3/12	良	タタキ、 ナデ	タタキ、 ナデ	堅緻	黄灰、施釉	灰釉	D189	内面青海波	
	393	2008	南1区 包含層	色絵	筒丸碗	—	66.0		(50.0)	4/12	良	ロクロ	ロクロ	堅緻	灰~にぶい褐、 施釉	透明釉	D195	現代 外表面赤文字	
111	394	2009	市道区 ZW-1 包含層	筒形盃											第22表参照				
	395	2008	南1区 ZV3区 包含層	折敷											第22表参照				
112	396	2008	南1区 ZZ4 ~ ZY 包含層	連歯下駄											第22表参照				
	397	2008	南1区 ZZ4 ~ ZY4 包含層	駄下駄											第22表参照				
113	398	2009	市道区 ZY-IE 4包含層	連歯下駄											第22表参照				
	399	2008	南1区 ZY2 包含層	連歯下駄											第22表参照				
114	400	2008	南1区 ZZ4 ~ ZY4 包含層	差歛下駄											第22表参照				
	401	2008	南区 遺構検出	砥石											第23表参照				
115	402	2008	南区 検出面	砥石											第23表参照				
	403	2008	南区 摂乱 (ZW-2) (下臼)	石臼											第23表参照				
116	404	2009	市道区 遺構検出	錢貨											第25表参照				
	405	2009	市道区 ZY-IE4 包含層	錢貨											第25表参照				
117	406	2008	南区 摂乱	錢貨											第25表参照				

第21表 土器・陶磁器観察表7

掲図 No.	遺物 No.	調査 年次	区名	出土遺構等	器種	部位	樹種	残存法量				実測 No.	備考
								長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	木取り		
38	3	2008	北1区	SE01 10-11層	漆器椀		モクレン属		(底径) 60.0		横木地 板目	木12	分析No.1 漆パレット
	4	2008	北1区	SE01 最下層	筒状木製品		ムラサキシキブ属	155.0	22.0	21.0	芯持材	木13	
	5	2008	北1区	SE01 10層	横櫛		イスノキ	48.0	53.0	14.0	削出	木14	
	6	2008	北1区	SE02	桶?	底板	スギ	680.0	692.0	32.0	柾目	木8	
39	25	2008	北1区	SE08	漆器椀	口縁部	ブナ属	30.0	40.0	4.0	横木地 板目	木24	分析No.7
40	36	2008	北1区	SE10 下層	漆器椀		カエデ属				横木地 板目	木25	分析No.8
	42	2008	北1区	SE12	漆器椀		カエデ属	(口径) 126.0	(底径) 60.0	(器高) 65.0	横木地 柾目	木16	分析No.4
42	58	2008	南1区	SE22	連歯下駄		マツ属複維管束亞属	207.0	77.0	31.0	板目	木18	
	59	2008	南1区	SE23	建築用 部材?		クリ	212.0	64.0	53.0	分割材	木19	
	60	2009	南2区	SE25	柱根		クリ	579.0	238.0	165.0	芯持丸木	木1 (29)	
57	83	2008	北1区	SK10	漆器椀		ブナ属			5.0	横木地 板目	木28	分析No.10
58	98	2008	北1区	SK22	漆器椀		不明	71.0	79.0	9.0	—	木27	分析No.9 漆パレット
59	124	2008	南1区	SK65	漆器椀		ブナ属		(底径) 60.0		横木地 板目	木17	分析No.5
60	128	2008	南1区	SK69	差歯下駄	台	モクレン属	151.5	95.0	84.0	板目	木11	
						前歯	モクレン属				板目		
						後歯	モクレン属				板目		
61	135	2008	南1区	SK76	柱根		マツ属複維管束亞属	(274.0)	177.0	154.0	芯持丸木	木3	
96	250	2008	北1区	P100	柱根		クリ	647.0	148.0	136.0	芯持丸木	木1	
97	269	2008	南1区	P288・289	漆器椀		ホオノキ属		(底径) 54.0		横木地 板目	木23	分析No.6 漆パレット
	270	2008	南1区	P292	柱根		クリ	(560.0)	138.0	125.0	芯持丸木	木4	
	271	2008	南1区	P308	柱根		サクラ属	(310.0)	148.0	150.0	芯持丸木	木7	SB15
98	279	2008	南1区	P383	柱根		カラズザンショウ	(255.0)	156.0	125.0	芯持丸木	木5	SB11
	281	2008	南1区	P389	柱根		スダジイ	502.0	176.0	146.0	芯持丸木	木2	SB15
	283	2008	南1区	P395	柱根		ヌルデ	(326.0)	134.0	96.0	芯持材	木6	SB15
99	306	2009	南2区	P564	柱根		クリ	289.0	131.0	125.0	芯持丸木	木3 (31)	
	308	2009	南2区	P574	柱根		センダン	(117.0)	(245.0)	153.0	半裁状	木6 (34)	SB16
	309	2009	南2区	P581	柱根		クリ	197.0	146.0	151.0	芯持丸木	木2 (30)	SB16
110	394	2009	市道区	ZW-1 包含層	筒形盃		ハンノキ亜属	(口径) 96.0	(底径) 60.0	(器高) 61.0	横木地 板目	木7 (35)	分析No.12 木挽時の筋状痕跡あり
	395	2008	南1区	ZV3区 包含層	折敷	底板	マツ属複維管束亞属	223.0	213.0	6.0	板目	木15	分析No.3
	396	2008	南1区	ZZ4～ZY 包含層	連歯下駄		ケヤキ	184.0	80.0	30.0	板目	木26	
	397	2008	南1区	ZZ4～ZY4 包含層	駒下駄		ケヤキ	175.0	91.0	21.0	板目	木21	
111	398	2009	市道区	ZY-IE4 包含層	連歯下駄		スギ	193.0	79.0	25.0	板目	木4 (32)	
	399	2008	南1区	ZY2 包含層	連歯下駄		モクレン属	180.0	90.0	22.0	板目	木20	
	400	2008	南1区	ZZ4～ZY4 包含層	差歯下駄	台	ヒノキ属	215.0	81.0	24.0	板目	木22	歯幅124.0mm 歯厚19.0mm
						歯	ヒノキ属				柾目		

第22表 木製品観察表

挿図 No.	遺物 No.	調査 年次	区名	出土遺構等	器種	石材	残存法量				実測 No.	備考
							長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)		
40	33	2008	北1区	SE09	硯	粘板岩	55.0	28.0	8.0	15.5	6	分析No.6 一部披熱か
43	61	2009	南2区	SE26	円面硯	砂岩	113.0	160.0	27.0	625.3	6(16)	分析No.16 底面に線刻文字、披熱
58	101	2008	北1区	SK23	砥石	流紋岩	74.0	32.0	18.0	53.5	7	分析No.7 4面使用、一方折損
59	121	2008	南1区	SK64	硯	粘板岩	156.0	72.0	155.0	142.6	9	分析No.8 披熱か
60	130	2008	南1区	SK70	砥石	デイサイト	57.5	30.5	18.0	46.0	15	分析No.14 3面使用
	132	2008	南1区	SK73	砥石	流紋岩	52.5	44.5	15.0	58.2	10	分析No.9 4面使用
98	293	2008	南1区	P504	碁石	黒色頁岩	24.0	20.5	4.0	3.5	14	分析No.13
105	330	2008	北2区	SX02 1a～3層	砥石	流紋岩	123.0	37.0	42.0	259.3	2	分析No.2 4面使用
	331	2008	北2区	SX02 1a～3層	砥石	砂岩	146.0	60.0	29.0	429.4	1	分析No.1 2面使用
112	332	2008	北2区	SX02 3a上層	石鉢	デイサイト	110.0	97.0	90.0	480.3	3	分析No.3 外面は未加工か
	333	2008	北2区	SX02 3a下層	硯	粘板岩	57.0	32.0	9.0	23.1	4	分析No.4 京都鳴滝石
112	334	2008	北2区	SX02	碁石	黒色頁岩	26.5	19.0	7.0	5.9	5	分析No.5
	401	2008	南区	遺構検出	砥石	流紋岩	66.0	44.0	20.0	77.2	12	分析No.11、両端折損 3面使用うち1面は筋砥石
	402	2008	南区	検出面	砥石	粘板岩	130.0	66.0	36.0	412.3	11	分析No.10 2面使用
112	403	2008	南区	攪乱(ZW-2)	石臼(下臼)	安山岩	(径) 274.0		72.0	4023	13	分析No.12 臼面の溝ほぼ摩滅

第23表 石製品観察表

挿図 No.	遺物 No.	調査 年次	区名	出土遺構等	材質	器種	法量				実測 No.	備考
							縦 (mm)	横 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)		
40	44	2008	北2区	SE14	鉄	鍋	(142.0)	(34.0)	(3.0)	68.2	8	
60	134	2008	南1区	SK74	銅	簪	106.0	4.0	2.0	4.0	7	松葉もしくは吉丁かんざし 金鏡金
74	219	2009	市道区	SD18 下層	鉄	不明	(86.0)	(24.6)	14.0	4.0	40	
97	266	2008	北2区	P260	銅	飾り金具	(34.0)	(35.0)	(3.0)	5.2	6	釘隠し? 鍍金

第24表 金属製品観察表

挿図 No.	遺物 No.	調査 年次	区名	出土遺構等	銭名	国名等	初鑄年	法量 (mm, g)						実測 No.	備考		
								銭径縦	銭径横	内径縦	内径横	孔径縦	孔径横	厚さ	重さ		
57	84	2008	北1区	SK10	元豊通寶	北宋	1078	24.5	24.5	19.5	19.5	6.5	7.0	1.0	1.9	5	
58	102	2008	北1区	SK23	不明			20.0	22.5			7.0	7.0	1.0		2枚接着 (表・表)	
					不明			21.5	22.0			5.0	5.5	1.0			
59	116	2008	南1区	SK58	元豊通寶	北宋	1078	23.5	23.5	19.0	18.0	6.5	6.5	1.0	2.5	4	
97	275	2008	南1区	P345	寛永通寶	日本	1668	24.0	24.0	20.0	20.0	6.5	6.0	1.0	2.0	3	新寛永
99	311	2009	市道区	P588	元豊通寶	北宋	1078	24.5	24.8			6.0	6.0	1.1	2.1	3(8)	篆書
112	404	2009	市道区	遺構検出	不明			21.2	21.1			7.0	7.2	0.6	1.0	1(6)	
	405	2009	市道区	ZY-IE4 包含層	永樂通宝	明	1411	25.0	24.9			5.5	5.3	1.3	1.8	2(7)	
	406	2008	南区	攪乱	寛永通寶	日本	1769	28.0	28.0	21.0	21.0	6.0	6.0	1.5	5.5	1	新寛永 4文銭、11波

第25表 錢貨観察表